
キョーハク少女

ヒロセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キヨーハク少女

【Nコード】

N8722X

【作者名】

ヒロセ

【あらすじ】

佐藤優大^{さとうゆうた}は普通の高校生。特に変わったところのない普通の、それでいて少しさみしい毎日を過ごしていた。そんな優大の楽しみは幼いころ遊んだ山へ行くこと。その日もただ単に暇だったので山へ遊びに行っただけだった。しかしそこで妙な人間に出会ってしまう。それがきっかけで優大の脅迫^{おそれ}生活が始まってしまった。幼馴染やいじめっ子を交えて動き出す優大の人生。これはこれで幸せ。

僕と秘密基地と変質者

突然だけど、僕は親友がいない。

友達呼べる人はいると思う。

親友の定義はよく知らないけど、心の底から信用できる友達はいないし、暇だったら一緒に遊ぶような仲のいい友達もいない。そもそも友達と思っている人も厳密に言えば友達ではないのかもしれない。でもそう考えたら悲しくなるから厳密に言わない。

暇な時に一緒に遊ぶ友達がいなかったけど、当然日曜日に遊ぶ友達もいないので毎日が暇だったりする。時々、極稀にお声がかかることもあるけれど、大抵の休日は一人家でパソコンと向かい合っている。ニヤニヤ動画はいつみても暇しないなあ。でもニヤニヤ動画だけを見て休日が終わっているととても虚しい気持ちになる。でもしょうがないよね。

お姉ちゃんと弟がいるが二人とも忙しそうに遊びに出ている。

僕だけ一人、家にいる。

今日も一人だ。寂しいなあ。

だからそんな時、僕は山へ行く。

何故かと言えば、山は楽しいから。

山には、親友はいないけど親友との思い出ならある。

子供のころに作った秘密基地。

何にも考えなくて遊んでいた小学生時代。

友達三人で山に秘密基地を作った。その友達も中学校に上がったから突然疎遠になってしまった。同じ中学校なのに疎遠って不思議。多分、僕が悪いのだと思う。

まあそんなこともういいや。終わったことだしね。とにかくも、そう言うわけで僕は山に行った。

家からそう遠くない山。

誰もいない、思い出だけが生きる山。

僕は秘密基地へ向かって山を登った。

少し歩いて山の中腹あたり。標高がそれほど高くない山なので山登りの時間は少し。だけど木が多く雑草も茂っているので足場が悪くて普通には登れない。でも楽しみが先に待っている僕としては全然苦ではない。

僕はすぐに秘密基地にたどり着いた。

基地って言ってもそんなに大層なものではない。ただ木の棒を地面に突き刺してそこにビニールシートをかけただけの簡素な秘密基地。秘密基地と言うより秘密テント。でもあのころの僕らにとっては自分の家よりも居心地のいいところだった。

思い出が詰まった大切なところ。

僕はそれが風化しないように大切に守ってきた。

いつ行っても秘密基地は変わらずに僕を迎えてくれた。

目を瞑ればあのころの笑い声が聞こえてきそうな気がする。でも気のせいだった。

あの日を留めたままの秘密基地。眺める度にとってもノスタルジ
ィ。

……でも、今日は少し様子が違った。

秘密基地は壊れていない。いつもの通り汚いままだ。いつもと違うのは、その周り。秘密基地の周辺の地面に妙なものを見つけてしまった。

足跡が、あった。

秘密基地を探るようにぐるぐると足跡がついていた。

正直、怖い。

なんでこんなところに来ているのだろう。この付近に変わった物なんてないのに……。

僕は恐怖に駆られながらも、秘密基地を守るために足跡をたどって行った。

足跡は山の奥深くへ進んでいた。

出来るだけ音を立てずに足跡を追う。

でもすぐに見失った。土から草むらに地面が変わっていた。

見失いはしたが土の上の足跡はまっすぐ進んでいたの、僕は足跡の方向に真っ直ぐ森を進んだ。

そして僕は人を見つけた。

多分、女の人だ。

草の生えていない土が見えているスペースに一人立っているその人は、山に似つかわしくない格好をしていた。

黒いミニスカートから伸びる白くて長い脚。足元はミュールを履いており、よくそれで山が登れたなあと感心してしまう。上半身はノースリーブシャツにネクタイをつけたこれまた山登りには似合わない格好。露出が多くて虫に刺されちゃうよ。真っ白で綺麗な肌なんだから虫なんかに刺されたらダメだと思います。

周りを囲む大自然とその人の格好はとてもミスマッチだったが、それ以上にその人のモデル体型が山と不釣り合いだった。

しかし。

ミスマッチだろうが不釣り合いだろうが僕にとってそんなことは些細なこと。さらにその人が何かをつぶやいているが今の僕には全く気にならない。

「……ぶつ……ぶつ」

……色んな意味で怖かった。

森の中で不似合いなおかしな格好、でもそれは別にいいと思う。どんな格好で山に登ろうがその人の勝手だからね。モデルのような体型も恐怖とは程遠いもの。

なら僕はいったい何に恐怖しているのかと言うと。

主にその人の頭部。それとその人がとっている行動。

その人は顔に白馬のお面をつけた状態で、青いおもちゃのプラス

チックのバットを握り全力で素振りをしていた。

空を切る軽い音。振っては構え、振っては構える。

野球のことはよく知らないけれど、とても綺麗なフォームだと思った。

バットを振る度にスカートがギリギリまでめくれている、大変目のやり場に困ってしまう。

馬のお面で視界が狭くなっているせいか、様子を見ている僕の姿に全く気付いていない。さっきから草むらを踏みしめる音を鳴らしているのだけれど、それにも気づいていない。お面の中で自分のつぶやきが反響して周りの音が聞こえづらくなっているのだろうか。被ったことがないのでよく分からない。

女の方はひたすらプラスチックのバットを振っていた。終いには素振りをやめて地面にバットを叩きつけ体全体で怒りを表現するようになっていた。

地面をばこばこにする姿はスタイルの良さも帳消しになる位みっともなかった。

モデルさん並みなのに……何か残念だ。いやあ、変な人だなあ。

地面を殴ったり地団太を踏んだり傍にある木を思いっきり叩いて手を痛がったり。

しばらくぶつぶつ言いながらバットを振り回し続ける女の人。不安定な山の地面の上でミールなんかを履いてあれだけ暴れまわれるなんて運動神経がいいんだなあなどどうでもいいことを考えてみる。

そんなことを考えながら僕がその光景に目を奪われていると、突然その人の動きが止まった。

そして、ゆっくりとこちらを振り向き――

「う、うあああああああああああ！」

僕は白馬と目が合う前にその場から全力で逃げ出した。本当に怖

かったんだもん。

全力、必死に、何度も転びそうになりながら秘密基地まで止まることなく振り返ることなく逃げてきた。

深呼吸をして息を整える。僕はあまり運動が得意ではないからすぐに息が切れてしまう。膝に手について走ってきた草むらを振り返る。

「うわっ！ 追ってきてるー！ー！ー！ー！ー！」

白馬がバットを振りながら猛スピードでこちらに迫ってきていた。

「おわわわわわわ」

まだ息が上がっている、走れない！

逃げる事ができない僕は地面にへたり込むことしかできなかった。

白馬が迫ってくる。ミールなのに物凄く軽快なステップ。やっぱり僕と違って運動ができるみたい。

ってそんなことよりも……。

僕はどうなってしまうのだろうか。あのプラスチックのバットで殴られるのだろうか。痛いのかな？ 痛いよね……。

無駄なことだとは分かっているけど、僕は後ずさりをして少しでも白馬から距離をとろうと試みた。

当然、無意味。

僕と二足歩行の馬との距離はあと五メートルも無い。ああ、おしまいだ。痛い目にあっちゃう。

諦めた僕。

でも神様は僕を見捨てていなかったようだ。

「！！！！」

馬のお面が枝に引っかかり頭からそれが取れた。

女の人の頭が大きく後ろにのけぞり、すぐに前のめりになる。お面の下に隠れていて見えなかった長く黒い髪が頭を越え顔の方に流れた。艶やかな黒髪一本一本が意志を持っているかのように木漏れ日の光を反射していた。

それに目を奪われていたが、すぐに女の方は恥ずかしそうに顔を隠し逃げるように森の奥へと走り去った。

「な、何だったんだろう……」

ユウ…ってことがあったんだ

まりも…にわかには信じられない話だね

ユウ…でも本当なんだ！ 本当に変な人がいたんだよ！？

まりも…もちろん信じているさ。その馬の後を追ったのかい？

ユウ…まさか！ 追うわけないよ！ 殴られたら痛いでしょ！

まりも…それはそうだけど、気にならないのかい？ そんな変質者滅多にお目にかかれないよ。私なら後を追って正体突き止めるね

ユウ…でも、怖いし……

まりも…まあそうだろうね。でも今度会ったら是非その姿を激写してほしいね

ユウ…もう会わないよ！

まりも…まあ会わないならそれがいいだろうけどねw それじゃあ、私はもう寝るよ

ユウ…うん

まりも…お疲れ様

僕はスカイペからログアウトしてパソコンを切った。

僕が唯一自信を持って友達と呼べる人は、ディスプレイの向こうの顔も知らない女の人。女の人かどうかも分からないけれど、自分でそう言っていたので僕は信じている。

その人と毎晩のようにスカイペで話をして、一日を終える。相手の声を聞いたことは無いけれど、きっと優しくって柔らかい人なのだと思う。

実際に会って話してみたいけれど、今の関係で充分満足しているのも確か。

僕は踏み出せずに今日もスカイペでその日遭った事の話をするだけにとどまっているのだった。

僕の学校生活

馬と出会った日曜日から四日が経ち今日は木曜日。僕の馬に対する恐怖心とは裏腹に平和な日々が流れていた。

馬が通学路で待ち伏せしていると、人込みで知らない人に話しかけられるとかそういう妄想に囚われていたけれど、日常を逸脱するようなものは片鱗すら覗かせることは無かった。

このまま何事もなく馬のことを記憶から追いやることができのかなと思いついて今日この頃。朝学校に来た僕は、人の少ない教室に入り真っ直ぐに教室の一番隅、最後方の自分の席へ向かった。座ってすぐに本を引っ張り出し文字の世界に没頭する。

本は良いよね。文字を読むだけで誰にも迷惑かからないから。

僕の好きなライトノベル。ライトだもんね。ファンタジーや学園モノをよく読んでいる。憧れちゃうよね、こういう世界。

僕の名前は佐藤優大^{さとうゆうた}。普通の高校一年生。友達のない僕を普通と称していいものかどうか悩むところだけでも、普通だと自覚しているので普通って言う。身長も低いし勉強もできない。顔もかっこよくないし性格だってよくない。特殊な能力がないどころか普通
の能力すらも無い僕は漫画や小説の主人公にはなれない。

よし、自己紹介の練習もばっちりだ。これでいつ小説の世界に飛ばされても自己紹介に困らないね。……自分で主人公にはなれないって言ってるのにそれを知りながら主人公になることを望んでいる僕ってなんなんだろう……。

でも万が一に備えるのはいいことだね。うん。

誰とも朝の挨拶を交わすことなく本を読み続ける。寂しい朝だけど、もう慣れた。別にいじめられているわけじゃないよ？ 挨拶を交わすほど仲のいい人がいないだけ。

どんどんクラスメイトが登校してきて、教室に人が増えてくる。本に目を落とし騒がしい教室から視線をそらす、ふりをする。

実は僕の趣味は人間観察だったりする。

誰も僕のことを気にしていないけれど、僕はみんなのことを気にしている。

高校一年生の六月下旬。友達はいないけれど日頃の人間観察のおかげで、大体の性格と人間関係が分かった。

このクラスは、大きく分けて三つの派閥に分かれているらしい。

一つ目はかっこよくて運動神経抜群な沼田君が率いる男子連盟（連盟名は適当）。沼田君は本当にかっこいいしユーモアのセンスもあるしクラスの男子の中で一番信頼されている人。僕も沼田君みたいになれたらなあっていつも思っている。

二つ目の派閥は女子の中心人物、有野さんが中心となっているチーム有野（やっぱりチーム名は適当）。有野さんはきはきとした物言い、好き嫌いをはっきりと言うタイプの人。このクラスの女子どころか一年生女子のリーダー格みたいだ。

そして、三つ目――

僕はその三つ目の中心人物に目をやった。

黒くて長い髪。雪のようにふわふわした白い肌。すらりと伸びる細くて長い脚と母性を感じさせる大きな胸。

このクラスの委員長、楠若菜さん。

驚くほど整った顔立ちをしている楠さん。一番美人だと思う人を一人思い浮かべると言われたら、多分この学校にいる人はアイドルより誰より先に楠さんを思い浮かべると思う。きっと、これからの人生で楠さん以上の美少女には出会えないだろう。

運動神経がよくって、当然のように勉強もできる。

美少女で、勉強ができて、運動神経ができて、おまけに性格までいいと来てる。僕が読んでいるライトノベルの主人公みたいでかっこいい。

三つ目の派閥はその楠さんを慕って集まる楠ファンクラブ（ファンクラブ名はもちろん適当だ。ファンクラブなんて存在しない、仮のものだよ）。クラスの半分的女子を有田さんと取り合っている状

態（楠さんにはそんな気ないみたいだけど）。多分、僕の勘だけだと近い将来楠さんが女子の中心になると思う。楠さんはとっても親切で、欠点が見つからない。それに比べて有野さんは少し我が強く、魅かれる人も多いけど敵も多いみたい。僕は惹かれる人間もいないし敵もないけど……。

沼田君と、有野さんと、楠さんの三人がこのクラスの中心人物。

楠ファンクラブとチーム有野は覇権を争って対立しているけれど、楠ファンクラブと男子連盟は男女連合を作るほどとても良好な関係を築けている。男女連合の総長は、当然楠さん。

つまり、実質的にこのクラスのトップは楠若菜さんなのだ。委員長だし、当然と言えば当然かも。

トップの人間が素晴らしい人物なので対立してようやくクラスの雰囲気は穏やかだ。楠さんは凄いと思う。

……でも最近、その平穏が脅かされて、不穏な空気が流れだしている……。

有野さんは楠さんがトップなことが本当に面白くないみたいでよく楠さんに突っかかっている。楠さんと言えば全く気にしていない様子で、相手にしない分不穏な空気は広がらない。でも最近は何の要因も発生してそのせいでクラスの空気が不穏になってきているんだ。

別の要因が発生したのは楠さんが委員長なことが関係している。

委員長は二か月前に決めたのだけれども、副委員長は必要ないということで長らく空席だった。しかし夏休み明けにある文化祭に向けてやっぱり副委員長を決めようという男子の総意でこのたびその一つの席を巡って男子たちが争い始めたのだ。

当然、楠さんと一緒に仕事がしたいっていう下心全開な考えだ。

男子たちは選ばれしものだけが就けるその役職を目指して日々楠さんにアピールしまくっているのだ。さすがに有野さん以外の女子もそれは面白くないみたいで、楠さん……と言うより男子たちに冷たい目線を送っているのだった。

当然、僕は蚊帳の外。

いじめられているわけじゃないよ？

ただ僕なんかがそれに混ざったらもっと不穏な空気になっちゃうからね。僕は見ているだけでいいんだ。

そう、見ているだけで。

そう言うわけで僕はその様子、主に楠さんを眺めていたのだけけれども、あ、しまった。

楠さんと視線が合ってしまった。

怒られる。じろじろ見ていたことを咎められちゃう。

うわああああ。楠さんがにっこり笑って近づいてきた！

慌てて本に目を落とす僕に、楠さんが黒くて長い髪を掻き上げながら話しかけてきた。

「佐藤君」

名前を呼ばれた。でも緊張して顔が上げられない。

寂しい朝に慣れてしまったせいかな、誰かに話しかけられる朝が来ると焦ってしまう。

「おい。佐藤優大君」

反応したいけれどちらりと視線を送ることしかできない。なんて言えればいいんだろう……。

困っていると、楠さんが質問してくれた。

「何読んでいるの？」

質問なら、答えを返せる。

「あ、えっと、これは、ライトノベル……」

「ライトノベル？」

上目遣いで楠さんを見てみると、とても素敵な笑顔で首をかしげ僕の目を見ていた。

「ライトノベルって何？」

「……えつと……、ライトな、小説……」

なんと説明していいものか分からなかったので曖昧な説明になった。

「へえ！ そうなんだ！」

僕の適当な説明にも明るい笑顔を返してくれる楠さん。みんな副委員長の座を狙うのもよく分かる。

「おもしろい？」

「う、うん」

でも、何故だろう。今までほとんど話したことが無かったのに、一昨日あたりから妙に話しかけてこられる。にこにこ眩しい笑顔を見せてくれるけど、それと同時にクラスの男子全員から熱い怒りの視線も受けることになるので少し居心地が悪い。僕悪くないのに……。

「どうしたの？」

僕の晴れない顔を見て、楠さんが心配そうに聞いてくれた。

「悩み事があるなら私に言ってね？」

「あ、うん。ありがとう。でも何もないから大丈夫だよ」

「本当？　ならいいんだけど」

「うん、大丈夫」

最後まで優しい空気を作りながら、楠さんが女子たちの輪に戻って行った。

あー、緊張した。何と言ってもこのクラスのトップだからね。緊張しちゃうよ。

……。楠さんが離れて行ったのに男子たちの目は依然鋭い。僕悪くないのに……。

僕は逃げるように本の世界に飛び込んだ。

今日も一日何事もなく終わった。

残すはホームルームだけ。

変わらない日常。これがいいことかどうかは僕にはわからないけれど、僕は満足している。日常が変化してどうなるのか分からないのなら、平和な今が続けばいいと思う。

だから早く帰ってお姉ちゃんと弟のご飯作ろう。

机の上で教科書をトントンしてカバンの中にしまう。あとは席について先生を待つだけだ。

先生はすぐに来た。そういえば小学校時代に「先生が来た!」って言ったら「いらっしゃったでしょう!」って本気で怒られたっけ。そこまで怒ることないのについて思ったけどあのころから言葉づかいを教えておけば将来困らないもんね。さすがは先生。そういうわけで先生はすぐにいらっしゃった。

「席に着けー」

先生の声にみんなが従い席に座る。静かになった教室を見渡しホームルームを始める。

「特に連絡事項はないからさっさと終わろうか」

面倒くさい話をしない先生だからいいね。

「あーそうだ」

あれ? 珍しく話があるのかな?

「えーっと……」

誰かを探すように教室を見渡す先生。僕じゃないよね。僕に用事なんかあるわけないもん。しかし先生僕を見て、

「佐藤、放課後暇か?」

ぼぼぼ僕ですか?!

「えっと、その、……一体なんでしょうか」

「ああ、ちよつとこの後資料の整理があつてな。男手が必要なんだが、このクラスで部活をしていないのは佐藤だけだからな」

なるほど……。何もできないからこそその僕なんだ。

「あ、あの、でもっ」

「え？　暇じゃないのか？」

「……いえ、暇です……」

「そうか。じゃあよろしく頼む」

……今日の晩御飯は送れそうです、お姉ちゃん。

先生の言いつけどおり放課後残る。

「じゃあ佐藤、ちよつと来てくれるか？」

「あ、はい」

先生に連れてこられたのは三階にある資料室と言う名前のよく分からない教室。本棚の中には沢山の資料が詰め込まれている。これを整理するのかな？

「とりあえずこの本棚を空にしてくれ」

「はい。……はい？」

この本棚っていうと、目の前にある本棚だね？ 幅三メートル高さ二メートル。約。そこにぎっしりと詰まった謎の資料。これを空にするのかな？ 本棚から出すだけでいいのかな。

「これを焼却炉に持って行ってくれ」

「え、ええ……」

さっきも言ったけどここは三階。そして本棚はぎっしり。これじゃあいつ帰れるのか分からないよ。

「じゃあ、後は頼んだ」

「え？！ 先生は……？」

「俺は仕事があるからな。良いだろう佐藤。どうせお前暇だろう」

「い、いえ、そんなに言うほどは暇じゃないです……」

「なんだ。用事があるのか？」

「は、はい。早く帰らないとお兄ちゃんご飯って言って泣かれるんです」

「あれ？ お前の弟はそんなに幼かったか？」

「あ、いえ、姉です」

「……じゃあ佐藤頼んだぞ」

「え、いや、本当の話で——」

先生は僕の話を最後まで聞かずに資料室を出て行った。

こ、困ったなあ。本当にお姉ちゃんに怒られてしまう……。

ううん。悩んでいても仕方がない。早く終わらせる以外に帰れる方法がないんだから余計なことを考えずに資料を持って行こう。

僕は本棚の上の方から資料を取り出した。……重い。とりあえず持って行こう。

そして僕は二度の階段の上り下りで腕の筋力が無くなってしまった。本って重たい。どうしよう、これ時間がかかるよ……。

困ったなあ、どうしよう……。

ああ、いや、そんなことやりながら考えればいいんだ。

僕は本を持った。

ひいひい言いながら階段を下りる。重たいよ。しかもいい方法が思いつかない。

「早く帰らなきゃいけないのに……。遅くなっちゃうよ」

つぶやいてみても何も解決しない。足を動かさなきゃ。

愚痴りながら一階へ続く階段を下りた先に。

「佐藤君？」

まさかの楠さんがいた。

「楠さん。さようなら」

忙しいしどうせまともに話せないから僕は軽く頭を下げた先へ進

んだ。けど、引き止められてしまった。

「ちょっと待って、佐藤君。それもしかして先生に頼まれた仕事？」

「あ、うん。そう」

「大変そうだね。時間かかりそうなの？」

「ううん。そんなことも無いよ」

「でも今遅くなっちゃうって言ってたよね？」

「え、聞いてたの？」

「あ、うん。たまたま、たまたまね？ 偶然耳にね？」

なんだろう？ 三日前から楠さんに僕のつぶやきをよく聞かれてしまう。僕の声が大きいのかな？

「私も手伝うよ」

「え」

手伝ってくれるって！ さすがだなあ！

「一人でできるからいいよ？」

でも僕はありがたい申し出を僕は断っていた。だって人に迷惑かけちゃいけないからね。

「でも早く帰りたいんでしょ？ 手伝うよっ」

作り物のような完璧な笑顔。みんなこの笑顔に癒されているのだろう。でも僕は困る。直視できないしなんて言えばいいか分からないから。褒めることもできないよ。恥ずかしいもん。

「で、でも……重いから……大丈夫だよ」

「重いからこそ手伝うんでしょ」

「でも、先生だってわざわざ男の僕に言ってきたし、その、楠さんに手伝わせるのは、あの」

「……え」

長いまつげをぱちぱちと動かしとても驚いていた。なんでだろう。まるで断られることが予想外だとも言うような顔だ。

「……そんなに大変じゃないとか？」

「あ、うん。そう。そう」

「……へえ、そうなんだ。なら、他に手伝うことないかなっ！」

う、眩しすぎる笑顔だ。目がくらんじやうよ。

「だ、大丈夫だよ。もうこれで終わりだし？」

全然終わりそうにもないけれど疑問形にしたから嘘にはならないよね。……ならないのかな？

僕の言葉を聞き楠さんがしばらく考え、

「……なら、頑張ってね」

何故だか不満そうに帰って行った。

ずっと資料を持ちっぱなしだったから腕が痛いよ。とにかく早く終わらせよう。

七時。結局三時間かけてやっと終わった。まさかこんなにかかるとは思わなかった。腕はもう使い物にならないね。

全部運び終わったころ、先生が様子を見に来た。

「ありがとう佐藤。もう帰っていいぞ」

ううう……淡白だなあ。でもいいや。

やっと帰れる……。お姉ちゃんに怒られるよ。

夕日の沈む直前の空。赤い街の中疲れ切った腕を揉みほぐしながら帰路につく僕。途中で、あの馬に会った山へ続く道を通りがかったので少しを眺めてみる。あの馬が待ち伏せしているのではないかとドキドキしながら見ていたら、山の方から人が降りてくるのが見えた。あの時の馬だ！ と慌てて電信柱の陰に隠れた。

緊張する。

また襲われたらどうしよう。プラスチックのバットで殴られてしまおう！

そう考えたら怖くていつの間にか向かってくる人に背を向けていた。恐怖で見ることができなかった。

足音が近づいてくる。このまま気づかずにどこかへ行ってください

い！

どきどきどきどき。

願い虚しく足音は僕のすぐ後ろで止まった。

「佐藤君？」

その人はとても優しい声で僕の名前を呼んだ。

「え？」

名前を知っているということは僕の知り合いと言うことだ。安心して声の主を確認してみた。
違う意味でピンチだった。

「く、楠さん……」

ああ、今日はよくこの人の顔を見るなあ。
緊張してなにを話せばいいのか分からないよ。

「佐藤君、もしかして今帰り？」

「あ、うん。そう」

「こんなに時間かかったの？ 仕事大変だったんじゃない！」
可愛い声と顔で怒られた。

「え、ま、まあ……」

「手伝ってあげるって言ったのにつ」

頬を膨らませ可愛く怒る。

「でも、終わったからいいよね」

「……まあ、いいけど。でもなんで助けを求めなかったの？」

「え？ 申し訳ないから……」

一瞬とても楠さんに似合わない顔が見えたけどすぐにいつもの穏やかで明るくって親しみやすくって素敵でふわふわでとにかく地上の物とは思えない笑顔を作ってくれた。あれ？ 僕ヘンタイかな……。

「今度は私も手伝うからね」

「あ、うん。ありがとう」

やっぱりいい人だなあ。夕日が山に隠れ始め、赤から黒に変わり始めた街の中、楠さんが笑顔で立っている。僕なんかが正面に立つことは許されることではないのに、ましてや言葉を交わすなんてみんなに申し訳ない。って、あれ？

「あの」

「なにかな？」

首をかしげ、長く夜のように深い色の髪の毛を鳴らす。

「何か聞きたいこともあるの？」

美人過ぎて自分の存在が情けなくなる。生きているのが申し訳ないよ。僕なんかが一緒の空気を吸ってもいいのかな。

「どうしたの？」

しまった。ついつい自己嫌悪に陥ってしまい楠さんに話しかけたことを忘れていた。話しかけておいて無視するとか失礼にもほどがある。僕は慌てて気になることを聞いてみた。

「こんな時間に山に何の用事かなって思って……。もう暗くなるし、危ないんじゃないかなーって」

あれ？ こんなプライベートなこと聞いてもよかったのかな！
もしかしたら僕はものすごく失礼なことをしているのではないでしようか！

「ええ、まあ、色々と」

やはりプライベートなことだった。聞いちゃいけないみたいだ。

「でもこの辺りは変な人が出るみたいだから……。気を付けた方がいいよ？」

僕の言葉を聞いて笑顔が冷たくなる。

「変な人と言うと、たとえばどんな人？」

「え、変って……。変な人だけと……」

「だから、どんな人かって聞いてんの」

う、怖い。

「あ、ごめんね」

すぐに暖かい笑みに作り直す。あーびっくりした。怒られるのか
と思った。

「それで、変な人ってどんな人？」

何故だか妙に変な人にこだわる楠さん。なんでだか僕には全く分
からないや。

「変な人は変な人だよ」

変な人だもんね。

「ヘエソウナンダ」

最終的に妙にぎこちない笑みを作って山の方へ向かっていった。

「く、楠さん？ もう暗くなるよ？」

「ハハハハハ」

笑いながら手を振って木々の中に消えて行った。

危なくないかなあ……。追った方がいいのかなあ……。でも怖い
し……。……。ぷ、プライベートなことだし、追わない方がいい
よね。うん。なんで山に行くのか分からないし。

僕は後ろ髪を引かれる思いをしながら家路を急いだ。

家についた僕。

お姉ちゃんに泣かれたり弟にフォローしてもらったり色々あったけど無事に自室のパソコンをつけられた。これが毎日のお楽しみ。僕はすぐにスカイペにログインし、顔も知らない友人を待つ。しかしいくら待っても友人・まりもさんはログインすることは無かった。仕方がないので一人ニヤニヤ動画を見てにこにこしておこう。

ニヤニヤ動画かあ。僕も何か投稿してみたいなあ。でも僕面白くないしなあ。何か面白い動画撮れないかなあ。

……。

あ、そうだ。そう言えば昨日まりもさん（スカイペの相手）に変質者がいた証拠を撮ってきてくれて言われてたっけ。どうせなら動画を撮ろう。あ、別に投稿しようっていうわけじゃないよ？ あの変な人は写真なんかよりも動画の方がその凄さが伝わると思ったから動画を撮ろうって思っただけだよ。

馬の中の人

いよいよ放課後。僕はあの日であった馬の動画を撮りたいがために、先生に捕まらないうちに早めに教室を出で真っ直ぐに秘密基地へ向かった。

やっぱり秘密基地はいつも通りの顔で僕を迎えてくれる。一応念のために、何の念のためにかは自分でも分からないけれど、一応念のために秘密基地もとい秘密テントに首を突っ込んで中を確認してみた。

異常なし。

秘密テントから顔を引き抜き僕は森の奥に視線を向けた。

……。

ここまで来て少し怖くなってきた。やっぱりやめようかな……。

……。

……うん。そうだね。盗撮になるし、いけないことだね。やめよう。

と、引き返そうとしたとき。

「！」

僕が登ってきた道から誰かが登ってきた！

逃げる必要はないのかもしれないけれど、馬に対する恐怖がすべての物に作用し僕は思わず森の奥へと逃げてしまった。

逃げて逃げて何故かあの馬が暴れていたところまでやってきてしまった。辺りを見渡してもあの馬はいない。でも後ろを振り返ってみると登ってきた人がこっちにやってきている。も、もしかしたら、あの時の馬本人なのかもしれない……。

恐ろしいので僕は少し戻って木の陰に隠れてやり過ごすことにした。

……怖い。また馬を被っているのかな……。

その人をやり過ごし、その後ろ姿を覗き見る。

背の高い後姿。後頭部から垂れる黒く長い髪が規則正しく揺れていた。しかもその人は僕と同じ高校の制服を着ている。だ、誰なんだ！ 顔を見なければ全然わからないよ！

何かを探すようにきよろきよろと視線を動かしている。もしかして僕の存在が見つかったのかもしれない。ど、どうしよう……。やっぱりあの青いバットで殴られるのかな……。で、でも今は何も持っていないし、そもそも馬の人かどうかも分からないし……。

僕が恐怖に支配された精神でがくがくとその人の観察を続けていると、とうとうその人の顔を拝むチャンスがやってきた。

ゆっくりと、その人が振り向く。い、一体……誰なんだ……！
全然想像もつかないよ！

「あれ？」

そこにいたのは馬であるはずのない人だった。

「く、楠さん……？」

完璧少女の楠さん。まさかこんな娘を疑ってしまうなんて。僕はダメだなあ。

僕は安心して木の影から出た。

「……そこに隠れてたんだ」

ふらりと僕を見る。

「え、う、うん。僕がこの山にいるって知ってたの？」

「当たり前でしょう。追ってきたんだから」

え、誰？ 本当に楠さん？ その前に、追ってきたってなんで？

「どうしてここにいるの？」

と楠さん。

「あ、この前ここで変な人に会ったから写真でも撮ろうかなって思
って……」

「ふーん。いい趣味してるね」

これは褒められていないと僕でも分かる。

「で、写真はもう撮ったの？」

「え、いや、変な人いないみたいだから……まだ撮ってない……」

「へえ……」

楠さんとは思えない顔ですね。

「え、え、え？ も、もしかして僕悪い事した？」

「……分かってるんでしょう？」

いつものような暖かい笑顔じゃない。っていうか、笑顔がないね。
ものすごく怖い無表情。とりあえず怒っているみたいだから謝ろ
う。僕が悪いんだから。

「ごめんなさい」

頭を下げた。

「やっぱり分かってたんだ」

ゴミでも見るかのような目。怖い。分かってたって、いったい何のことだろう……。でも怖いから聞けない。

「それで、気になることは無い？」

「え、えっと……」

しいて言うならばなんで怒っているのかを聞いてみたい。けど怖いから聞けない。

「聞く必要がないって？　へえ、それはそれは」

何も言っていないけど。

あの優しい楠さんがここまで怒るなんて……。僕はそれだけのことをしたんだ……。ああ、償いたい。でも罪を自覚していないのでどう償えばいいのか分からない。聞けばいいのだろうけれど、怖いから聞けない。

「ご、ごめんなさい……」

謝ることしかできない僕を誰が責められようか。

「見ちゃってごめんなさい？　ムカつくね」

む、むかつく?! あの時、楠さんが今ムカつくって言った?! やっぱ偽物?! 怖いから怒っている理由聞けないと思ったけど、聞かないで怒られている方が怖いことに今気づいたよ!

「あの、その、な、なんで怒っているのかわかりません!」

思わず敬語になるほどに怖い!

「いい加減分らないフリやめてよ。私だってもう隠さないで本音で話してるんだからさ、君も本音で話そうよ」

「ほ、本音です……。本当に分らないよ……」

「嘘ばかり。ずっと私の事監視してたじゃん。あの時顔見たんでしょ」

あ、なるほど。ここ最近目が合う機会が多かったから監視されてると思われちゃったんだ! でもあのときっていつのこと?!

「ごめんなさい! その、あの、えっと」

言い訳のしようがないよ!

「ごめんなさい……」

学校生活を諦めよう……。楠さんに嫌われるのは一年生全員に嫌われるのと同義だから。

「謝らなくていいから。とりあえずあの時落とした私のお面返して

よ」

怒った顔で手を差し出してきた。

「お面……？　って、何？」

はああああああと大きくため息をつく楠さん。

「いいかげんにしてくれないかな」

一文字一文字間にスペースが入るほどにキレていらっしやる！

「あの時の馬のことに決まってんでしょ。持って帰ったの？　捨てたの？」

……。

「え、なんで馬のこと知ってるの？　あれ？　楠さんも見てたの？」

どこにいたんだろう。木の陰に隠れてたのかな？

「見てたって……そんなの知ってて当たり前じゃん」

眉根を寄せて怒っていることを教えてくれる。

「ど、どうして？」

僕は首をかしげて聞いてみる。

「ああ、なるほどね。私の口から言わせたいわけ」

な、何のことだろう。

何かに納得したように頷いて楠さんが言った。

「あの時の馬は私です。これで満足ですか？」

……。

……。

……。

………ええええええええ？！

それ初耳なんすけども！ 全然わからなかったよ！ うん！

「それで」

楠さんがこっちに近づいてきた。

「そ、それで……？」

僕の目の前で止まる。

「この事実を知った君はどうするつもり？」

「ど、どうするもこうするも……」

今初めて聞いたし、まだ何も考えられない……。

「まあ、どうせ君も他の男みたいに私をいやらしい目で見てるんですよ。私は可愛いからね」

うん。自分で言っても許される可愛さだと思うよ。

「そういう人間が何をするのかは大体想像がつくよ」

何をするって……、黙ってるつもりだけど……。言いふらしたりしないよ？

「どうせ君はこのネタを使って脅すつもりなんですよ」

「ええええええ？！」

そんなことしないよ！　って言いたいけど楠さんの顔が近すぎて緊張して言葉が出ない。

「あーいやらしいやらしい。人間なんてみんなそう。特に男はクズばかり。女みたいな顔してる君だって例には漏れないでしょう」

と言って顔をぐいっと近づけてきた。

うわー！　近い！　綺麗な顔が近いよ！　思わず目をそらしちゃうよ！

「でも私はそんなことさせないよ」

楠さんが片手で僕の頬を挟み込み、無理やり自分と向かい合わせる。僕の方が背が低いから少し見上げる形になってしまう。僕は直视することができずに固く目を瞑った。

「君は私を脅せない」

「う、ううう」

い、痛い。痛い。痛い。楠さん。

「だって、脅すのは私の方だから」

「え？」

「どういふ意味か分からず目を開ける僕。いや、もう開けない方がよかったですぐに後悔したよ……」。

目の前に広がる楠さんの綺麗な顔。眩しいよ。

いや、そんなことよりも。

僕は、

何故だか分からないけれど、

楠さんに、

キスをされていた。

.....

.....○

ぎゃあああああああああああああ！
意味が分かりませ

僕は完全に思考が停止してしまい指先一つ動かすことができなくなっていた！

直立不動の僕の横で、携帯のシャッターの音が鳴った。それと同じに楠さんが離れる。

「な、
ななななにを？
なななんで？！」

ぼ、僕の純潔が！ 何が起きているのでしょうか！ これ地球終
るんじゃないの？！ ぼ、僕のような下賤な人間が楠さんとせせせ
接吻を交わすなどと世間様にもも申し訳が立ちません！

「……」

楠さんは慌てる僕を無視して、満足そうな表情で携帯を眺めていた。

「くくくく楠さん?!　せせ説明をお願いしてもいいですか?!」

とりあえず僕は無視される。

「ああ、なんて哀れな私……」

よよよと泣きまねを見せる楠さん。な、何が起きているのかさっぱり分かりません!

「い、いったい、どういうことでしょうか……」

少し落ち着いてきた。でもドキドキは一向に収まる気配を見せてくれません……。多分今日はもう無理です……。

「君は今私に無理やりキスをしたの。そう言うこと」

無理やりって何?!　意味が分かりません!

「あ、あの、詳しい話を教えてほしいんだけど……」

「そんなことよりさっさと携帯出してって言ってるの。赤外線送信」

「え、あ、はい」

同じこと言わせないでみたいなことを言われたけれど初めて聞いたよ。でも僕は言うとおりに携帯をだし、楠さんの携帯と向かい合わせる。そして言われるがままにプロフィールを送信した。

楠さんが送られてきた僕のアドレスにメールを送ってきた。僕はそれを開封。何やら添付されている。開いてみた。

「うぎゃあああああああああああああああああああああ！」

楠さんと僕のキスシーンだった！ なんの羞恥拷問ですか！

「なななななんですかこれは！」

「そんなの決まっているでしょう。私が、君に、無理やり、キスを、させているシーン」

「そんなに単語分けしなくても分かります！」

でも結局なにを言っているのか分からないので慌てて写真を見てみる。恥ずかしい！ 恥ずかしすぎるよ！ けど我慢してよく見てみる……。

自分のファーストキスを客観的に見てみる。異次元の美貌を持つクラスメイトと唇を合わせている僕。……。うばばばばばば。……いや、もう現実に起こったことを認めて前へ進もう。僕は取り返しのつかないことをしてしまったんだ。罪を背おって生きなければ。

とにかく今は楠さんの言葉の意味を知ろう。

何となく薄目でディスプレイを見る。

楠さんはなんて言ったっけ。

無理やり、僕が、ききき、キスを、しているシーンって、言っただけ。

ディスプレイに映し出されていた楠さんの表情は苦しみに満ちたもので、確かに、どう見ても、僕が無理やりしているようにしか見えなかった。

「あーあ。私のファーストキスが君みたいなのもやし野郎に奪われちゃったのか。人生何が起きるか分からないね」

「……も、もやし……」

口が悪い……。楠さんだとは思えない……。

って、ファーストキスだったんだ……。……。……。……。それってこんなところで散らしていいものなのですか?!

「とりあえず、君は無理やり私にキスをした。その事実はおツケー?」

「……。……いやいやいやいやいやいやいや! おっけーじゃないよ! ちょっとぼーっとしてたけどおツケーじゃないよ! アウトです!」

「うるさいね。君は今私に口答えできる立場じゃないの」

そう言っって携帯を開いて僕に写真を見せてきた。

さっと視線を外す。自分で見るのより楠さん本人に見せつけられたほうがなんだか恥ずかしい。

「そ、そんな。く、楠さんが……。じぶんで……」

「あーはいはいはい。別に君がどう思ってもいいよ。こっちには証拠があるんだから」

「証拠って……。それは楠さんが僕に無理やりキ、キスした証拠じゃあ……」

「何言ってるの？ この写真が全てを物語っているじゃない」

「確かに、この写真だけ見たら僕がその、無理やりしているように見えるかもしれないけど……。ちゃんとみんなに説明すれば……」

「私と君の言葉、みんなはどっちを信じるかな」

う。当然楠さんの言葉を信じるね……。僕だってそうだもん。僕みたいな芋虫なんかより楠さんのような蝶の話信じちゃうよ。

「ご理解いただけましたかね。君のこれからは私が握っているの。脅す立場から脅される立場になっちゃったの。オッケー？」

おっけーと言わざるを得ないよ……。

「ううう……。僕脅すとか考えたことなかったのに……」

そもそも知らなかったんだから。

「嘘ばかり。人間はみんなクズ。どうやって上に立つ人間を蹴落とすかしか考えてないんだから。完璧美少女である私の欠点を見つけた君はそれをネタに私を脅してエッチな命令を下してそれを眺めながら下卑た笑みを浮かべるつもりだったんでしょ気持ち悪い」

酷い妄想だよ本当に。

「でも残念。君はこれから私の言うことを聞かねばならない立場になりました。とりあえず手始めに馬返して」

ずいと手を差し出してくるけど僕は何も渡せない。

「ほ、本当に知らないよ……」

あの後すぐ帰ったもん。

楠さんがゴミを見る目で僕を見た後、ため息をつき言った。

「……まあいいや。じゃあひとまず今日は解散。明日君の家に行くからそのつもりで」

え、僕の家に来るの？ あの時超絶美少女が？ すごいことだよこれは。でも全然嬉しくないや！ 不思議だね！

「今は混乱しているだろうから、一晚よく考えていいよ。でも一晚だけしか時間あげないから」

そう言いながら僕とすれ違いこの場を去る楠さん。

僕はがっくりとうなだれた。何が何だか分からない……。

「佐藤君」

後ろから聞こえてくる声が僕の耳をくすぐる。先ほどまでの声じゃない。僕は思わず振り返っていた。

そこにいたのは、いつもの、僕が知っていた、誰もが憧れる優しい楠さんだった。

「ばいばい佐藤君。これから、仲良くしようねっ」

その表情を見て、不覚にも僕はドキドキしてしまった。

可愛い同級生が起こしてくれる朝って夢だね。でもそれって都市伝説でしょ？

楠さんとキ、キスをした次の日。

土曜日だよ。

ドキドキを収めてやつとのことで眠りについた金曜日。眠るのが遅かったから、いつもより深い眠りについていたらしい。

起きた時にはいつも起きている時間、朝八時を一時間も過ぎていた。

つまり今は九時。

寝坊したこともそれなりに驚いたのだけれども、今はそんなことはどうでもいいと思える状況だった。

「あわわわわ」

どんどんと。

僕の部屋の窓が叩かれていた。

物凄く怒った顔をした美少女に。

「な、何してるの楠さん！」

僕の部屋は二階。楠さんが立っているのは屋根。もちろん斜めの屋根。

僕は慌ててカギを開け屋根の上にいた楠さんを部屋に迎え入れた。ベッドに降り立ち僕を睨み付ける楠さん。ジーンズにTシャツ。動きやすい格好だ。初めから屋根の上に登るつもりできたのだろうか。

「起きるのが遅いよ。私がどれだけ待ったと思ってるの」

そう言っ て肩にかけていたカバンを僕に投げつけてきた。

どれだけ待っていたかは、楠さんの髪がぼさぼさだから長時間風にさらされていたのだろうと想像できる。

僕はカバンを地面に置き聞いてみた。

「な、な、なんで屋根から?! 危ないよ!」

ぼさぼさの髪の毛を撫でつけながら楠さんが言う。

「何言ってるの。昨日君が無理やり部屋に連れ込んだんでしょ。だから君の家族は私がここにいることを知らない。私がここで助けてと叫んだら君は自宅でさえ居場所がなくなってしまう。叫んでいる?」

「そ、そんな理不尽な……。僕は何もしてないのに……」

「寝ぼけてるの? 佐藤君、君は昨日私に無理やりキスをして無理やり部屋に連れ込んでいやらしいことをしたでしょう。覚えてないの?」

「そんなことしてないよ! 特に後半身に覚えがないどころの騒ぎじゃないよ!」

「なに? 口答えるの?」

ジト目で僕を見下ろす。でも感情はこもっていない。

「いっこで叫んでもいいの?」

「よ、よくないです……」

「なら認めて。君は、私を、無理やりここに連れ込んだ。はい、復唱」

「うう……。僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました……」

「はいご苦勞様」

そう言いながら何かを機械を取り出す。そしてそれをごそごそといじると。

『僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました』

機械が僕の声を再生していた。

「って、録音してたの?!」

「そうだけど。それほど驚くことでもないでしょ? 初めて見た? ICレコーダー」

「ICレコーダー初めて見たけど、その前になんで録音なんかするのっ!」

「脅すネタを増やすためだけど。そんな当たり前の事聞かないでくれる?」

な、なんていう美少女なんだ……。僕達は今までとんでもない勢いで騙され続けていたみたいだ……。猫被ってたとか、そんな言葉じゃあ足りないよ。でもいい表現が思いつかないから猫をかぶってたとしか言いようがないんだけど……。

まあいいや。

撫で続けられた楠さんの髪はセットしたばかりのように整っていた。すごい潤いヘアーだなあ。

ベッドにへたり込み楠さんの黒い髪に見とれていると、ずずいと顔を寄せられ至近距離で見つめられた。くりくりとした大きな瞳に僕の顔が映し出されている。映し出されたその顔は何とも情けない男らしさとは無縁の顔だった。っていうか、綺麗な肌が近すぎて僕の顔が真っ赤だよ！

「ねえ」

「な、なんですか……」

また怒られるのかな……。

「とりあえず、着替えようか」

「え、あ、うん……」

パジャマじゃダメなのかな……。

僕はベッドから降りてタンスを開ける。服を取り出し気付いた。振り向き楠さんを見してみる。ベッドの上にアヒル座りをしてばかりこちらを見ていた。

「……あ、その、楠さん……、その、見ない方が、いいんじゃないかな……」

「ああ、そう。恥ずかしいんだ。顔もそうだけど性格も女の子みたいだね」

そう言つて僕に背を向けてくれた。

そ、そんなの、可愛い子に見られてたら恥ずかしいに決まってるよ……。僕も背を向けて着替えを始める。

ささつと下を着替えて、上を脱いだ。が、その時、
ぱしゃ。

と、聞きたくない音が聞こえてきた。

上を着ないまま振り向いてみる。そこには当然携帯のカメラを構えた楠さんが……。

急いでシャツを着て猛然と抗議をする僕！ 当然だよ！ 今回ばかりはちよつと強めに言っちゃうよ！

「そ、その、な、なんで、写真なんか……」

「部屋に連れ込んだ君が服を脱いで私を襲おうとしている証拠」

「そ、そんな……！」

「君サイテー。か弱い女の子を部屋に連れ込んでこんなことをしようとしているだなんて」

「してないよ！ する気も無いよ！」

「する気も無いって、それ失礼でしょう。ふざけてんの？」

「う……」

確かに失礼だった……。

「訂正して」

「……」

「僕が気を付けておけば防げたことだから楠さんに文句を言うのは間違っている……のかな？」

「知らないよ」

「だよね……」

「うなだれる僕に楠さん。」

「ねえ佐藤君」

「な、なに？」

「なんで君はそんなに遠慮してるの？ 私はこんなに心を開いているのに君はずっと閉じたまま。なんかムカつくんだけど君の愚行をみんなにばらしているの？」

「そ、そんな……。そんなこと言われても……。僕なんか楠さんになれなれしく話すなんて許されることじゃないし……」

「何それ。脅してくる奴相手にへりくだるって君どれだけマゾなの」

「ま、マゾじゃないけど……。本当のことだし……」

「……私が心を開いているんだから佐藤君も心を開くべき」

「え、で、でも」

「でももしかشもない。ばらすよ」

……本当に僕は脅されています……。

「わ、分かったよ。本音で、接します」

「約束だから。じゃあそう言うわけで、佐藤君朝ご飯まででしょう。食べてきていいよ」

「え、楠さんは？」

「私は食べたよ。そもそも忍び込んだからご家族の方と一緒にご飯は食べられないでしょ。さっさと一階へ行ってご飯食べてきて。そのついでに何か飲み物を持ってきて。君と私の分二つね。できればお茶」

「う、うん。じゃあ、僕は、ご飯を食べてくるね」

「はいはい」

僕を脅していると言っても、やっぱり楠さんは優しいなあ。

朝の食卓は平和で幸せだった。家族みんなで食べるごはん。おいしいよね。

ご飯を食べ終え、お盆の上にお茶を二杯乗せて二階へ上がる。なんで二杯持っていくのかお姉ちゃんに怪しまれたけど僕の部屋にお

茶好きの幽霊がいるんだと言ったら納得してくれた。

自分の部屋だけれども、楠さんがいるのでノックをしてから入る。

「入るよ？」

ゆっくりと扉を開いて中を覗くと楠さんが堂々と部屋をあさっていた。

「あれ？ 探し物？」

何も隠していないけれど。

「……その反応を見ると、別にエロ本とか隠していないみたいだね……」

「え、エロっ……！ そんなのないよ！ そんなの探さないでよー！」

「……本当に男なのかな……。情けない声出してみっともない」

ぶつぶつと言いながら楠さんが勉強机から椅子を引っ張ってきて座る。

「うう……。よく言われるよ……」

僕はお茶の乗ったお盆をテーブルの上に置いてそのまま床に正座をする。テーブルの上に空のタッパが置いてあるけどなんだろう？

「佐藤君本好きなんだね」

「え？ あ、うん。好き」

「漫画本とかが多いね」

「うん」

「アニメも見るんだ」

「うん」

「オタク？」

「う、うーん、オタクの人から見たらオタクじゃないと思うけど…」

「じゃあオタクだ」

「……サブカルチャーに全然興味がない人から見たらオタクかも」

「オタクなんだ」

「あ、その、楠さんよりは……」

「オタクなんでしょう？ 言い切ってよ。ウザい」

「は、はい。僕はオタクです……」

ウザいって言われちゃった……。あの楠さんにウザいって言われちゃった……。

「今度からはすぐに答えてよね。何度も聞き返すの面倒くさいから」

「あ、うん……」

怒られちゃったよ。

「なにかおすすめとかある？」

「おすすめ？」

「面白いアニメとか、漫画とか」

「あ、えーっと……。楠木さんは、その、どんなのが、好み……。なのかな」

「うーん。平和なの」

「平和なの、なら……。そこにある、とある女子高の軽音楽部っていうのが平和で面白いよ」

ふーん、と興味なさげに呟いて椅子をくるくる回す。興味ないのなら何で聞いたんだろう……。椅子の回転をピタッと止めて僕を見る。

「それで、君は男の情事やらをどうしているのかな？」

情事？ 情事ってそういうことかな……。……はあ？！

「な、なな何我突然言っているの？！ 何を言っているの？！」

「繰り返さなくても聞こえているから。で、どうしてるの？」

「ししし知らないよ！」

「……まあ、いっか。ただの興味本位だし」

「う、うううう……」

なんか強いよ、この人……。

「ああ、そうだ」

「な、なに？」

声をかけられる度に怖いよ……。なんだか調教されている気分だ……。

「色々と部屋を調べさせてもらったんだけど、タダで探すのは申し訳ないと思ったから調べた個所に代金としておはぎを置いたから」

「おはぎ?!」

「ほら、ベッドも調べさせてもらったからそこに」

楠さんが指さす方、僕のベッドの上を見るとおはぎがその肌を剥き出しのまま銀紙の上に鎮座していた。

「や、やめてよ……。蟻が来ちゃうよ……」

「嬉しくないの？」

「嬉しくないよー……」

「あれそれは残念。合計九個おはぎを隠したのに喜んでもらえないなんて」

「九個！？ 結構多いよそれ?!」

「まあいいや」

「僕はよくないよ!」

「なら探しておはぎたちを助け出せばいいと思います。その間私はここにある君のパソコンをいじらせてもらおうから」

「う、うう……」

どうやらおはぎの生息地は教えてくれそうにないね……。仕方がないので、僕は一人おはぎ探しをすることになった……。机の上のタップはおはぎを持ってきた入れ物だったんだね……。

そして僕は無事に全九個のおはぎの救出に成功した。ダンスの中、押し入れの中、引き出しの中、カバンの中……。色んなところにちりばめられたおはぎを探し終えたとき、僕はまるでドゴランボールをそろえたかのような気分になった。願い事が一つ叶うのかな？

そうだとしたら何を願おうかな！ 身長も伸びてほしいおいしいものも食べたいし。でもやっぱり一番欲しいのはパソコンソフトの終音ミコが欲しいかな。歌を作ってニヤニヤ動画に投稿したいな。おはぎを見つけ終え楠さんの後ろで正座をする僕。

「ねえ佐藤君」

おはぎ事件に対して特に反応も見せずディスプレイを見つめたままの楠さんが聞いてくる。

「どうしたの？」

「エロ画像はどこにあるの」

「エロっ……！ そ、そんなのないよ！」

「君は聖人ですか。三大欲求の一角を担っている性欲が佐藤君には無いの？」

「そん、そんなの気にしないでよ！」

「……まあ、脅せば済むことだけど、別に処理の仕方が気になってるわけじゃないからいいや」

なら聞かないでよ……。

「それで佐藤君」

「な、なに？」

「このパソコンは何のために使ってるの？ Dドライブの中身が空っぽなんだけど、エロ画像もエロ動画も見ないなんてパソコンとしての役割が果たせていないでしょ。これじゃあただの暖房器具じゃない」

「僕パソコンを駆使しているわけじゃないからパソコンの事全然詳しくないけど、パソコンってそんなえっちなものじゃないと思うよ……」

「パソコンを個人で所有している人の99パーセントはエロ目的でパソコンを買っているの。君が残りの1パーセントだとは思えないから君はエロス。うちの兄もエロス」

「お兄さんがいるんだね」

楠さんが大きな瞳で僕を睨み付けてきた。

「ちょっと。なんで私の個人情報を知ってるの。もしかして私のこと調べてたの？」

「え、い、今自分で……」

「録音するから調べてましたって言って」

「とうとうオープンに録音しだした！ これじゃあどんな言葉でも人質に取られちゃうよ！」

「そうだね。なら『楠さんに酷いことをしました』って言って」

「い、言わないよ！」

「……自棄になられても困るし、無理な注文はやめておこうか」

「そ、そうしてくれると嬉しいよ……」

「感謝してね」

「う、うん」

感謝しなきゃね。

「それで、この暖房器具は他にどういう機能がついているの？ エ
ロ画像を見る機能はつけていないみたいだけど」

暖房器具扱い……。

「僕の場合はニヤニヤ動画とか見たり、2・1ちゃんねるを見たり
してるよ。だから用途としては暇つぶしかな？」

「ふーん。暇つぶしね」

カリカリとホイールを回す楠さん。

「私さ、思うんだけど」

「うん」

「インターネットしてたらよく見る、（※ただしイケメンに限る）
ってあるでしょ？」

「うん」

「あれさ、逆バージョンの方が該当ケース多い気がするんだよね」

「逆バージョンってどういうこと？」

「（※ただし美少女に限る）っていうこと」

「？」

やっぱりよく分からなかった。

「もしかしたら私の勝手なイメージなのかもしれないけどさ、デブで暗い男と、デブで暗い女を比較した場合、デブで暗い男の方がポイント高い気がするの」

「……ご、ゴメン。よく分からない……」

「たとえばね、デブ男がカラオケに行きました。歌がうまい。デブ夫のくせにやるじゃんってなるでしょ？」

「う、うん」

「でもね、デブ美がカラオケに行って歌がうまくても、それはただ気持ち悪いだけなんだよ」

「えゝ……。そ、そうかな……。すごいと思うけど……」

「歌がうまい（※ただしイケメンに限る）は無いけど、歌がうまい（※ただし美少女に限る）はあると思うの。ブ男には適用されない

けど、ブ女には適用されるケースが多い。そう思うのは私だけかな」

……多分、楠さんだけだと思う。

「女性歌手の殆どはビジュアルがいいでしょ。でも男性歌手はそうでもないのもいるでしょ？」

う、うーん……。なんて言うか、同意しづらい……。

「その、あの……」

「言いたいことがあるならはっきり言ってよもやし太郎」

も、もやし太郎……。キャベツ○郎みたい。

「心を開くって言ったでしょ。もう約束破るの？　なんだ、君、無理やりキスしたことみんなにばらしたいんだ」

「そ、そんなことないよ！」

「なら言ってよ」

怖いです……。言うよ、言いますよ……。

「う、うん。あのね、人を見た目で判断するってよくないと思う……」

「へー。君は見た目で判断しないの？」

「し、しないよ」

「なら私を特別視してない？ クラスで一番可愛い私を少し高い位置においてない？」

う。それは、ちょっとあったかも……。

「で、でも、楠さんは本当に何でもできるし親切だから尊敬するのは当然だよ」

「ビジュアルが論外でも？」

「う、うん。それは、そうだよ。関係ないよ」

「……へえー。まあ、そう言えば君はその他大勢の男子と違って私にまわりついてこないもんね。」

「う、うん」

「本当に男なのかな」

「一応……」

「男ならシャキツとしなよ。どうでもいいけど」

「どうでもいいんだ……。まあ、そうだよね……。」

「……あ、そう言えば……」

聞きたいことがあったんだった。

「なに？ 何か気になることでもあるの？」

「そ、その、聞いてもいいかな」

「内容を言わないでそんなことを聞かれても」

「そ、そうだよ。あの、あの山での出来事について聞きたいことがあるんだけど、聞いてもいいかな」

「脅すネタを増やそうっていうんだね。別にいいよ、かかってきなさい」

そんなつもりじゃないのに……。

「あの、あそこで何をやっていたの？ 怒っているように見えたけど……」

「何言ってるの。私の言葉を聞いていたでしょ。ああ、また私の口から言わせたいんだね。すごく陰険。ますます君のことが嫌いになっちゃった」

う、うう……。もっと嫌われちゃった……。でもしょうがないよね……。僕が悪いんだから。

「私はいつもあそこでみんなの悪口を言ってるの。人と話すだけでストレスたまるからさ。あの日は一緒にデートした井上先輩のことについてイライラしてた」

「あ、井上先輩って言ったらかっこいいことで有名な先輩だよ。さすが楠さん。井上先輩にデート誘われるなんてすごいよ」

「何それ嫌味？ イライラしたって言ってるじゃんか。あいつ触るなって言ったのに私の体べたべた触ってきやがって……！ 今思いついてもイライラしてくる！」

ここに来て初めて感情を見せてくれた。けどそれが怒りなのが少しいやかなり悲しい。

「ああああああああ……！ 気持ち悪い……！」

キーボードをガンガン叩く楠さん。

「あ、その、やめてほしい……んだけど……」

「何が?! 何を!」

「いや、えっと、キーボードを、壊すのを……」

「……ならこんなところに置いておかないでよ」

「で、でも、キーボードなんだからパソコンにつないでおかないと……」

「すぐそれ。触られたくないのなら人目につかないところに置いておけっていうの」

う、うう……。そんなの間違ってるとよ!

「うう……」

「喘がないでよ気持ち悪い。もしかして私の後ろ姿で情事を済ませたの？ 気持ち悪いから学校やめて」

「そんなことしてないよ！」

「あっそう。疑ってごめんね。お詫びにエロ動画ダウンロードしておいたから」

「ええ?! 知らないよっ！」

「知らないの？ ふんどしの男たちがぶつかり合う動画知らないの？」

「ますます知らないよ?!」

「あれ。一応異性に興味があるんだ。男色かと思ったのに違うんだね」

「違うよ！ 勘違いも甚だしいよ！」

甚だしいっていう言葉を初めて使ったよ！

「なら私は女の子が大好きですって言ってよ」

「ICレコーダーを構えながら言わないでよ……」

「ばれたんだ。ばれないかと思った。佐藤君だから」

「僕目悪くないけど……」

「察しは悪いでしょ」

う、そうかも。

「あーあ。今日の収穫は少なかったよ」

「しゅ、収穫って、何？」

「もちろん君を脅すための材料に決まってるでしょう。致命的なものがまだないからね。エロ画像でも見て佐藤君の趣味を把握しておこうかと思ったんだけどどうやら君は聖人君子みたいだからうまく行かなかったよ」

そんな理由で僕の部屋に来たんだ……。

「まあいいや。とりあえず君のパソコンの中にガチムチ動画が入っているのを写真に収めさせてもらったから」

「そんな！ それ楠さんが自分でダウンロードした動画だよ！？
僕の趣味じゃないよ！」

「そんなの関係ない。現に君のパソコンの中に動画が入っているんだから。言い逃れはできないよ」

ひどすぎる……。

僕はぐったりうなだれた。僕はどうやらいじめられるみたいです。

「あ、お茶貰うね」

椅子を回し手振り返り、お茶に手を伸ばした楠さん。

「……」

だけれども、お茶を握って動きを止めた。

「どうしたの？ 楠さん」

「……君、このお茶の中に何か薬入れたでしょ」

「そんなことしないよ……。そもそも薬なんか持ってないよ……」

とても心外だ。でも疑われる僕が悪いんだろう。

「なら、僕が先に飲めばいいよね？」

「そうだね」

すごく警戒しているなあ。でもしょうがないよね。初めて訪れる部屋なんだから。

僕は傍にあったコップを手に取り、口へ近づけた。が、

「ちょっと待って。そっちじゃなくてこっちを飲んで」

「え？」

「そっちには何も入ってないかもしれないし」

「う、うん……」

すごく警戒しているよ……。

楠さんに近い方のコップに持ち替えて僕は一口飲んだ。

「……問題ないみたいだね。じゃあありがたくいただくよ」

お茶とおはぎを持つ楠さん。

「うん。おいしい。佐藤君も食べていいよ」

「え？　ありがとう。じゃあ……」

「あ、旗が刺さっている奴を食べてね」

「うん」

残り八個のうち旗が刺さっているおはぎは一つ。僕はそれを手に取り一口食べた。驚くほどおいしかった。

「……」

何故だかその様子をじっと見つめている楠さん。なんだろう？
あ、そっか。

「おいしいおはぎだね」

きつとこう言うことなんだよね。

「そんなことはどうでもいい」

……どうでもいいんだって。でもおいしいのは本当だからすぐにペロリだよ。

「……くふ」

楠さんが笑った。暖かくない笑みだった。

「ど、どうしたの？」

「それには下剤が入っています」

「……え?!」

なんてこった!

「ひ、酷いよ!　なんでこんなことするの……?」

「言うことを聞かせる為に」

ど、どういうことだろう……。

「う……早速お腹が痛くなってきた気がする……」

下剤の効きが早い気がするけど、多分これは僕のメンタルが弱いことによる思い込みだと思う。

「ちょ、ちょっとトイレに行ってくるね」

立ち上がり、ドアへ向かうが、

「待って。待たないと大声で泣くから」

「え……？ ま、待つから、待つからやめてね」

ドアの近くに腰を下ろす。そんな僕を椅子に座った楠さんがにやにやと眺める。

「さて、佐藤君のお腹がエマージェンシーモードなわけですが、君がトイレに行けるかどうかは私にかかっています」

「うん……」

「トイレに行きたければ私の言うことを聞きなさい」

「うん」

自分の命の為にどうしようがないよね。

「とりあえず馬を返して。この部屋にあるんでしょ？」

「え、ないよ？ その、さっき部屋を探したときに……その、無かったよね」

「無かったけど。どこかに隠しているんでしょ？」

「隠してないよ。僕本当に知らないんだ」

「……本当かな……。怪しいね」

「ほ、本当だよ……」

「あとで嘘がばれたらひどいことになるからね。馬を隠すメリット

はないよ」

「う、うん。僕、馬持って帰ってないよ」

「……………信じましょう」

「あ、ありがとう！　じゃあ、ちょっと……」

「まだ用事は終わってないからその上げた腰を下ろして」

「え、あ、はい」

「とりあえず次は誓約書にサインをしてもらおうかな」

「誓約書？」

カバンに手を突っ込み一枚紙を取り出した。

「これに目を通さずサインして」

「め、目は通させてもらうよ……」

紙を受け取り、手書きの誓約書の内容を確認してみる。
えっと？

その一・あの日見たことを口外しないこと。

その二・私、楠若菜の言うことに逆らわないこと。

その三・人前では自然に接すること。

その四・ってゆーか転校して。

「四つ目は無理だよ!」

「え? 漏らしたいの? それとも家族からの信用を無くしたいの?」

「どっちも嫌だけど転校するのも嫌だよ……。あの、他の三つは絶対を守るから最後の一つは許してくれないかな……。お願いします……」

「……そんな悲痛な表情で頭下げられたらまるで私が嫌なこととしているみたいじゃない。やめてよ」

「ご、ごめんね」

「……」

何故だか分からないけれども楠さんの目に不快の色が映った。

「え、ど、どうしたの?」

「……なんでもない。分かった。じゃあ四つ目は勘弁してあげる。でも消すのが面倒くさいからとりあえずそのままサインしちゃって」

「うん」

ペンをとり紙に名前を書く。さとう、ゆうた……と。

「はい」

「……ありがとう」

受け取る時にも不快の色が見えた。僕、何か悪い事したのかな。受け取った誓約書を眺め、一度溜息をつく楠さん。僕にはその溜息の理由が分からなかった。

「……お腹の具合はどう、佐藤君」

「うん……あんまりよくない」

ごろごろと警報が鳴っているよ。

「行ってきたいいよ」

「あ、うん。じゃあちよつと行かせてもらうね」

やっとスッキリできるね！

僕はちよつと失礼してトイレに行かせてもらった。

十分後か十五分後かはよく分からないけれど、トイレにこもり用を済ませ部屋に戻ってきたとき、楠さんは一枚の手紙を残して部屋からいなくなっていた。

「えっと……」

残された手紙を読んでみる。

「『帰る。おはぎ食べていいから。下剤入りは旗が刺さった一つだけ。おじやました。』」

……。

激動の朝だったね。

学校の屋上は聖地

激動の土曜日を終え日曜日は何事もなく過ぎてゆきいつも通りの月曜日がやってきた。

あ、いつも通りじゃなかった……。

僕が教室に入ったら、黒髪ロングの美少女が笑顔で挨拶をした。くれた。

「佐藤君！ おはよう！ 今日も一日頑張ろうねっ！」

男子数名と話していた楠さんが僕に向かって手を挙げてくれた。

「あ、お、おはようございます」

「あはははは。やだなあ、なんで敬語なの。クラスメイトなんだから親しくしようよ、ねえ？ さとうくん？」

「うん……」

いつも素敵だと思っていた笑顔が今は裏にある感情を想像してしまつて素直に見惚れることができない。残念でなりません。

僕はぎこちない笑顔を作つて楠さんをやり過ごし自分の席へ向かった。

席へついて一度辺りを見渡してみた。男子数名が「なんでお前なんか若菜ちゃんが挨拶してるんだよ死ね」というような目で僕を見ていた。僕は気付かないふりをして文字の世界に飛び込んだ。

しばらくして教室に先生がやってきた。僕は本をカバンの中にしてまづ姿勢を正した。

「みんなおはよう」

先生の声が静かな教室に響く。

「あー、今日の放課後暇な奴いるか？」

先生が教室を見渡す。でも誰も反応しない。

「……じゃあ、佐藤」

「え、ぼ、僕ですか？」

「佐藤部活してないしな。佐藤しかいないんだ」

この前もそんな理由だったよ……。

「草むしりの人間を一人出さなきゃいけないんだが、佐藤やってくれないか」

「あ、は、はい……」

今日も晩御飯作れないのかな……。

うなだれる僕に関係なく朝のホームルームが続けられる。連絡事項を伝え終えた先生が教室を出て行った。

草むしりか……。この前より早く帰れればいいな。

「佐藤」

「え？ あ、有野さん。おはよう」

金髪セミロング、女子のリーダー有野さん。

「お前嫌なこと押し付けられすぎじゃね？ 嫌なら断ればいいじゃねえか」

「え、で、でも、僕にしかできないし……」

「んなもん適当に断っとけば若菜か誰かが買って出てくれるだろ。佐藤何度も嫌な仕事押しつけられてんじょんか。あいつ絶対お前の事便利な奴だと思ってんぞ。嫌だろ？」

「え、ううん？ その、僕がやればみんな困らないし、全然かまわないよ」

「あんた……優しすぎだろ」

有野さんが僕のほっぺたを軽く抓って引っ張ってきた。

「ご、ゴメンなさいい」

「悪くねえのに謝んなよ」

怒った顔をして、うにうにと僕のほっぺたを引っ張たあと自分の席に戻って行った。よかった。殴られるのかと思った。

お昼。

「佐藤君」

お弁当を食べようとカバンをあきついているところに、いい匂いとともに黒い髪が視界に入ってきた。お弁当を持ってその人を見ている。

う……。楠さんだ……。

「佐藤君？」

「な、何？」

「あはは。そんなに怯えないでよ。クラスメイトでしょ」

「うん……」

確かに何もされていないのに怯えるのは失礼だね。気をつけなきゃ。

「それで、何か用かな……」

「一緒にご飯食べようかと思って」

「えっ」

と僕が驚くのと同時に教室内がざわめきに包まれた。

当然だよ。僕のようななよした人間が楠さんのような凛々しい人間と昼餉をともにするなどと恐れ多いにもほどがあるよ。

さらにそんなことよりも重要なことで、そんなことをしたら男子全員から冷たい目で見られてしまうと思うんだ。

「えっと、その、あの、僕」

「え？　もしかして、私とご飯食べるのが嫌なのかな……」

とても悲しそうな声だった。でも顔は無表情に怒っていた。

楠さんは教室にいるみんなに背を向けているので、みんなは楠さんが怒っているとは思わない。僕が悲しませているように見えているはずだ。その証拠にクラスの大部分から熱い視線をもらっているよ。

「なにか嫌な理由でもあるのかな……」

顔と声が全然合ってません……。怖いですよ……。

「佐藤君が嫌ならいいんだけど……残念だな」

楠さんの後ろからとても重量感のある視線をびしびしもらっているわけだけどそれは僕には耐えられるようなものじゃないんだ。だから楠さんの言うことに従うことにするよ。

「う、うん。ご一緒させていただきます」

「え、いいの？　ありがとう！」

ちなみにまだ無表情です。怖いです。

敵意のこもった視線を体中に感じながら僕は楠さんについて教室を出て屋上へ向かった。

屋上へ着くなり僕の胸ぐらをつかんで顔を近づけてくる楠さん。

「……誰かに言ったでしょ」

「い、言ってますん」

「嘘つかないでよ。こんな楽しいこと誰にも話さないわけない。話す友達がいないなら別だけど」

「う……」

あれ……。今日、まだ男子の誰とも話してないや……。親友はいないけど友達くらいいるよって思ってたけど、友達もないのかな……。

「……もしかして佐藤君、君友達いないの。……ま、しょうがないか」

しょうがないみたいです……。

「よかった君に友達がなくて」

「うう……」

悲しいです。

「ねえ、孤独な人生を送っている佐藤君」

「そ、そんな呼び方やめてよ……」

「そう言えば今までずっと一人でご飯食べていたね。よかったね、今日はこの私とお昼一緒できて」

「うん。本当だね」

「……」

イラッとされた。

「ご、ごめん」

「……別に怒ってないから謝らなくてもいい。それで、君、今日はいつも通り過ごすことができた？」

「うん。大丈夫だよ。楠さんのことも誰にも言っていないよ」

「当たり前でしょう。恩着せがましいこと言わないでよ」

そんなつもり無かったのに怒られてしまった。僕の配慮が足りないせいだ。

「じゃあさっさとお昼を食べて佐藤君と別れよう」

早く僕と別れたいみたいだ。急いでご飯を食べよう。

屋上の端に座る楠さんを追って、僕も屋上の端に座った。楠木さんとの距離は人三人分。近すぎたら馴れ馴れしいと思われるし、離れすぎても失礼な気がする。だからこれくらい。

「佐藤君のごはんおいしそうだね」

「え？ あ、ありがとう。楠さんのもおいしそうだね」

「おいしいよ。あげないから」

「う、うん……。あ、そうだ。おはぎありがとう。おいしかったよ」

「あたりまえでしょ。私を作ったんだから」

「え、手作りだったんだ。すごいね！ あんなに美味しいおはぎを作れるなんて羨ましいよ！ どうやって作ったの？」

「興味もないのに作り方聞いたり無理して褒めたりしなくてもいいよ。おいしいのは分かってるし」

「あ、ごめん……。で、でも、全部本当だよ……」

「へえ。料理もしないくせに作り方が気になるって？」

「あ、ぼ、僕、その、時々、料理とか、するんだ。このお弁当も手作り」

「へえ……。それ結構すごいね。多分自分でご飯作っている男子はこの学校で佐藤君くらいだよ。それは誇っていいと思う」

「そ、そんなこともないんじゃないかな……」

「あっそう。そう思うんならそうなんだろうね」

う、ちょっと不快に思われたみたいだ。ごめんね。

「もしかして佐藤君お母さんがいないの？」

「え？ ううん。両親とも健在だよ」

「ならどうしてご飯なんか作ってるの？ 作ってもらえないの？」

「両親とも、共働きだから。できる事は自分でやろうと思って」

「へえ。それは偉いね」

「そんなこともないんじゃないかな……」

「あっそ」

しまった。また怒らせてしまった。どうやら楠さんは褒め言葉を素直に受け取らない僕にイライラしているみたいだ。気をつけよう。

「あ、そう言えば。佐藤君が言ってた、とある女子高の軽音楽部、私の兄も持ってたから見てみたよ」

「え？ あ、うん。面白かった？」

「面白いかどうかは別として、商売上手だと思った」

「商売上手？」

「私がそれを見ているときに兄が暑苦しく説明してきたんだけど、とある女子高の軽音楽部を制作している郷土アニメーション、だっけ？ そこってエンディングに踊るアニメを手掛けたらしいね」

「うん。春宮スズヒの爽快だね」

「それぞれ。キャラクターソングとかもたくさん出して、アニメか

ら作られる副産物で結構稼いでいるみたいだね」

「へえー。そうなんだね」

「そうらしいね。それで、その時に副産物で稼げると分かった郷土アニメーション。だから今度はその副産物自体を物語に組み込んだというわけだよ。たくさんCD出しているんでしょ？」

「う、うん」

「あーあ。つまり君はまんまと騙されているんだよ。郷土アニメーションが副産物を作るのに適した漫画を見つけて、それをアニメにして、歌を作って、君が買う。完璧にやられているね」

「そ、そうなのかな……」

「そうなの。あれは企業の策略の元に作られたものなんだよ。どう？ 面白いと思っていたアニメにこんな裏があると分かった気分は残念？」

「え？ う、ううん……。別に、そんなことも……」

いきいきと話していた楠さんが、途端に不機嫌そうな顔を作った。

「……なんで」

「え、だ、だって、面白いのは本当だし……。そもそも、面白いものじゃなきゃ、誰もCDとか買わないんじゃないかな」

「…………まんまと騙されやがって、って思われてもいいの？」

嫌じゃないの？」

「うん……。面白いから、買ったんだもん」

「……なにそれ。がっかり」

「え、え？」

「君をがっかりさせるためにわざわざ聞きたくもない話を兄から聞いたのに、何それ。佐藤君面白くない」

「え……。ごめんね……」

「……」

う。謝ったらさらに楠さんの怒りゲージが溜まったみたいだ。よく分からないけれどもう謝るのはやめよう。

「話は変わるけど」

「あ、うん」

「ずっと疑問に思っているんだけど、なんで電車の中で電話しちゃいけないのかな」

「え？ それは、他の人に迷惑がかかるからじゃないのかな……」

「迷惑って、話すことが迷惑なら会話自体を禁止すべきでしょ」

「あ、僕聞いたことがあるよ。誰かが電話をしているとき、他の人

はその電話の向こうの相手の声が聞こえないからそれを想像してしまつて、そのせいでストレスを感じてしまふんだって」

「それは私も知ってる。偉そうに言わないでよ」

「あ、ごめん……」

「……。で、そのことなんだけど、そんなの禁止にする理由にならないと思うんだよね。その程度のことを迷惑と言うんだったらさ、そんなものよりもっと迷惑なことだってあるんだから、そっちを禁止にしてよ。でもそれらを一々禁止していったら人間はまともな生活できなくなっちゃうんだけどね。例えば、お風呂に入らない人は臭いがきついので人のいるところに行かないでくださいとか、挙動不審な人は目障りなので人目につかないように歩いてくださいとか。そんなルールがあつたら困るでしょ？ 携帯電話なんかよりも臭いのきつい人の方が迷惑でしょ？ だからと言ってそれを禁止にはしないでしょ？ だったら、なんで携帯電話は禁止にするの」

「うん……」

そうなのかな……？

「なに？ 言いたいことがあるなら言つてよ。心を隠さないつて約束でしょう」

「あ、うん。その、大勢の他人と空間を共有する電車の中だから、えっと、逃げ場がないというか、自分ではどうすることもできないというか……。お風呂に入らない人がいるのなら近づかなければいいし、動きが気になる人を見かけて嫌だなと思ったのなら目をそらせばいいし……。でも電車の中で電話をされたら防ぎようがないと

「うか……」

「じゃあ電車の中に臭い人がいたらどうするの」

「う。……移動する」

「なら電話も移動すればいい」

「……そうだね……」

「臭い人は電車に乗っちゃいけない？　ワキガのお客様は乗車ご遠慮願いますとでもいうの？」

「……そんなこと、言えないね……」

「でしょう。それに比べて電話なんて軽いものだよ。だから、不快にならないように、聞こえないくらいの小声で話してくださいってことにすればいいんじゃないの？」

「えっと……それは、どうなのかな……よく分からないけど……」

「『車内での通話は他のお客様の迷惑になりますので電源を切るかマナーモードにしてください』って言うけど、小声で話すなら別にかまわないんじゃないの？」

「えっと……、あ、そうだ。ペースメーカーとか、そういう大切な機械に影響が出ちゃうんじゃないかな」

「ならその人は街を歩くだけで死ぬよ。電波で溢れているんだから」

「あ、そ、そうかも……」

「つまり、電車内で携帯を使ってはいけない理由はよく分からないのにみんなマナーだマナーだ言ってるんでしょ。おかしいよそれ」

「そう、なのかな……」

「そもそも会話の一方だけが聞こえてくるのが不快だなんていうけど、盗み聞きするのもよくないと思うし、その会話を理解しようとするのも意味が分からない。聞き流せないの？」

「……ごめんなさい」

「謝らないでよムカつくから。で、他の国がどうだからっていうわけじゃないけれど、参考までに、禁止しているのは日本くらいなんだよ?」

「え、そうなの？」

「そうなの。変だね」

「うん。それは、ちょっと変」

「流されやすい日本人が、なんでこんなところで独自のルールを作っちゃってるんだろうね」

「不思議だね」

深く考えたことないや。すごいなあ、楠さんは。

「さて」

楠さんが立ち上がった。

「ご飯も食べ終わったし、私はもう行くから」

「え、あ」

いつの間に。僕のお弁当箱の中にはまだたくさんご飯が残っていた。話に夢中で箸が止まっていたみたいだ。

「ごゆっくり」

さっさと屋上を出て行った。

少しの間だけでも、楠さんにご飯を一緒にできたのは嬉しいことだね。

青空の元、僕は一人笑顔でお弁当を食べた。

金髪なだけで怖い

放課後になった。帰りのホームルームが終われば草むしりだ。早く終わらせよう。

「席につけー」

いつも通りにホームルームが始まり、いつも通りに進む。

「えーっと、じゃあ、佐藤。この後草むしり忘れるなよ」

「あ、はい」

「誰か暇な奴がいたら手伝ってもいいからな」

暇な人がいないから僕になったんじゃないのかな……。

「はい。私が手伝います」

誰かの、綺麗で、嘘みたいに透き通った、とても聞き取りやすく、すぐに耳になじむ声が教室を震わせた。

その人は、背筋をぴんと伸ばした姿勢で椅子に座り、傷一つないどころか汚れ一つない真っ白な手を挙げていた。座って手を挙げているだけで他の生徒とは違う空気を醸し出せるその人は、当然、

「……いいのか？ 楠。服が汚れるから男子に頼もうと思っていたんだが」

「はい。服が汚れる事なんて誰も気にしませんよ？ そんなことよ

りも、佐藤君一人に仕事をさせる方が気になります」

「おお、さすが楠だな。お礼を言っておけよ、佐藤」

「は、はい」

「じゃあ、よろしく頼んだぞ」

帰りの挨拶後、僕はすぐに楠さんに駆け寄った。

「楠さん……」

「ん？ なに？ 佐藤君」

「あの、ありがとう。手伝ってくれて」

「別にいいよー。一人でやるより二人でやった方が早く終わるからねっ！」

「う、うん」

やっぱり、楠さんは一般人のレベルを軽く超越した可愛さだなあ……。

見惚れていた僕だったけれど、誰かに突き飛ばされて正気に戻った。

「若菜ちゃん、俺も一緒にやるよ！」

僕を突き飛ばしたのはバスケット部の小嶋君だった。このクラスの男子リーダーの沼田君に続く、ナンバー2の人だと思う。

「え、そんなわるいよ。小嶋君部活があるでしょ？」

「ちょっとくらい遅れたって大丈夫だって！　すぐ終わるすぐ終わる！」

「……なら、お願いしちゃうかな」

「任せろ！」

楠さんが立ち上がり、小嶋君と二人で楽しそうに笑いあいながら教室を出て行った。僕はと言えば突き飛ばされたことに驚き少し呆けて動けなくなってしまうていた。

尻餅をついたまま、ぼうつとしている情けない僕を、誰かが後ろから引き起こしてくれた。

「何してんだよお前」

黒髪美少女の楠さんと女子のトップを争っている金髪美少女の有野さんだった。

有野さんが怒ったような顔で僕を見ている。手間をかけさせてしまつて、申し訳ないよ……。

「あ、ありがとう。ごめんね」

「何も悪くねえだろ。小嶋の奴、最悪だな」

「え？　どうして？」

「はあ？　どうしてって、お前……。……まあ、佐藤が気にしてな

いのならいいや。……にしても、あの担任、うぜえな」

「え？ ど、どうして……？」

同じ言葉を繰り返しちゃった……。怒られるかもしれない……。

「何が若菜にお礼いっておけよだ。別に佐藤が自分で作った仕事じゃねえんだから佐藤が若菜に礼を言うことじゃねえだろ」

「でも、僕が頼まれた仕事だし、一人でやらなきゃいけないことだし……、手伝ってくれるのならお礼を言わなくちゃ……」

「だあかあ、礼を言うのは担任だろ。あいつが押し付けた仕事なんだからよ」

「そ、そう、かな……。で、でも……」

「んな顔すんなよ。別にお前にキレてるわけじゃねえから」

そう言って、優しい笑顔を見せてくれた。

「あ、ごめんね」

「怒ってねえから謝んнатての。じゃあ、頑張れよ」

ぺちぺちと、頬を二度叩かれ教室から送り出された。

有野さんも優しいなあ。女子が魅かれる理由がよく分かるよ。でも楠さんとはあまり仲が良くないんだよね……。悲しいことだね……。

僕ははっきりと好き嫌い言う所は好きなんだけどな。裏表のない

性格っていうのかな。凄いことだと思う。

……でも、僕は嫌われているんだよね……。悲しいね。でも、しようがないね。

僕は少し暗い気持ちになりながら、草むしりをすべき場所へ向かった。

二人に遅れて指定された場所、校舎裏についたとき、先に向かっていた二人は既に草むしりを始めていた。

「佐藤！ お前おせえよ！ お前の仕事なんだからお前が一番働けや！」

「あ、ご、ゴメン……」

「まあまあ小嶋君。別に佐藤君は悪くないでしょ」

「ええー？ でも手伝ってやる俺たちが先に仕事を始めるってなんかおかしくね？」

「はいはい。いいから手を動かして」

「ういーっす。おい、佐藤。お前もさっさと仕事しろよ。お前はあっちやってこい」

「う、うん。ごめんね」

「でさあ、若菜ちゃん――」

小嶋君はもうすでに楠さんとの会話に集中していた。

あ、早く始めなきゃまた小嶋君に怒られちゃう。早く草むしりをしよう。

先生の話によれば各クラスから草むしり要因が出されていて、それぞれ草をむしる区域が違うみたい。僕たちの担当の校舎裏は結構広いから二人が手伝ってくれて助かったよ。

地面の上に用意されていたゴミ袋を持つ。道具はこれだけかなと思ひ、楠さんと小嶋君の方を見てみた。二人は軍手と熊手装備していた。どうやら道具は二人が使っているみたいだ。仕方がないから素手でやろう。

僕は小嶋君に言われた場所、二人の姿が見えなくなるところで草むしりを開始した。でもここ、指定された場所から少し離れている気がするなあ……。でもいっか。綺麗になるんだから間違えていても問題ないよね。

……。

……………。

……………。

三十分くらい草をむしった。まあまあ綺麗になったと思う。あと少しだ。

「おい、佐藤」

「え？」

振り向いてみると、小嶋君が僕を見下ろしていた。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃねえだろ。お前さあ、俺達は手伝ってやってんだからよ、気い利かせて飲み物の一つでも買ってこいや」

「あ、ご、ごめんね」

本当だ。せっかく手伝ってもらっているのに何の差し入れも持って行かないなんてありえないね。

「なにか飲み物買ってくるよ。何がいいかな」

「なんでもいいからとっと買って来いよ！」

「あ、う……。ご、ごめん」

怒らせちゃった……。

怒られたくない僕は慌てて自動販売機へ飲み物を買に行った。

あ、でもこんな汚い手じゃあ飲み物持てないや。まずは手を洗おう。

自動販売機へ向かう途中にある手洗い場で泥を落とし、急いで自動販売機へ。ここから一番近い自動販売機は食堂かな？

校舎に入って食堂へ向かう。

食堂の入り口付近に備え付けられた自動販売機。ラインナップを眺めてみる。

「……うーん。何がいいんだろう……」

二人の好み分らないや。でも、こう言うときって何となくポリカスエツトな気がするね。うん。そうしよう。

二百四十円入れてポリカを二本買う。それを持って急いで二人のところへ戻った。

「お、お待ちせ……」

走ってたどり着いた校舎裏。

「……あれ？」

二人の姿は無かった。

きよろきよろとあたりを見渡してみる。

軍手と熊手が二セットずつあったけれど、それを使っていた人たちは見当たらない。何か用事でもできたのかな？

仕方がないので、とりあえず帰ってきたのがすぐわかるように、先ほどまで二人が担当していたところの草をむしりながら待つことにした。

十分後。

誰も来ない……。おかしいなあ。帰っちゃったのかなあ。

不安になり、飲み物を両手に持って立ち上がる。

でも、探しに行つて入れ違いになつても嫌なので結局身動きがでないままきよろきよろと見渡すだけしかできない。

ど、どうしよう……。

不安がピークを迎えようとするところ、念願の土を踏みしめる音

が聞こえてきた。

「小嶋君？」

校舎の角から足音が聞こえてきたので音の方へと駆け寄った。
しかし、角から出てきたのは小嶋君でも楠さんでもなかった。

「あ、せ、先生」

「どうだ？ 進んでるか？」

「あ、はい」

僕は小嶋君に言われて草をむしっていた場所に先生を案内した。
小嶋君と楠さんが草むしりをしていたところは僕の手柄じゃないからね。

「あと少しです」

「……」

先生は僕の成果を見て苦い顔をした。

「え、えっと……」

なんでだろう。

「おいおい。ここは指定した場所じゃないだろ。ここはしなくていいから道具が置いてあったところを掃除してくれよ」

「え、あ、はい……。そ、そうですよね」

「……はあ。まったく。お前はまともに草むしりもできんのか。ほら、日が暮れる。早く終わらせろよ」

「はい……」

そう言って、先生は足早に去って行った。うう……。そりゃそうだよね。掃除してほしいところがまだ汚いんだからいいわけないよね……。

二人が担当していたところに座って草むしりを再開する。でも、このポリカどうしよう。ぬるくなっちゃうよ……。

辺りを見渡しながら素手でむしっていく。道具を使おうかとも思っただけれど、二人が帰ってきたときに僕が使っていたら嫌な気分になるかもしれないから素手で作業を進めた。

……。

……。

しばらくして、また足音が聞こえてきた。

こ、今度こそ。

僕はポリカを持って立ち上がった。そして、足音を迎える。

けれども、その足音はまたしても違う人の物だった。

「あれ。有野さん？」

綺麗に染め上げた金色の髪。薄汚い校舎裏では浮いて見えるけれど、どうしようもないくらい有野さんに似合っているのですんな違和感帳消しだ。

大きな瞳で僕を睨み付ける。眼光が鋭いというのはこういうことを言うのだろうか。でもそう言う人って何となく目がつり上がっている気がするけど、有野さんの目は可愛く垂れ下がっている。ほにゃんとした目だ。

どうなんだろう。

有野さんのような可愛い眼の人でも眼光鋭いって使うのかな？

使わないのかな。よく分からないや。

まあ、とにかく、眼光鋭いという言葉がぴったりの目で僕を睨み付けていた。……女の子に向かって眼光鋭いっていうのはいけないことなんじゃないかな……。で、でも、怖い……。

「ど、ど、どうしたの？ 楠さんに何か用事？」

有野さんは僕の言葉には答えず一度辺りを見渡し大きな舌打ちをした。

「……佐藤一人かよ……」

「あ、ご、ごめん……。楠さんだよね？」

「……あいつらどこ行っただよ」

ずんずんと近づいてくる有野さん。

「え、うん。多分、何か用事があるんだと思うよ。きっとすぐに帰ってくるよ。あ、探してこようか？」

僕の言葉を聞いてまた大きく舌を打った。

「え、どうしたの……？」

怒っているようで怖いけれど、恐る恐る聞いてみる。

「あいつらは帰って来ねえよ」

「え？ どうして？」

「小嶋は部活、若菜はさつき校門から出て行くのを見た。あいつら仕事放りだして帰ったんだよ」

「え……」

じゃあ、この飲み物が渡せないよ……。どうしよう、渡しに行こうかな。

「あいつら……！ 佐藤に仕事押しつけて帰りやがって……ふざけてんのか……？！」

憎々しげな表情で奥歯をぎりりと鳴らす有野さん。

「う。お、落ち着いて有野さん」

「……お前は、あいつらが勝手に帰ったことムカつかねえのかよ」

「え？ う、うん、別に……。もともと僕が一人でやる仕事だったし、少しでも手伝ってもらえたんだから感謝しなくちゃ」

少し表情を緩ませた有野さん。よかった。

「……ったく、お前は……。昔から変わんねえな……」

「え？ う、うん？ そうかな……」

「……。……ん？ その飲み物は」

「あ、えっと、その、喉が渴いたから、飲もうと思って……」

「二本もか？」

「うん。それくらい喉が渴いてたから……」

……二本、飲もう。

有野さんは僕の手に握られた二本の缶を見て一瞬悲しそうな顔を見せた。

「……そうかよ」

そう言ったのとはほぼ同時に有野さんが僕の手からポリカスエットを奪い取った。

「あ」

と思ったときにはもうすでにプルタブを開けごくごく飲まれていた。

「あー、うまい。ちょうど喉が渴いてたんだ」

よかった。これで無駄にならずに済んだね。

「あん？　なんか文句あんのか？」

「あ、う、うん。全然ないよ」

「そうかよ」

そう言って、また飲みだした。

「……ふう。佐藤も喉が渴いてるなら飲めばいいじゃねえか」

「え？ あ、うん」

……二人とも帰っちゃったのなら、飲んでもいいよね。
僕もポリカを飲むことにした。

うん。おいしいや。アクリエアスよりも甘いよね。

「って、何だこれ！ 缶が泥だらけじゃねえか！」

汗の掻いた缶は僕の手についていた泥で茶色く汚れていた。その泥が有野さんの可愛い手を汚してしまっていた。

「あっ、あ！ ご、ごめん！ そう言えばさっきまで草むしりしてたんだっ！ ごめんね！」

「お前なんで軍手使わねえんだよ！ そこに用意されてるじゃねえか！」

「え、あ、うん。その、うっかりしてて……！」

「うっかりって、お前よく見たら爪の間土だらけじゃねえかよ。んな状態ならすぐ気付く……、……ちっ。そうか」

軍手を睨み付けてまた舌打ちをする有野さん。そして小声で何かをしゃべっていた。

「……………初めから私が手伝つとけばよかったぜ…………」

「え？　ご、ごめん、聞き取れなかったんだけど…………」

「あん？　何も言っただけだよ。そんなことより、ポリカの礼だ。私も手伝ってやる」

「え、そんな、お礼なんていいよ別に」

「うっせえな。それじゃあ私の気が治まらないんだよ。いいからさっさとするぞ。今からちゃんと軍手つけてやれよ。道具もちゃんと使えよ」

「あ、うん。…………ごめんね」

「悪くねえんだから謝るなって」

僕の顔に泥がついていたのか、何かを拭うようなしぐさで僕の顔を撫でてくれた。

「んじゃ、さっさと終わらせようぜ」

そう言っただけ、かっこいい笑顔を僕なんかに向けてくれた。

「ありがとう」

——やっぱり、優しいな。

有野さんに手伝ってもらった草むしりはすぐに終わった。有野さんの豪快なむしり芸は惚れ惚れするような技だった。見習いたいね。

「ふー……」

軍手を地面に放り投げて立ち上がり腰をトントンとたたく有野さん。

「ありがとう。おかげで早く終わったよ」

「別に。飲み物の礼だし」

「あ、もう一本買ってくるよ」

あれだけじゃあ足りないはず。早く買ってこなきゃ。

立ち上がって駆け出そうとした。けれど、有野さんが引き止めてきた。

「いらねえよ」

「え、そう？　喉かわいてない？」

「全然かわいてねえよ」

と言いながら汗をぬぐった。やっぱり、何か飲んだ方がいいと思うんだけどなあ……。

行こうかどうか迷っていると、有野さんが空を見上げ僕に話しかけてきた。

「佐藤とこれだけ話したのも久しぶりだな」

「うん」

何となく僕も向こうの空に目を向けた。

夏の手前の入道雲。

もうすぐ、あの頃のように暑くなる。

「……。あの、さ」

「うん？」

僕は有野さんに視線を戻した。有野さんはまだ空を見上げたままだった

「……。……あー、なんでもねえわ。んで、草むしり終わったけど、どうする」

急に怖い顔を作って僕を睨み付ける有野さん。

「ど、どうするって、何のこと？」

怒られるのかな？

「あいつら二人。しめるなら手伝うけど」

とんでもないことを言いだした！

「そ、そんなことしないよ。誰も悪くないんだから」

「納得できるのか？ あいつらお前を馬鹿にしてんだぞ？」

「そんな。違うよ。二人とも草むしりより大切な用事があったんだよきつと。なら、しょうがないよね」

「それでも一言声かけて行くのが礼儀ってもんだろぅが」

「う、うん……。でも、僕がちよつと姿を消していたから、言えなかったんだよ。だから、その、しょうがないのかなあ、とか……。思ったり」

ど、どうしよう。ここで有野さんを納得させなければ明日二人の命が危ない……。僕の手にかかっているんだ……。！
なんて気負っていたが、

「あーそんな顔すんなって。分かったから。誰も悪くねえな。うん」
すぐに有野さんが笑いかけてくれた。

「あ、ありがとう」

ふう、よかった。

「礼言われるようなことしてねえよ」

楽しそうに笑った。

僕も笑った。

何となく、昔を思い出した。

でもそれも先生の登場ですぐに終了する。

「終わったか」

「あ、はい。終わりました」

「ん？ 有野手伝ってやったのか」

「そうだよ」

「珍しいこともあるんだな」

それはちよつと失礼だと思う。けど、僕にはそれを咎める度胸がなかった。

情けない。

有野さんは優しいのに、手伝ってくれたのに。失礼なことを言う先生に、僕はそれを訂正させることができない。

情けない。

先生が辺りを見渡す。

「へえ、綺麗になったな。よし、ごくろうさん。あとはこのゴミを焼却炉に持って行ってくれ。そうしたら帰っていいからな」

「はい」

先生が来た道を引き返して行った。

よかった。やっと帰れるよ。何事もなく終わったなあ……。と、思ったのだけれども、有野さんとしては何事もなく終わらせたくないみたいだ。

「おい、お前ちょっと待てよ」

う?! 先生相手にお前って!

もしかして、手伝うのが珍しいって言われたのが気に障ったのかな……。

「……お前って言うのは、俺の事か? 先生相手にお前なんて言ったのか?」

「それ以外に何があんだよ」

とても怒った顔で振り返る先生。

「………有野。もう一度聞く。お前、俺に向かってお前って言ったのか?」

「耳わりいのか?」

う、うわあああああ! 危ないよ! 何か空気が危ないよ!

「あ、有野さん……」

有野さんの制服を軽く引っ張った。

「なんだよ」

怒り一色の顔で僕を振り返る有野さん。う、怖い……。

「そ、その、気に入らないことが会ったのかもしれないけれど、穏便に、穏便に、いこ？」

僕の情けない言葉に困った顔を見せる有野さん。

「……お前、それでいいのかよ」

「え、え？ な、どういうこと……？」

「……あーいや、いいわ」

本当に分からない……。僕のせいで怒ったのかな……。

「そんな悲しそうな顔すんなよ。別にお前には怒ってねえんだからさ」

「え、あ、うん」

先ほどの表情からは考えられない素敵な笑顔。そんな笑顔見せられたらドキッとしちゃうよ。

……でも先生はご立腹していらっしゃる。恐ろしい表情で僕らを睨み付けていた。

「おい、有野。お前、教師に向かってその口のきき方はなんだ」

な、何とかしなきゃ怖いよ！

「ち、違います先生！ 今、有野さんは僕に向かって言ったんです

「！」

「お前には聞いてない。有野に聞いてるんだ」

「う、ごめんなさい……」

そうですよね……。

「有野、お前、教師に対しての言葉遣いじゃないよな」

「はぁ？ 佐藤の事呼んだんだけど」

「……。……それでも、お前の口調は教師に対する言葉遣いじゃないだろう？」

「あーはいはい。すみませんでした。どうぞお帰りください」

先生の、とても疑いのこもった視線。

「……………まあいい。早く帰れよ」

「は、はい……」

よかった……。何事もなく済んだね……。

先生の背中を見送り、完全に視界から消えたところで有野さんが僕に困ったような顔を見せて言った。ううん、言ってくれた。

「お前さ、ガツンと言わないからあいつに舐められるんだぜ？ ブッ飛ばすつもりで何か言ってやれよ。そうしなきゃまた嫌なこと押し付けられるぞ」

「え、そ、その……」

「見ただろ？ あいつの舐めきった態度。『ごくろうさま』だけでぜ。舐めんなって話だろ。佐藤はあいつの奴隷じゃねえんだ。もつと佐藤に感謝しろよな……！」

徐々に顔が修羅の者になっていった。怖いよ……。

……女の子の怒った顔を見て怖いなんて思う僕はとても失礼な人間ではないだろうか……。

「あいつ、絶対に佐藤の事見下してるぜ。ふざけてるよな」

「で、でも……」

「お前、今度からはあいつの頼みごと断れよ。別に佐藤じゃなきゃいけねえ理由はないんだ。メリットだってないんだし、言うこと聞く必要ねえだろ」

「でも」

「でもでもうるせえな。なんだ？ あいつの言うこと聞いていいことあるのか？ ねえだろ？」

「う、ううん。誰もできないから僕が指名されているわけだし、僕がやらなかったら違う人が困るし……。その、だから、僕でいいというか……」

「誰かが困る位なら自分が困るって？」

「まあ、うん、そんな感じ、かな？」

大きな大きなため息をつく有野さん。

「お前は……。本当にどうしようもねえな」

「う、ごめん」

「褒めてんだよ」

え、分からなかった。

有野さんがにっこりと笑った。

「まあお前がいいならそれでいいや。でも困ったら私に言えよ。助けてやる」

「あ、うん。ありがとう」

「きにすんな。んじゃ、さっさとそれ焼却炉にぶち込んで帰ろうぜ」

「あ、う、うん。ありがとう。本当にありがとう」

「そんな大げさなお礼いらねえよ」

気持ちのいい笑いを見せてくれた。

今日の仕事は、いつもと違ってとっても楽しかった。

虫よけスプレーの信頼度

「佐藤君」

僕は、草むしりを終えたあと、教室へカバンを取りに行き、「今何時かな？」と携帯を開き、ついでに未読メールを見たと思ったら、いつの間にか秘密基地の前で正座をしていた。ここまでの道のりを覚えていない……。

まだ日が沈むには時間があるけれど森の中は薄暗い。涼しい位だよ。

でもそれどころじゃありません……。

「舐められたものだね。まさかこんな仕打ちを受けるなんて……」

「そ、その……」

メールの差出人は楠さんだった。『今すぐ君の秘密基地へ来ること。遅刻厳禁』という内容のメールが一時間ほど前に僕の携帯に入っていた。草むしり中携帯は教室のカバンの中だったので当然気付かなかった。僕は慌てて秘密基地へ向かい、今に至る。

「しかも、これだけ待たせるなんて。一時間私はここで待ちました。一時間蚊に刺されるためにこの林の中で突っ立っていました。これはあれだね。君の愚行をばらすしかないね」

「え？！　ご、ごめんなさい！　そ、それだけは許してください！」

僕は潔く土下座をした。だって、楠さんが蚊に刺されたなんて重大事件じゃないか！　時代が時代なら僕は打ち首だよ！

「みつともないね」

楠さんの声と同時にカメラのシャッター音が聞こえた。でも、これは仕方がないよ……。

「顔を上げて。早く」

「はい……」

顔を上げ、楠さんを見上げてみる。依然として、無表情で怒っている。

「で？ 言い訳は？」

遅れた言い訳かな……。

「あの、僕、」

「くだらない言い訳だったら問答無用でばらすから。君がそう言うふざけた態度を取るのなら、話し合いも何もしない。謝っても許さない。君のしたことをみんなにばらして、学校にいられなくしてやるから」

うう……。僕のしたことって、僕何もしないよ……。

「さあ、納得のできる遅刻の言い訳を是非。よく考えてね。これで君の人生が終わるかもしれないんだから。面白かったら許さないことも無いよ」

「お、面白い、言い訳……」

「まあでも君面白くない人間みたいだし、ギャグに逃げるのはやめておいた方がいいと思うよ。ちゃんと私が納得できる言い訳をするんだね」

「う、うん」

でも、言い訳って……。

「その、草むしりに手間取って……」

「はああああ？」

どうやらこの言い訳は楠さんの気に入らないみたいだ！
大変だ大変だ！ 楠さんの顔が大変だ！ どう大変って……表現したくないくらい歪んでいるよ！

その、色々な意味で怖い顔をグイッと近づけ言う。

「君、先に帰ったでしょ？」

……。

「え？」

「君、私たちに仕事押しつけて先に帰ったでしょう？」

「え、え、え？」

「えーえーうるさいね。それ以外に言う言葉がないの？ よし、ば

らそう」

僕から顔を離し携帯電話を操作しだした楠さん。

「あ、ちょ、ちょっと待って！」

僕は正座をしたまま両手を突き出して待ったをかけた。

「なに？ 遺言？ まあ聞いてあげないことも無いよ。友達に電話がつながるまでの数コールだけ時間をあげる」

短っ！

「その、僕飲み物を買に行ってたの！ 多分それで校舎裏にいなかったんだと思う！」

「……あ、丸山さん？ その、ね……少し、話があるんだ……」

電話が繋がっていらっしやる！ 死んじゃうよ！

「ごめんなさいごめんなさい！」

両手をバタバタ振って何とか通話を辞めてもらおうとした、けど……、

「え？ ううん？ 違う違う。ただの鶏じゃないのかな？ うん、チキン野郎」

楠さんが左手で僕の頬を挟み込みうるさいと睨み付けてくる。でも僕にとってもそれどころじゃないよ！ 腰を浮かせたままパタパ

タと手を振って必死に校舎裏にいなかった理由を言う。

「ほ、本当に許してください！ 小嶋君に言われるまで気付かなかった、気を利かせて早く飲み物を買に行かなかった僕が悪いんですけど、タイミングが悪かっただけなんですー！ もう少し早く気づければこんなことにならなかったんだよね！ ごめんねごめんね！ 今度からはまずお礼を買ってから仕事を始めます！ だから許してください！」

一瞬沈黙した後、楠さんが手を離し僕を地面に落とす。そして僕をいぶかしげな表情で見つめてきた。

「……。え？ あ、ごめんね。話っていうのはおすすめの喫茶店とかないかなってね。ほら、丸山さんの行くお店ってとってもセンスがいいでしょ？ だから、どこかいところ教えてもらおうかなーって思っ！ うん、うん。あ、あそこかー！ うん、分かった。うん、うん。ありがとう！ じゃあ、また明日！」

よ、よかった。助かったみたいだ……。

通話を切り、楠さんがしゃがんで僕と視線を合わす。

「……小嶋君と話したの？」

「う、うん。その、小嶋君にマナーのことを指摘されて、なるほどと思って慌てて飲み物を買に行っただけど、その、タイミングが悪かったみたいで、その、帰ったと思わせちゃったね……」

「……私は小嶋君から君が帰ったって聞いたんだけど。小嶋君が様子を見に行ったときにはもう帰った後だったって」

「え、え？　僕、帰ってないよ？　今まで草むしりしてたよ？」

「……………。……………ちょっとタンマ」

そう言って立ち上がり僕から少し離れた。いったい何事だろう？　ぼけっと眺めていると、楠さんがカバンの中に手をつっ込みタオルを取り出し始めた。

汗でも拭くのかな？　と思ったけれど違うようだ。グローブのよう
うに手にタオルを巻き、一本の木に近づいて行った。
？

……！？　え、え？　え？　な、何してるの？！

僕は驚きで全身の力が抜けてしまっていた！

「……………！　……………！　……………！」

何かをつぶやきながら、思いつきり木を殴りつけた！　手が
痛いよ！　僕の手は痛くないけど！　楠さんの手が痛いよ！　せっ
かくの綺麗な手に傷がついちゃうよ！

つぶやきが、少しだけ聞こえてくる。

「あいつ……………！　嘘ついて……………！　これじゃあ、私が、さぼった、
みたいじゃない！」

う、うう……。一体何のことだかわからないけれど、とても怒っ
ているみたいだよ……。あの木には、もしかしたら僕が重なって見
えているのかもしれない……。うう、ごめんね……。何に怒ってい
るのか分からないけれど……。

「……。ふう……………」

拳を木にめり込ませたまま、大きく息を吐いた。すぐに全身から力を抜き、腕をだらんとたらし。もう一度息をはいたあと手からタオルを取って綺麗に畳み、カバンにしまった。そして、無表情の顔を僕に向けてくる。

本当に失礼だと思うけれど、僕はびくつと畏縮してしまった。ずんずん近づいてきて、へたり込んでいる僕に頭を下げた。

「……今回は、完璧に私が悪い。ごめんね佐藤君。疑っちゃった」

「え、え？」

何のことを謝っているのだろう……。

「ズボンが汚れるから正座やめて」

「あ、うん」

立ち上がりズボンを払う僕。

「ごめんね一人置いて帰っちゃって」

「う、うん……」

謝るようなことなのかな……？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……？」

な、何だろう。なんで僕はじっと見つめられているんだろう。何か僕の言葉を待っているような……。ぼ、僕は何を言えばいいだろう……。

「そ、その……」

分からないけど、とりあえず。

「ご、ごめんね……？」

謝っておこう。

「……なんで謝るの。私が悪いって言ってるのに」

「う、い、いや……その、何言えばいいのか分からなくて……」

「叱責すればいいでしょう。気のすむまで言葉責めすればいいよ。好きなだけ責めて興奮すればいいよ気持ち悪い。どんな言葉で罵るんだろうね。楽しみだよ。それも録音するけど」

「そ、そんなことしないよ！　なんで僕がそんなことするの?!」

「私が佐藤君を呼び出して土下座までさせてでもそれは私の勘違い

だったんだから君が怒っても仕方がないでしょう」

「よく、分からないけど……。でも勘違いは誰にでもあるし、そんなのを怒っていたら過ごしにくい世の中になっちゃうよ」

勘違いは怒っちゃだめだと思うよ。

「……。何なの君？　それで私に恩を売っているつもり？　気分悪いよ」

「そ、そんなつもりじゃあ……」

うわ、怒らせてしまった……。

「ずっと気になっていたんだけどさ、佐藤君、悪くないのにとりあえず謝るよね。結構不快だよそれ。自分が謝っておけば済むだろうって思ってるの？　私が悪いのになんで謝られなきゃいけないの？　おかしくない？」

「お、おかしいです……」

「だから謝って」

「え！」

なんだかおかしくないかな？！

「とりあえず謝ってよ」

「……、ごめんなさい……？」

少し理不尽さを感じながらも一応謝ってみた。

「……まあいいや。今日はごめんね。言い訳のしようがないよ」

「う、ううん。その、こちらこそ、手伝ってくれてありがとう」

「……嫌味？」

「う、ううん！ そんなつもりはないよ！」

「……………。じゃあ今日のことは本当に申し訳なかったということ
で、お詫びに佐藤君が部屋で服を脱いで私を襲おうとしている写真を
消しておいてあげる」

「あ、ありがとう！」

「どういたしまして。別にお礼を言われるようなことではないけど」

まあ、確かに僕はそんなことしていないのだからね。

「じゃあ、私は帰るね。ごゆっくり」

「あ、ばいばい」

楠さんが山を下りて行った。

放課後ごたごたしたけど、よかったー。色々と解決したみたいだね。
これで何のわだかまりもなく明日を過ごせるね！

僕は意気揚々と家に帰った。

うとかいうなよ！」

「うう……ごめんなさい……」

あの楠さんをこんなにも落ち込ませることができるのは多分有野さんだけだと思う。って、そんなことより！

「あ、あ、有野さん……」

僕は二人に駆け寄った。というか有野さんに駆け寄った。
有野さんが僕に気づき、申し訳なさそうな顔で言った。

「……佐藤。お前は別に怒ってねえみたいだったけど、やっぱり私は納得できねえみたいだわ」

「……」

楠さんが本当に悲しそうな顔で有野さんを見上げた。

「本当にごめんなさい……。全面的に私が悪いです……」

それを睨みで返す有野さん。

「私に謝るんじゃないくて佐藤に謝れよ」

あ……。僕の為に怒ってくれているんだ……。優しい人だなあ。
……で、でも……。僕、すでに謝罪してもらっているからね……。
説明しなきゃ。

「あ、有野さん、その、僕昨日謝ってもらったんだ」

「……はあああ？」

僕の発言が何やら有野さんの気に障ったようです。

「お前、なんで校外で若菜と会ってるんだよ」

「あ、その、用事があるからって呼び出されて……」

「ちげえよ。どうやって呼び出されたのかって聞いてんだよ」

「え、え？　その、携帯電話で……」

「……………」

な、なななんでそんな顔で睨んでくるんですか？！

「……………若菜のアドレス知ってたんだ……」

「え？　うん」

……………。

……………。

……………え？！

「あ！　僕楠さんのアドレス知ってる！　すごい！」

いつの間に！　あ、そう言えばメール送られてきてたっけ！　なんだかうれしいね！　今まで気付かなかったよ！　うわー。なんか感激だなあ。クラスの女の子のアドレス教えてもらったの初めてだ

よ。しかもそれがあの楠さんのだからね。すごいことだよこれは。

「……んだよ……」

有野さんが不機嫌そうに教室を出て行った。

「え？ あれ？」

怒らせちゃったのかな……。僕が悪いことしちゃったんだ。でも、楠さんとの言い合いが止まったね。僕が泥をかぶって解決したのなら、まだいいよね。

と思っていた時期が僕にもありました。

「ごめんね……佐藤君……うう……ごめんね……！」

「え！」

今度は楠さんが目を拭いながら教室を出て行った！ これはよくないね！

有野さん、楠さんが出て行った後の教室。僕は一度教室を見渡ししてみた。とてもクラスメイトを見るための物ではない視線を僕に送っていた。

「……ま、まってー」

僕はとりあえず教室から逃げることにした。……だって、さあ……。

有野さんも楠さんもどこに行ったか分からないけれど、何となく、僕は屋上へ行ってみた。

運よく、楠さんが腕を組んで立っていてくれた。

「く、楠さん……、ご、ごめんね」

「別に悪くない。責められて当然の事したんだから。有野さんから聞いたけど有野さんに手伝ってもらったんでしょ。なら有野さんに責められても仕方がない」

う……。なんだか僕は何も言えない……。楠さんの言葉を肯定すれば楠さんを責めてしまうし、否定すれば責めた有野さんを悪く言っているようにとられちゃうかもしれない……。どうすればいいんだろう？

「またそんな顔をして。素直に私を責めればいいのにごちゃごちゃ考えて。ああ、本当に面倒くさい」

「ご、ごめんなさ——」

「ああ、そうそう」

「——え？」

僕の言葉を遮る楠さん。

「クラスの男子で、と言うか家族以外の男で私のアドレス知ってるの君だけだからあんな大きな声で言わない方がいいよ。っていうか言わないでよ」

「え、そ、そうだったの？ ごめん……」

「そうだったのって、私がアドレスばらまいてると思うってたの

？　　すごく失礼。ちょっと転校して」

「う、うん、わかった……って、転校なんてできるわけないよ！」

危なくノリで転校させられるところだった！

「……女々しい人……」

「そ、そう言う問題かな……」

「そう言う問題なの。だから、転校が嫌だったら私のアドレス知っているって言いふらさないでよ」

「わ、わかった。転校は嫌だもんね……」

「ま、もう手遅れかもしれないけど」

「手遅れ？」

「あれだけ大勢にばれちゃったらね。まあ、どうでもいいけど……」

どうしてもよくなさそうだった……。

「ところで、佐藤君」

「はい」

「君、あの有野さんに気に入られているみたいだけど、何かしたの？」

「え？　僕が有野さんに気に入られてる？」

「……そう言ったんだけど、なんで聞き返すの？」

「う、ご、ごめんなさい……。で、でも、それは違うよ」

「違うって、どの角度から見てもそうとしか思えないんだけど。もしかして君は鈍い人種なの？　まあ、見た目は完全に鈍いというか要領の悪そうな見た目をしているけど」

要領の悪そうな見た目って、初めて言われた……。でも実際そうだからそう言う見た目をしているんだろう。悲しいけど……。

「落ち込もうがどうしようが君の勝手だけど、その前に有野さんとの関係を説明してよ」

「あ、う、うん。あのね、僕と有野さんは、小さいころからずっと同じ学校に通っているんだ」

「……なんでそんな面倒くさい言い回しするの？　それ幼馴染ってことでしょ？　幼馴染って言えばいいじゃない」

「……」

僕と有野さんは幼馴染だ。正確には、僕と有野さんと有野さんのお兄さんは幼馴染だ。

でも、今の僕には幼馴染だって胸を張って言えない。

……僕は、有野さんを怒らせているのだから。

「なんだ。幼馴染って言わなかったのは何か理由があったからなん

だ。幼馴染って言えないんだ」

「う、うん……。その、僕、小学校の頃有野さんを怒らせちゃって、それからずっと疎遠だったんだ……。だから、幼馴染って言ってもいいのかなって」

「ふーん。なんで怒らせたの？」

「その……。それが分からなくて……」

分からないけれど、私を下の名前を呼ぶなって怒られた。もちろん謝った。でも許してくれなかった。当然だよ。理由も知らずに謝って、許してくれるはずがないよ。

今も僕は分かっていない。だから、有野さんも許してくれていないんだ。

今日も怒らせてしまったみたいだし、いい機会だ。あの時のことも謝ろう。許してもらえないかもしれないけれど、もう一度謝ろう。

「……教えてくれなきゃ、ばらすよ？」

う！ 楠さんは僕が理由を隠そうとしていると思っているんだ！
違うよ？！

「ほ、本当に分からないんだ……」

「……本当かな……」

とても怪しんだ視線。でも僕にはどうしようもない……。本当の本当に分からないから。

「……まあ、いいや」

納得してくれた。よかった。

楠さんが僕に「先に教室に帰って」と言ってきたので、僕は一人先に教室へ帰ることになった。教室に入ると、すぐにみんなから冷たい視線をもらったので、僕はうつむき顔を隠しながら自分の席へ向かった。教室の端っこにある自分の席がこんなにも遠いとは思わなかった。一番角っこでいい席だなと喜んでいたけれど、まさかそれをうっとおしく思う日が来るとは思ひもなかった。席へつき、急いで本を取り出す。僕は無事に幻想世界への逃避することができた。でも、没頭する前に、一度教室内の様子を見る。相変わらずみんな冷たい視線を僕にくれていた。……有野さんの姿は見えなかった。

それからしばらくして、楠さんが教室に帰ってきた。みんなに囲まれ、事情を聞かれたり慰められたりしていたけれど、楠さんは気丈な笑顔で「大丈夫」と答えるだけで深く説明することはしなかった。でもそれが余計に僕への視線を強めていたけれど、誰も責められないよ……。

一方有野さんは、朝のホームルームが始まって教室に入ってきた。……。

僕のせいだ。

きょうはくっ！

楠若菜さん。

黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パツチリお目目にまぶしく瑞々しいお肌。

世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。美人で、勉強ができて、運動もできる。人望もあるしそれに応える力も持っている。いわゆる完璧な美少女。悪くとらえられたら困るけれど、八方美人と言う言葉がよく似合う。楠さんのことを軽んじているわけではないし、僕は当然尊敬もしているけれども、裏にある感情を知ってしまった僕はついついそう言う目で見てしまう…。

みんなに分け隔てなく優しさを振りまき、差別なく人と接する楠さん。

多分、誰も楠さんの真の姿を知らない。もしかしたら、僕に見せているのも真の姿ではないのかもしれない。

言うなれば、完璧な八方美人。

八方美人を演じきれ素質を持った人。

八方美人でありながら、誰にもそれを悟られない。

それは、とてもすごいことだと思う。ぼろを出さない、と言うのは少しはばかられる気もするけども、欠点の一つも見せないのはそれなりの才能がなければできないことだろう。

誰にもばれていない楠さんの裏の顔。

当然だけれども、裏の顔が誰にもばれていないのであれば、見えている表の顔、完璧な姿が、みんなにとっての楠さんなのだ。

完璧すぎる人。

皆の共通の認識。

でも。

それでも、全ての人間に好かれるということは難しいらしい。

楠さんのことが気に入らない人が何人かいるみたいで、衝突している姿を度々見る。

多分それは嫉妬で、楠さん本人に非があるわけではない。

欠点がない事が欠点、とでも言えばいいのかな……。

嫉妬することですと悪く言える。

でも結局それも、嫉妬する側が自分で自分の徳を下げる行為でしかなく、楠さんは何ら困らない。誰も楠さんを貶めることはできない。

唯一有野さんだけが楠さんに文句を言ったりしているが、その内容も嫉妬以外の何物でもないように思う。

有野さんと楠さんの仲がよくないのは、個人的にとっても悲しい……。

「あの、楠さん」

「なに？」

楠さんと一緒に屋上で食べるお弁当。

何故だかわからないけれど、今日も一緒にお弁当を食べることになっていた。

「有野さんの事、どう思ってるの？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「え。あ、いや、その……。……仲良くしたらいいのになって思うから……」

「ふーん。そんなこと心配するなんて、一応幼馴染なんだね」

「お、幼馴染とか、そう言うんじゃないくて、その、みんな仲良くできたらいいのになって思ってた……」

「残念でした。仲良くするとかしないとかは、人に言われて出来るようなものじゃありません」

「あ、そう、だよな」

「君がいくら心配しようが私と有野さんの関係がどうにかなるわけじゃないから余計なこと考えない方がいいと思うよ」

「う、うん」

「そうだよな……。僕みたいなちっぽけな人間が他の人の関係に介入できるわけじゃないよ。僕はもう少しとしていたんだろう……。自分でもよく分からないや。」

「でも」

と、楠さん。

「別に私は有野さんのことを嫌ってないし、嫌な人だとか、うるさい人間だとか、そんなマイナスなイメージは持っていないんだよな」

「え？」

「そうだったんだ。」

「でも、有野さん、よく楠さんに言いがかりみたいなこと言ってる、よね？」

「君は幼馴染なのに何にも分かってないんだね」

「え？」

「君の知っている有野さんはそう言うことを言うような人間だったんだ？」

「えっと、うーん……。好き嫌いははっきり言うけど、人の才能に嫉妬したり、人がちやほやされるのを見て嫌な気持ちになったりするような人ではなかったと思うけど、でも実際に楠さんにそう言うことを言っているから、その、変わったんだなあって思ってた」

「ま、しばらく関係が断たれていたみたいだし、そう思っても仕方がないかもね。でも可哀想。まさか佐藤君にそう思われているなんてね。ああ、表面でしか人を見れない佐藤君最低。人の心の奥底なんて見ようとしないんだらうね」

「う……。ご、ごめんなさい……。……。え？ えっと、つまり、それは、有野さんは何か理由があって楠さんに突っかかっているの？」

「自分で有野さんに聞けば？」

「あ、そうだよ。ごめんね」

「あーはいはい。どうでもいいよ」

う……。どうやら僕が謝る度に不快になるみたいだ……。謝れないのかな、僕。

「お昼時にこんな面白くない話したくない」

「あ、うん。そうだね」

「何か面白い話してよ」

「む、無茶ぶりだね……」

「無いのならいいよ。佐藤君の犯した罪をみんなにばらして楽しむとするから」

「え！ ま、待って！ 面白い話するから！」

「自分で面白い話をするって言ってから話しだすなんて、Mだね。ハードル上がりまくり」

最初にハードルを上げたのは楠さんだけだね……。

「えーっと、うーんと……」

面白くない人間の僕には難しいよ……。

面白い話、おもしろい話……。……。

「……あ！ そうだ！ そう言えば――」

「ちょっと聞いてもいいかな」

僕が勇気を振り絞って面白いと思う話を始めようと思っていたけれど、その前に楠さんは何か聞きたいことがあるみたい。

「――え？ うん」

なんだろう。

「例えばさ、本で『マイナスイオンは科学的根拠のない疑似科学だ』
っていう知識を得たとします。それを次の日人に話すとき、『昨日
本で読んだんだけど』って前置きするでしょ」

「うん」

「じゃあ、二年後話するときもそう言うのかな。『二年前に本で読ん
だんだけど』って前置きする？」

「う、うーん。多分、前置きしないと思う」

「そうだよね。きっとその知識をどこで得たのか忘れているよね。
どこで得た知識かは知らないけれど、それを知っているから人に話
す」

「うん」

「それで、ちょっと気になるんだけど、それはいつから自分の知識
になったのかな。どれくらい時間が経てば『本で読んだ知識』じゃ
なくて『自分の知識』になるのかな」

「え、う、うーん……」

いつからだろう……。

「その、本で読んだっていうことを忘れるまで、とか？」

「情報元を忘れたら自分の知識になるの？ それおかしいでしょ。情報じゃなくて情報元に左右されるっていうのはどうなのかな」

「えっと……。あ、じゃあ、その情報が本当だって、自分の中で確証が得られたらじゃないかな。そうしたら自信を持って自分の知識と言えるね」

「どうやって確証を得るの。マイナスイオンが科学的に証明されていないなんてどうやって自分で調べるの」

「え、えっと、どこかで教えてもらうとか、本とか読んで自分で深く調べるとか……」

「教えてもらったのが本当かどうかはどうやって調べるの。読んだ本が本当かどうかなんてどうやって調べるの」

「う……」

そうだよね……。

「でも、そう掘り下げて行ったら何も信じられなくなっちゃうよ……」

「そうだね。テレビ、新聞、インターネット、本。もっと言えば、教科書、身近な人の体験談。何も信じられなくなっちゃうね」

「そうだね……」

「自分で体験したこと以外は真の知識とは言えないと」

「そう、なるのかな？」

「そうなるでしょ。自分体験したこと、自分で実際に実験して調べたこと以外は知識とは言えないと。究極を言えば今まで実証されてきた科学や、証明された数々の数学の公式なんかも、それが本当かどうかを自分で調べなければ真かどうかは分からないってことなんだよ」

「う、うん」

「つまり、君の言う知識と言うものは、前提自体を証明することから始めなきゃいけないんだね」

「そ、そう、なるの、かな？」

「そんなに大それたことを言っただつもりはないけれど……。でも、そういうことなのかな。」

「私たちが教えてこられた歴史、情報、常識は嘘である可能性がある。これは洗脳されている可能性があるね……」

「う、うん」

「そう考えたら怖いよ……」。

「昨日楠さんが言ってた電車内でのマナーもそれに通じるものがあるね」

「そうだね。みんながダメダメ言ってるから何となくダメなんだっ

て思ってたけど、本当のところはどうなのか分からない。洗脳だよ
洗脳」

「うん。怖いね」

「だから、これからは電車内で通話してもいいってことなんだよ」

「うん」

「いや、そんなわけないでしょ」

「……え?!」

まさかの裏切りだった!

「郷に入っては郷に従え。訳が分からなくてもルールなんだから従おうよそこは」

「う、うん。ごめんなさい……」

「しょうがないから許してあげる」

「ありがとう」

……なんか、少し釈然としないや。騙されている気がするよ?
僕は謝る必要があったのかな?

「ところで」

「うん?」

「君は想像ついていると思うけど、私の兄は君と同じようにアニメとか漫画が好きでさ」

オタクと言わなかったところに何かしらの含みを感じるけれども触れないようにしよう。

「私、部屋に入ってその兄のコレクションを眺めたりするんだけどさ、なんでああいうのって四文字の題名が多いの？」

「う、うーん……。なんか、可愛いからかな……。言いやすいし……」

「でもさ、多すぎて混乱しちゃわない？」

「う、うん……。する……。かな？」

あまりしないけれど……。

「私は四文字にしない方がいいと思うんだよね」

「え？ どうして？ 可愛いからいいと思うけど。覚えやすいしメリットが多そうだと思うけど」

「四文字が氾濫している中で、自分の四文字だけ拾ってもらえると思う？」

「う、うーん？」

「そりゃ流行ればいいと思うけどさ、流行らなかつたら悲惨じゃな

い？ 安易に四文字の波に乗った安っぱさが出ちゃいそう」

「あー……」

確かに、それはあるかも。無理やり省略して四文字にしているものや、よく分からない四文字の物もよく見る。『そ〇〇〇っ』とか、『る〇る〇』とか。そう言うのは、ちょっと安っぱさを感じちゃうね。

でも興味が湧くのも事実。ついつい買っちゃうもん。……でも手を出して失敗したことも多々……。うう……。絵は綺麗なのに……。内容スカスカ……。『すかすかっ！』だね。

「四文字がいいっていうけどさ、それは読む人が勝手に呼びやすい略称を考えてくれるんじゃないの？ リモコンエアコンパソコン。コンぱっかりになっちゃった」

「そうだね……。大体、どの漫画にも略称ってあるよね。そう言えば、すごい略し方のゲームとか本があるよ。題名のひらがな部分だけを取って略称とするゲームとか、小説とか。そう言うのってよく考えたなあって感心しちゃう」

みんな頭がいいんだね。すごいや。

「でもまあ、四文字は四文字で無難なのかもね。もはやそのレベルまで蔓延しちゃってると思うよ」

「うん、そうだね。たくさんあるね」

「四文字ならどんなものでも題名っぽく聞こえるんじゃない？」

「そうなのかな？」

「『ごきぶりっ』とか」

「それは……全然題名にふさわしくないよ……」

「『けらちん!』とか」

「えっと、タンパク質……だよね……？ 髪の毛とか、爪とかの……」

全然面白くなさそうだよ……。

「何、さっきから否定的だね。私のセンスがないっていうの？」

「そ、そうは言っていないけど……」

「なら私の本気を見せてあげる」

本気って……。

「……。……。『エビぞり!』」

「い、ごめん、こういう内容がよく分からない、かも……」

「……、ある女の子が旅行で人生初スキーへ。そこで見たスノボをする女性。スキーすらまともにできない女の子が目を奪われたものは、太陽を背に、真っ白い雪の照り返しによって空に浮かび上がるスノボ女性の美しいエビぞりだった。それに感動した女の子のスノ

ボ人生が今始まる」

「面白そう！」

でも『エビぞり！』っていう題名は無しかな……。怒られそうだから言わないけど！

「『ふんそうっ』」

「えーっと……」

コメントに困る……。

「紛争萌え萌えマンガ」

「それは……面白くなるのかな？」

「『せんめっ！』」

「こ、怖いよ……」

「『レンズぶ！』」

「レンズ？」

「写真部の日常を描くバトル漫画」

「バトル！？」

シャッター一つ切るのにどんな戦いがっ！

「『――ログイン――』」

「ログイン？」

「死んだ彼女がまだにログインしている……?! この世にいないはずの女の子を中心に進むサスペンス。最後にあなたは騙される――」

「面白そう！」

でも今話している『四文字の題名』って言うのとは少し違う気がするよ！

「『ビーだま』」

「ビーだま、って、あのビー玉だよ」

「ビー玉が宝石のように見えていたあの頃。ビー玉の本当の価値を知った今、それはもうただのガラス球にしか見えない。」

――まるで、僕らみたいだ。毎日が輝いていた小学校、何をしてもしそれは宝物の思い出になった。

――でも今は汚れてくすみ、輝きも透明感も失われたつまらない日々を過ごしている。

宝物の日々と一緒に過ごしたみんなとも自然と離れ離れになり、昨日も今日も明日も『同じ一日』で、生きることには辟易していた……。

……そんなある日、部屋の掃除をしたときにあの頃みんなで分けたビー玉を見つけた。

――そこから再び転がり出すガラス球の僕ら。毎日は――宝物だ」

「面白そう！」

ビー玉一つですごく膨らませたね！

「お気に召しましたかね」

「うん。とっても面白そうだね」

「そうでしょう。でも全部主人公が死にます」

「台無しだよ！？」

超展開だよ！

「というわけで、帰ったら兄コレクションの中で四文字の物を捨てようと思うんだけど」

「ええええええええ！　どういうわけか分からないし、それは少し無情だと思うよ！　お兄さん悲しんじゃうよ！」

「なに？　私に意見する気？　生意気」

「う……、そ、そう言うつもりではないですけど……。その、捨てられても、お兄さん、また買っちゃうんじゃないかな？　お金の無駄だから、捨てない方が……」

「……あの兄ならばあり得る。捨てるのはやめておいてあげよう」

「ふー。よかった」

「なんで君が安堵するの」

「え？ よかった、から、だけど……」

「……まあ、いいや」

いい事だから、安心していいんだよね？

「でも、兄コレ、いい加減にしてもらわないと家の床が抜けちゃうんだよね。さすがに三部屋目がいっぱいになるのは許せない」

「うん、それは捨ててもいいかも！」

「よし、佐藤君が捨ててもいいって言ったから捨てよう」

「あ、しまった！ コレクションが三部屋分もあるところ想像して行きすぎ感を覚えてしまっつついつい無責任なこと言っちゃった！ 僕そこまで責任持てないや！」

「まあ、とりあえず、捨てることは確定で」

「とりあえず捨てることを確定しないで！」

「コンビニでさ」

「え？ うん」

驚くほど急に話が変わったね。

「パスタを買ったときに、勝手にお箸を入れる店員ってなんなの？ お前は所詮日本人なんだから箸でも使ってろと言っても言いたいのか？」

「そんなこと言いたいわけじゃないと思うけど……。でも、それは聞いた方がいいね……。お箸で食べたらミートソースとか飛んじやうもんね」

「そもそも、流れ作業でレジをするのが気に入らない」

「流れ作業？」

「笑顔も作らない。それどころか客の顔すら見ない。パスタに箸をつけるのもそのせいだよ。さっさと客を捌きたいから聞かずに箸を放り込んで済ませようっていう考え。終いには買ったものを落とすように袋に入れるあのデブ！ ぐっ……。思い出したら腹が立ってきた……。あいつ、コロツケのソース忘れやがって……。！」

「お、落ち着いて。ミスは、誰にでもあるよ」

「仏の顔も三度までなの。四度目は死刑だよ死刑。最低でも終身刑だよ」

「そ、それは、厳しい裁定だね……。！」

「『最低』だけに『裁定』って？ ちょーおもしろーい」

「え、そ、そうかな……。！」

えへへ。褒められたよ。

「……………早くご飯食べてよ」

「え？ あ、うん」

楠さんの話が興味深くてお箸が止まっていたみたいだ。
楠さんのお弁当箱を見してみる。

空っぽだった。もう食べ終わっているみたい。
……でも、昨日はすぐに帰ったのに、なんで今日は帰らないんだろう……。あ、ううん。そんなことを考えるより先にお箸を動かそう。僕を待っていてくれるんだから、早く食べ終わらなくちゃ。
箸を動かす僕と、動かすべき箸が無い楠さん。
楠さんが足を伸ばし退屈そうに空を見上げた。

「あーあ。隕石振ってきてみんな死なないかなー」

「ちょ、な、何を言ってるの?! 怖いよ?!」

「どうせ死ぬなら派手に死にたいよね。隕石なんて素敵。しかもみんないっぺんに死ぬなんて、この上なく平等だね」

「理不尽な平等だよ……」

「ま、隕石が振ってきてても君だけ生き残るんだけどね」

「え、僕生き残っているの?」

「いいよ。でもそれって幸せなのかな」

「……。幸せじゃ、無いね……」

「一人じゃ寂しいから？」

「う、ううん。僕なんかが生き残っても人類復興の役には立たないから。無力な自分が情けなくて、幸せにはなれないよ」

「ふーん。じゃあ君の好きな人と、君。二人が生き残ったら？ それって幸せ？」

「それは……もう一人の人がかわいそうだよ。僕がその人を好きだとしてもその人は僕の事嫌いだもん」

「でもいやらしいことし放題だよ。喜んでもよさそうなのに」

「い、い、いやらしい、こととか、そんな、それどころじゃないよっ。他の生き残りを探したり、安全に住めるところを探したり、忙しいよ！」

「……ふーん。君らしいっちゃ君らしいね。で、生き残った相手は、誰を想像したの？」

「え？」

真っ先に思い浮かんだのは、スカイペ相手のまりもさんだった。あ、そう言えば、最近スカイペしてないや。なんだか、怒濤の日々過ぎてパソコンつけずにすぐ寝ちゃってたっけ……。今日久しぶりに話したいな。

「まさか、私とか言うんじゃないでしょうね」

「そんな！　僕がそんな想像するなんて恐れ多すぎるよ！」

「なら有野さん？」

「有野さん、でも、ないけど……」

「なら何。どこのマッチョを思い浮かべたの」

「ぼ、僕はガチムチ好きじゃないよ……」

「嘘。パソコンの中に動画保存してたじゃない」

「それは楠さんが勝手にダウンロードした奴だよ！？　僕が好き好んで保存していたみたいに言うの止めてください！」

「私を責める暇があったらお箸を動かさない。いい加減教室に戻りたいんだよね。ここ暑い」

「あ、すみません」

また箸が止まっていた。

楠さんと話していると話題が尽きないなあ。

それって、とってもすごいことだね。

楠若菜さん。

黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パツチリお目目にまぶしく瑞々しいお肌。

世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。美人で、勉強ができて、運動もできる。

そして——おしゃべり好きみたい。

あの不思議な感覚

僕がお弁当を食べ終えたら、楠さんはすぐに屋上を去って行った。わざわざ僕を待っていてくれたなんて、優しいね。

屋上にとどまる理由も無いので、僕も弁当箱を片付けて校舎内に戻った。

階段を下りて、下りて、下りて、教室へ向かおうと角を曲がったところで、人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい……」

もっと注意して歩けばよかった……。

「……」

誤っても相手から何の反応も無いので、ぶつかってしまった人の顔をよく見てみる。

「う、あ……。小嶋、くん……」

昨日草むしりを手伝ってくれた小嶋君が怖い顔で僕を見下ろしていた。

「ごめんね……」

「……」

「あっ」

グイッと胸ぐらをつかみ引き寄せられ間近で睨み付けられる。

「な、なに……するの……！」

「……お前最近調子のもてんじゃねえか？」

「の、のってません……！　く、くるしいよ……！」

「若菜ちゃんに気に入られてるからって調子のもてつとぶん殴るかな？」

「き、気に入られてなんか、いないよ……！」

むしろ嫌われているよ！

「どうやってアドレス聞いたかしんねえけど、自分は特別だなんて思うんじゃないぞ？」

「思っ、て、ません……」

「ああ？」

怖いし、苦しいよ……。

誰か助けてくれないかなと思い、あたりの様子を見してみる。みんなご飯を食べているのか、驚くほど人がいなかった。

「ご、ごめん……」

とりあえず謝る僕。

怖い。

これほどまで直接的な嫌悪は初めてだ。一切の情も含まれていない。

怖い。

夢のような、おかしい感覚。

怖い。

頭が現実として認めたくないんだ。

怖い。

僕は、固く目を瞑った。殴られたら痛いんだろうな。どこを殴られるんだろう。……どこをとって、胸ぐらをつかまれた状態で顔以外のところが殴られる想像ができないね……。だから、多分顔を殴られちゃうんだろう。頬かな。鼻かな。人中を殴られるのは嫌だな。と、諦め覚悟を決め歯を食いしばり、ドキドキしながら拳が飛んでくるのを待つ。

「お前、何ビビってんの？」

小嶋君が笑いながら言った。

「マジ情けねえ。本当に男かお前？」

「う、うう……」

「だっせえなあ。なんか、お前みたいなクズにこんなことしてる俺がバカみたいじゃねえか」

「や、やめてください……」

「……………わあ！」

「ひっ！」

思わず目を瞑ってしまふ。

「あはははは！ こいつマジだせえ！」

それを見て小嶋君が笑う。

「うう……」

もうやめてほしい……。

「こんな奴にかまっても仕方ねえわ」

ふ、ふう……。どうやら飽きてくれたみたいだね……。よかった、痛い目に遭わなくて。

「まあ、むかつくから殴るんですけど」

「え！」

そんな！

また拳を構える小嶋君。い、いやだよ……！

胸ぐらをつかまれる僕と拳を構える小嶋君。

ニヤニヤしながらぐっと力を入れ、いよいよ僕が殴られるというところで――

「小嶋あ！ てめえ何してんだ！」

誰かの怒声が廊下に響いた。

後ろを振り向き声の方を見る小嶋君。

「げ、有野だ……」

「え、え？」

小嶋君の後ろの方から有野さんが早歩きでこちらに近づいていた。

「優大に何する気だてめえ！」

僕と小嶋君の間に割って入ってくれて、僕の胸ぐらをつかんでい
る手を引き離してくれた。そして有野さんはそのまま小嶋君と対峙
するように睨み付けた。

それを見て、「別に何もする気ねえよ」と、とぼけた様子を見せ
る小嶋君。

「ふざけんじゃねえぞコラ……。殴ろうとしてたじゃねえか！」

「ちげえよ！ ただ遊んでただけだし！ なあ、佐藤？」

目の前にいる有野さんを越して僕を見る小嶋君。僕は驚き、目を
そらし、

「え……、う、うん……」

頷いてしまった。

情けない。

本当に、情けない。

「ま、そういうわけ。有野がキレル意味が分かんねえ」

ニヤニヤと小嶋君が有野さんに言った。

「ふざけやがって……！ お前、優大に手を出してみろ……。……
……ぶっ殺すからな……」

とてもドスの効いた声に、思わず小嶋君がひるんで一歩後ずさっていた。

「う……。だ、だから何もしようとしてねえって！ ちょっと遊んでただけだっつーの！」

「遊んでただあ？ んなもん関係ねえだろ……。優大が泣いてんじやねえか……！」

な、泣いてないよ？ほんとだよ！？ ……………涙目では、あるかもしれないけれど……。

「……ああ、もううぜえな！」

有野さんの威圧に負けた小嶋君が踵を返し、教室へ帰って行った。よかったなと安心して、夢の中のような頭でぼうっと小嶋君の背中を眺めていると、有野さんが振り向き僕に声をかけてくれた。

「優大」

「……え、……あ！ あ、ありがとう、助けてくれて……」

情けないよ……。男なのに女の子に助けてもらうなんて……。有野さんは困惑しているような、悲しんでいるような顔で僕を見

ていた。二つを足して二で割った顔。

「お前、もしかして日頃からこんなことされてんのか？」

「う、ううん。そんなことないよ。今は、僕がぶつかっちゃったから怒らせたんだと思う」

「本当か？」

「うん」

「本当に本当か？」

「うん。僕、雛ちゃんに嘘つかないよ」

僕の言葉を聞き、有野さんの顔が引きつった。怒っているのとも違う、何と言えいいのか、嫌なことを言われたのに怒れないときの顔。

「……………おい、お前、今…………」

「え？」

「私のことを…………なんて呼んだ…………」

「…………雛ちゃんのことを…………ああっ！」

し、ししししまった！ 雛ちゃんいや有野さんは下の名前で呼ばれることを嫌うんだった！ 小学校の頃、そのことで怒られてそれがきっかけで疎遠になっていたのに、それを忘れてついつい呼んで

しまった！ 朝謝ろうとしていたことを繰り返してしまふなんて僕はバカだ！ これは間違いなく怒られちゃう！ 小嶋君ではなく有野さんに殴られちゃうよ！

「ごごごめん！ その、あの、つい、昔を思い出しちゃって、つい、その、つい！」

言い訳すら出てこないよ！

「……………あーっと…………いや、何だ。私も優大って呼んじやったし、その、まー、仕方ねえよ」

「…………え？」

あれ？ 許してくれるのかな。

「ご、ごめんね。もう、こう言うことないようにするから。もう名前で呼ばないから。気を付ける」

「あー……。……。まー、気を付けてくれ」

「う、うん」

でも、チャンスだから、色々謝ろう。でもその前にお礼だ。

「ありがとう、助けてくれて……」

「いいって。殴られなくてよかったな」

「う、うん……。本当にありがとう」

「気にすんなよ。……その、幼馴染じゃねえか」

僕のことを、幼馴染と呼んでくれた。

あの日、有野さんを怒らせてしまった僕を、幼馴染と言ってくれる。

とてもうれしかった。

「あの、ごめんね……」

「はあ？ 何が。今名前で呼んだことか？ いいって」

「あの、その、今のもそうなんだけど、ずっと前にも、同じことで怒られて、その、まだ許してもらってなかったから……。そのことも、ちゃんと謝りたいって思ってた……」

有野さんが呆れたような顔で僕から視線を外した。

「お前覚えてたのかよ……」

「え。う、うん。ずっと気になっていたから……。でも、忘れろって言うのなら忘れる」

「いや、別に忘れろとは言わねえけど……。そもそもあれは私が悪いんだ」

「そんな。僕が悪いんだよ」

「悪くねえよ。だってお前、私が怒った理由分かんねえだろ？」

「う……。う、うん……。ごめん……」

「いやいやいや。私が悪いって言ってんじゃねえか。謝るのは私の方だ。あの時怒って悪かったな。自分勝手な理由なんだ。気にすんな」

「でも……」

「でもじゃねーの。お前は悪くない。私が悪い。もつと言え私の兄貴が悪い」

「え、え？ 國人君が悪いの？」

有野國人。有野さんの三つ上のお兄さんだ。僕の幼馴染だった人。

「まあな。でもそれも結局は罪をなすりつけているだけで私が悪いんだけどな」

「う、うん？」

よく分からないや……。

「だから、謝らなくていいから」

「う、うん……」

なんだか、もやもやが残るけど……。

でもこれ以上謝っても気分を悪くするだけだね。だからこの件にはもう触れないようにしよう。

頭を切り替え、もう一つのことについて謝ることにした。

「あの、朝も、ごめんね……。その、なんだか怒らせちゃって……」

僕が怒らせてしまったから有野さんは教室を出て行ったんだ。でも、なんで怒ったのか、分かっていないんだ……。申し訳ないよ……。

「……あー……。……いや、別に、優大は悪くないんだろうけど……」

「けど？」

「……まあーそのーなんだ。あれは私の心が狭いというか、予想だにしない事実を突きつけられて動揺したっつーか。だから謝るな」

「えっ、う、うん」

謝れないなんて……。許してくれないってことかな……。

「そこでお前はなんでそんな悲しそうな顔をするんだよ」

「謝れないんだなあって思っ……」

「別に悪くないんだから謝るなって意味だからな？」

「う、うん……」

悪い僕を氣遣って悪くないと言ってくれる有野さん。なんて優しいんだらう。やっぱり有野さんは昔から変わってないや。優しい人だ。

……でも、なんで楠さんに食って掛かるんだろう。やっぱり、女子の頂点を狙っているのかな……。

「あん？ 何見てんだよ」

いつの間にか僕は有野さんの顔をじっと見ていたようだ。

「う、ごめん」

「いや、怒ってねえけど……。……やっぱりお前も私のこの髪の色怖いのか？」

自分の髪をつまみくりくりとひねる。

「え？ う、ううん。そんなことも、無いと、思う、かなー」

実は怖いです。

「……なら染めるか……」

「え！ やめちゃうの！？」

「嫌なんだろう？ この色」

「そ、そんなことないけど……。その、とっても似合ってるから、もったいないかなって」

近寄りがたい雰囲気を出しているけれど、僕はとても似合っていると思う。

「あれ、お前金髪が好きだったの？」

「う、ううん。そんなことも無いと思うけど、有野さんには似合ってるなって。あ、でも、僕が意見することじゃないよね」

「……まあ、そうかも知れど……。まあいいや。んで、じっと私の顔見てたけど、何か聞きたいことでもあんの？」

「あ、そうだった。その、聞いてもいいかな」

「別にいいぜ」

「ありがとう。えっと、その、有野さんって、その、楠さんの事、嫌い、なのかなーって」

「はあ？ 別に嫌ってねえけど」

「え？ そうなの？」

「そうなのって、意外なのかな」

「あ、ううん。そうじゃなくて、その、ならなんで楠さんに、その、……えーっと、文句？を言ってるのかなあって……」

「どうやら、この質問はよくない質問らしい。有野さんの顔が怖くなった。」

「……なんでお前がそんなこと気にすんだよ。お前もやっぱり若菜のことが好きなのかな？」

「え、いや、そんなことないけど……」

「本当かよ……。まあ？ お前が誰を好きになろうが？ 私には、
いっつつっさい関係ねえけどな！」

「うっ、ごめん……」

「別に怒ってねえよ！ なんで謝るんだよ！」

「お、怒ってるよ……」

「怒ってねえって言ってんだろが！ ふざけんな！」

「う……。わ、分かりました」

「……ふん」

有野さんの機嫌を損ねてしまった……。

「えーっと……」

どうしよう……。

「ごめん……」

「なんで謝るんだよ」

「……色々と、情けなくって……」

きっと、僕が普通の人なら有野さんが怒っている理由がわかるは

ずだ。でも僕はダメダメ人間だから……。有野さんが怒っている理由が分からない。生きていてすみません……。

「ごめんね……」

「……別に、悪くないんだから謝んなよ」

「……うん……ごめん」

有野さんが一度ため息をついて、すぐに笑ってくれた。とても優しい笑顔で笑ってくれた。

「優大は優しいな」

僕は優しくなんかないよ。優しいのは有野さんだよ。

「ほんと、悪かったな」

突然、謝ってきた。意味が分からなかった。

「え、え？　なんで有野さん謝るの？」

「今までのことだよ。中学あたりから、私がお前の事避けてるみたいで気分悪かっただろ」

「え、いや、その……」

「あの時、私が理不尽に怒った理由、そろそろお前に教えなきゃいけないよな。納得できねえよな」

「気にはなるけど、言いたくないのなら、言わなくてもいいと、思うけど」

「言うよ。教える。下らねえ理由だよ。下らなすぎてお前怒るかもしれないねえな」

「怒らないよ」

「そっか。んじゃまあ、教えるわ。………あーでも、ダサすぎる理由だからここじゃあ言いたくねえな……」

有野さんが周りを見渡す。人に聞かれたらよくないのかな。

「あ、そうだ」と言っ、有野さんが僕の方を見る。

「お前さ、秘密基地覚えてるか？ 私と、優大と、兄貴の三人で作った秘密基地」

「うん。覚えてるよ」

今も時々行ってるからね。

「今日の放課後そこに来てくれよ。あそこなら誰にも話聞かれねえだろ」

「うん。分かった」

「んじゃあ、放課後そこで待ってるよ。………まだ残ってるかなー、秘密基地。残ってたらしいな」

「うん。そうだね」

残ってるよ。秘密基地。

「ま、適当に作ったからもうなくなってるだろうけどな」

「うん」

ちゃんと、守ってきたよ。

「思い出がのこってりやそれだけで十分だよな」

「うん」

思い出も、秘密基地も。

僕はあの日のまま、残してるよ。

「……なんだか、少し楽しみだな」

「うん」

とっても、楽しみだね。

僕は少し、ほんの少しだけ、涙が出てきてしまった。

僕が泣いていること、有野さんにばれてないかな。

すぐ泣いたら、きっと有野さんに怒られちゃうよ。

男らしくないって。

でも、あそこであの頃の友達に会えるのは、僕にとって泣くほど嬉しいことなんだよ。

だから、これくらい許してね……。

――放課後が、待ち遠しい。

幼馴染の存在も都市伝説でしょ？ え？ 違うの？

有野雛さん。

金髪セミロングで背は普通。楠さんのようにスタイルがいいわけではないけれど、それは楠さんが特別いいと言うだけで有野さんのスタイルが悪いと言いたいわけではない。細くってスレンダー。

楠さんのように身長が高いわけではないし、楠さんのように胸もあるわけではないけれど、楠さんに負けなくらい可愛い。

大きくてほにゃんとした目。潤んでいるような形のいい唇。

楠さんは近寄りがたい美しさで、有野さんは親しみやすい可愛さ。女優とアイドル、と言えればいいのかな……？ なんか違う気がする。しかも今とっても失礼なこと言っているのかも……。

とにかく、有野さんは可愛い。

僕が幼馴染だなんて申し訳ないです……、と思うほど可愛い。

美少女で、勉強ができて、運動もできる。みんなを引っ張る力を持っていて、有野さんを慕って集まってくる人も多い。女子の人气で言えば、有野さんの人气が高くて、男子の人气で言えば楠さんの人气が高い。

ただ、有野さんは好き嫌いははっきりと言うタイプだからそれを良しとしない人は有野さんと距離をとっているみたい。そう言った点で、我が強い。

この前、きゃぴきゃぴしている女の子（語尾に☆とかついちゃいそうな人）にむかって「うぜえから普通にしゃべれよ！」と言っていたのを見たことがある。あと「缶が開けられなーい☆」って言っていた驚くほど力の弱い女の子に「なら買っくんじゃねえよ！」と怒っていた。ストレートだなあって思ったね。

でもそう言った男前なところに憧れる女の子も多いみたい。

楠さんと有野さんがクラスの女子ナンバーワンとして、その一つ下の位置にいる前橋さんは有野さんを慕っているみたいだし、有野

さんの人気は凄いね。金メダルと銅メダルと一緒に取ったみたいだな
感じだね。

有野さんは男勝りな性格なので、男子にも人気がある。でもちや
はやされるのが嫌みたいでいつもうつとおしそうに追っ払っている。
もちろん気に入らない男子には強く言葉をぶつけるので、有野さん
を苦手とする男子もそれなりに多い。お昼に言い合っていた小嶋君
も、有野さんのことをあまり好いてはいないようだ。

有野さん。

好き嫌いははっきり言う人。

そして。

好き嫌いがはっきり分かれる人。

好きな人は好きだし、苦手な人は苦手。

多分、そんな感じ。

……でも、楠さんと有野さんの関係はよく分からないや……。

楠さんは有野さんのことを嫌っていないし、有野さんも楠さんの
ことを嫌っていないみたい。

でも有野さんは楠さんに意見することが多いし、今朝だって楠さ
んが強めに怒られていた。

一見嫌いあっているように見えるのに、実はそうでもないみたい
……。

よく分からないや……。

「佐藤君」

「え？」

放課後、帰ろうと荷物をまとめているところに、楠さんが話しか
けてきた。

「佐藤君、今から暇でしょ？」

思わず暇だと言ってしまいそうになる笑顔。暇意外に答えが無いのではないかと思う。

いやいや。

僕は頭を振ってその考えを散らす。

「あの、僕、この後用事が……」

「え？ 用事があるの？」

「うん……」

楠さんが僕だけに聞こえる小声で言う。

「……あの暇でしようがない佐藤君に用事？ それ嘘でしょ？」

「う、嘘じゃないよ……」

「……ふーん」

ジト目で僕を見た後、やれやれといった感じでおもむろに携帯電話を開いた。

「な、なんで携帯電話を操作しているの？」

「え？ 私がケータイ操作したらダメかな」

「だめじゃないけど、その、なんでこのタイミングなのかなーって思ってる」

「あはは。別にどんなタイミングでもいいでしょー。あーそれにしても今日は暑いね。思わず汗でケータイが滑り落ちそうだよ。そのせいでうっかりデータフォルダの中の写真が見られちゃうかもしれないね。でも暑いからしょうがないよね。――あつ、おっとっと、手からケータイが……」

と言いながらボウリングの球を投げる時のように携帯電話を構えた。

「ごめんなさい僕暇でした!」

「あ、そうなんだ。ならちよつといいかな」

笑顔で携帯をしまってくれた。ふ、ふう……。死ぬところだった……。

なんて安心している場合じゃない。有野さんに事情を説明しておかなきゃ。

教室を見渡し有野さんの姿を探す。

……。

い、いない……。

もしかして、もう行っちゃったのかな……。

「さあ、佐藤君、行こう」

「え、え、あの、その前に……」

「ああ……手が汗ばんで……」

「分かりました!」

「よろしい」

僕は教室中から冷たいような熱いような視線を受けながら楠さんの後ろについて教室を出た。

……有野さんとの約束、どうしよう……。僕、連絡先知らない……。

「あの、楠さん。僕、少し急いでて……」

僕の前を歩く楠さん。背筋がピンと伸び、腰にまで届こうという美しい黒髪が歩く度に左右に揺れる。後姿がすでに美人。追い越して顔を見た時にも美人だから街中では大変だろうね。でも今は素直に見とれることができないよ。

「なに君、まだ逃げようとしてるの？ 私に刃向う権利君にはないの。ばらされたいの？」

「そんなこと、無いけど……。でも、先にしていた約束だから……守らなきゃいけないし……」

「うるさいね。ばらそうかどうか。よしばらそう」

「えっ、いや、ごめんなさい……」

僕どうすればいいんだろう……。

「と言っても、別にそんなに時間をとらせるわけじゃないから。ただ聞きたいことがあるだけ」

「あ、そうなんだ。でも、教室じゃあだめなの？」

「みんなに聞かれたくないし」

「聞かれたくないこと？」

「そう」

な、何だろう……。怖い……。

「……ここでいいや」

通りかかった空き教室の扉を開けた楠さん。僕もそれについて教室に入った。

「あの、一体、何？」

「お昼に話したこと。兄コレを処分しようと思って、どこかい値段で買い取ってくれるところを教えてほしくてね。君なら何でも知ってるでしょ。オタクだから。オタクだからこそ」

「え、うん、その、まあ……」

オタクと言われることにやっぱり抵抗があるなあ。普通の人より少し本が好きっていうくらいなのに……。

「で、高く買い取ってくれるところはどこ？ 何なら君が高値で買い取ってくれてもいいけど」

「ぼ、僕そんなにお金持っていないから買い取れないよ……」

「甲斐性がないね。甲斐性がないならついでにその貧乏性も無くしてよね。さっさとお財布出して」

「か、カツアゲですか……」

「む、そんな暴力的なことするわけないでしょ、失礼なこと言わないで」

「ご、ごめんなさい……」

でも……、実際、財布出せて……。

「で、買い取り値って場所によって違うの？」

「う、うーん……。僕売ったことないから……」

「へー。そうなんだ。役に立たないね。役に立たないのならせめて命断ってよね。さっさと屋上行ってきて」

「役に立たないからって別に死なないよ!？」

「はいはいはい。我儘だねホント」

我儘じゃないよ……。

「でも、なんでそれを聞くの、教室じゃあだめだったの？」

「兄がそんな人種だつてばれたくないでしょう。あ、しまった。また君に弱みを握られてしまった」

「よ、弱みって、別に楠さんが悪いわけじゃないし……。そもそも全然弱みにならないし……」

「何を言っているの。オタクが家族にいるなんて恥ずかしい事この上ないでしょう。オタクは、無いよねー」

「う……」

楠さんは、僕のことオタクっていうから、何気に僕も否定されていることになるね……。

「いいところ知らないのなら、せめて古本屋の場所を何個か教えて」

「う、うん」

これなら、すぐに秘密基地へ向かえるね。

知る限りの古本屋を紙に書き記し楠さんに渡す。

「へえ。結構あるんだね。さすが佐藤君。この中から兄コレを売る店を探せばいいんだね」

「う、うん……。でも、お兄さんのコレクション本当に捨てちゃうの？」

「君が捨てろって言ったんでしょ」

「え、いや僕捨てろなんて言っていないよ!？」

「はいはい。じゃあ、とりあえず佐藤君の命令通り泣きながら兄コレを捨てに行ってきます」

「完全に僕のせいにしようとしてる！」

「不肖楠若菜。佐藤君の命により兄の宝物を捨てに行ってまいります。では」

「え、あつ、ちょっと……」

行っちゃった……。ぼ、僕のせいかな……。……僕のせいだよね……。ゴメンねお兄さん……。

「うう……。また僕のせいで不幸な人が……」

ごめんなさい……。

「……はっ。落ち込んでいる場合ではない。早く秘密基地へ行かねば」

落ち込む時間はたくさんあるからね。

「よし、早く行こう」

少し急ぎ足で教室を出た。

急ごう！

と、思ったのだけれども。

う……。まずいよ……。

「おお、佐藤。ちょうどいいところに。もう帰ったかと思ってたぞ」

廊下の角で、先生に会ってしまった……。また仕事を頼まれちゃ

うのかな……。

「この前片付けた資料室に資料が山積みされて置いてあるから、それを本棚にしまっていて欲しいんだ」

「あの、その……、僕、用事があつて……」

「またお前は……。すぐそうやって逃げようとするなあ！ さっさと終わらせればすぐに帰れるんだから、文句を言う前に早く仕事をはじめろ！」

「は、はい……」

うう……。早く終わらせよう……。

……。

・
・
・

……。

「うわぁ！ 時間とられちゃったよ！」

一時間弱資料室に縛り付けられ完全に遅刻してしまった僕。まだいてくれるかな……。当然怒ってるよね……。

ごめんね……。

山を駆け上る僕。でも体力がないのですぐに息切れして足が止まる。

急ぎたいのに。

情けないよ……。

体力つけないきゃね……。

「あ、有野さんは……」

全力で歩いてやっとたどり着いた秘密基地。

そこには誰の姿も無かった。

ただ、いつもと変わらない秘密テントだけが寂しそうに僕を迎えてくれた。

「う、ご、ごめん……」

何もない。誰もいない。

木の間から漏れる陽のスポットライトが僕を寂しげに照らす。

「な、殴られる……。絶対殴られるよ……」

昔を思い出すよ……。よく殴られていたっけ。

「でも、そんなことより、早く謝りに行かないきゃ……。殴られちゃう」

僕は踵を返し来た道を引き返そうと一歩踏み出した。けど、

「まって」

秘密テントの中から声がした。

「帰ってねえよ」

テントから出てきたのは当然有野さん。
にこやかに手を挙げてくれた。

「あ、有野さん！ ごめんね！」

僕は駆け寄り頭を下げた。

「別に怒ってねえよ。時間決めてねえし、優大の放課後の予定聞いてなかったし。それにたった一時間じゃねえか。来なかったらムカつくけど来てんだから文句はねえよ。でも、そんなことより、殴られるってなんだよそれ。私がいつお前のことを殴ったよ」

「え、主に、小学生時代に……」

「……忘れとけよ」

体に刻み込まれていますので……。

「あの、待たせちゃってごめんね……」

「構わねえっての。どうせお前また誰かに捕まってたんだろ」

「えっと……」

「あー、言わなくていい言わなくていい。別に聞きたいわけじゃねえし」

「う、うん」

よかった。聞かれたら理由を言わなきゃいけないところだった。

「にしても、この秘密基地がまだ残ってるとはなあ。風で吹き飛んでると思っただけどなあ……」

「うん」

「あの頃を思い出すな。昔はあんなに大きく見えた秘密基地も今見れば狭くて汚ねえぞ。それに造りが雑。ホント、よく残っててくれたな」

「うん」

「……毎日のようにここへ来て遊んだな……。懐かしい」

「そうだね」

「……でも、それも私が理不尽にキレたせいで、終わっちゃった」

「……」

ここで遊んでいるときに怒られた。

『今度から私の名前を呼ぶんじゃねえぞ!』って。

その理由を、今日教えてくれるみたい。ずっと引っかかっていた胸のしこり。それが今日無くなるんだ。

「悪かったな。キレて」

「う、ううん」

「ああ、いや、そうだな。とりあえず、理由しりてえよな」

「あ、うん」

いよいよ聞ける。

「大した理由じゃねえんだけどさ、あのー、私の兄貴がさ、ああな
ったじゃん？」

「うん」

ああなった。

有野さんのお兄さん、くにひと國人君は、中学校に上がったあたりから、
突然非行に走りだした。髪の毛を金色に染め、平気でタバコを吸い、
毎日喧嘩に明け暮れた。もちろん、僕と遊ぶなんてことはもうなくな
っていた。

この辺りでは有名だ。とても喧嘩が強くて、目が合ったただけでば
こぼこに殴られる。とても恐れられていた。

みんなから怖がられていた。それは、当然僕も……。
でも、実は憧れてもいた。

強くて、かっこよくて、自分の腕だけで生きていくような、そんな
僕とは正反対のアウトローな生き方に憧れを抱いていた。

しかし憧れるだけ。

僕には、そんなことできるわけがなかった……。

國人君が荒れだしてから、有野さんも徐々にその影響を受けだし
た。

國人君のように、非行の道を歩き出した。

それからしばらくしてだった。

僕が有野さんに怒られたのは。

『名前を呼ぶな』と怒られ、それから疎遠になってしまった。

悲しかった。幼馴染が、二人とも僕の元から離れて行ったのは。そこから僕は一人になった。

そこからずっと、僕は一人だった。

そこから——色々と決まったんだと思う。

「だせえことに、兄貴の影響で私もこんなになっちまってさ」

「……う、うん……」

「まあ、なんだ。あの当時、兄貴の真似をして、調子に乗ってた私はさ、その……」

「うん」

「……あの当時の話だからな？　今は違うからな？」

「う、うん」

「……えーっと、言い辛いんだけどさ、あー……その、優大の事……だせえと思ってたんだよ」

「うん」

それは今もそうだよ？

「当時だからな！　今はそんなこと思ってねえからな！」

「え、う、うん……？」

今もかっこ悪いけど……。

「んで！ でだ！ ……その、私の名前ってさ、今の私には似合わねえじゃん？」

「え？ なんで？」

「なんでって、似合わねえだろ。『ヒナ』だぜ。雛。こんな女っぽい名前、可愛い奴にしか似合わねえだろ」

「え、そうかな……。有野さんにはとっても似合ってると思うけど……」

「……………。……似合ってるって、それお前…………！」

突然顔を赤くして僕をべしべし叩いてきた。

「いたい！ ご、ごめん！」

「て、てめえ！ この野郎！」

「ゴメンなさい！」

僕が悪いです！

「はぁー…………はぁー…………」

い、息が荒いよ……。顔も赤いし、怒らせてしまったみたいだね……。

「ご、ごめんなさい…………」

「……べ、別に、怒ってねえけど……」

え、怒ってないのに叩かれたの？ 僕……。

「い、今はそんなのいい！ そんなことよりあの日のことだ！」

「あ、はい」

「私は、自分の名前が恥ずかしかったんだよ。こんな女っぽい名前嫌だっと思ってたんだ。それで、更に、だせえと思ってた優大に『雛ちゃん』なんて呼ばれるのが我慢ならなかったんだ」

「そうだったんだ……」

「だから私はあの日、お前にキレたんだ。『今後名前を呼ぶな』って……。今思えば、なんて理不尽な奴なんだろうな、私。ホント悪かった」

「そ、そんな。嫌なことしたのは僕なんだから謝るのは僕だよ！」

「私が理不尽だったって言ってんだろ。それは譲れねえよ。お前は謝るなよ」

「……でも……」

「でもじゃねえの。私が悪かった。……許してくれ」

「う、うん。許すもなにも、僕怒ってないし……」

「……そっか。そう言えばお前はそういう奴だよな」

そういう奴って、どういう奴だろう……。よく分からないや。

「でさ、お前にキレてから、どうにも雛って名前が嫌いになっちま
つてさ。誰に呼ばれてもイライラするようになってたんだよ」

「うん……」

可愛いのに……。

「まあ、今思えばしょうもねえことなんだけどな。なんでそんなこ
と気にしてたんだろうって、馬鹿みたいだぜ」

今思えば馬鹿みたい、と言うことは？

「えっと、なら、今はもう名前で呼んでもいいの？」

「いやー、なんかもう恥ずかしいわ。イラつくことはねえけど、恥
ずかしさは残ってるんだよ。……だって、似合ってるねえもん」

「そんなことないよ。似合ってるよ」

「……そっか」

にっこりと笑ってくれた。

あの頃から何も変わってない、優しい顔だ。

と、思っ懐かしんでいたのだけれども、急に恥ずかしそうに僕
から顔をそむけ、もごもごと言った。

「ま、まあ、何だ。お前が、呼びたいって言うんなら、その、なあ。別に、呼んでも、いい、かなーとか……」

「……え！　いいの？！」

「あ、いや、無理にとは言わねえけど、どうしても、呼びてえなっと思うんなら、我慢してやらないことも、ない」

やったね！

「嬉しいな！　僕、あの頃みたいに呼びたいよ！」

「え、その……。……まあ……お前がそうしたいのなら……。私も、悪かったし。迷惑かけてきたし」

「迷惑なんてかけられてないよ。でも、僕、雛ちゃんって呼びたい」

あの頃にはもう戻れないのなら。

呼び方だけでも、戻したいよ。

「呼んでも……。いい、かな……？」

「ぐっ……。！」

完全に僕から目を背け、顔を隠した。やっぱり、嫌なのかな。顔を背けたまま、有野さんが言う。

「……こほん……。……なら、しょうがねえな。好きに呼べばいい」

「やった！　ありがとう、雛ちゃん！」

やっぱり、少し嫌なのか、耳が真っ赤になっていた。お、怒ってるのかな？

「……………くそ……………そんな嬉しそうに……………ふざけやがって……………」

「え、ご、ごめんなさい……………」

嬉しそうに呼んだらダメなのかな……………。
赤い顔を僕に向ける。

「ち、ちげえよ！ ふざけてんのは私だ！ 今更こんなこと、なあ！」

「え、よ、よく分からない、けど……………」

今更名前で呼び合うことがおかしいって言いたいのかな？ 僕は全然おかしいとは思わないけど。

あたふたとしていた有野さん……………、いや、雛ちゃんが我に返り、コホンと一度咳をつき仕切り直して僕の顔を見る。

「私も、お前の事優大って呼ぶからな」

「うん」

僕らは笑顔を見せた。

「あの頃に、戻ったみたいだな」

「うん。……………ここに、國人君がいれば、完璧だね」

「……兄貴がここにいれば……か」

雛ちゃんの笑顔に影が落ちる。

「え、え？ 國人君に、何かあったの……？」

「……あいつは、もうここへ来れねえよ……」

「それは、ここに来たくないからってこと？」

「……そうじゃねえ。そうじゃねえんだよ。来たくても………来れねえと思う」

「どう、して……？」

そう言えば、最近は全く噂を聞かない。あれだけ街で噂されていた國人君だったのに、ここ二年くらい何も聞いていない……。な、なにかあったのかな……。

「兄貴の話は今はいい。……でも、多分、近いうちに……事情を説明する……」

「う、うん……」

……なんだか、嫌なことが起きているみたいだ。でも、近いうちに教えてくれるというのであれば。これ以上僕が踏み込むのはよくないよね。

「で、だ」

改めて雛ちゃんが僕の顔を見る。

「うん？」

「その、昔に戻った私達なんだけどさ」

「うん」

また雛ちゃんの顔が赤くなった。
お、怒ったのかな？

「……もうちょっと、先へ進んでみるのも、面白いんじゃないかな
って思ったり思わなかったりしたりなんたり」

「え？ どういうこと？」

「いや、だから、幼馴染の、先……、と云えばいいのか、よく、わ
かんねえけど……。もうちょっと、踏み込んだ、関係……。？ っ
ていうか、なんていうか……」

「……幼馴染の先って……。……あっ！」

分かった！

「そ、そう言う、こと、何だよね……」

「え！ い、いや、その、なあ！ 面白いかなあって、思っただ
けだぜ！ そう、実験的に。実験的にな？ してみたら面白いかも
なって！ 思いつき思いつき！ お前が嫌なら別に、このままでも

いいし？ 冗談、ってことでも、いいし……。……ってゆーか、冗談だし！」

「え？！ 冗談なの？！ 僕とっても嬉しかったのに……」

「……………え？！ 嬉しい！？ 嬉しいって言ったのか？！ え、え？！ マジで！？ いや、なら冗談じゃなくてもいいし？！」

「えっと……僕は、冗談じゃない方がいいな……」

「冗談じゃねえよ！」

「ひっ……。じよ、冗談じゃない、よね……。ごめんね……。僕調子のってた……」

怒られた！ ごめんなさい！

「は、はあ？！ お前何突然……………あっ！ いや、今の冗談じゃねえって言うのは、ふざけんじゃねえって意味じゃなくて、その、今言った提案が本気だってことだ！ キレたんじゃねえよ？！」

「あ、ああーなるほど。勘違いしちゃった」

「そうだぜ！ 優大勘違いしちゃってたな！ あはははは！」

「う、うん」

……。なんだか、おかしいなあ、雛ちゃん。

「えーっと、な、なら……。その、今から、そう言う関係ってこと

で、いいのか？」

不安そうに聞いてくる雛ちゃん。何が不安なのか分からない。僕が断るわけないのに！

「うん！ もちろんだよ！ これからよろしくね！」

一気に、雛ちゃんの笑顔が弾けた。とっても嬉しそうだ。嬉しいのは僕なのに。

「……は、はは……。ははは。……い、いやあ、その……なんか悪いな……。私みたいなので……」

「そんな！ 雛ちゃんだから、僕は嬉しいんだよ！」

「そ、そんなこと言うなよおお前っ！ 照れるじゃねえかっ！」

雛ちゃんも喜んでくれている。とっても嬉しいよ！

「僕、雛ちゃんが初めてだよ」

「そ、そうなのか！ あ、あははははは！ なあ！ おい！」

「うん！ 初めての親友だよ！」

「……」

……
……
……
……
……

「ごめん……」

無の顔をやめ、あきれたような顔で僕を見てきた。

「謝るなよ……。勘違いは、誰にでもある……」

落ち込みまくりの雛ちゃん。ごめんね、ごめんね。一体どういう意味だったのだろう……。

「その……、今のは、本当は、どういう、意味だったの？」

「ああ、しょうがねえよ。私のはっきり言わなかったのが悪いんだもんね。ああ、私が悪い」

「そ、そんなことないよ。僕が、馬鹿だから」

「お前はバカじゃねえよ。バカは私だ。こうなりそうだってことは予想ついてたんだ。はっきり言わない私が悪い」

「え、っと……」

「……だから、はっきりと言うわ」

「え、あ、うん」

「……………うっし」

雛ちゃんが、気合を入れた。

覚悟を決めた、かっこいい顔で僕の顔をまっすぐに見てくる。

「……………私は、優大のことが、すー」

と、ここでタイミング悪く誰かの携帯電話が鳴った。電話みたいだよ。

……。あああああああああああああ！ 僕のポケットから聞こえてくる！ っていうか僕だ！

「う、あ、あ、あ、ゴメンなさい……！ その、僕、マナーモードにし忘れてた……！」

「……いや、別にマナーにしているのは悪い事じゃねえだろ。いいから、さっさと出ろよ。話はそのあとだ」

「う、うん、ごめんね、ちょっと、失礼して……」

ポケットから携帯電話を取り出しディスプレイをしてみる。

「？」

知らない番号だった。でもなり続けるので出してみる。

「はいもしもし。どなたですか？」

『……………なんで私は君の番号を知っているのに君は私の番号を知らないの？』

この可愛い声ときつい口調は……。

「え、あ、楠さん？」

「若菜だあ?!」

「えっと、僕、携帯番号は教えてもらってないけど……」

メールしか受け取ってないよ。

『嘘。どうせ君、私の番号を調べて登録してあるんでしょ?』

「そ、そんな。僕そんなことしないよ……」

『どうだか……。ま、いいや。私から電話をかけたことによって君が調べていようが調べていまいが番号が知られてしまったわけだし、変わらないね』

「そ、そうだね。それで、その、いったい僕なんか何の用事が……」

『私じゃないんだけどね。兄が君に言いたいことがあるってうるさいから』

「え! ま、まさか、本売ったの?!」

『売れて言ったのは君でしょ』

「言っていないよ?!」

『うるさいね君。往生際が悪いよ。売れて言ったのは君。認めてよ』

「み、認められないよ……」

『……レイプ未遂……』

「ぼぼぼ僕が言いましたあああああ！ ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

なんだかどんどん罪が重くなっているよ?!

『でも私は謝らなければならないの……』

「え、え？」

『未遂犯の君に命じられた兄のコレクションの処分、それも未遂に終わってしまったの』

「え、あ、よかった……」

失敗したみたいだね……よかった。

『出張買取してもらおうと思ったんだけど、査定中に兄が帰ってきてしまっただけ。理不尽に怒られたよ。そしてその言い訳として君に命令されたと言ったら、君に電話しろと。兄に代わるね』

「え!？」

そんな突然代わられても！ 僕が怒られちゃうの?!

『……もしもし?』

「あ、はい！ その、僕……！」

『いやいや、そんなに恐縮しないで……。俺は、全部分かってるから』

「え……」

怒鳴られると思っていたけれど、全然そんなことは無くむしろ優しさと憐みのこもった声だった。

『君、若菜の本性を知っているみたいだし、きっと無理やり言わされたんだろう？』

「えっと……その……」

『みなまで言わなくていいよ。大丈夫。俺は君の味方だから』

「は、はあ……」

『これからは部屋に鍵をかけることにするから。安心していいよ。もう勝手に処分されることは無い』

「そ、そう、ですか……」

『じゃあ、若菜を恐れる者同士、仲良くしよう』

「は、はい」

『じゃあね。いつか愚痴りあおう』

「えっと、はい……」

お兄さん、優しい人だね……。

『……もしもし?』

「あ、楠さん……」

楠さんに代わっていた。え、いや、お兄さんも楠さんだけど……。……とにかく、楠さんに代わっていた。

『ふざけた会話の内容だったね。何が私を恐れている者同士よ。それはこっちのセリフだよ。恐れているのは私の方だよ。被害者面しないよね』

「は、はい、すみません」

『……ふん。まあ、そう言うわけで、君の作戦は失敗に終わりました。ここに報告させていただきます』

「はい……」

『では失礼します。また明日』

「うん、ばいばい」

電話が切れた。

よかった、お兄さんのコレクションが葬り去られないで……。って、そんなことよりも！

「あ、ご、ごめん雛ちゃん。話の途中で電話なんかに出ちゃって……。……これで、もう大丈夫。電源切ったよ。それで、何の話だっけ」

うぐ……。雛ちゃん、怒っているのかとても怖い顔。……。電話に出ちゃったから怒ってるのかな……。……

「…………お前、若菜の電話番号も知ってたんだな」

「え、あ、うん……」

「しかも、若菜から電話がかかってくるんだな」

「う、うん。初めてだけど……」

「……」

ぎろりと睨み付けてくる雛ちゃん。
う、怖い……。……

「その……」

「……話つてのはあれだよ。私達、しんゆうになったんだから、とりあえずアドレス交換しようぜって言おうとしてただけ」

「え、あれ、親友になろうっていうのは僕の勘違いじゃなかったの？」

「勘違いじゃねーよ。初めからそれ以外言うつもりなかった。なんだ？ それ以外に何かあるのか？ ねえよな。あるわけねえよな！」

ええ？　おい！」

「そ、そうでございます……」

怖いよ……。

「……………なんだよ……………くそ……………」

「え、え？」

とても悔しがっていた……。

「てめえ、いいから、さっさと教えろよ。早く帰りてえんだよ」

「あ、うん。ごめん」

「…………ふん」

突然機嫌の悪くなった雛ちゃんと、アドレスの交換をしたあと、雛ちゃんが一人さっさと山を下りて行った。

一人取り残された僕は、雛ちゃんを怒らせてしまったと困惑し立ち尽くしていたけれど、山を下りて行った雛ちゃんから送られてきたメールを見てほっと息を吐いた。

『また明日な』

なんてことは無いメールだったけれども、今の僕にはこれだけでとっても安心できた。

あの頃、別れる時に言ってくれていたこの言葉。

この言葉の次の日は、ちゃんと笑いあえていたから。

……また明日。

僕は、声には出していないけれど、思いを込めて、メールに乗せて送った。

なんだかとても、ノスタルジー。

スカイプの音にビビる毎日

山から家に直帰して、お姉ちゃんと遊んで、ご飯を作って、みんなと一緒にご飯を食べて、お姉ちゃんを振り切ってお風呂に入ってお風呂から上がって、お姉ちゃんを振り切って部屋に入って、パソコンの電源をつけた。

廊下でお姉ちゃんが叫んでいるが気にしないでおこう……。ゴメンねお姉ちゃん……。すぐにスカイプをつけてネット上の親友まりもさんのログイン状態を見てみる。

「あれ……。いないや……」

この前ログインしたのは、土曜日かな？ 僕二日もログインしてなかったんだね。

僕にとって二日はすごく長い。それくらい、遊び相手がいないから。

遊び相手はお姉ちゃんくらいだよ……。……。廊下のお姉ちゃん、大人しくなったね。部屋に戻ったのかな？

と、ここで！

「あー！」

タイミングばっちり！

まりもさんがちょうどログインしてきた。

僕はさっそくメッセージを送った。

ユウ…こんばんは！

まりも…やあ。二日ぶりかな？

ユウ…うんそうだね

まりも…毎日のように話していたから死んでしまったのかと思ったよ。

ユウ…死んでないよ。ちよつと、バタバタしてて…

まりも…パソコンの前に座る時間が減るのはいいことだね。これから先スカイペにログインする時間が減っていくといいね

ユウ…そんな。僕まりもさんと話したいよ

まりも…嬉しいこと言ってくれるね。でも顔も名前も知らない相手をそこまで信用するのはいかなものかな

ユウ…でもまりもさん優しいから、信用してもいいよね

と、ここで突然どんと隣のお姉ちゃんの部屋から物凄い音が聞こえてきた。どうやらお姉ちゃんが僕の部屋の壁をどんと叩いているみたいだ……。さっき相手にしなかったことを怒っているみたい……。あとで謝っておこう。今はそれよりもスカイペだ。

まりも…私は別にかまわないけれど、こんなコミュニケーションだけのつながりなんてすぐに切れてしまうよ。パソコンが壊れでもしたらもう連絡がつかなくなる。そんな薄いつながりに頼って

はいけないよ。君はもっと友達を作るべきだ

ユウ…うん。それは分かってるよ

ユウ…でも、実は今日親友ができたんだ！

まりも…へえ。それはいいことだね。でも親友なんてものは突然出来る者なのかい？

ユウ…親友ができたというか、昔の友達と仲直りできたんだ！

まりも…なるほどね。それは本当によかったね。心から祝福させてもらうよ

ユウ…ありがとう！

まりも…実生活が充実してきて、私の事なんか忘れるくらい現実を楽しんでほしいものだね。私は所詮、君の想像上でしか生きられない存在だからね

……それは、僕嫌だよ。

まりもさんのことは絶対に忘れたくないよ。

だって、一番の親友なんだから。

例え顔が分からなくても、名前を知らなくても。

そんなの関係ないくらい好きだもん。

ユウ…まりもさんも現実だから絶対に忘れないよ。僕まりもさんのこと好きだもん

まりも..

回線の不都合か、そのあとすぐにまりもさんのログイン状態が解かれ、返事がないまま、その日のスカイペを終了した。

まりもさん。

それだけしか分からないけれど、とっても優しい人。

地球に隕石が落ちてきて、僕と誰かが生き残るのだとしたら、一番生き残っていてほしいなと僕が思ったのは、顔も名前も知らない、パソコン越しのつながりしかないまりもさんだった。

それくらい、まりもさんには支えられたから。

誰よりも、まりもさんは優しい人だから。

ライトノベルの主人公

楠さんに脅されたり、雛ちゃんと仲直りをしたり、小嶋君に怒られたり、先生に仕事を頼まれたり。

なかなか濃い日々が続いているけれど、きつともうすぐこの非日常の波は治まるよね。今まで風すぎなほど風いでいた僕の人生の海がこれ以上荒れることは無いよね。今日からまた落ち着いた心地のいいビーチに戻っていくはずだ。僕の世界じゃあサーフィンなんかできないよ。波一つないからね。

僕はいつも通りの一日を迎える為に、いつも通りひっそりと教室に入って、いつも通り誰とも挨拶を交わすことなく、いつも通りライトノベルの世界に逃げ込む。

うん。

これが僕の毎日だよ。

昨日までが嫌だったとか、そう言うことは一切ないけれど、むしろ面白かったけれど、僕は楠さんや雛ちゃんや小嶋君や先生といった人生の主役を張れるような人たちと深くかわれる人間じゃないんだ。

部屋の隅っこで一人本を読んでおくくらいがちょうどいいんだ。

誰も怒らせることは無いし、誰も困らせることも無い。

脇役ですらなくていい。

背景の一部で充分だよ。

僕が今読んでいるライトノベルで言うならば、僕はページ数で分だ。イラストでも、本文でもなく、ページを教えるだけの役割。無くてもあまり困らない、小説の一部でありながらその枠から外れている存在。時々、気になった人が目をやる位の存在でいい。僕には物語の一端を担うなんて荷が重すぎるからね。

……楠さんは主役かな？ 美人だし、なんでもできるし、みんなから信用されているし、簡単に主役になれるね。あ、でも雛ちゃん

も可愛いし、何でもできるし、男前だし、簡単に主役になれるや。
あ、でも、大体主役は男の子だから、この二人はヒロインになる
のかな？　だとしたら、主役は――

「おーっす」

とても大きな挨拶が聞こえてきた。

僕は顔を上げてその声の主を見してみる。

「はよー」

手を軽く上げ近くにいるみんなに挨拶を振りまいていた。

背が高くってかっこいい沼田君だ。

このクラスの男子ナンバーワン。

ライトノベルの主役は、沼田君だね。むしろ沼田君しかないね！
席に着く沼田君を目で追う。

沼田君が座った瞬間、そこに人だかりができた。

男子も女子も、みんな集まる。

沼田君はいつもいつでも人だかりの中心だ。すごいや。

……僕なんか、背も低いし、かっこ悪いし……。

僕はいつもいつでも人だかりの外の外だ……。すごくないね……。
所詮は主役とページ数。憧れることもおこがましいことなんだよ。

僕は、人生のページ数らしく、誰にも気づかれないように本の世
界に没頭した。

沼田英明君。
ひであき

茶髪で男子にしては長い髪。でも全くうっとおしくない、完璧にセットされたような髪型。噂によれば、自然とそうなるらしい。

小嶋君と同じバスケット部で、一年生にもかかわらずレギュラーを任されるすごい人。

当然背も高く、運動神経は言わずもがな。しかも部活だけに打ち込んでいるわけではなく勉強だってお手の物。楠さんの男子バージヨンと言っても過言ではないね。

凛々しい瞳に凛々しい眉。凛々しい鼻に凛々しい口元。毛先を見ても凛々しいよ。

しかも優しい性格で沼田君の悪口を聞いたことがない。完璧な女の子楠さんに対する嫉妬はよく聞くけれど、完璧な男の子沼田君に対する嫉妬は全然聞かない。なんでだろうね？

かつこよくて、勉強ができて、運動もできる。しかも平等に接することのできる才能を持っていて、みんなとすっごく仲がいい。(少し辺りを確認して楠さんがいないことを確認させていただきます……。……。うん。向こうの方で話しているね……)

沼田君は、楠さんのように『平等に親切』のお面をかぶっている訳ではなく、根っこから平等に親切。(……。ご、ごめんね楠さん……。少し悪口を言ってしまった……)

明るい性格で、一緒にいる人をいつも笑顔にしている。

当然モテる。モテまくりだよ。

一説によれば毎日二人のペースで告白に来るらしい……。多分、それは嘘だけど。

これだけ凄いのに、一切調子に乗らない。調子に乗ってもよさそうなのに、調子に乗らない。すごい。

みんなに優しく、みんなに好かれ、みんなの笑顔を作れる沼田君。

……。でも、僕はほとんど話したことがない……。

だ、だって、こんなすごい人となんか話せないよ。僕なんかが話しかけたら、沼田君のイケメンオーラが散ってしまうよ。そんな罰

当たりなことできないって。

……ああ、憧れてしまう。

僕は雛ちゃんのお兄さん、國人君にも憧れているけれど、沼田君にも憧れている。

二人が似ている訳ではないけれど、二人に憧れている。

二人とも、『男』っていう感じがするね。

僕も男らしくなりたいよ。

少し自己嫌悪中です……。

僕が自己嫌悪になっていようがいまいが、そんなのお構いなしにチャイムが鳴り先生がやってくる。

「席につけー」

先生が教室に入ってきた。

あ、まだ朝だったんだ。

先生が教壇に立ち、教室を見渡す。

「……全員来てるな」

僕も一応全体を眺めてみる。うん。全員いるね。

先生が全員いるのを確認した後、今日の連絡事項を伝えだした。

「今日の四時間目はロングホームルームだ。そこで、今日はずっと決まらなかった副委員長を決めようと思う。その時に話し合いを早く終わらせられるように、お前たちの間で大体決めておいてくれ。決められなかった場合、俺が勝手に任命するからな。……まあ、決まらないだろうけどな」

副委員長。文化祭へ向けて忙しくなる楠さんを傍でサポートする仕事。男子全員が狙っているよ。あ、僕以外だよ。

「じゃあ、よく考えておけよ」

先生が教室を出て行った。

副委員長か……。まあ、僕には関係ないけどね。

信頼度

数学、英語、古文と終わり、いよいよ四時間目のロングホームルーム。LHRだね。

今日の話し合いは副委員長について。誰が楠さんをサポートするのがとうとう決まる。これまで誰も一步も譲らなかったから、多分、先生が決めることになるんだろう。

チャイムとほぼ同時に担任の先生がやってきた。

「席へつけー」

いつも同じセリフで教室に入ってくる先生。

楠さんの声で起立礼。

みんなが着席する。……決戦の火ぶたが切って落とされた。

「えーっと。それで、誰が副委員長をするのか決めたか？」

みんな無言。

「えーっと、じゃあ、やりたい奴」

先生の声に男子全員が手を挙げた。あ、僕以外だよ。……と、思っただけで、沼田君も上げていなかったから、僕と沼田君以外だね。

「あー分かった分かった。手を下ろせ。やっぱり男子全員だな」

え、僕と沼田君は上げてないよ。

「じゃんけんでもくじでもいいが、それじゃあいい文化祭は作れな

いからな。やっぱり、俺がふさわしいと思う人間を指名したいと思う。それでいいよな」

教室内の空気は「まあ仕方ないか」と、それを受け入れた。でも、大体誰が指名されるか分かるよね。

「じゃあ、そういうわけで――」

こんなの、当然。

「――沼田」

沼田君に決まっているよ。

「え、俺っすか？」

「ああ、沼田にお願いしようと思う」

悔しがっている生徒も大勢いるけれど、でもその人たちも「まあ、最初から分かっていたし……」とあきらめがついているようだ。クラスの雰囲気はもう沼田君が副委員長になるのを認めていた。

「沼田ならうまくやるだろう。じゃあ、沼田。頼んだぞ」

すごいや！ 楠さんと沼田君の完璧コンビだ！ 一体どんな文化祭になるんだろう。楽しみでしかたないや！

沼田君が先生の指名を受けて、ぽりぽりと頭を掻きながら苦笑いで言った。

「俺、あんまりやりたくないんですけど……」

「「「「「「「「……え?」「」「」「」「」

教室中が、あっけにとられた。当然僕も。

「……いや、でも、お前以外に適役はいないぞ。どうして嫌なんだ?」

「え、だって、部活ありますし。そもそも、俺やりたいてって言ってませんし」

教室中がざわめく。自分にチャンスが回ってくるかもしれない……! と、思うことよりもまず沼田君が断ったことがみんなに衝撃を与えた。

全員どこかで分かっていたから。

沼田君と楠さんなんだろうなーって。

でも、本人が、見事に拒否をした。

「ぬ、沼田? でもな、お前以外には、みんなをまとめられる人間いないと思うんだがな?」

「いやー、楠さんだけで充分っすよ。それに、俺以上の適役がいると思うんすよね」

「沼田以上の適役? ……ああ……なるほど……。じゃあ、沼田が指名した奴が副委員長だからな。異存はないな」

教室全体が頷く。そしてみんなちらちらと小嶋君の方に視線を送っていた。

きっと、そうだね。男子ナンバーツの小嶋君なら、男子をまと

められると思うし楠さんとも仲良くできると思うな。

小嶋君も分かっているのか、とてもいい笑顔で胸を張って沼田君の使命を待っていた。

「じゃあ沼田。指名してくれ」

「はい。俺は佐藤がいいと思います」

沼田君の指名を受けて小嶋君が立ち上がった。

「えー、しょうがねえなあ……沼田が言うなら俺が……って、は？」

「よし、沼田が言うのならしょうがない。小嶋が……って、は？」

「「「「「「……は？」」「」「」「」「」

教室中が、疑問に満ちた。当然僕も。いや、僕は誰よりも疑問に満ちているね。今この瞬間、僕は世界中の誰よりも疑問を抱いていると自信を持って言えるよ。

「……………は？」

だから僕は、みんなからの視線に、一言だけ返した。それしかできなかった。

みんなより早く我に返った先生が沼田君に聞く。

「あー、沼田？ いい間違い、だよな？」

「え？ いえ？ 佐藤が適任だと思いますけど」

「……こほん。えー、沼田？ 文化祭は、一年に一回、合計三回あるわけだが、高校一年の文化祭は、一回しかないんだぞ？ それを、佐藤なんかに任せていいのか？」

う……。本当のことだけど、なんだか悲しいよ……。

「任せられると思うから佐藤がいいって言ったんですけど」

「……ごほんごほん！ 沼田？！ 落ち着いて考えてみる！ 沼田がやった方が、文化祭が楽しくなると思わないか？！ 佐藤もそう思うよな！」

「あ、は、はい」

本音。クラスのみんな、当然そう思ってるよ。

……沼田君以外は。

「先生、よく言ってるじゃないっすか。部活をしていないのは佐藤だけだから佐藤頼むぞって。時間が一番とれるのが佐藤なんだから佐藤が適任だと思ったんすけど、ダメっすかね？」

「……えー、あーいや……。でも……佐藤、か？」

みんなから視線をもらう。僕は慌てて机を凝視した。

「……ほら、佐藤だってやりたくなさそうだし、無理にやらせなくても……」

「え？ 佐藤、嫌なの？」

「え?!」

突然沼田君に問いかけられた! き、緊張しちゃうよ! そもそも話しかけてきたのが沼田君じゃなくてもこの状況なら緊張しちゃうよ!

「え、いや、僕、その……」

「佐藤! 嫌だよな!」

先生が力強く言ってくる。

「は、は、はい……」

同意させられてしまった……。でも、嫌だし、これはありがたいね。僕やりたくないし、まとめられるはずないもん。

僕は、顔を伏せ拒否の体勢をとった。これで、大丈夫だね。

それを見てかどうかは、顔が見えないからわからないけれど、沼田君が残念そうに言う。

「そっか……佐藤したくないのかー。佐藤が適任だと思うんだけどなあ。なら――」

ふうー……。無事に、回避、できたかな?

安心してた僕だったけれど。

最後まで、何が起こるか分からないのが、LHRらしいよ……。誰かの声が僕の安心を壊す。

「ちょっと待てよ」

誰だろう？ と、伏せていた顔を上げてみる。

小嶋君が呆然と立ち尽くしたままだけど、今の声は違うね。じゃあ、誰だろうかと教室を見渡してみると、教室の後ろの方にもう一人立っている人物を見つけた。

雛ちゃんだった。

「おい担任。お前、いつも無理やり優大に仕事やらせてるじゃねえか。副委員長も無理やりやらせろよ」

雛ちゃんが、格好良く、立っている。

「……それとこれとは話が違うだろう」

「違わねえよ。なんで雑務は嫌がる優大にさせるのに、こういうオイシイ役を優大にやらせねえんだよ」

ひひひひ雛ちゃん?! 雛ちゃんは、僕の、味方なの?! 敵なの?! どっちなの?! 僕やりたくないんだよ!?

「あのなあ、こんな大切な役、佐藤に勤まるわけないだろう?」

「てめえ優大を馬鹿にしてんじゃねえよ!」

「な、なんでお前がキレルんだ!」

「あつたりまえだろう! 友達なんだから! ……ともだち……で
すから……」

急に落ち込んだ! どうしてだろう!

「友達なのは分かったけどな、この仕事はクラス全員に関わる仕事なんだぞ？ 佐藤には荷が重すぎるだろ」

「んなのやってみねえと分かんねえだろ！」

「分かるだろ。無理無理」

「て、てめえ……！」

た、大変だ！ 雛ちゃんが爆発寸前だ！ どうしよう！

「俺は佐藤ならやり遂げられると思うけどなあー」

一触即発の教室に、沼田君の声。

爆発寸前だった雛ちゃんも、絶対否定派だった先生も沼田君を見る。沼田君は続ける。

「だって先生から任せられた仕事ちゃんとしてるし、文句の一つも言わないし。こんな責任感のあるやつ、佐藤以外にいないと思うけど」

雛ちゃんの顔が一気に明るくなった。

「沼田……。お前分かってんじゃねえか！ そうだよなあ！」

先生の顔が一層暗くなった。

「沼田……。お前何もわかってないな。そうじゃないんだ」

「てめえ担任！ どういうことだよ！」

「あのな、佐藤に仕事を頼むと、いつも『暇じゃないんで』って言うって断ろうとするんだ。それを俺がやらせているからやるだけで、責任感とは無縁の人間なんだぞ佐藤は」

……。僕、死んでもいいかな。

「てんめえ……！ 勝手に優大に仕事を押し付けておいてその言いぐさはなんだよ……！」

「本当のことだから仕方がないだろう。なんだっけか？ ご飯を作らなきゃいけないからとか、そんな言い訳をしていたな。そんなことあるわけないだろう。なんで佐藤が家族のご飯を作らなきゃいけないんだ。すぐウソついて逃げようとするんだ」

う、嘘じゃないのに！

ちよつと、本気で涙が出てきちゃった……。

「先生」

沼田君でも雛ちゃんでもない声が聞こえてきた。今度は誰だろうか、涙目で見てみる。

「先生。佐藤君は自分でお弁当作ってきているみたいですよ」

楠さんだった。

「両親が共働きらしくって、できる事は自分でやっているようです。なら晩御飯作っていても不思議ではないはずです」

「……それが本当かどうか分からないだろ？」

「独り言で早く帰らなきゃいけないって言ってましたから、暇じゃないというのは多分嘘ではないかと」

「……そ、そうか。でも、な」

「それに私も佐藤君が適任だと思います。佐藤君なら、私の命令を……じゃなくて、私の指示をよく聞いてくれますし、一番効率がいいです」

「……………」

先生が黙った。

う、う……。僕、とっても嬉しいよ……。クラスのトップスリーがみんな僕の味方だなんて……。

でも僕、副委員長したくないんです……。……。

うーん、と、唸っていた先生が顔を上げ、汗を飛ばしながら提案した。

「……じゃ、じゃあ、こうしよう。佐藤に決めてもらおう。うん。そうだ。みんなが信頼している佐藤に決めればいいだろう？ 自分でやるのもいいし、誰かを指名するのもいい。うん、いい考えだな」

「はあ？ てめえ何言って――」

「佐藤！ それでいいよな！」

「え、え？」

「自分でぜひやりたいの言うのなら、自分でやってもいいし、誰か他の奴が適任だと思ったら、そいつを指名すればいい。な？ それでいいよな？」

「……はあ」

楠さんが呆れていた。

「んなの自分がやりたいなんて言うわけねえだろ！」

雛ちゃんはキレていた。

「まあ、俺はそれでいいと思うけど」

沼田君は納得していた。

「よし、佐藤！ 指名してくれ！」

え、あれ？ いつの間にか僕が指名することになってる！ 僕了解してないのに！ っていうか、僕、ここまですりゃな発言してないよ！ なのに問題の中心になっちゃってるよ！ なんだこれ！

「さあ。佐藤。早く指名してくれ」

僕がやるんじゃないくて、指名することは、決定なんだ。やりたくないから、いいんだけど……。

僕は誰がベストなのか教室を見渡してみる。みんな僕に注目していたけれど、一番目についたのはずっと立ちっぱなしだった小嶋君だった。小嶋君が、僕を睨み付けていた。

眼力で訴えている。「俺を指名しろ……」と。うう……怖いよ……。

「ほら、佐藤。早くしてくれ。早く誰かを指名してくれ」

急かす先生。う、うう……ゆっくり考えさせてよ……。

ううん。考えるまでも無いよ。この状況で、誰を指名しなきゃいけないかは決まってる。僕の命がかかっているんだからね。

「あ、あの……僕は……」

きつと、みんな納得してくれる。この選択以外無かったって。

「僕は……」

怒られるのは、怖いからね。

そして僕は、みんなの視線を一身に受けて言う。

「僕は、有野さんがいいと思います」

「「「「「「「………は？」」「」「」「」「」

全員が、僕を馬鹿にするような目で見てきた。や、やめてよ……。そんな目で見ないでよ……。

「……あー、佐藤？ 男子で、だぞ？」

「え？ で、でも、副委員長は男子って決まっている訳じゃないですし、その、有野さんがやれば、多分、みんなまとまると、思うん

です、けど……。楠さんと有野さんの二人なら、です」

僕が雛ちゃんを選んだ理由を聞き、クラス中から「ああ」と納得の声が聞こえてきた。よ、よかった。これでみんなに怒られなくて済むね。

……でも、一人だけ激怒していた。

「……てめえ優大コラ。仕返しかよ……！ 自分が副委員長に推薦されたことがそんなに気に入らなかつたのか？」

とっても怒っていた！ 優しい雛ちゃんの顔じゃない！ 普通に怒ってるよ！

「ち、ちち違うよ？！ 仕返しとかじゃなくて、ほ、ほんとに、雛ちゃんがやった方がいいと思ったから！」

「てめえみんなの前で雛ちゃんとか呼ぶな！？」

雛ちゃんの顔が真っ赤になった。な、なんだか、僕も恥ずかしいけど、幼馴染なんだから、いいよね。

「あー。じゃあみんなも納得したみたいだし、副委員長は有野で」

「はあああああ？！ なんで私がしなくちゃいけないんだよ！ 男どもやりたがってたじゃねえか！ 私はしたくねえよ！」

熱い雛ちゃんの心に対して先生はとっても冷めきつた心。もう先生の中では決まっているみたい。

「いやあ、でも、かなりいい落としどころだと思うけどな。俺の推

薦した沼田が拒否して、沼田が推薦した佐藤が嫌がって、佐藤が推薦した有野がやる。しかも、クラス全員それで納得しているし、かなりいい選択だと思うな」

「私の意志が一切入ってねえよ！ 沼田と優大の拒否が認められて私の拒否が認められないのはなんでだよっ！」

「いやあ、みんなも有野がいいと思うよな」

みんなが無言で頷いていた。

男子達は自分以外の男子がするくらいなら女子がした方がいいだろうと思っているし、女子達は色々と思うところがあるだろうけれども最終的には雛ちゃんがするのが一番いいと思っているのだろう。多分このまま嫌がる雛ちゃんに決まってしまうだろう。これで決まらなければきっと一生決まることは無いと思うよ。

でも、このまま決まったら僕、絶対に雛ちゃんに怒られるね。ものすごく睨まれているし、僕の命はもうないのかもしれないよ。

「……。ああ、分かった。分かったぜ担任。やってやろうじゃねえか！」

「おお、やってくれるか。助かるよ。いい文化祭になるな」

「ただ！」

雛ちゃんにはまだ何か言いたいことがあるらしく、机に手を突き先生を睨み付けていた。

「どうした？ 何かあるのか？」

「……やってやる、面倒くせえけど引き受けてやる……！ けど、その代わり――」

思いつきり机をたたいた後、僕を指さしてきた。

「優大も道連れだ！ あいつも副委員長だ！」

「……。……えっ？！ ええっ、ななななんで？！」

「もとはと言えば優大のせいじゃねえか！ お前も苦い思いをしろ！」

「え、ええ！？ で、でも、先生も、僕が副委員長するの嫌ですよ？ そもそも、副委員長は、一人ですよ？」

「え？ いや？ 二人ですればいい」

何それ！ さっきまであんなに嫌がっていたのに！

「く、楠さんは？！ 副委員長が二人もいたんじゃあ邪魔なんじゃないかな？！」

「私は全然いいよ。むしろ、便利がいいかな」

……。

まあ、そうだよ。有野さんがいるんだから、ほかに副委員長が増えたところで、問題が起きるわけないよね。多ければ多いほど、便利だよ。

……だから、誰も、拒否、しそうに、無いですね。

「じゃあ、そう言うわけで――」

そう言うわけで、僕は、いろいろな人からの恨みの視線を貰いながら、副委員長になりました……。

ロングホームルームは、最後まで何が起こるか分からないみたいです……。

平凡な人生の終わり

「まさか君が副委員長になろうとはね」

ロングホームルームが終わってすぐに楠さんに連れてこられた屋上。

教室を出るときに受けた男子全員の視線が非常に痛かったです。おまけに雛ちゃんもめちゃくちゃ睨んでました。怖かったです。

「僕もこんなことになるとは思いませんでした……」

昨日のように、二人屋上の端に腰掛けお弁当を食べる。

「他の男子がするより、佐藤君はコントロール効く分よかったけど。それにしても、有野さんね……」

「え、やっぱり嫌なの？」

「やっぱりって何。嫌だなんて言っていないでしょ」

「あう、ゴメン……」

「君は今までそう思ってたんだね。私が有野さんのことを嫌っているって。嫌ってないって言った私の言葉を信じていなかったんだね」

「そう言うわけじゃないよ！　なんだか意味深な言い方だったから気になって……」

「ふーん。まあ、いいでしょう。信用してもらおうだなんて思っていないし。私と君の間に信頼関係は必要ないもんね。大切なのは主従関係」

「う……。僕召使なんだ……」

「なんで人なの。おこがましいよ」

「え！ 犬ですか!？」

「……」

……？ あれ？

「ぼ、僕、犬扱いなの？」

「……」

あれ……。無視されるよ……。

「そ、その……」

「……」

聞こえてないのかな……。……そんなことあり無いよね……。

「……あ、の……」

……今話しかけたらダメなのかな……。ものすごく寂しい不安に襲われ始めたところで、やっと楠さんが

声を出してくれた。

「知ってる？」

「え、な、何が？」

「犬の無駄吠えはね、無視するに限るの」

「えっ、今僕しつけられてたの?!」

「……」

……うう……。

「そんなことより、有野さんが副委員長になったことだよ」

「あ、そうだったね」

「君はどういった目的で有野さんを推薦したの？」

「え、僕は一番いい人を選んだだけだけど……」

「ふーん？ 他意はないと？」

「他意はない、です……」

そもそも、他にどんな他意が想像できるんだろう。

僕の頭の中が読まれたのか、楠さんが教えてくれる。

「たとえば、君は私と有野さんが仲が悪いと思っているようだし、

それを何とかしようと二人を近づけた、とか」

「あ、なるほど……」

「……別に誰でもよかったんだけどね……。でもまさか有野さんと君になるとは思わなかったよ。特に有野さん。絶対副委員長は男子になると思ってたんだけどね」

僕もそう思っていました。

「女子と女子もどきが副委員長になる未来は見えてなかったな……。残念」

女子もどきって、僕、だよ……。うう……。男子にカウントされていないって、すごく悲しい。

「佐藤君！」

落ち込む僕を見て、楠さんがみんなの前で使う可愛くて聞きやすい声で声をかけてきてくれた。

「佐藤君、この程度のことで落ち込まないで！ まけちゃダメ！」

「く、楠さん……」

なんて優しいんだろうと、感涙にむせびなこうと思ったら。

「目障りだから」

喜ぶ僕を見て、楠さんが僕の前で使う可愛いけれど感情のこもっ

ていない声で突き放してくれた。
ありがとうございます。

「それで、話の続きなんだけど」

「え、うん」

「少し前ね、兄とファミリーレストランに行ったの」

……さっきの話と全然関係ない話だけど……違うよって注意しなくても……いいんだよね？

「タミフルみたいな名前のお店」

「うん分かった」

「そこで面白いことがあってね」

……今自分でハードルを上げたね。

「私と兄が入店して、席に案内されただけど、私達にあてがわれたボックスの隣のボックス席に学生と思しき三人組が座っていたの」

「うん」

「私たちの席から遠い方のサイドに、私達が案内されている姿が見える奴が一人いたの」

「うん。一人は楠さんたちに顔を向けていて、残り二人は楠さんたちに背を向けているんだね」

「そういうこと。その私の顔を見た男をA、背を向けている二人のうち通路側の男をB、残りをCとするね」

「う、うん……」

世間話でA B Cのキャラ分けが必要だなんて、いったいどんな話なんだろう……。

「Aは私の顔を見て、すごく気持ちのいい気持の悪い笑顔を作ったの」

……どっち？

「私は可愛いから、見ればそう言う反応もしたくなるし仕方がないけれど。でも気持ち悪いから私はAの顔を見なくて済むようにそいつに背を向けるように、B Cと背中合わせになる方に座ったのね」

「うん……」

この時点でなんだかAさんがかわいそう……。

「席についたと同時に兄がウザい話をしだしてね。興味のかけらも湧かない私は暇だったから背中の方から聞こえてくる話を盗み聞きすることにしたの」

「え?!」

「なに」

「え、いや、なんでもないです……」

この前、楠さん、電車内の携帯電話についての話の時に、「盗み聞きするのもよくないと思うし」って言っていたけれど……。今、盗み聞きすることにしたって……。

「言いたいことがあるなら言ってよ。そういう約束でしょう。ばらすよ」

「あ、えっと、その……なんでもないです……」

「……ばらされたいみたいだね……」

「ほ、本当に、何もないの！ 気にしないで！ 僕、楠さんの話の続きが聞きたいなあ！」

「……………まあ、いや。それで、後ろの話に聞き耳を立てただけだね、そこで思いもよらない話を聞いたの」

「思いもよらない話……」

一体、どんな話なんだろう。

「すごい話と言うより、話している人の感性に感心したっていうこと」

「どんな話だったの？」

「最初はね、くだらない話ばかりしていたの。下世話な話。あーはいはいって思ってたんだけど、Bが何の脈絡もなく『俺さあこの前、

親指を結構広い範囲でやけどしちゃって』っていう話をしだしたの。どうせまた『こんな傷を負う俺すげえ』みたいな話なんでしょうって呆れていたんだけど、全然違ったの」

「どんな話だったの？」

「Bはね、そのやけどの傷を『子供のようだ』って言ったの」

「こ、子供？」

よく分からないや！

「Bがね、『このやけどができた時、すごく痛い思いをした。それからしばらく痛みが続いて、それが終わったら急に痛みが引いたんだ。でも、安心していたら突然やけどがものすごい痛みを発しだして、それを我慢してしばらくしたらまた痛みが治まって。それを繰り返して、今はもうほとんど痛くない状態。これってさ、子供を育てることと似ているんじゃないかって。産むのに激痛を伴って、手にかかる時期を何度も乗り越えて、やっと落ち着いて。もうすぐ俺のやけどは独り立ちだ。俺は快適な老後を過ごせるというわけなんだ』。そんな内容の話をしたの」

「そ、それは、すごいね」

「まさか傷を子供に例えるなんてすごい感性を持っているでしょう。確かに言われてみればそうなのかもって、珍しく相手が男なのに感心させられてさ。しかもそのあとBが『俺、このやけどに名前つけたんだ』って言ったときには思わず吹き出しそうになったよ。さらにその名前が、空から降る『雪』に茉莉の『莉』で『雪莉』だって、『ユキリ』。なんでその名前なのかなって、少し考えて、『湯きり』

だって気づいたときにはもうおかしくて仕方がなかったよ」

「それは楽しいね。すごい人に出会ったね」

面白い人がいるなあ。

面白くって、すぐくって、僕は笑った。

「いや、まだ笑いどころじゃない」

「えっ?!」

あれ?! 面白かったのに?!

「Bがその話をしている間、私の顔を見て一目ぼれしてしまったAが、明らかに私を意識した面白ツツコミをしようと元気に空回りしているところが滑稽で面白かったっていう話」

「……」

やっぱり、最終的にAさんがかわいそうという感想で終わった。

「なんなの? Aが面白いツツコミをしたところで私はAなんかに興味を示さないよ? それでも頑張る男の子ってなんなの? 興味があるならそっちらから話しかければいいじゃない。なんで、面白ければ私のほうから話しかけるはず、とか思えるの? そんなのあり得ないでしょ」

「う、うん……」

僕はよく分からないけれど……。

「興味のない男に話しかけたりなんかするわけないじゃない」

「そ、そうだよね」

怒ってるよ……。どうやってなだめればいいんだろう……。

「あ、そう言えば、君料理するんだっけ？」

「え？ うん」

あれ、また話が変わった……。もう怒ってないのかな。よかった。

「オーブントースター本体にさ、温める目安って書いてあるでしょ？」

「うんあるね。トーストとか、グラタンとか、おもちとか」

「私の家にあるトースターはね、トースト二分、クッキー三分、焼きもち四分、冷凍ピザ四分、グラタン八分、冷凍フライドポテト十分って書いてあるの」

「すごいね。全部覚えてるんだね」

「あんなのパツと見ただけで勝手に頭に入ってくるでしょ」

……。僕には無理です。

「おかしくない？」

「え、え？ パツと覚えられない僕が？」

「そんなのはどうでもいい」

「……ごめんなさい」

「私が言っているのはその表記の統一性のなさ」

「え？ ……何か、おかしいかな……」

「おかしいでしょ。トーストは完成形でしょ？ 完成前は食パンね。焼きもちも完成形。でも、冷凍ピザと冷凍フライドポテトは温める前の完成前。完成形と完成前のものが混同しているっていうのはどうなの？」

Aさんの話から変わったけど、結局最後に怒ることは変わらないんだね……。

……オーブンの表記に統一性がない、かあ。でも……。

「う、うん……」

少しもやもやするところを残しながら、とりあえず頷いてみたけれども、

「何？ 言いたいことがあるなら言って言って言ってるでしょ！」

お、怒られた！ 怒鳴られた！

「あ、あ、あの、僕は、その、購入者の為を想って、分かりやすさを優先した結果だと思います！」

「分かりやすさ？」

「は、はい……」

「……」

楠さんが空を見上げて考えている。

その間に僕はドキドキを抑え込もう。あー、怖かった。

すぐに僕の方に顔を戻す楠さん。もうちょっと考えてくれてもよかったけれど。

「……確かに、混ぜた方が分かりやすいかもね。パンより、トーストの方がわかりやすいし、ピザより、冷凍ピザの方がわかりやすいもんね」

「そ、そう、だよね」

「なるほど。別に統一する必要もないし、それなら分かりやすい表記の方がいいよね」

「うん、うん」

「あれは私達の為を想ったメーカーの粋な計らいだったわけだね。ああ、疑っていた私が恥ずかしい」

ふー。よかった。もう怒ってないね。

「そう言う優しい見方ができる君ならば、もしかしたら、私の抱えている悩み、解決できるかもね……」

楠さんの悲しげな視線が屋上の地面を滑る。

「え、悩み……?」

楠さんが抱える悩み? ……もしかしたら、みんなの前でいい人を演じている理由なのかもしれない。きっと、何か深い理由があるんだ。でも、僕なんかに解決できるのかな……。む、難しいよね……。

地面をさまよっていた視線を僕に固定する。

「……あのね」

「う、うん!」

解決できようができまいが、僕にできる事は何でもしよう!

「佐藤君、四元徳って知ってる?」

「……四元徳? ちょっと、分からない、です」

「人間が備えるべき四つの徳だということなんだけど、その四つが、正義、知恵、勇氣、節制なの。聞いたことない?」

「……ありません」

「だろうね」

も、もしかして、一般常識なのかな……。

「その四元徳は、『国家』に当てはめたりするらしいんだ。いわゆる哲人政治。理性のある人間が国を治めることによって、軍人は勇気をもって国を守り、市民階級——まあ、私達でいいや——私たちは節制をするようになるらしいの。正義の独裁政治と言えбайいかな」

「へえ……。そうなんだね」

初めて聞いたよ。

「いやいや、ちょっと待ってよって、思わない？」

「え？」

「なんで私たちが節制しなくちゃいけないの？」

「え、え？」

「これじゃあまるで私達だけが節制しなきゃいけないみたいじゃない。まずは理性のある哲人様が節制してよ。そうしたら見習うから」

「そ、う、なのかな……？」

「君はそう思わない？　いくらいい政治をしてくれても、上がやらないことを下に求めてもらってもって」

「う、うん……」

「私の解釈が間違っているのかもしれないけれどね。君はどう思う？」

「えっと、その」

……正直に言えば、何とも思いません……。だって、よく知らないんだもん……。

「……はあ、君でも私の悩みにこたえることはできなかったか……」

「ご、ごめん」

「……。全く、佐藤君は役に立たないね」

「ごめんなさい……」

「……。ふうー……」

疲れたのか、膝の上の弁当箱を両手で包み大きく息を吐いた楠さん。

「……早く食べ終わってよ」

「え、あ」

まただ！ また楠さんの話に夢中でお箸を動かしていなかった！でも楠木さんのお弁当箱は空っぽだ。いつの間に……。

「あの、別に、僕を待たなくても、帰りがかったら帰ってもいいと思うよ？」

「なに？ 邪魔だって言いたいの？ 急かすなって？」

「そ、そんなこと言わないよ！ もちろん、隣にいてくれるのは嬉しいけど、待たせるのは悪いから……」

「そう思うなら早く食べて」

「あ、そうだね」

僕は箸を動かした。

……。何で待ってくれるのかな。

「……」

僕はまじまじと楠さんを見つめる。

「なに？ 箸を咥えながら私を眺めても私は食べられないよ？」

「え、あ、ち、違うよ」

じっと見つめるなんて、失礼だね。

「えっと、その、聞いてもいいかな」

「この前も言ったけど、内容も何も聞かされないでそんなことわかれてもうなずけるわけないでしょ。何を聞きたいのかを最初に言つてよ。佐藤君のそれ、絶対にいい事じゃないよ」

「あ、ごめんね……。あの、僕を待ってくれる理由を聞いてもいいかな……」

「……で、それを聞く……」

「い、嫌なら、別に言わなくても……」

言いたくないことだったのだろうか。

「言うよ。大した理由じゃないけど」

「ありがとう」

「佐藤君が草むしりをしてる時に、私先に帰っちゃったでしょ。あれ、すごく申し訳なく思ってたからさ、どうやって償おうか考えていたの。そこで、一人寂しそうにご飯を食べている佐藤君に気づいて、一緒にご飯を食べてあげようって。別にこれはただの自己満足だし、償いのつもりだから感謝とかしないですよ」

僕なんかの為に、ここまでしてくれるんだ……。優しいね、楠さんは。

「ううん。僕、嬉しいからお礼言うよ。自己満足とか、償いとか、関係ないよ。ありがとうって言いたいから、ありがとうっていう。本当にありがとう楠さん。おかげでお弁当がおいしく食べられたよ。やっぱり一人で食べるより誰かと食べた方がおいしいね」

「……。そう」

僕の答えが気に入らなかったのか、楠さんが口をとがらせ空のお弁当箱に困惑のまなざしを注いでいた。

「あ、あの、楠さん？」

気になり、声をかけてみたけれど、楠さんからそれに対する反応をもらうことはできなかった。

「……」

仕方がないので、僕は急いでご飯を食べることにする。それが一番だからね。

「ねえ、佐藤君」

「え？」

ウインナーを口に入れようとしたタイミングで話しかけられた。僕はウインナーをつまんだまま楠さんを見る。

「佐藤君、その性格を少しだけ変えたら人生楽しくなると思うよ」

「え？ え？」

空の弁当箱を弁当袋にしまい楠さんが立ち上がった。

「その、どういふこと……？」

僕を見下ろす楠さん。その眼はいつもより暖かい、気がした。

「目障りだから卑屈な性格を矯正してって言ってるの」

全然暖かくなかった！

「う、うん……。ごめんね……」

「……。じゃあ、私戻るから。ここでご飯食べる理由がばれちゃったら、もうここじゃあ食べられないね。明日からはまた一人で食べてね」

「う、うん……」

「じゃあごゆっくり」

屋上から去っていく綺麗な黒髪を眺めながら、僕は心に生まれた半透明な疑問の正体を懸命に探った。

——楠さんが屋上を出て行き、一人取り残された僕もお弁当を食べ終え教室に戻った。

そこから僕の人生は激変していく——

銀色

結局心の奥底に感じた混濁した疑問の実態をつかみきれないまま、僕は教室に戻った。

教室の扉を開け自分の席に向かっている途中、僕の歩く通路に誰かが立ち塞がり進行が妨害された。

「？」

誰だろうかと顔を上げてみる。

腰に手を当て僕を睨み付けるように立っていたのはメガネをかけ、髪を銀色に染めた女子。

楠さん、雛ちゃんに続く第三位の位置にいる前橋さんだ。

長い銀色を一度振り、また僕を睨み付ける。

「……あの……。何か、用？」

僕と同じくらいの背だけれど、僕を見下すように顔を上げ睨み付けているので妙に上から睨まれている気分だ。

「用事があるから君の前に立っているんです。ちょっとついてきてください」

そう言って、颯爽と教室を出て行った。

僕は訳も分からず後を追いかけた。

前橋さんはどこか落ち着いたところで話したかったようで、僕を最寄りの空き教室に迎え入れるとすぐに鍵をかけて入口を封鎖した。……出口を封鎖したのかもしれないけれど。

鍵をかけすぐに僕の方を振り向き、苛立たしげに顔にかかったメ

ガネをかけ直した。

「君は有野さんの何なんですか？」

「え、え？」

何を言っているのかよく分からない。

「どう言うことでしょうか……」

「君と有野さんの関係を聞いているんです！ さっさと教えてください！
さいこの野郎って言いますよ？！」

それは、もう言っているのと変わらないんじゃないかな……。

「殴りかかる振りをしてもいいんですか！？」

振りなら、別に構わない気もするけど。

「えっと、僕は、雛ちゃんと――」

「それです！」

前橋さんがグイッと距離を詰め僕の鼻先に指を突きつけてきた。

「え、え？！」

どれ？！ まだ何も言っていないけれど！

「なんで有野さんを雛ちゃんなんかと呼んでいるんですか！ 私も

呼びたいのに！」

「それは、僕が幼馴染だから……」

「羨ましい！」

メガネの下の目が威圧的な光を放った。

「えっと……」

「私だって名前で呼びたいんですよ！」

そう言いながら僕のほっぺたを両手で抓ってきた。

「い、痛いです……！」

「こうやって暴力を振るってしまうほど憎たらしい人ですね！」

暴力と言えるほどつらい仕打ちでもないけれど……。

「いったいどうやって幼馴染になったんですか？！」

「う、生まれた時から……」

「才能だって言いたいんですか？！ 生意気ですね！」

「ち違うよ！ 運が良かったなあって！」

「私だって有野さんの事を『雛ちゃんっ』とか『雛さま』とか呼ぶたいのに、有野さんがやめろって言うから我慢しているんです！」

それなのに君は！」

頬の肉をつまんだまま両腕を思いきり広げる。

「痛い！……い、痛いよ、前橋さん……」

「うう……。有野さんのバカ……」

痛がる僕に何の関心も示さず、メガネをはずしてハンカチで目を拭っていた。

「あの、その……ごめんなさい……」

僕の謝罪を聞き、ものすごい勢いでメガネをかけて僕を睨み付けてきた。

「仲が良くてごめんなさいざまあみろって言いましたね!？」

「言ってませんけども!？」

「ぐ、ぐぐぐぐ……! まさかあなたのような男にバカにされるとは思ってもみませんでした!」

「バカにしていません!」

「……許しませんからね? 私から有野さんを奪ったら酷い目に遭わせる気になりますよ?」

酷い目に遭わせる気になるっていうのは、酷い目に合わせるっていうことじゃないんだよね?

「ぼ、僕は、前橋さんから雛ちゃんを奪おうだなんて、考えてないよ？」

友達が取られたくないっていうことかな。でも、友達はとるとか
とらないとか、そう言うものではないと思うよ。

「……勝者の余裕ですか？ ……私が寛大な心を持っていると勘違いしているようですね」

「えっと、その……」

何を言っても、僕の声は謎のフィルターを一度通ってから前橋さんの耳に入っていくようだね。

「私から有野さんを奪ったら――」

言うや否や、左手で僕の胸ぐらをつかみ逃がさないように固定し、
右手に持った何かを僕の顎の少し奥辺りに突き付けた。

何を突きつけられているかは見えないので分からないが、少しと
がった金属のような感触だった。

「――切り裂きますから」

「えい、ごめんなさい」

何を突きつけられているのか分からないし、何故こんなにも怒っているのか分からなかったけれど、とにかく謝ることしかできない
状況だった。

「注意してくださいね。有野さんが少しでも嫌な思いをしたら」

顎の奥に添えられた何かを軽く突き立てる前橋さん。そこに鋭い痛みが走り僕は顔をしかめた。

「容赦しませんからね？」

メガネを光らせ、口元に冷たい笑みを浮かべた後、前橋さんが僕を突き飛ばした。

よろめき尻餅をついた僕。視線は自然と前橋さんの右手に吸い込まれていた。

「――」

前橋さんが握っていたのは銀色の柄のハサミだった。

前橋さんの髪の毛と同じ色のハサミ。

僕は、それを突きつけられていた。

ハサミがゆっくりと開き、勢いよく閉じる。

「刺しますから」

今までは曖昧な言い方をしていた前橋さんだったけれど、これは、言い切った。

そして、前橋さんが空き教室を出て行った。

僕は昼休みが終わるまで自分の教室に帰れなかった。

校舎裏にて

前橋未穂^{みほ}さん。

銀髪ロングで身長は普通。

入学した当初は黒髪だったけれど、ある日突然銀色に染めて学校にやってきた。

それまで優等生として振舞っていた前橋さんのその行動は色々な人に衝撃を与えたが、そこまで話題になることは無かった。優等生の突飛な行動に驚きはしたものの、僕らの学校は大変自由な校風なため、髪を染めてはいけないという校則がそもそも存在しないので問題があるわけでもない。

この前の高校初めての、一学期中間テストでも普通に二番をとっていたので成績に影響が出ている訳でもないみたいだし。

ただみんな驚いただけ。

優等生にしか見えない顔つき、優等生にしか見えない佇まい、優等生にしか見えない振る舞い。でも髪の毛がすごい色。

それが衝撃だった。

でももうみんな慣れたようで今更髪の毛に触れる生徒はいない。

当然僕も見慣れたよ。

前橋さんは雛ちゃんと仲がいい。だからよく金色と銀色でセット扱いされることもあるみたい。

メガネの下には怒っているような目。雛ちゃんとは百八十度違う目。

強気な顔にまじめな性格。一見したら委員長に見える。多分これまで何度か委員長を務めてきたのだろうと思う。委員長っぽいのは見た目だけではなく、行動も委員長っぽい。楠さんがいなければ、多分前橋さんが委員長になっていただろう。

その面倒見の良さから女子達に慕われている。行動力もあり、責任感もあり、何事もそつなくこなす能力を持っている。だてにこの

凄い人たちが集まるクラスの女子三位につけている訳ではないということだね。

……ただ、男子に滅法きつい。

男子と女子とで全く扱いが違う。そのせいで、男子からの評判はあまりよくないみたい……。

もっと仲良くすればいいのになと思う。

……。僕は、うん……。嫌われているというか、憎まれていたね……。

今は放課後。

僕は昼休みに起きたショックな出来事からまだ立ち直れないでいた。

優等生の前橋さんが……あんなことをするなんて……。

「おい」

僕、何か悪い事したのかな。だから怒ってるのかな。

「おい！」

僕の机が叩かれた。

「え、なにごと?!」

驚き、机を叩いたその人を認めた。

「こ、小嶋君……」

「無視すんじゃないよ」

気が立っている様子の小嶋君が高い位置から僕を睨み付けていた。

「ごめん……」

「……ちよつと来い」

「え？」

着席したままの僕を置いて小嶋君が教室を出て行った。着いて行かなきゃ怒られちゃうね。急いで小嶋君を追った。

その十分後。僕は校舎裏の地面に呆然と腰を下ろしていた。

「……いたい」

小嶋君にお腹を殴られてしまった。そのあと倒れ込んだところ、右腕を蹴り飛ばされてしまった。痛い……。

むかつくって言っていたけれど、多分僕が副委員長に小嶋君を選ばなかったことで怒りを買ってしまったのだろう。

だから、殴られて、蹴られたんだ。

しょうがないよ。

しょうがない。

この前胸ぐらをつかまれた時以上に頭がフワフワしている。お腹も腕も痛いけれど、あまり気にならない。

夢の中にいるような。

何を考えていいのか分からない。

ぼーっと座っていた。

「てめえここにいやがったか！」

突然聞こえてきた声に飛び上がり、僕はあたりを見渡した。

「優大てめえよくも私を巻き込んでくれたな!？」

雛ちゃんだ。雛ちゃんがものすごい勢いで僕に近寄ってきた。

「なんで私を副委員長なんかにしやがったんだよ!」

雛ちゃんが、座り込む僕を睨み下ろしている。

「優大のせいでなんか大変なことになっちゃったじゃねえか……!」

「あ、ごめんね」

怒られているのだろうけれど、よく分からない。

「なんなんだよ本当にお前はっ」

「うん」

今返事をしたのかどうかも、僕の中では定かでない。

「……?」

「……」

「……お前、どうした?」

「え？　なに？」

「……なんかあったのか？」

雛ちゃんが腰を落とし座り込んだままの僕と目線を合わせる。

「え？　何にもないよ？」

「何もないわけねえだろ。どうした？」

「な、何もないって」

「お前嘘つかないって言ったじゃねえか。嘘つくなよ」

「……」

睨み付けられているようだけど、その眼はとてもまっすぐで僕は見ていられなかった。

「そ、その、心配するようなことは、何もないよ」

「……本当か？」

「うん」

「……分かった」

雛ちゃんが立ち上がった。

「私が心配するようなことは何もないんだな」

「うん」

雛ちゃんを見上げる。

その時ふと、突然お昼休みの前橋さんの一件を思い出してしまった。

「あばばばばば」

「どうした?!」

雛ちゃんが僕を心配してくれているこの状況を目撃したら前橋さんに切り裂かれてしまうのではないのでしょうか?!

「ぼぼ僕はだだ大丈夫だからあああああ」

がくがく震える膝を抑え込みながら立ち上がる。

「お前全然大丈夫じゃねえよ! やっぱり何かあっただろう!」

「ちが、違うの! これは、違うの! その、雛ちゃんが心配する
ようなことは一切ないから!」

両手を突出し否定の仕草。

「顔真っ青だぞ?! 何に怯えてるんだよ!」

「怯えてないですよ?!」

「おびえまくりじゃねえか！」

ま、まずい。不自然過ぎた！
僕は急いで話をそらす。

「その、雛ちゃんって、前橋さんと仲良いよね！？」

「……話をそらすなよ」

うぐ。

「……まあ私に言いたくないっていうんなら、別にいいけど……」

うう……。悲しませてしまった……。ごめんね……。

「んじゃま、その話に乗ってやるか。未穂と仲がいいって？ そっか？」

「え？ あれ？ いつも一緒にいるよね」

「あー、まあ未穂がついてくるからな」

「別に仲良しじゃないの？」

「仲良しに見えるならそうなのかもしれねえなあ」

「えっと……」

前橋さんとの温度差に戸惑いを隠しきれないよ。

「未穂の事よく知らねえしな」

「えっ、あんなにも長い時間を過ごしているのに？」

本当に、ずっと一緒にいたような気がするけれど……。

「入学してからこれまで優大の事しか見てなかったからな」

「え？」

それは、あの時の理由を説明するタイミングをうかがっていたってことかな。そうだよね。

「他の奴らのことはあまり気にしてなかったわ。なに？ 私未穂に気に入られてんの？」

「そ、そうみたいだよ？」

強烈にね。

「ふーん。あー、もしかしたらそれで髪を銀色にしてんのかな？」

「あ、そうかも」

雛ちゃんが髪を染めているから前橋さんも髪を染めたんだね。でも、それだったら同じ金色にすればいいのに。

「なんか悪い事したなあ。悪影響与えてるじゃん、私」

「そんなことないと思うよ」

「そんなことあるんだよ」

自分の前髪をつまみそれを見る雛ちゃん。

「……やっぱり髪染めた方がいいのかなあ？」

ちらちらと僕に視線を送ってくる。

「でも、似合ってるよ？」

「うへへへ。そうかあ？」

「うん。でも、雛ちゃんなら何でも似合うよね。絶対」

「うへへへへへ！ んだよ照れるじゃねえか！」

ばしばしと小嶋君に蹴られた右腕を叩かれた。いたい、痛いよ。

「優大の好きな色とかあんの？ あればそれにしてみるけど」

「僕の好きな色？」

うーん。空の青い色が好きだけど、そんなすごい色は髪には合わないよね。

「えーっと、あ、楠さんみたいな綺麗な黒髪も素敵だよね」

突然不機嫌な顔になった雛ちゃん。

「……」

小嶋君に殴られたお腹にパンチをもらった。小嶋君のより、痛かったです。思わず足から崩れ落ちてしまう僕。

「な、なに、するの……？」

「別に。蚊が止まってたんだよ。蚊が」

「蚊なら、そんなに、強めに殴る必要なかったような……」

「蚊との対決はスピード勝負だろ！？ 逃げられてそいつにさされてマラリアにでもなったら大変だろうが！ なんだよ、文句あるか」

「な、無いです。危険を未然に防いいただきありがとうございます」

「ならうだいうんじゃねえよ。で？ お前は若菜の黒髪が好きなんだって？」

「え、いや、その、楠さんの髪は綺麗だなあ……とか……」

「楠さんの髪『は』綺麗ねえ……。まあ？ 染めて痛んだ私の髪なんて綺麗じゃねえんだろうけどな！」

「そ、そんなこと言ってないよ。雛ちゃんの髪も、綺麗だね」

「後付でそんなこと言われて喜べるわけねえだろ！ ……そういやお前、ここ最近若菜と飯食ってるみてえだな？」

「あ、うん」

「へー。ふーん。そうですかあー。やっぱり男はみんな若菜みたいなやつが好きなんだなあ。私みたいな金髪似非ヤンキーは目にも留まらねえよな」

「ち、違うよ。そんなことないよ。雛ちゃんもモテるでしょ？」

「モテねえよこの野郎。嫌味か？」

「嫌味じゃないよ！ ほ、本心だよ！」

ところで僕はなんでこんなにも怒られているの？

「別にどーでもいいーけどー」

へたり込んでいる僕を一睨みした後、背を向けて校舎裏から去って行った。

「うう……。僕皆を怒らせてるよ……」

楠さん前橋さん小嶋君雛ちゃん……。……僕、すごい人たちを怒らせているね。みんなクラス序列の上位にいる人たちだよ。底辺の僕なんかがこれらの人たちから怒りを買うなんて愚かにもほどがあるね。

妙な感慨深さを感じながら、僕も校舎裏を後にした。

夜の自室にてパソコンをいじる。もちろんスカイペだ。

ユウ..そんなこんなで僕副委員長になったんだ。

まりも..それはすごい。信頼されているね

ユウ..違うよ。僕が暇そうな人間だったからだよ。本当に信頼されている人たちがみんな断ったから一番暇な僕になったんだ

まりも..そんなに謙遜する必要はないよ。君はいい人そうだからね

ユウ..それは勘違いだよ

まりも..そうは思わないけどね

パソコンを通じてのコミュニケーションは気が楽だよね。面と向かわないで話せるからかな？ あと電話みたいに声じゃなくて文字で会話するから気が楽だっていうのもあるんだね。

僕は電話が苦手だ。

すぐに何かを言わなきゃいけないし、それなのに相手の表情が見えないから何を言っているのか分からない。面と向かって話すのも苦手だけど、顔つき合わせて会話するのならば表情から何かしら情報を読み取れるし、メールやチャットなら考える時間があるから失礼なことを言うことも少なくなる。顔見えないし考える暇がない電

話は何よりもコミュニケーション取りづらいよね。……僕だけかもしれないけど。

スカイペって素敵。

ユウ…副委員長って何すればいいんだろう。僕みんなをまとめられないよ

まりも…まとめるのは委員長に任せておけばいい。君は君なりに頑張るだけでいいんだよ

ユウ…僕何もがんばれないよ。何もできない

まりも…君なりにさ。何もできないなんてことないだろう

ユウ…何もできないよ。僕不器用だもん

まりも…関係ないさ。頑張る気持ちさえあればね

頑張る気持ちか……。それすらも無いかも……。やりたくなかったから……。

でも、頑張らなきゃいけないんだよね……。憂鬱……。

スカイペをしていたのに、最終的にそれは嫌な気持ちをもたらしてしてきた。残念賞だよ……。

狂った木曜日

朝。学校に来た僕は真っ直ぐに小嶋君の元へ向かった。

「あ、あの、小嶋君」

「……」

「おはよう……」

「……」

「その、昨日ごめんね……。その、小嶋君を選ばなくて……」

「……」

「……あの」

がたっと、小嶋君が椅子を鳴らして勢いよく立ち上がった。

「……」

無言で僕の胸ぐらをつかんで、教室の外に連れて行かれた。

そのままトイレまで連れて行かれてお腹を殴られた。トイレの床汚いよ……。

「うぜえ」

それだけ言って僕を置いて行った。

うう……。とても怒らせているよ……。

「また謝らなきゃ」

……。

休み時間毎に殴られました。

朝から昼まで、計五回。トイレで。

「痛いよ……」

お腹をさすりながらトイレから教室に戻る。お腹をさすってトイレから出てくるって、僕がまるでお腹を壊しているみたいだね。誰にも疑われないからいいね。普通に教室に帰れるや。……そもそも僕なんかを気にする人いないか……。

「でも、これじゃあ謝れないよ……」

許してくれないみたいだよ。どうすればいいのかな……。

まず話を聞きたいのに、殴ったらすぐにどこかへ行ってしまうんだもん……。

お腹を押さえながら教室へ行く。どうしよう。小嶋君がいたら入りづらい。

扉の前で躊躇う僕。

そんな僕に誰かが話しかけてきた。

「優大。何してんだお前」

「え？」

振り返ってみると、そこに立っていたのは綺麗な金色の髪を持つ人と綺麗な銀色の髪を持つ人。雛ちゃんと……前橋さん。

「あ、その、お腹、痛くて、保健室に、行こうかなー、とか……」

「大丈夫か？ 連れて行ってやるよ」

雛ちゃんが僕の腕を自分の肩に回してくれる。が、それを見て前橋さんの顔が鬼神に変わる。

背筋が凍る。

僕は慌てて雛ちゃんから離れた。雛ちゃんが驚いたように僕を見ている。前橋さんは相変わらず鬼神。

「だだだ大丈夫ですよ！？」 雛ちゃんは前橋さんと仲良くしていいよ？！」

両掌を突出し一生懸命振る。

「無理すんなよ。ほら、行くぞ」

突き出していた右手を掴んで僕を引っ張る雛ちゃん。

前橋さんの顔は、ちよっと、言葉では、言いあらわせない、物になっていきます……。激怒と悲しみを大量に混ぜ込んだものをベースに、愛情を少し振りかけた後憎悪で蓋をし、その上にトッピングで嫌悪と不快を乗せた後アクセントとして恐怖を少し垂らした顔。

……。

とにかくすごく怒ってた。

昨日のハサミが頭をよぎり、僕は乱暴に雛ちゃんの手を振りほどいた。

「なっ……」

雛ちゃんが一瞬とても悲しそうな顔を見せて、すぐに怒った顔を作る。

「なんだよ。迷惑ってのか？」

「そ、そうじゃなくって、その、お腹痛いのは、その、ただの下痢だから……。あの、保健室じゃなくて、トイレに行けば治るから……」

「……そうかよ。ならさっさと行けよ」

「う、うん、ごめんね……」

「別に」

怒った雛ちゃんが歩き出し、前橋さんもそれに続く。廊下の少し先で、雛ちゃんの後ろを歩く前橋さんが一度こちらを振り向き、べーっと舌を出してから消えて行った。

……昨日に続いて、今日も怒らせちゃった……。謝らなきゃ……。一度大きく息を吐いて僕は改めて教室を向く。

もういいや。教室に入るのが気まずかろうがなんだろうがどうでもいいよ。入ろう……。扉を開け、一歩踏み出す。

突然だけれども僕はよく人とぶつかる。それはきつと、地面ばかり

り見て歩いているせいで前方の確認がきちんとできていないせいなのだろう。校舎内とか狭いところだとなおさらだ。よく人とぶつかってしまう。

そんなわけで今も人とぶつかってしまっ僕だった。

「あ、ご、ごめんなさい！」

慌てて頭を下げる。も、もしかして、小嶋君？ 小嶋君だったら、いやだなあ……。

「ううん。大丈夫だよ」

歌っているかのような声。顔を上げて確認するまでもなく、楠さんだ。

「す、すみません……」

一度お顔を拝見させていただき、もう一度頭を垂れる僕。

「いいっていいって。それより、佐藤君は怪我無い？」

「あ、うん。大丈夫。ごめんね、ぶつかってしまっ……」

「大丈夫だよ」

にこにこ笑っている。でもその後ろで数名の女子が嫌悪感を露わにした表情で僕を睨み付けていた。な、なんでそんな目で見るの……。

「楠さん行こう。場所無くなっちゃう」

どうやらみんなは、どこかにお弁当を食べに行くようで、一人の女子がお弁当箱片手に楠さんの手を引っ張った。

「うん。それじゃあね、佐藤君」

楠さんは素敵な笑顔を僕に振りまきながら、他のみんなは弱敵を威嚇するように睨み付けながら、僕の目の前から消えた。

僕がぶつかったのは楠さんなのに……。なんでみんなから睨まれるんだろう……。

……そんなことを気にしてもお腹がいっぱいになるわけじゃないし、ご飯を食べよう。

自分の席へ向かいながら一度教室内を見渡してみる。小嶋君はみんなと楽しそうに笑っていた。僕なんか気にしてもいない。

僕は自分の席で、一人でお弁当を食べた。

お弁当を食べた後、ライトノベルを読む。

相変わらず、とても面白い。でも何故だか集中できない。

僕は窓の外に視線をやった。

窓から見える空は、屋上で見る空よりも狭くて濁っていた。

放課後に、また校舎裏に連れて行かれてお腹を殴られた。

謝ったけれど、聞いてくれなかった。代わりにうずくまる僕の左腕を蹴り飛ばした。

理由を聞いたけれど、無視された。代わりに尻餅をついた僕の胸に前蹴りをした。

小嶋君は無言で去った。

「うう……」

尻餅をついたまま胸を押さえる。今日殴られたのは六回だ。六回殴られ、二回蹴られた。

さすがに理不尽なものを感じてくる。僕が悪いのだろうけど、理由位教えてほしい。

でも、教えてくれないし聞いてくれない。

少しだけ、涙が出てきた。

でも、ここでじっとしていたらまた誰かに見つかってしまうかもしれない。

僕は土のついたお尻と胸を払いながら立ち上がる。何度か瞬きをして涙を引っ込め、とりあえず校舎内に入ることにした。

その途中、

「佐藤君」

楠さんだ。ちょうど玄関から出て帰ろうとしていたところで出会った。

「楠さん。あの、お昼はごめんね……」

「お昼？ 何かされたっけ？ ……まさか、君私のいないところで私の椅子であんなことや私の縦笛でこんなことを……」

「そ、そんなことしてないよ！ そもそも縦笛なんて持ってないでしょ？！」

「そうだけど、君が用意しているかもしれないでしょう。君が持ってきて、私のロッカーに入れる。それを取り出して君が舐める。擬

似りコーダー舐めを体験できるというわけだよ。……この変態」

「やってないよ……」

妄想の僕を貶すのはやめてほしいよ……。

「どうだか。やってない証拠が――」

楠さんの後ろをクラスメイトの男子歩いている。その男子が楠さんに向かって元気よく別れの挨拶。

「楠さんさようなら！」

楠さんが振り向き手を振った。

「うん！　ばいばい！」

僕に話しかけていた時とは全然違う暖かい声。

再び僕の方を見る。顔は無表情。声はやっぱり冷たい。

「縦笛事件。君がやってない証拠が無いから、私と君の社会的信用の差で君は有罪。だから君は変態。家の兄も変態」

「お兄さん、いい人だったね」

電話越しでも分かる暖かい感じ。優しそうな人だった。

「ちょっと。なんでうちの兄の性格を知っているの」

「え、この前、電話で……」

「さては調べたんだ。私の家に盗聴器をつけて兄の行動を逐一チェックしていたんだ。兄に言っておこう」

「そ、そんな！ 会ったことも無い人に嫌われたくないよ！」

「なら早く転校してよ」

「い、嫌だよ」

「なら転送する。どこがいい？ 雪山？ 砂漠？ 無人島？ ああ、残念ながら二次元の世界へは転送できませんので」

「わ、分かってるよ……」

「残念だね二次に行けないで。でも君が二次元になる方法ならあるよ？」

「え？ どういうこと？」

僕の絵を描くっていうことかな。

「まずは、プレス機を用意して、」

「その二次元のなり方はとっても嫌です！ まずの時点でごめんなさい！」

「わがままだねホント。それじゃあ友達出来ないよ」

「う、うん……ごめん」

「……どうでもいいんだけどね。時間がもったいないね」

「え、あ、ごめんね楠さん。引き止めてしまってた」

「私のじゃなくて君のだよ。君の時間がもったいない」

「え？　どういう意味？」

「私はもう帰るっていう意味。じゃあね佐藤君。達者で」

「あ、うん。さようなら」

意味を教えてくださいなまま、楠さんが帰って行った。

一体どういう意味だったんだろうね。今の僕には分からないや。分からないことを考えても仕方がない。

早く帰って晩御飯の買い物をしなきゃ。

駆け足で教室へ荷物を取りに行く。

教室へたどり着いた僕。

誰もいない教室。

どこからか楽しそうな笑い声が聞こえる。みんなとっても幸せそうだ。その事実だけで僕も幸せになれるよ。

にやけながら僕は真っ直ぐに自分の席へ向かう。

そして、僕は自分の机の上のよく分からないものを見つけた。

「……」

机の上に置かれたものは細切れにされた紙切れだった。

「え？　なにこれ……」

何があだかわからないけれど、とりあえず破片をつまみあげてみる。

文字の書かれた紙切れ。明朝体の文字が綺麗に並んでいた。

「……これ、ライトノベルだ」

多分僕の。

僕が読んでいた。

「……」

これはさすがに、悲しすぎた。

救いを求めるように僕は秘密基地へ向かう。

濡れる目を拭いながら山を登る。

涙が落ちることはもうないけれど、思い出したら涙がにじむ。

僕の味方は秘密基地だけだ。

生活や周りの状況なんて簡単に変わるけど、秘密基地は変わらずにいてくれる。

先の見えない未来よりも先の見えている今の方が大切。

何よりも平穏だ。波風の立たない人生が一番いい。

でも今はそれが壊れかけている。僕の未来が見えなくなってきた。最悪だよ。

だから僕は秘密基地へ向かう。

あの日から変わらない秘密基地は僕の心の支えだ。
変わらない世界の象徴。

それが秘密基地だ。

あの日を留めたままの風景。

あの日を僕は守りたいんだ。

そして、たどり着いた秘密基地。

「う……」

楠さんがいた。

玄関で別れたはずの楠さんが秘密基地の前で暴れまわっていた。

「くそっ、この……！ あいつら、好き勝手言いやがって！」

振りまわしているものは以前持っていたプラスチックのバットではない。今度はバドミントンのラケットだ。パツと見は一生懸命素振りをしている様子。でも実際は体を動かしてもややもやを振り払おうとしているんだ。

「……佐藤君」

暴れていた楠さんが僕に気づいた。

「何しに来たの。まさか私を追ってきたの？」

「え、あ、違うよ。たまたま、僕もここに用事があった……」

「用事って何。言ってみてよ」

「う、その……」

「ほら用事がない。やっぱり私を追ってきたんだ」

「……違うよ……」

「違うない。早くどこかへ行つてよ。こんな姿人に見せる物じゃないから」

犬を遠ざけるときのように手を払う。

「違うってば。僕はここに用事があつてきたんだ」

「だから用事って何」

「よ、用事は、用事……」

「ふーん。なら後にして。今は私が使ってるから」

僕は少し自棄になっていた。

だから、ありえない行動をとった。

「そ、そんなの……、楠さんが、林の奥へ行けばいいでしょ……！
ここは僕の秘密基地だよ！ 僕だけしか使っちゃダメなんだ！」

僕は思わず叫んでいた。

「え」

楠さんが目を丸くして僕を見ている。

僕は今自分の取った行動にハッとして、すぐに謝った。

「え、あ、ごごゴメン……。その、僕が、山を下りるから」

僕は、踵を返し来た道を駆け下りた。

まさか、脅してくる相手を怒鳴りつけてしまうなんて。僕は何を考えているのだろう。ばらされたら困るのに……。

とにかく僕は走った。

早く降りれば、今起きたことが無かったことになるような気がして。

そして追ってきた楠さんに捕まり秘密基地まで連れ戻されました。

「機嫌が悪いね。どうしたの」

隣に座る楠さんが興味深そうに僕に尋ねてくる。

「そんなこと、ないよ。ごめんね、その、僕わがままで」

「なにか嫌なことでもあった？」

「全然ないよ。その、ただここでちょっと休憩したかっただけ」

「休憩するために山登りをするなんて馬鹿でしょ。いいから、何があったのか言いなさい。ばらされたいのなら言わなくていいけど」

「ほ、本当に何もないんだ。気にしないで」

「そんな無茶な。気になるに決まっているでしょ。自己主張の少ない佐藤君が突然キレて襲い掛かってきたのだからその理由が知りたくなるのは当然の事でしよう」

襲ってなんかいないのだけれども……。

「そ、そんなことより、楠さんは何をしていたの？　また嫌なことがあったの？」

「嫌なことは毎日起きているよ。楽しい日なんてない」

「え、そんな。楠さん、みんなに慕われているし、信頼されているし、嫌なことなんてされないでしょ？」

「違う。それは違う」

「え？　どういうこと？　何が違うの……？」

嫌なことされないっていうのが、違うってことかな？

「私は、慕われているんじゃないくて、『慕わせている』の。信頼『させている』の。そこは重要なところだから」

「う、うん？　えっと、慕われているのと、慕わせているのは、違うの？」

「もちろん。慕わせるために色々と努力をしている。信頼させるために色々と仕事を引き受ける。だからストレスが溜まる。そう言う

こと。自然とみんなが慕ってくるんじゃない。私がそうさせるように仕向けているの」

「どうしてそんなことをするの？」

「だって、私のこの性格じゃあ慕われないでしょう。信頼されないでしょう」

「そ、そんなことも、無いんじゃないかな」

「無理しなくていいよ。分かってるから。私の性格はいい方じゃない。好感を持てる性格を演じなきゃ私はすっごく嫌われる。分かっていることだよ」

「そんなことないよ。楠さん、優しいもん」

「だから、それは私が優しい人間を演じているから。私はここ最近君に対して優しい行動をとってる？」

「とってる……、ような……」

「はいはい。とってませんよね。でもそれが私。それが本当の性格なの。こんな性格で人と付き合ってたら誰も近寄ってこないよ」

「で、でも、その、楠さん、綺麗、だし……」

「そうだね。綺麗だね。でも、『綺麗だから』なんだよ」

「え、え？」

「私は人より容姿が綺麗。謙遜する気も起きないほどにね。でも性格が腐ってる。美少女で、性格が腐ってる。それは周りの目に調子のってるって映るらしいよ。『あいつは可愛くって何でもできるから調子に乗っている』。ふざけるなって思うみたい」

「でも、楠さん優しいよ」

「君も私の魔性に騙された一人なんだね。これほどまでにひどく扱っているのにそれを受け入れない。現実認めちゃなよ」

「そうじゃなくて、その、この一週間、本当の楠さんと接してきたけど、やっぱり、優しいなって、思った」

「どこをどう見たらそうなるんだろうね。ドM以外喜ばないよこんな性格」

「でも、その、一緒にお弁当を食べてくれたり、草むしりしてくれたり」

「お弁当は自己満足。草むしりは手伝う私偉いってみんなに思わせたかったから」

「えっと、でも」

「でもない。私は猫をかぶっている。間違いないね」

それは、そうかもしれないけれど。

「で」

何と言おうか迷っている僕に楠さんが言う。

「私は今正直に包み隠さず君に話したわけだけど、君は何かあったのかを隠すんだ？」

「え」

今日はよく自分のことを話してくれるなあって思ったけどそう言うことだったんだ……。

「何があったのか聞かせてもらおうかな」

「う、その……」

言いたくないよ。

「……あの、ちょっと、言えない……」

「不公平だよ。私がこんなにも情報を与えたのに君は何も教えないなんて。酷い話だよ」

「でも……。迷惑かけると、いけないから」

「……どうしても言いたくないんだ？」

「う、うん……」

「よし、誰にばらそっかなー」

「や、やめてください！」

やっぱりそうきたよ！

「えーっと、じゃあ山口さん辺りにばらそうかな」

携帯を取り出し耳に当てる。

「あの、本当に、やめて……」

「あ、もしもし……。その、私、ちょっと相談があつて……」

ま、まずい！ 電話が繋がっちゃった！ 僕は慌てて頭を下げる。

「……！ ごめんなさい！」

「うん。うん」

頷きながら楠さんが通話口に手を当てる。

「なら、何があつたか教えてくれる？」

「……それは……」

「あ、山口さん？ ごめんね、急いで来てほしいところがあるんだ。うん。学校近くのコンビニ」

「ごめんなさいごめんなさい！」

楠さんが目で言う。「教えるの？」

「……………僕、言いたくないです……。でも許してください……」

僕は必死に土下座をした。
言えない。

だから頭を下げて許してもらうしかない。

話し声が聞こえなくなったので顔を上げて楠さんを見てみる。
僕を睨み付けていた。

うう……。ごめんなさい……。

しばらく僕を睨んだ後、携帯を閉じた。

「え、あれ？ 通話……」

「してない。ちょっと驚かせようと思っただけ。そんなに言いたくないんだね」

「う、うん……。迷惑かけるし……」

「ふーん。じゃあ私帰る」

「あ、ご、ごめんね」

「はいはい許す許す。じゃね」

なんだか驚くほどあっけなく、楠さんが諦めてくれた。

やっぱり、優しいんだなと、改めて思った。

そういえば。

楠さんと話ただけで少し気が紛れていた。

愚痴ったわけでも慰めてもらったわけでもないのに。

少し言葉を交わしたせいで、なんだかここで落ち込タイムミングを失ったというか、なんというか。

これも楠さんの力かな、とか、思ってみたり。

優しさの意味

小嶋翔君^{しょう}。

髪の色は明るい茶色で、普段は長い前髪をヘアピンで留めている。バスケットで、レギュラーではないけれどもうまいみたい。

クラスの中では結構発言力が強く、結構やりたい放題。自分が望まない意見になりそうになったら、無理やり自分の意見を通そうとして話がややこしくなったりする場面もちょくちょく見かける。そういう時は沼田君が小嶋君をなだめたりしているのでやっぱり沼田君は凄い人なんだと思う。

楠さんのことが大好きなようで、猛烈なアピールをして気を引こうとしている。多分、全男子の中で一番アピールしているのは小嶋君だ。

雛ちゃんとはあまり仲が良くないようで、言い合いのような場面を何度も見てきた。結局は小嶋君がどうしてもよさそうに諦めるのだけれども、諦めるのなら最初から言い合いなんてしなけばいいと思う。

男子二位の位置にいるけれど、粗暴な性格のため、かなり多くの人から恐れられている。僕も、できる事なら関わりたくない。

バスケットをしているので運動は出来るみたいだけれど、勉強の方はよく分からない。この学校は上位三十人の結果が張り出されるが、前回のテストで小嶋君の名前が無かったので多分普通位なのだと思う。

それくらいしか知らない。

最近ますます思うけれど、やっぱり関わりたい人間ではない……。痛い思いはしたくないもん。

でも、その願いは聞き入れられない。

さっきもちょっかいを出された。

朝トイレで出会って、わざと肩をぶつけられた。

怖い。

小嶋君は怖い。

何より、なんで怒っているかを教えないので怖い。

どうしていいのか分からないから。

僕に少しでも腕力があれば小嶋君を抑え込んで話を聞けるのに。

少しでもすばしっこさがあれば避けて話を聞けるのに。僕はひ弱だしどんくさいからダメだ。

小説みたいにな、何か特殊な力に目覚めればいいのに。

「……」

暇な朝。

僕は机の真ん中をじっと見て時間が過ぎるのを待つ。僕、話し相手っていないかったみたい。友達と思っていた人も最近は話しかけてくれないし、僕はずっと孤独だったんだ。

「おう、優大」

孤独の中で、唯一雛ちゃんだけが話しかけてくれる。
雛ちゃんが僕の前の席に座って笑顔を見せてくれた。

「あ、おはよう、雛ちゃん。昨日は、ごめんね……」

「昨日？ ……ああ、昼の。別に気にしてねえよ。そんなことより、お前今日は本読まねえんだな」

「う、うん。家に忘れてきちゃって」

本当は忘れてなんかいない。持ってくる本が無かったんだ。

「ドジだなあ。でもま、その方がいいんじゃないの」

「え？ どうして？」

「本読んでたら話しかけづらいじゃん。暇そうにしてた方が話しかけやすいだろ」

「う、うん。でも、僕、話し相手いないから」

「私がいるじゃねえか。し ん ゆ う だろ」

何故か親友と言う言葉を強調されたけれど、僕はとっても嬉しかった。

「うん。ありがとう」

「まあ、私は本読んでようが関係なく話しかけるんだけどな」

かっこよく笑った。どんな笑顔でも似合うなあ雛ちゃんは。と、ここで！

「?!」

ものすごい悪寒に襲われた！

きよろきよろと辺りを見渡す。すぐに悪寒の正体を見つけた。

「うぎぎぎぎぎぎ……!」

前橋さんだ！ ハムスターな勢いで爪を噛んでいる！ 怖い！

「どうした？」

怯えている僕の様子を訝しんでいる雛ちゃん。

「な、にも、無いけど、その、雛ちゃんは、前橋さんと、話した方が、楽しいんじゃないかな？」

僕の言葉をどう取ったのか、雛ちゃんがすぐに怒った顔を見せた。

「……なんだよ。お前は私にどっか言っただけで欲しいってのか？」

「そ、そんなわけないよ！ 僕だって雛ちゃんと仲良くしたいよ！」

「うぐっ。そそんなこと、大声で言うなよっ」

恥ずかしかったのか、真っ赤になる雛ちゃん。それを見て僕も赤くなった。少し恥ずかしいセリフだったね……。

「あ、ごめん……」

俯く僕に、雛ちゃんが明るく話しかけてくれる。

「だったらもっと話そうぜ。その方が私だって楽しいし」

「う、うん……」

気のせいかもしれないけど、視界の隅に映っている前橋さんの髪が逆立ち口から紫色のモヤが出ているよ。きっと僕の恐怖が幻覚を見せているんだね。

「優大、なんか最近元気ないけど疲れてんのか？」

心配そうに聞かれた。

疲れているというより恐れているのだけれども、言えない。

「え、あ、うん。そう。疲れてる」

「それはよくないな。気分転換が必要なんじゃねえの？」

「そうだね。でも、僕趣味とかないし、どうやって気分転換すれば……」

ニヤニヤ動画じゃあ気分転換にならないし、運動しようにも一人じゃあ楽しくないよね。

「明日土曜だし、どこか出かければいいじゃん」

「そうだね。でも、どこへ行こう……。楽しい場所どこにあるのかな。雛ちゃんいいところ知ってる？」

「んー？ そうだなー……」

と、少し考え、ちらりと僕に視線を送る。

「……あー……のさ。もしよければ、明日、私と――」

「席につけー！」

ああ、楽しかった雛ちゃんとの会話が終わってしまった……。短い間だった。

「——ちっ」

雛ちゃんが忌々しげに先生を睨み付けていた。

「またあとで話すわ」

すぐに笑顔に作り替え僕にそれを見せてぺちぺちと僕の頬を叩き、自分の席へ戻って行った。

なんだろう、なんて言いたかったんだろう。……もしかして、僕と遊んでくれるのかな。もしそうだとしたら嬉しいな。とっても楽しい休日になるね。

またあとで、か。

一体何が聞けるのかな。

でも、結局、雛ちゃんが言った『またあとで話す』の内容を聞けないまま、僕はこの日を終えることになった。

この日の小嶋君は、昨日、一昨日よりも酷かった。

休み時間の度に教室から僕を連れだし、校舎裏でいつもより酷い暴力を振るってきた。

だから雛ちゃんと話すチャンスが無かった。

放課後まで、それは続いた。

「うっ！」

小嶋君に胸ぐらをつかまれ壁に押し付けられる。苦しい。

「……」

相変わらず小嶋君は怒った顔をするだけで何も言わない。

「な、なんでこんなこと、するの……」

「うるせえ」

「ううう！」

ぐっ、と押し付ける力を強める。さっきよりも苦しい……。

「……」

「や、やめて……やめてください……」

胸ぐらをつかんでいる手を引き離そうとするが、全然勝てない。筋力に差がありすぎる。

「……んでめえなんだよ」

「苦しい……放して……！」

「なんででめえなんだよ」

「な、何が……？」

「若菜ちゃんだけじゃなく、有野までお前のことを気に入ってるみたいじゃねえか。どうしててめえみたいななよした奴がちやほやされるんだよ。ああ？」

「そ、それは、勘違い、だよ？」

僕なんかがちやほやされるわけなのに。でも、小嶋君は何も聞いてくれない。

「うるせえんだよ！」

「うう！」

今まで顔は殴られてこなかったけれど、今、初めて左頬を思いっきり殴られた。

そのおかげで、おかげと言ってもいいのか分からないけれど、胸ぐらをつかんでいた左手から解放された。

「う……ど、どうして、殴るの……」

「気持ちわりいんだよ！」

「あっ！」

近寄ってきて、僕を何度も踏みつける。僕は丸まって必死に耐えた。

「ムカつくんだよ……！ お前みたいな奴は！」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

謝るけれど、何も聞いてくれない。

「すみませんすみません！」

聞いてくれないというより、聞こえていない。
耐えるしかないんだ。痛いけど、我慢しよう。
そう思った矢先、

「死ねよ！」

脇腹を思いっきり蹴り上げられた。

「……！」

息ができなくなった。

「……ふざけんじゃねえよ」

小嶋君が何か言っているが、聞こえない。呼吸をするだけで精一杯だ。

遠ざかる足音、あふれ出る涙、脇腹の痛み、全部気にならない。
僕はただ生きようとした。

・ ・ ・

十数分後。もう呼吸はできる。恐怖は去った。
けれど。

僕はどうしようもなくショックを受けていた。
怒らせているとかではない。

僕は憎まれていた。

何かの拍子に殺されてしまうのではないかと言うほどに憎まれていた。

波風を立てないよう意識して過ごしてきた僕がこれほどまで恨みを買うことになるとは思わなかった。

今までの生き方が間違っていたこと、これから先どうやって生きて行けばいいのか、僕が何をしたのか。色々と目の前に現れた問題に僕はどう対処すればいいのか分からなかった。

お腹はまだ痛い。顔もいたい。きつと青くなっている。顔を殴られたのは初めてだ。こんなに痛いだなんて。お腹を蹴られて呼吸ができなくなったのも初体験だ。本当に、死ぬかと思った。

「……」

誰もいない校舎裏で、僕は涙を流した。
どうすればいいのか分からず、とにかく泣いた。声を殺して泣いた。

「ゆうたー？」

遠くから聞こえてくる声にハッと顔を上げる。

この声は雛ちゃんだ。僕を探している。

涙を拭って立ち上がり、どうしようか辺りを見渡す。

でも結局逃げることもできず、涙目でそこに立ち尽くすことしかできなかった。

「優大ー。あー、やっと見つけた。お前なんでこんなところに……
……優大？」

「う、うん」

顔を見られなくなかったので俯いた。でも、雛ちゃんのテンションが一気に下がったので、もしかしたらばれたのかもしれない。

「……………誰が犯人だ」

怖い声色で僕に問う。僕は質問の意味が理解できないふりをした。

「え、な、何が？」

僕の反応を見て雛ちゃんが怒る。

「誰だって聞いてんだよ！ 誰にやられたんだ！」

「な、何も、されてない……」

駆け寄ってきて、僕の両肩を掴む。

「ふざけんじゃねえ！ どこのどいつだ！ 教えろ！」

「だ、大丈夫だから。少し転んだだけだから」

「ならこの服についてる足跡は何なんだよ！ てめえ教えろ！」

がくがくと僕の体を揺らす。僕はとにかく白を切った。

「何も、無いから」

「……っ！ てめえ……………小嶋、か？」

「ち、違う！ ……よ……」

しまった。返答がおかしなことになってしまった。

「あいつ……！ 殺す……！」

荒々しく僕の肩を突き放し、どこかへ向かおうとする雛ちゃん。

「ま、まって……」

僕は慌てて雛ちゃんの腕をつかんで引き止めた。

「大丈夫。僕は何ともないから」

出来る限り明るい声で言った。

「何ともない訳ねえだろ！」

雛ちゃんが振り向き僕の顔を見る。僕の顔を見るなり悲しそうに眉を寄せた。

「お前……、ひでえ顔じゃねえか！ 顔も殴られたのかよ！ あの野郎！」

しまった。顔を見せてしまった。

「なんで殴られたんだ！」

悲しそうだった顔から再び怒りの顔に戻る雛ちゃん。

「そ、その、それが、よく分からなくて……」

「あの野郎……!」

体育館がある方を睨み付け歯を食いしばる雛ちゃん。

「まって! 小嶋君だなんて言っていないよ!」

「でもそうなんだろう?! あいつ以外にいねえ!」

「ち、違うよ……」

「違わねえ!」

雛ちゃんが怒っている。僕なんかの為に怒っている。嬉しい。
また涙がにじむ。

「痛むのか?!」

僕の両肩を包み込むように掴む。優しい手だった。

「ち、違うよ。その、雛ちゃんが怒ってくれるのが嬉しくって」

「んなの当たり前だろ……友達じゃねえか!」

「うん、うん」

僕にも味方がいるんだ。

雛ちゃん少し膝を曲げ、うつむきがちな僕を見上げるような位置から諭すように言う。

「だからな、私が代わりに仇をうってやる。誰がやったか教えてくれ」

「……それは、お、教えられない……」

「なんでだよ。お前はそれでいいのか」

「よ、よくないけど、その、雛ちゃんに迷惑かかるから」

両肩を持つ手にぐっと力が入る。

「迷惑なもんか！ お前の為ならなんだってする！」

「でも、それで雛ちゃんが傷ついたりしたら、僕、その、嫌だから……」

「……」

雛ちゃんが呆れたように曲げていた膝を伸ばし僕から手を離れた。

「……はぁ……」

大きくため息をつく雛ちゃん。僕は慌てて言い訳をする。

「それに、その、これは僕が自分で解決しなきゃいけないことだし、雛ちゃんに手間かけさせられないよ」

「……そうか……」

とっても悔しそうに落ち込む雛ちゃん。

「……お前は本当に優しいな」

その姿のまま。僕のことを褒めてくれた。

「そんなこと、ないよ……」

「優しいよ。でも、どうするんだ。どうやって解決するんだ？」

犯人を聞きだすことは諦めくれたみたいだ。

「……そ、それは……」

ど、どうしよう……。

「目には目を、歯には歯を。殴られたら殴り返せ」

「そ、そんな。僕、勝てないよ……」

「鍛えればいい」

「鍛える……」

「私が喧嘩を教えてやる！」

格好よくポーズを決めた雛ちゃん。

「そ、それは……。雛ちゃん女の子だし、危ないよ」

「優大になんか負けねえよ。舐めんじゃねえ」

「う。そ、そうだけど……。でも……」

喧嘩……。それしかないのかな……。

でも、確かにこのままじゃあ話し合いにならないし。

せめて一方的にならないくらいにならないと。

でも、雛ちゃんにケンカを教えてもらって、雛ちゃんと殴り合
うってことなのかな……。それはかなり抵抗があるよ……。万が一、
万が一！ 僕のパンチが当たったりなんかしたら……。

雛ちゃんは女の子だもん。僕と雛ちゃんの間には圧倒的な力の差な
ってないはず。……多分。

雛ちゃんの可愛い顔を傷つけたりなんかしたら……！ それはも

う死んでも死にきれないよ！

ど、どうしよう。喧嘩以外の解決方法を……。

……。

何も、思いつかない……。

多分小嶋君の暴力をいなすようなことも必要だし……。僕の弟に
頼もうかな？ ……でも、小学六年生だし……。じゃあ、お姉ちゃ
んは？ 高校三年生だけど、女の子だし……。どうすればいいんだ
ろう。……僕に、お兄ちゃんがいれば……。
……。

「……あ！」

閃いたよ！

「あん？ どうした」

突然声を上げた僕に雛ちゃんが怪訝な顔を向ける。

僕とってもいいアイデアを思いついてしまったよ！

「雛ちゃん！ 僕國人君に頼むことにするよ！ 國人君なら喧嘩慣れしていると思うし、僕なんかひとたまりもないよね！ 喧嘩を教えてもらうには一番だよ！」

「え……」

雛ちゃんの顔が渋くなった。

「え？ どうしたの？」

何か都合の悪い事があるのかな。

「……あ、そう言えば……、國人君、何か問題抱えてるんだったよね……」

「……あ、ああ？ まあ、そう、なんだけど……」

しまった。忘れていた。バカなことを言った。

「ご、ごめんね、無神経なこと言って……」

「いや、全然そんなことはねえよ……」

でも雛ちゃんの顔はすぐれない。……もしかして、國人君――

「……そうだな。いい機会だし兄貴に会わせるよ」

何か覚悟を決めたような面持ちで僕と向かい合っている。

「う、うん。その、大丈夫？」

「……ああ。大丈夫だぜ。むしろそのセリフは私が言うセリフだ。優大、覚悟はできてるか？」

「う、うん……」

正直、あんまり……。

一体何が起きているのか分からないけれど、いい事ではなさそうだよ。

「どんな状態でも、泣かないって約束できるか。どんな状態でも、兄貴だって、言ってくれるか」

「うん。それは、もちろんだよ。國人君がどうなっても、僕は國人君の幼馴染だよ」

「……そっか。なら、会わせてやる……。……ショック、受けないでくれよ……」

とても悲しそうに、雛ちゃんが俯いた。

國人のケンカ指南（予定）

有野國人君。

有野さんと同じ金髪で、ツンツンとした髪型。背も高くって、顔もかっこいい。ピアスとかもたくさん開けていて、どこからどう見てもヤンキー。細い体つきからは想像できないくらい力が強くって驚くほど運動神経がよかった。

僕の幼馴染……で、年は三つ上。今は、大学生、なのかな。ここ二年くらい國人君の噂を聞かないからどうなったのか分からない。二年前までは凄かった。

とにかく喧嘩が強くなって無法者で。町中で知らない人はいないくらいの有名人。遠くの方から喧嘩を売りに来る人がいるくらい有名だった。

『新月の災厄』

そう言う通り名がつくほど恐れられていた。

その理由。

新月の暗い夜が、一番國人君が襲われる回数が多かったから。そして、それを返り討ちにしまくっていたから。しかも、新月の夜を狙って襲ってくるのが分かっていた國人君も、それを知っていて敢えて新月の夜に出歩いていたらしい。

だから、新月の夜は怪我人が大勢出る。新月の夜は巻き込まれるかもしれないから外へ出てはいけない。そう言った理由で『新月の災厄』と言われていた。

恐ろしい。

髪を染めてから、僕は遠目から眺める事しかできなくなっていた。でも、今日僕は國人君に会う。

喧嘩を教えてもらうんだ。

……正直に言くと、とっても怖い。

殴られるんじゃないかって。

とっても怖い。

それと、もう一つ。

雛ちゃんの様子がおかしい。

もしかしたら、國人君は大変な状態なんじゃないかなって。

その不安が当たった時は、多分僕の想像を超える状況なんだろう。

二つの意味で怖かった。

会いたい。

けど、会うのが怖い。

でも知っておかなきゃ。

國人君が、どうなっているのか。

「……最後にもう一回聞くぞ。後悔、しないか？」

有野家の扉の前で雛ちゃんが振り返って僕を見る。

「うん」

怖いけど、もう迷いはない。國人君と対面するんだ。

「……じゃあ、開けるぞ」

雛ちゃんが、自分の家の扉に手をかけた。

う……。なんだかお腹が痛くなってきた……。

「……よし、行くぞ」

雛ちゃんがゆっくり扉を開けた。

久しぶりに訪れる雛ちゃんの家は何一つその装いを変えていなかった。玄関に入ってまず見えてくる大きなジグソーパズル。僕たち

が完成させた奴だ。大変だった。

黄土色の傘立ても、焦げ茶色の靴箱も、家の匂いも。あの日から何も変わっていなかった。

——ただ、静かだった。

「入るか」

僕を後ろに従え、雛ちゃんが家にかかる。

「お邪魔し——」

「しっ！」

お邪魔しますと、声をかけようと思った僕の口に指を当て止める。

「——え？」

「ちょっと、待ってろよ。居間に行っててくれ」

居間の方を指さし僕を促した。

「う、うん」

「私は兄貴の様子を見てくる。お前は物音を立てずに居間にいてくれ」

「うん……」

「じゃあ、少し待ってろ」

雛ちゃんが階段を上って行った。

僕は首をかしげながら居間へ。様子を見なければならぬ状況って、どんな状況だろう……。

何となく有野家の状況が怖いと思った僕は、居間の扉を少しだけ開け、中の様子を耳を澄ましてをうかがう。……何か、物音がする……。雛ちゃんのお父さんかお母さんかな。

ゆっくりと扉をあけ、僕は居間の中へ足を踏み入れた。

「――！」

僕はその瞬間戦慄する。

「……ちっ、何もない……！」

誰か、見たことも無い巨漢の男が部屋をあさっていたのだ。ぼさぼさの黒髪、グレーのスウェット上下。とても大きな体がリビングと繋がっているダイニングを物色している。

ど、泥棒だ！ 早く警察に！ ……でも、違うかもしれないし……。お客さんだったら申し訳ないから……。

「あ、あの……」

僕は一応、声をかけて確認することにした。

「……?!」

その大きな人は、僕を確認した瞬間、ものすごい勢いで僕に襲い掛かってきた。

突然のことに思考がついていかない。

「え、え?!」

百キロはゆうに超えているだろうというその体に見合わないものすごいスピードで、僕との距離を一気に縮めた。僕は驚き一步も動くことができなかった。

「う、うわあああああああああああ!」

叫び声を上げる事しかできない。まずい、殺される!

まさか、久しぶりに来た友達の家で泥棒の犯行現場に出くわすなんて。非日常すぎて頭が混乱する。

当然泥棒はそんなのお構いなし僕を襲う。

棒立ち状態の僕に泥棒が飛びついてきた。

押し倒されるように居間から追い出された僕は、そのまま大きな体に押しつぶされてしまった。

「う、うう……」

泥棒は鼻息荒く僕の顔を見ていた。

「た、助けて……」

窒息させるためなのか、一向に僕の上からどうこうとしない。

苦しい。息がしづらい。

怖い。

このまま殺されちゃうのか……。

嫌だよ。まだ死にたくない。

助けて、雛ちゃん――

助けて、國人君――

「何してんだてめえ！」

僕の祈りが届いたのか雛ちゃんが駆けつけてくれた。

「兄貴！」

雛ちゃんの声が玄関に響く。

え?! 國人君が助けに来てくれたの!?
お肉の下で首を回しきよろきよろと國人君を探すけどどこにもいない。

あれ? と状況がよく分からずにいると雛ちゃんが僕の上にいる泥棒に蹴りをお見舞いして僕を解放してくれた。
ごろごろと玄関まで転がっていく泥棒。

「大丈夫か?! 優大！」

雛ちゃんが僕の体を起こし胸に手を当ててくれる。それだけで少し楽になったような気がした。

「ごほっごほっ。う、うん、ありがとう……。……そ、そんなことより、そ、その人……。！」

睨み付ける僕と雛ちゃん。

「……」

泥棒がのっそりと起き上った。
また襲ってくる!

「どどどどうしよう! 早く警察に!」

この人巨漢なのにすごく素早いからこのくらいの距離すぐに詰められちゃうよ！

「……いや、さすがに警察は」

とても余裕のある雛ちゃん。襲い掛かれても大丈夫なくらい、喧嘩に自信があるのだろう。でも、この人は泥棒で、体が大きい。武器をつていないとも限らない。絶対に雛ちゃんには勝てないよ！

「ひ、雛ちゃん！ 危ないよ！ 早く警察に！」

「……えーつと、あー、いやまあ……」

「ひ、雛ちゃん……？」

気まずそうな雛ちゃん。

あ、もしかして、知り合い、なのかな……。

……まさか、雛ちゃんの彼氏とか？

いやいや！ その、人を見た目で判断してはいけないけど、その、ねえ！ いきなり襲ってくるし、れ、礼儀が、なってないよ！

ダメだよ！ 僕は認めないよ！

と、混乱している僕の肩に手を置き、もう一方の手で太った人を指さし言った。

「あれ兄貴」

……。

「……………は？」

.....は？

「いててて.....。ひ、酷いだろう！ 雛タン！」

.....雛タン？

「雛タン言うな！ 殺すぞデブ！」

「ひう！ そ、そんな目で睨むのはやめるのです！ いや、そんなことより、その隣の美少女は誰！？ ま、まさか、俺の為に.....。ありがとう雛タン！」

「死ねデブ！ これは優大だ！ 昔一緒に遊んだだろう！ 男だよ！」

「優大.....？ああ！ 佐藤優大君！ 久しぶりだな！」

「.....」

「優大！ しっかりしろ！」

「はっ」

雛ちゃんに揺すられ現実に戻された。

「まさか優大君、いや、優大タンがこんな俺好みのシヨタに成長するなんて.....！ 僕感激！」

と言って、また飛び込んできたが雛ちゃんの足の裏がそれを阻ん

でくれた。

「優大に近づくんじゃねえこのくそデブ！」

倒れている國人君を何度も何度も踏みつける。

……まるで放課後の僕みたい。

「ああ！ もっと、もっとお願いします雛タン！ はあはあ」

訂正します。させていただきますお願いします。放課後の僕とは似ても似つかないですごめんなさい。

……あの、……その。

……。

ものすごくショックだ！

誰これ！ 國人君じゃないよ？！

「おいデブ。てめえさっき優大に抱き付きやがっただろう！ 殺してやるから死に方選べ！」

「うーん。俺は萌え死がいいなっ！」

「よしわかった。望み通り外側からその脂肪を燃烧させて役に立たねえ醜い体を消し炭にしてやる！」

「雛タン。萌えを分かってないよ」

「分かりたくもねえよ！ 役に立たねえデブは二階に上がってろ！」

「役に立たないデブか……。でもね、雛タン。俺は一人で眠れるんだよ」

「だからなんだよ！　んなもん普通じゃねえか、自慢げに言うな！」

「何を言っておるのか！　俺以外の人間はみんな嫁と二人で寝てるんだぞ！　その点一人でも眠ることもできる俺は偉いではないか！」

「なにが嫁だくそ野郎！　んなもん妄想の中だけにしろクズ！」

「妄想じゃないもん！　ちゃんと部屋にいっぱいいるもんね！　今日はタイガーちゃんと寝ようっと」

「もしかして嫁ってあれの事か？！　あの気色悪い枕カバーの事か？！」

「枕カバーなんかじゃない！　あれは魂の宿った正真正銘俺の嫁だ！　昨日だって四人で楽しくおしゃべりしたんだぞ！」

「枕カバーを人で数えるんじゃない！　お前さあ、あの気持ち悪いのをベランダに干すの止めてくれよ！　恥ずかしすぎるだろうが！」

「何を言っているのか！　俺の嫁を馬鹿にするなんていくら雛タンでも許さないぞ！　謝罪を要求する！」

「てめえはまず親に謝れ！　次に世間に謝れ！　最後に地球に謝って死ね！」

「ぬぬぬ……。仕方がない、戦争じゃっ！」

「かかってこいよ！」

「とうっ！」

「死ね！」

「ごぶ！ ま、負けた……」

「すぐにやられるなら挑んでくるんじゃない！」

「くっ……。こんな時に俺の幻想世界に潜む暗黒竜が現生化するなんて！ 命拾いしたな！ ヒナ！」

「黙れデブ！ って、優大！ しっかりしろ！ いろいろな機能が停止してるぞ！ 現実から逃げるな！ おい兄貴！ お前のせいで優大が呆然としちまってるじゃねえか！」

「何？！ それはいかん！ 人工呼吸だ！」

「はあ？！ ちょ、て、てめえ！ う、うぎゃあああああああああ！ なにしゃがるうー！ー！ー！ー！ー！」

ふわふわしていたけれど、体に衝撃を感じて、意識を正面に集中させると、大きな顔が、目の前にあって、僕の、唇が、奪われて――

「離れろデブ！ 優大、しっかりしろ！ 優大、ゆうたあああああああああああ！」

さっきまで悪い夢を見ていた気がする……。どんな夢だったかわからないけど、なんだか、そのまま忘れていてくれた方がいいような……。

うーん？

まあ、いいや。

今見てる夢はとっても幸せだからね。

なんといえいいのかわからないけれど、とっても幸せな気持ちになる。甘くて、あたたかい夢。

僕にもよくわからないけれど、とっても穏やかな気持ちで満たされていた。

なんだか、柔らかい感触を感じるね……。

……でも、柔らかい感触って、悪い夢の時にも感じていたような……。

……ううん。これは、それとは違う……。もっと、優しい。

ずっと感じていたい。このまま寝続けていたい……。

……。

ああ、でも寝ている場合じゃない気がする……。

この幸せを手放したくないけれど、起きなきゃ。

僕は眠りに来たわけじゃないんだから。

――

夢から覚醒し目を開けると一番に雛ちゃんの顔が飛び込んできた。雛ちゃんが間近で僕の様子を見ていてくれたらしい。

「あわっ」

突然のことに驚き胸の鼓動が激しくなる。こんな近くに雛ちゃんの可愛い顔があるだなんて驚くに決まっているよ。

恥ずかしかったのか、真っ赤な顔の雛ちゃんが慌てて僕から遠ざかった。

「わ、わりい！」

「え、う、ううん」

ドキドキする胸を押さえながら上半身を起こす。

「お、おお前、い、いつから、起きてた?!」

「え? 今起きたばかりだよ」

「嘘じゃねえだろうな！」

真っ赤な顔で僕を睨み付ける。

「う、嘘じゃないよ? えっと、その、なんで？」

「別になんでもねえよバカ! ビビらせんなよ！」

赤い顔のままそっぽを向いてしまった。怒らせてしまったのかな
……。

「あの、僕何か悪い事したの……?」

「別に何もしてないっ」

機嫌が悪いよ。

無言のままではどうにも居心地が悪いので、なにか話題を見つけ

「? 上書きって?」

よく分からないよ?

「う、上書きは上書きだ! 細かいことは気にすんなよ!」

何故だか詳しく聞くと怒られそうな勢いなのでとりあえず事実だけを確認することにした。

「あの、僕は、國人君に、唇を奪われたんだよね?」

「……………まあ、有野に唇を奪われてた」

「? 國人君に?」

「あ、有野」

「???? 『有野』じゃあ、雛ちゃんも容疑者に入っちゃうよ?」

「…………う、うるせえな! いいからさっさと兄貴のところに行くぞ!
あのデブ、普段出てこねえくせにこういう時に限ってタイミング
悪く部屋を出てやがる。優大がびっくりするだろう! なあ!」

「う、うん。あの、僕、國人君とキス——」

「よーし! さっさと行くか!」

「え、あの——」

「いいから行くぞ優大！」

腕を掴まれ引きずられるように二階へ向かった。事実を確認したかったのに……。

「ここが兄貴の部屋だ」

二階のとある一室。その部屋の前で掴まれていた腕が解放された。

「ここに、やせた國人君がいるんだね」

「おい。お前現実を見ろよ」

「ううん。まだ、あれは夢かもしれないから」

「現実から目をそらしたらまたショック受けるぞ」

「大丈夫。ここにいるのはやせた國人君だから」

「……お前がそう思いたいのなら何も言わねえけど……」

それ以外に考えられないよ！

だ、だって、僕が憧れていたのは金髪で沢山ピアスをつけていて眼光が鋭くって一目見ただけで只者じゃないと分かってしまう國人君だったんだよ！？

それなのに、夢で見た人は黒く長いぼさぼさの髪でピアスなんてつけていなくて眼光是鋭くなくて雪だるまみたいで一目見ただけでお腹いっぱいになっちゃう様な人だった！
ギャップがすごすぎるよ……。

「落ち込むなよ……」

「あ、うん……」

「……ドア開けても泣かないよな？」

「う、うん。大丈夫だよ」

ドアの前で話す僕らの耳に、部屋の中から飛んでくる國人君の声が聞こえてきた。

「遅えんだよこの野郎！ さっさとしろよボケ！ 殺すぞ！」

こ、これだよ。これ……。これが國人君だよ！

この恐ろしい声と暴言！ 遠目に見るだけしかできなくて、近寄れなくて、でも、それでも憧れを抱いていた國人君だよ！

やっぱりこの中には國人君がいるんだ！

「開けるぞ優大」

「うん！」

雛ちゃんがゆっくりと開ける。それと連動して聞こえてくる國人君の怒声の音も大きくなっていった。

ああ、國人君は誰に向かってこの罵声を浴びせているのだろう。

電話かな？ 知り合いが部屋にいるのかな？

ああ！ 怖いなあ！

そして開いた扉の先で、

「早くしろよこの野郎！ ディスプレイ叩き割るぞ！」

大きな人がパソコンに向かって怒鳴り声を上げていた。

「おい優大。何かしらの感情を見せてくれ。無表情は怖い」

「……。ね、ねえ雛ちゃん。國人君はどうしちゃったの？」

現実を認めよう。これは國人君だ。二年前までの國人君は死んでしまった。

「私が聞きてえよ……」

「ふうー……ふうー……！ ……ん？ おお、優大タン。もう調子
はいいのかね」

ディスプレイを睨み付けていた國人君が椅子を回し僕らの方を見て言った。

ちらりと覗くディスプレイには、ぜ、ぜ、全裸の女の子の、絵が映し出されていた……。

「あ、はい大丈夫です」

「いきなり倒れるんだもんな。びっくりしたよ」

「ご迷惑をおかけして大変申し訳ございません。以後気をつけます」

「なにになに！　俺と優大タンの仲なんだからさあ、敬語なんてやめようよ！」

「うん、わ、わかった……。そ、その、部屋に入って大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。むしろ早く入って欲しい！　さあ、早く、早く！」

國人君の鼻息が荒くなる。

僕は情けないことに雛ちゃんの後ろに隠れてしまった。

「大丈夫か、優大」

そんな僕に優しく声をかけてくれる雛ちゃん。

「ちょっと、ふわふわしてる……。で、でも、大丈夫です」

「無理、するなよ……」

「うん」

ちゃんと、幼馴染と接する態度を取らなきゃね。

「あ、あの、國人君？」

僕は雛ちゃんの後ろから顔を出して尋ねてみた。

「なんだいマイハニー」

ぞわぞわっと、背筋に強烈なものを感じた。

「……國人君、その、どうしちゃったの？」

まずこれを聞かなきゃ僕はもう駄目だ。

「どうしちゃったって、何のこと？ ああ、もしかして、髪の色？
面倒くさいから染めるの止めたのにや」

「……にや……。……う、ううん。その、あの、全体的に、どうし
ちゃったのかなーって……」

「全体的に？ ああ、そう言えば少し体重が増えちゃったかな。ま、
これくらい運動すればすぐやせるし」

絶対に無理です！ 昔何故だか流行った某ブーツキャンプを二万
回やらなきゃ痩せられないよ！

「その、体もだけど、あの、生活、と言えいいのか、趣味と言え
ばいいのか……」

「生活？ 何かおかしい？」

本当に分からないと言った顔でそばにあったポテトチップスを食
べる國人君。

「二年前から考えたら、百八十度違う生活を送ってるよね……」

「ああ、まあそうだけど、こっちの生活が人として正しい生活だか
らね。いやあ、DON時代が恥ずかしいよ。ぶひひひひ」

ドキュンとか！　ぶひひとか！

「ひ、雛ちゃん？！　その、原因は？！　僕頑張って元の國人君に戻してみるよ！」

「いや、私も聞いたんだけど、訳が分かんねえんだよ」

よし、僕も聞いてみよう！

「國人君！　國人君がこの道に引きずり込まれた理由は何？！」

「引きずり込まれたんじゃなくて導かれたと言って欲しい！」

「うん！　分かった！　面倒くさいからとりあえず話を合わせる！　國人君は何によって導かれたの？！」

「ふ……。俺は、運命の人に出会っちゃったのさ……」

そう言って、遠い目をして壁にかかったポスターを眺め出した。

「運命の人？」

首を傾げる僕に雛ちゃんが小声で教えてくれる。

「なんだかこいつよ、どっかの女のせいでこうなっちゃったみたいなんだ。でも名前だけでどこの誰だか分からねえし、その女の姿見たことねえし……。私にはお手上げなんだよ」

「そうなんだ……。運命の人って、何だろうね」

「さっぱり分かんねえよ」

一応、聞いてみよう。

「あの、國人君。その運命の人って、どこで出会ったの？」

「ふ……。彼女とのなれそめを聞きたいか。いいだろう。教えてあげよう」

偉そうに椅子にふんぞり返り窮屈そうに足を組んで話し始めた。

「あれは、学校へ続く坂の下だったかな……。桜並木の坂の下。僕は彼女に出会ったんだ……」

あ、もうこの時点でアウトだ。國人君アウト。

「彼女はこうつぶやいていた……。『あんまん』と……」

國人君は惚けた表情で壁のポスターを眺めていた。ポスターには一人の女の子の絵が描かれていた。アウト。

國人君の言葉を聞いて雛ちゃんが憎々しげに言った。

「学校の近くの桜並木ってのもどこか分かんねえし、あんまんってのも訳わかんねえし……！ 畜生……どこの誰だか知らねえが、兄貴をこんなにしやがって……！ 許せねえよ！」

「……」

「もし見つけたらただじゃおかねえ。ブツ飛ばして罪を償わせてやる！」

雛ちゃん。戦えないよ。雛ちゃんとその人では、次元が違いすぎるもん。詳しく言うと、相手の人に一次元ほど足りないかな。

「ね、ねえ、雛ちゃん。僕、國人君と二人で話がしたいんだけど、いいかな？」

「え?! お前襲われるぞ!」

「大丈夫だよ! きつと」

「自分も信じてねえじゃねえか! やめとけよ!」

「だ、大丈夫だよ。うん。國人君はやさしいもん」

僕の言葉を聞いて國人君が笑った。

「ぐふふ……優しくするよ……ぐふふ……」

……。うん。

にこにこと笑う國人君を指さして雛ちゃん。

「あんなキモいデブと二人きりだなんて耐えられるのか?!」

「体重とか、容姿は関係ないよ。ここにいるのは國人君だもん。多分」

「確信持ててねえけど?! 本当にいいのか?!」

「大丈夫。二人で話せれば、もしかしたら國人君をあの頃に戻すヒ

ントが得られるかもしれないよ」

「……それは、確かに欲しいけど……」

「でしょ。だから、僕に任せて」

「でも、優大が危ない目に遭うのは我慢できねえ」

「安心して、雛ちゃん。僕なら大丈夫。だから任せて」

気持ちを伝える為に雛ちゃんをまっすぐに見つめる。雛ちゃんも真っ直ぐに見つめ返してくれる。

しばらく悩んだ結果、

「……………心配は尽きねえけど、分かったよ……。私は居間にいるからな、話が終わったら居間におりてきてくれ。危ないと思ったら叫び声を上げろよ。それ出来ない状況だったら、近くにあるあいつのお気に入りの人形をねじ切れ。ショックで二時間は動かなくなるから」

「えげつなっ」と國人君が驚いていた。

「うんわかった。ありがとう」

「ああ。……じゃあ、出来るだけ早く話し合いを終わらせろよ」

雛ちゃんが開け放たれていたドアをくぐって廊下に出た。

「うん」

ゆつくりと扉を閉めて行く雛ちゃん。

最後に閉じかけのドアから顔を出して言った。

「……じゃあな。叫んだら、すぐ駆けつけてやるからな」

「うんありがとう」

「……………うう、またな……」

最後に悲しそうな顔を見せて、國人君の部屋のドアを完全に閉めた。

「……………ぐふふ……………。優大タン、やっと二人きりになれたね……………」

椅子から立ち上がる音が聞こえる。

「うん」

僕は扉に向けていた体を國人君に向けた。

「って、もうすでに俺の大切なフィギュアを握りしめている?!
いつの間に! しかも一番のお気に入りのフィギュア!」

「大丈夫。僕國人君のこと信じてるから」

「信じているのならそれを置いてほしい!」

「一応、その、保険として持っとくね」

「ぐ、ぐふふ……………」

悔しそうに一步後ずさった。

「あの、その、久しぶりだね」

「んー。そうでござるねえ。俺が中一になってからまともに会っていないから、えーっと、六年ぶり？」

「それくらい、かな？」

「いやあ、優大タン。可愛く育ってまあ！　なんで早く俺に会いに来なかったのっ。運命の出会いがこんなに近くで待っているなんてお兄ちゃん衝撃！」

……。うん。

「あの、その、聞いてもいいかな」

「いいよ！　なんでも聞いて！　ちゃんとお風呂入ってるし！」

意味が分からないけれど、まずこの状況について改めて聞いてみた。

「國人君、本当にどうしちゃったの……？　昔は、アニメとか漫画とか、嫌い、だったよね……？」

椅子に座り直し國人君が笑った。

「あっはっは。いやあ、毛嫌いはよくないね。こんなに楽しいものに触れずに生きてきただなんて、人生損しちゃってたわ！　ひゃひ

「やひゃ！」

楽しそうにお腹を叩く。うう……。國人君に見えない……。

「その、運命の人に導かれたって言ったけど、それって、あの、ゲームの……」

「そうそう！ 何？！ 優大タンも人生やったの！？ いやあ！ いいよねあれ！ アニメも神懸ってて涙腺崩壊しまくりだったね！ 優大タンはどの子が——」

「ちょ、ちょっと待って！ 落ち着いて！」

「ん？ なんだい？ 他の話がしたいのかい？ しょうがないなあ。じゃあ優大タンの嫁は——」

「待って待って待って！ 一旦、ストップ！」

「……。……。……。はい、一旦ストップした。それで、優大タンの嫁は——」

「うん僕の嫁の話は置いとこう！ それで、聞きたいことがあるんだけど！」

「聞きたいこと？ もー。しょうがないなあ。なんでも聞いてくれたまへ」

やっと落ち着いてくれた……。

「あの、ゲームが入口だったのは分かったけど、なんで、その、そ

れに手を出しちゃったの?」

「むふふ。運命って奴さ……」

「あ、あの、もうちょっと、詳しく……」

「詳しくう? ……しょうがないなあ、優大タンの頼みだからダゾ
!」

……。うん。

「いやあ、それがさあ。本当に運命の人に出会ってしまったんだぜ」
きいきいと椅子を鳴らしながらくるくる回る。

「……ゲームの中の?」

僕の問いかけに椅子をピタッと止めた。

「違う違う。リアルの世界の、普通の男」

「男の、人?」

「うん」

その人が原因で……。一体どうやってあのアウトローの代表國人
君に美少女ゲームをやらせたんだろう。

國人君がその時の状況を話し出した。

「俺が新月になったら襲われまくってたのは知ってるよね?」

「う、うん」

『新月の災厄』だ。

「今から二年とちょっと前、荒れまくっていた俺は新月の夜に街をぶらついて襲われるのを待っていたんだ。でもその日は一向に闇討ちの奴らが現れなくて、俺はイラついていたんだー」

「闇討ちの人が来ないからイラつくって、すごいね……」

その頃はこうなるって思ってたんだろうね……。

「当時は喧嘩が楽しくてしょうがなかったからさあ。だから一向に始まらないファイトにかなりイラついてた。ただ無意味に街をぶらついてたんだ。……そんなときに、前方から背の高い男が何か袋を持ってこっちに歩いてきてたんだ。ニヤニヤしながら。それを見つけて、その時の状況と合わさってムカついた俺はそいつにケンカを売ったんだ」

「無茶苦茶だよ……」

でもそれが國人君だった。だから恐れられ、噂された。

「凄んで、胸ぐらをつかんで、腕を振りかぶって、そしていつの間にか負けていた」

「え?!」

あの國人君が?! 負け知らずで有名だったあの國人君がいつの

間にか負けていた?!

「ああ、びっくりした。驚くほどあっさり負けてしまったんだ。驚いた。無敗だった俺が、こんな優男相手に完敗するなんて……。シヨックだった。シヨック過ぎて泣いてしまったよ」

「えっと、もしかしてそのせいでこの道に？」

「違う。そんなに脆くない。俺はリベンジするために毎日そいつと出会った道で待ち伏せした。襲ってくるDQNどもを適当に潰しながらそいつを待った」

……もうドキュンって言わないでほしい。

「時間を潰すみたいに人に怪我を負わせてるんだね……」

挑むのが悪いんだとは思うけど……。

「そして何日目かに、またそいつが現れた。また袋を持ってにやにやしていた。ムカついたね。俺をあんな目に遭わせておいて、にやにや笑っているだなんて。俺はそいつの前に出て、また喧嘩を売った」

その人は全く悪くないけど……。

「……その結果は……?」

「またあっさり負けちまった……。俺は悔しくて何度も何度もそいつに挑んだ。でも何度も何度も負けた……。悔しかった。負けるわけねえと思ってた俺が連敗するだなんて……」

「……」

考えられない。あの國人君が負けるだなんて……。そしてそこからこうなってしまうだなんて考えられない……。

「負けて、負けて、負けて……。いい加減、俺にも分かってきた。こいつには勝てねえなって。諦めようとしたんだ。上には上がいる。負けを認めようって。そう思って、最後にしようと思って挑んだ日……。ことは起きた」

「……」

いよいよ、理由が聞ける。

「喧嘩を始める前に、そいつが変なことを言いだしたんだ」

「変なこと？」

「ああ。なんか、『君には愛が足りない。それじゃ俺には勝てない。これで愛を勉強すればいい。そして恋するといい』って言われて、袋から取り出された一本のゲームを手渡されたんだ……。普通なら、受け取らないか目の前で叩き割るところなんだけど、俺たちの間には変な友情が芽生えていて……。まあ、一応やってみるかっと思ったんだ……。どうかしていた」

「……」

「それが、間違いだったのかもしれないニャー」

「うん。間違いだね」

ニャー言うな。

「でも俺は後悔していない。むしろ感謝している！ あの人、俺の師だ！ 先生だ！ もう一度あの人に会いたい！ でも、この誰かも知らないし……」

「でも会える場所なら、知っているんでしょ？」

何度もこぶしを交えているのなら、そこへ行けば会えるはず。でも会えないのは……。もしかしたら何か理由があるのかも……。

「……………だって、そこまで行くの、疲れるし……」

「うん分かったありがとうフィギュアおいておくねさようならまたいつか」

「怒涛のように一言に詰め込んだね！？ 優大タンもう帰るの？ もっとゆっくりしていきなよ！ 明日学校休んじゃおう！」

「明日はもともと休みだよ……」

曜日感覚が無くなって……。

「ならこの部屋に泊まっていこうぞ！ ねえ、ねえ。いいよね、いいよね」

「ぎ、ごめんね。僕家に帰ってご飯作らないといけないから……」

「わお！ 花嫁修業中ですか！？ 俺の為に花嫁修業中なんですね？！ ありがとう！ いつでも嫁いでおいで！」

「さ、さようなら！」

「え？！ ちょっと待って！ こんな面白くない話だけで帰るの？！
ねえもっとオタトークで盛り上がるよ！ ねえ、ねえ！」

迫ってくる國人くん。

僕は慌てて國人君の部屋を出て居間へ向かった。

うう……。実は結構怖かった……。殴られるとかじゃなくて、貞操の危機の意味で……。

居間の扉を開ける。居間では雛ちゃんがうろうろと落ち着きなく歩き回っていた。僕が入ってきたのを見てホッと息をつき安心の表情を見せて近づいてきた。

「何もされてないよな……。よかった」

ぽんぽんと僕の体を触って異変がないかを調べてくれる。

「國人君は優しいから、何もしてこないよ」

多分。一晩一緒に過ごしたらどうなるか分からないけど。

「優しくねえよあんなデブ。それで、何か分かったのか？」

一歩離れて聞いてきた。

「うん。外に出たくないらしいということが分かったよ」

「……あのデブ……」

雛ちゃんが呆れたように怒っていた。

「雛ちゃん。國人君に会わせてくれてありがとう」

僕は頭を下げた。

「いや、あんなデブ何の役にも立たなかったろ。悪かったな……」

「ううん。とっても、参考になった」

「参考って、あんな奴のどこが」

「……人って、変わるんだなあって！ だからきつと、僕も変わるよね！ 自信がついたよ！」

「……なんともまあ前向きな受け取り方だな。でも役に立ったのなら私も救われる。あんなクソ兄貴でも人のためになれるんだな」

雛ちゃんが笑った。

かと思えば、突然困惑したような顔になった。

「……私は、お前に変わって欲しくねえけど……」

「え？ でも、こんな情けない性格じゃあ、雛ちゃんも友達として嫌でしょ？」

「んなことねえよ。優大が優大だから、その、好きなんだよ……。……い、今の好きってのは、その、なんだ。別に、深い意味がある

わけじゃあ、ねえぜ」

「うん。分かってるよ。勘違いできる身分じゃないもん。あ、でも、僕も、雛ちゃん、す、好きだよ」

「つつつ。……そ、そうか。うん。そうかそうか」

お互い顔を真っ赤にする。こういうことを面と向かって言うのは、恥ずかしいよね。

「あ、そう言えば」

恥ずかしいといえば。

「ん？　なんだ？」

「あの、僕、國人君とキス――」

僕が言い切る前にまた顔を赤くした雛ちゃんが大きな声で言う。

「そのことはもういいんじゃないかなあ？！　なあ！　夢ってことでいいんじゃないかな？！」

「う、うん。そう、なのかな？」

「そうそう！　気にすんなよ！」

「うん。なら、気にしないことにするね」

「そうしろそうしろ！　別に嫌じゃねえだろ？！」

「え、い、いや、その、僕、男の人と、その、そう言うことするのは、あまり、好きじゃないけど……」

「ま、まあ、そうだよな。でも安心しろ。あれは帳消しになったはずだから」

「帳消し？　どういうこと？」

「……」

赤面して怒った顔をする。

「わ、私にかかれば、あんなの……、帳消しにすることくらいたやすいんだよ。それで納得しろっ」

「う、うん」

なんだか、これ以上聞いたら雛ちゃんの顔から火が出そうだ。だからもう聞くのはやめよう。

倒れる前に感じた國人君の唇の柔らかさと、夢の中で繰り返した感じた柔らかさの違いに妙な違和感を覚えながら、僕は追い出されるように雛ちゃんの家を後にした。

生徒手帳に何を書けばいいのかわからない

雛ちゃんの家から帰ってきた僕は居間に入り姉と弟に帰りの挨拶をする。二人とも笑顔で返してくれた。

ソファに腰を下ろしている弟の隣に座りテレビに目を向けた。何故かお姉ちゃんがダイニングのテーブルから僕の隣に移動してきたが気にしないようにしよう。

テレビから流れてくる夕方のニュース。

隣町で交通事故があったらしい。危ないね。

次のニュースはまた隣町。よく分からないけれど、爆発があったらしい。

そのほか色々なニュースが垂れ流されてくる。

僕はぼうつとそれを聞いていた。

そしてふと思い出す。

そうだ。今日は金曜日なので制服を洗濯しなければならない。

まとわりついてくるお姉ちゃんを引きはがして制服を洗濯器の中に入れる為に洗面所に入った。

きちんとスラックスのポケットの中身を確認しなくては洗濯物が大変なことになる。

僕はポケットの中に手をつ込み裏返した。

裏返してみても僕は首をかしげた。

おかしい。いつもポケットに入れていた生徒手帳が無い。どこかで落としてしまったのか。

いつ落としたか全くわからない。今日あったかどうかもわからない。

念のため自室に戻ってカバンの中身をひっくり返してみるが生徒手帳は見つからない。

もしかして……、昨日山を登った時に落としたのかな。
きつとそうだ。

僕は日が落ちる前に見つけようと、大急ぎで山へ向かった。

「この辺りかなあ」

いつも登る山道を、ゆっくり辺りを見渡しながら歩いて行く。夕日に照らされ、赤く燃える炎のように生い茂っている草木。

今日はもう駄目かもしれない。すぐに暗くなる。

通り慣れた道でも暗くなれば別だ。光があるのと無いのでは別世界なのだ。

学生証は生徒手帳とは別に用意されているので、生徒手帳なんて使ったことないし使い方わからないし、別にすぐに見つけなければいけないものでもないはず。生徒手帳って、名前以外なにか人に見られてはまずいもの書かれていたっけ？

まあ、とにかく。必要のないものだろうし今日はやめようかな。そうしよう。もう暗いしね。

そうはいっても落とし物が見つからないのは気持ち悪いのでとりあえず秘密基地までの道のりは歩いてみるのだけれども。

結局秘密基地まで行っても見つからなかった。

そもそもここで落としたわけではないのかもしれない。

あとあり得るとすれば、校舎裏か、雛ちゃんの家か。

「でも、多分ここだと思っただけだなあ……」

見つからなかったらどうしよう。再発行してくれるのだろうか。再発行の手続きは？ どこですればいいのだろうか。担任の先生に言わなければいけないのかな。やだな。また何か言われる。代わ

りに学年主任の先生に聞いてみようか。

……こんなことはここじゃなくても考えられるよね。帰ろう。もう暗くなってしまう。

でも、その前に。

靴を脱ぎ、狭い秘密基地に入る。僕の身長でも屈まなければ入ることはできない。中は僕が四人集まればそれでもう満室になる狭さ。そこで寝転がってみる。

秘密基地の真ん中に突き刺した棒が天井のビニールシートを支えている。これのおかげでシートがたわまない。雨が降っても水が溜まらない。あの頃の僕らにしてみれば劇的な発明だった。

青いビニールシートが木々をすり抜けてきた赤い夕陽を浴びて紫色に光る。

もうすぐ陽が落ちる。そうなれば青も赤も関係ない。すべてが闇に包まれる。この山の中では、月明かりだけが味方だ。しかしそれだけでは心もとない。懐中電灯でも持って来ればよかった。天高く僕らを照らす月よりも、僕の手握られて足元だけを照らす懐中電灯の方が心強い。今日はその心強い味方を持ってきていない。だから暗くなる前に帰ろう。

僕は体を起こし、秘密テントの中から這い出た。

靴を履こうとしゃがみ込んでいるところに、

「わっ！」

「うわあああああああ！」

突然横かけられた大きな声に驚き腰を抜かしてしまった。

「ななななに?!」

破裂しそうな勢いで収縮を繰り返す胸に手を当てながら、僕は声

の正体を確かめた。

「偶然」

楠さんだった。楠さんが後ろで手を組み立っていた。

制服ではないのでいったん家に帰って着替えてきたのだろう。

デニムのホットパンツに黒のストッキング。上はTシャツ一枚。

足はハイカットのスニーカー。初めてここで目撃したときよりは山を登りやすい格好だと思う。

いきなり声をかけられた驚きと楠さんの非日常レベルの容姿にぼうつとしている僕を楠さんが無表情で見下ろしている。

「こんなところで何してるの？」

「な、なんでもないよ」

驚いてみっともなく片手とお尻をついていた僕は、楠さんの前でこんな格好は見せられないと膝を抱えて座った。

「ふーん。でも何か探してたでしょ」

「え？ 見てたの？」

僕より先に来ていたということか。

「見てたよ。また私を追ってきたのかなと思って、木の陰に隠れて見ていたんだけど、何か落とし物を探しに来たみたいだね」

「うん。生徒手帳を落としちゃって。ここかなって思ってきたんだけど、見つからなかったんだ」

「ふーん。手伝ってあげようか」

「え、いいよ。もう暗くなるし、ここに落としたんじゃないかもしれないし」

「一人じゃ見つからないでしょう。手伝ってあげるって言ってるの」

「そんな。悪いよ」

「悪くない。代わりに、私が見つけたら一つ言うことを聞いてもらうから。それでいいでしょ？」

それが狙いだったのかな。

しかし、そんな裏があろうがなかろうが、手伝ってくれることはとても助かる。ここで断る理由がない。

「あの、ううん。楠さんに、迷惑かけられないから、大丈夫だよ？
一人で探せるよ？」

けれど、僕は断っていた。

一向に物探しの手伝いを認めない僕に楠さんが苛ついた表情を見せた。

「……なんで手伝うって言ってあげてるのにその好意を受け取らないの？」

「え、あの、ごめん……」

「謝るんじゃないくて、理由を聞いているの」

怖い……。でも、楠さんの言う通りだ。

「その、楠さんに、迷惑がかかると思っ」

「私から言い出したのに迷惑も何もあるわけないでしょ」

「は、はい……」

「まあ、手伝ってほしくないのなら断ればいいけど」

「そんなことは、無いけど……。手伝って欲しくないことは無いです」

「手伝ってほしいのに、君は断ったんだ。迷惑がかかるからって」

「うん……」

楠さんが大きなため息を吐いた。

「君さ、それよくないよ」

それとは、断ったことだね。

「う、うん」

「なんでだと思う？」

「え。えっと、せっかく手伝うって言うてくれているのに、その好意を受け取らなかったことが、失礼にあたるから、かな……」

「違うよ」

「え？」

違うらしい。

「佐藤君はさ、それが優しいと思ってるんでしょ？ 他人に迷惑をかけないことが、人に優しいって思ってるんでしょ？」

僕は何も言えない。何故だかは分からない。とにかく楠さんの言葉聞く。

「それは優しさなんかじゃないよ。いや、優しさかもしれないけど、少なくとも君の行動の裏にある物は優しさなんかじゃないよ」

楠さんが体育座りをする僕と視線を合わせた。

「君のそれはね、どこからどう見てもただの臆病」

「……臆病……？」

臆病。確かに、僕は臆病だけど……。この場面でそれを言われるとは思ってもみなかった。

「君は臆病。人に手伝って貰って借りを作るのが怖い。人と支え合っていくのが怖い。それじゃあ、友達なんかできるわけないよ。距離を縮めようとしなないんだから」

「……そう、なのかな……」

「そうなんだよね、残念ながら。君は傍観者で満足してていいの？
せっかく副委員長になれたんだからもっと人生楽しんでみていいんじゃない？」

「うん……」

僕は……。

「……あまり積極的に楽しみたいとは思っていないみたいだね。どうして？ 主体的に過ごした方が楽しいでしょ？」

「うん……。それは、そうかもしれないけど……」

楠さんが僕の肩に手を置き、力を込めた。

「言いたいことがあるなら、はっきり言ってね」

「は、はい」

怒られるところだった。

「僕なんかが、自発的に行動したって、誰も楽しくないから……。だから僕は、受動的に、みんなが楽しんでいるものに巻き込まれて生きた方が、楽しいし、その、迷惑をかけないですむし……」

「迷惑ね。人を困らせたくないから自分が困る。バカみたい」

「う、うん……。自分でも、そう思う」

「自発的に生きられないから受動的に生きるね……」

楠さんが立ち上がった。

「それが楽なんですよ。恥もかかないで済むし、傷つくことも無い。迷惑をかけたくないとか言ってるけど、結局は楽だからでしょ」

「……そう、かもしれない……」

「そうなんだよ、きっと。巻き込まれる人生はさぞ楽だろうね。流れにのるだけ。自分は一步も動かないんだから。でもそれ、疲れないけど楽しくないでしょ」

今までそうやって生きてきた僕の人生。楽しくないか、楽しかったかと聞かれたら、迷わず僕は答える。

「楽しいよ。だって、今まで悲しい出来事が無かったから」

「楽しいと悲しくないは別物でしょう」

……そうかもしれない。

「それと」と、楠さんが言う。

「君は、自発的の反対が受動的だと思っているらしいけれど、自発的の反対は強制的なんだよ。君は今まで強制的な人生を歩まされてきたんだよ。強制的な人生が楽しいだなんて思わない。強制的に楽しまされるだなんて、考えただけでも腹が立つ」

強制的に、楽しませてくれるのならそれでいいんじゃない……。

「自発的な人生を送ってこなかった人は、無理やり人生を選ばされる。どう？　こう聞いたらちよつとは自分で人生を作る気になるんじゃない？」

楠さんが前かがみになり僕に少しだけ顔を近づけた。ちよつと緊張してしまう。

少し考えてみる。

強制的に送られる人生。

確かに、楽しそうではない。

今まで僕は『自主的』に『受動的』に生きてきたと思っていた。でもそれは違うらしい。

僕は『強制的』に『受動的』だったみたいだ。

……よくわからなくなってきた。

でもよくないことだけはわかる。

これじゃあ、よくないんだ。

「うん。少しは、うん。積極的になろうと思った」

「そっか」

体を起こしほんの僅かだけ笑う。

「それならよかった。だったらまず、その臆病を治さなきゃね。その臆病のせいで傷つくのを恐れるし、他人の目を気にして恥ずかしがる。言いたいことは言ってやりたいことはやる。勇気を出して、自分で人生を選ぶ。勇気を出せば人生変わるよ、漢気見せてよね」

「うん」

人生が変わる、か……。

……國人君もあれだけ変わったんだ。僕だって、変わるはず。
うん。

僕は心の中で頷いた。頑張ってみよう。
小さく決心をした僕の前でしゃがみ込み、また僕と視線を合わせ
て楠さんが言う。

「で、生徒手帳の話だけど。手伝うから、私が見つけたら一つ言う
こと聞いてね」

「そ、それは、大丈夫です」

「……でた臆病……」

「え、いや」

一つ言うこと聞いて、と言うフレーズが怖いのは仕方がないと思
うんだ。

「あーもういいよ。一人で探せばいいよ」

立ち上がり、そのまま歩いて行く。

そして立ち止まらず、思い出したように、

「あーそうそう。今アドバイスしたことでこの前の草むしりの一件
はチャラね」

背を向けながら手を振りそう言う楠さん。

少し距離が開いたので僕は手でメガホンを作り大きな声で言った。

「草むしりの事って、僕全然気にしてないよー？」

「君が気にしてなかりうが関係ない。私が気にしていたんだから」

大きな声ではないけれど、とてもよく響いてくる。やっぱり楠さんは凄いと思った。

しばらく歩き、立ち止まる。

何事かな？　　とっていると、楠さんが振り返り僕を指さして言った。

「じゃあね、佐藤君。人生楽しみなよ」

楠さんが笑った。

無邪気とか、屈託がないとか、嫌味が無いとか、まだ色々と褒めたいけれど、これだけじゃ足りないけれど、それよりなにより、一番に言いたいことは、楠さんの笑顔は、とにもかくにもけた違いに綺麗だった。

楠さんが去った後しばらく何も考えられなかった僕を誰も責めようがないはず。

その後、楠さんからのメールで正気に戻った僕。

そのままメールを開封し、『郵便受け』と書かれたメールに首をかしげたが、家に帰って郵便受けを見ると僕の生徒手帳が入っていた。

どうやら、楠さんが見つけて入れてくれていたらしい。

『見つけたらひとつ言うこと聞いて』というのは、勝ちが見えてくるから持ちかけられたことだったようだ。……承諾しなくてよかった。

デジタル・バーサタイル・ディスク

いろいろと忙しかった土日はあっという間に過ぎて行き、月曜日。土日に色々と考えて、僕は一つ作戦を思いついた。これがうまく行けば、小嶋君も暴力をやめてくれるはずだ。その為に必要なのは根気と誠意と、そして勇気だ。

「小嶋君っ」

「……」

朝一番に声をかけて、不機嫌そうな目で睨み付けられる。でもひるんではダメだ。

「あ、あのっ」

「うるせえ……。てめえ、うるせえんだよ……。！」

勢いよく立ち上がり、僕の胸ぐらをつかんできた。またトイレに連行されてしまうのだろう。でも、その前に。

「これ！　これを、小嶋君に！」

「あん？」

僕は一枚のDVDで自分の顔を隠した。

「その、これを是非小嶋君に……」

「……」

胸ぐらをつかんでいた手を離し、僕の手からDVDを奪い取る。
そしてそのままDVDをへし折った。

う……。予想していたけれど、かなりショックだ……。

そのあと僕の顔めがけてそれを投げつけ、満足したのか僕をトイレに連行することなく腰を下ろした。

……うう……。また次の休み時間に挑戦しよう……。

そう言うわけで、僕の作戦はDVDを見てもらうこと。

朝も合わせて、各休み時間と放課後に合計七回DVDを渡そうとしたけれど見事全部へし折られました。おまけに放課後、いつもとは違う場所、屋上で殴られました。いえ、過去形ではありません。現在進行形で殴られています。

「なんなんだよてめえは。気持ち悪いんだよ」

「……うう……」

胸ぐらをつかまれ睨み付けられる。

「嫌がらせか？ あ？」

「ち、違うよ」

「ならなんだよ。おら。言ってみろよ」

何度も何度もびんたされる。

「い、いたっ、その、僕、小嶋君に見てもらいたいものがあって」

「てめえから受け取ったも誰が見るか！」

思いつきり顔を殴られた。

地面に倒れ込む僕を小嶋君が睨み付けている。

「てめえ、明日も今日みたいなことしやがったらただじゃおかねえからな」

「……」

「……ちっ」

舌打ちをして早足で校舎内に戻って行った。

「うう……。踏んだり蹴ったりだよ……」

DVDは割られるし、殴られるし……。

「先行きが暗いよ……」

痛いよ……。顔とか、精神とか……。でもあきらめられない。
僕がなよなよとコンクリートの上にへたり込んでいるところ、

「……楽しそうなことしているね」

誰かが屋上の影から出てきた。

「え、あれ、楠さん？　もしかして、みてたの……？」

「うん。佐藤君が小嶋君に連れていかれたのが気になってね。後を追ってきちゃったんだ」

恥ずかしいや。情けないところを見られてしまったね。

「ごめんね。怖くって助けに行けなかったよ。痛そうだね」

苦笑いを浮かべながら近づいてきた。

「ううん。痛いけど、僕が悪いから」

僕の傍にしゃがみ込む楠さん。

「へえ、君が悪いんだ。なんだか朝から小嶋君にまわりついていたら、何をしていたの？」

「あれは、僕が小嶋君に見せたいものがあって、一生懸命勧めていたの。進め過ぎたみたいで怒られたというわけです」

「ふーん。それは佐藤君が悪いね。無理やりはよくないよ」

「う、うん。そうだね。僕も無理やりはよくないと思う。でも僕は無理やりじゃないよ。一生懸命勧め過ぎただけ」

「それは無理やり。無理やりはよくないよ。でも――」

楠さんの顔が陰しいものになった。

「――暴力はもつとよくないよ」

小嶋君を責めているのかもしれない。でもそれは違う。

「暴力はよくないかもしれないけれど、小嶋君のは教育だから」

あまり勧め過ぎるなよと教えてくれているんだ。

しかし、楠さんとしては認められないらしい。

「それでもダメなものはダメ。教育だろうがなんだろうが手を出すのは罪なんだよ」

「え、でも、教育なら……」

悪い事をしたら、叩かれても文句は言えないと思うけれど。

「駄目なものはダメ。自分の身を守るため以外の、責任が持てない暴力は絶対によくない」

責任。よく分らないや。

「責任って、なに？」

「責任は責任。振るった暴力には絶対に責任が伴うの。罪を償うと言えれば分りやすい？」

「罪を償う……」

教育的指導も、罪なのかな。

「子供が悪い事をした。先生は殴ろうか躊躇っています。もうこの時点でその先生はダメ。ダメダメ。戸惑う時点でダメ。戸惑うっていうことは、PTAとか親の反応が怖いってこと。親たちの反応が怖いってことは、自分の保身を考えているってこと。自分の保身を考えているってことは、子供の為に振るう暴力ではないってこと。つまり？」

「つまり？」

「つまり、先生が振るおうとしていたのは自分の為の暴力なんだよ。悪い事をした子供を叱る為じゃない。言うことを聞かせる為に振るおうとしている暴力ってこと。罪を背負うのを恐れているから戸惑うんだよ」

「そうなのかな……」

「そうなの。本当に子どもの為を想って、子供を正しく教育するためなら自分の事なんか考えずに殴るべきなんだよ。責任を持って、殴るべきなんだよ」

「責任って、どう責任をとればいいの？」

「PTAに怒られればいいよ。最悪、怒られて辞めればいいんじゃない」

「子供の為に叩いたのに、それほど重い責任を背負わなきゃいけないのかな……」

先生がかわいそうだよそれじゃあ。先生だって人生があるんだし、

職を失うのはいきすぎだよ。

「それが責任って奴だよ。暴力はそれほど重い」

暴力はいけないことだと思うけど……。そこまでのかな。

「暴力をふるう人はその罪を知っておかなければならないんだよ」

罪。

確かに暴力は罪だ。

それを知ったうえで行使しなければならぬものだ。楠さんは言いたいらしい。

「えっと、でも責任が取れば殴ってもいいの？」

「いいと思うよ」

「そうなんだ……」

それは、なんだかおかしな気がする。

「理不尽な物でもいいの？」

理不尽な暴力はどんな状況でも認められないはず。責任が取れるからって認めていいものではないよね。

しかし、楠さんは言う。

「いいよ。殴った後相手を納得せしめる責任の取り方ができるなら」

「……でも、理由がないのなら……ダメだと思う」

「まあね。だからそんなものにはとんでもない責任が伴うんじゃないかな。死刑とか」

「そ、それは、重いね……」

確かに、自分の命を懸けて理不尽な暴力をふるうのなら、まあ、よくはないけれど、その覚悟はすごいと思う。

「重いよ。暴力は重い。私は小嶋君にそんな責任が取れるとは思わないね」

「小嶋君は、責任取る必要ないよ」

だって、僕が悪いんだから。

「……はあ……、君がそれでいいのなら、別にいいと思うけど。責任なんて言ってもあくまで被害者が納得できればいいことだし」

楠さんが立ち上がり、どうしてもよさそうに手を振って屋上から出て言った。

「……何が伝えたかったんだろう？」

よく分からないや。

でも、もしかしたら僕は悪くないって言うてくれたのかもしれないね。

違うかもしれないけど……。

結局作戦初日は小嶋君に話も聞かれずに終わってしまった。でも、僕は諦めない。

しかしDVDはあと一枚しかないので明日からは口で説得して見せよう。

プッシュプッシュ

二日目。

朝一で、小嶋君の元へ向かう。向かっている途中ですでに睨み付けられているが僕はひるんでいられない。

「小嶋君。おはよう。僕小嶋君に見てもらいたいものがあるんだ」

と、言った瞬間。小嶋君が立ち上がり、僕を掴んで投げ飛ばした。派手に机をなぎ倒しながら転がる僕。いきなりのことで驚いた。

「いたた……」

痛いで済んでよかった。

「てめえいい加減にしやがれ！ 何なんだよ一体！ ぶっ殺されてえのか!？」

小嶋君がとても怒っている。

「ご、ゴメン。でも、僕小嶋君に見てもらいたいものが……」

ずんずんと近づいてくる。う、怖い……。

小嶋君が近づいて、上半身を起こしていた僕の肩に足を置き勢いよく押す。

「俺に何を見せてえんだよ。何の嫌がらせだよオラ。言ってみろよ」

そのあと何度も何度も僕のふくらはぎを蹴ってくる。痛い。

「嫌がらせなんかじゃ、ないよ。あの、僕、小嶋君に見てもらいたいアニメがあつて……」

「アニメエ？ 誰がそんなクソみたいなもの見るんだよ！ いい年こいてアニメアニメ気持ち悪いんだよこのオタク野郎！ さっさと死ね！」

そう吐き捨て、自分の席へ戻って行った。

「う、ごめんなさい……」

つぶやいてみても、多分聞こえてない。
ダメだ。もう話を聞いてくれそうにない。また時間をおいて話そう。

一時間目、体育。

今日の体育はバスケ。

僕は小嶋君にマンツーマンでマークする。

「ねえ、小嶋君」

「……イライラ」

「僕小嶋君に見てもらいたいものが、」

「イライライラ！」

う！ 押された！
審判が笛を吹く。

「ファール」

こちらボールになった。

四時間目、美術。

今日の美術は校内スケッチ。

校舎内を自由に歩いていいので僕は小嶋君に着いて行った。

「ねえ、小嶋君」

「……イライラ」

「僕小嶋君に見てもらいたいものが、」

「イライライラ！」

うわ！ 蹴っ飛ばされた！

これはフレグラントファウルだよ！？ ……美術だけ……。

昼休み。

食堂にて。

「小嶋君」

「うるせえ！　ンだよしつけな！　キモいんだよ！」

僕のしつこい勧誘に耐えかねて小嶋君が怒鳴り声を上げる。食堂中の視線が一気に集まり僕は少し恥ずかしい。

「てめえ、まだ殴られてえのか？！」

「な、殴られたくはないけど、その、僕、見てもらいたいものが……」

「お前はそれしか言えねえのか？　昨日からそればかりじゃねえか！　んなもん見ねえからさっさと失せろボケ！」

「ゴメン……。じゃあ、また次の休み時間に」

「くんなよ！　うっとおしいんだよお前！　諦めろよ！」

「それは、できない……」

「なんで俺に見せようとすんだよ気持ちわりいなあ！　お前はホモか？！」

「ち、違うよ。僕はホモなんかじゃないよ」

「うるせえオカマ野郎！　とつとと視界から消えろ！」

お腹を殴られた。

これ以上説得してもダメなようなので引き下がることにした。
うう……。なかなか強敵だよ……。

放課後。

ホームルームが終わり真っ先に向かうところは当然小嶋君のところ。

「こじ、」

「うるさいもうくんな」

それだけ言って、僕の方をちらりとも見ずに教室から出て言った。
……今日もダメだったね……。
落ち込んだじゃうなあ……。

「お前何してんだ？」

雛ちゃんだ。

雛ちゃんが不思議そうに僕を見ている。

「休み時間の度に小嶋に話しかけに言ってたけど、どうしたんだお前。いままで散々殴られてきたんじゃないの？」

そうです。しかも今朝は投げ飛ばされました。でも雛ちゃんはまだ学校に来ていなかったから見ていないね。

しかしここで殴られていると認めてしまっただけはいけない。雛ちゃんと小嶋君が喧嘩になってしまふといけないから。

「僕はただ小嶋君と仲良くなろうと思っているだけだよ」

「仲良くって、今すげー拒絶されてたぞ。無理だろ。そもそもどうやって仲良くなるってんだよ」

「うん。僕は、小嶋君の趣味とか好きな物とか分からないから、とりあえず僕の好きなものを見てもらって小嶋君にもそれを好きになってもらおうと思ってるんだ」

「相手の好きなものを作ろうってか。そりゃまあ、好きになっくれりゃあ話題は作れるよな。でも優大の好きな物ってなんだ？」

「僕の好きなものは、アニメだよ」

「……アニメ、ねえ……。アニメとか漫画とか、あのくそデブの事しか思い浮かばねえわ。気持ち悪い」

雛ちゃんの顔が渋くなった。

「え、もしかして、雛ちゃんもアニメとか漫画が好きな人って嫌いな？ 楠さんも、小嶋君も言ってたけど、オタクって気持ち悪いって思ってる……？」

そうだとしたら、もしかしたら僕もそう思われているのかもしれない……。

でも雛ちゃんはカラッとした顔で言う。

「別に個人の趣味に口出しするつもりはねえよ。お前が好きなならそれでいいじゃねえか」

「でも、今國人君の事思い浮かべて、その、気持ち悪いって……」

「それはあのデブだからだ」

「え、容姿が嫌いなのか？　それは、その……あまりいいことじゃないと思う、ケド……」

「容姿じゃねえよ。私だって他人の容姿をとにかく言える顔じゃねえし」

雛ちゃんは可愛いよ？　言わないけど。

「あいつ、気持ちわりいじゃん。行動とか。発言とか」

「……」

言葉に困ります。

「そういうところが気持ち悪いって言ってんの。だから別に優大のことは気持ち悪いとか思ってねえぜ。だから安心しろ」

「うん」

突然小声で話し出す雛ちゃん。

「……でさあ、その、兄貴の事、出来れば周りの奴にしゃべらないで欲しいんだよな。優大なら言いふらしたりしないだろうけど、一応な」

「うん。分かった。内緒にしておくね」

「悪いな」

雛ちゃんの気持ちがわかる僕は良い人間ではないね……。

「それで、なんで小嶋と仲良くなりたいたんだ？」

「え、べ、別に、理由は……」

「あー、なるほどな。殴られるから、仲良くなってそれを防ごうってか」

「殴られてなんかいないよ？」

「なんだよ。何とかしてほしかったら私に言えばいいのに。即日解決して見せるぜ」

「な、殴られてなんかいないってば！」

「はいはい。にしても、仲良くなりたいたいからアニメを勧めるねえ……」

「え、まずいかな」

「別にそういうことが言いたいんじゃないけどおー。まあなんだ。お前が頑張ってるのを邪魔できねえし。しっかりやれよ」

「うん。……？」

何か、気になるのかもあるのかな……。

まあ、いいや。雛ちゃんに応援してもらったし頑張ろう。

作戦開始二日目はうっとうしがられて終わった。

三日目。

朝。

「小嶋君」

「……はあ……」

昼。

「小嶋君」

「……はあああ……」

放課後。

「小嶋君」

「……。お前、よく諦めねえな……。しつこすぎる……」

あきれたような顔で僕を見る。

「どうしても、見てもらいたいから」

「見ねえから」

「面白いよ？」

「見ねえから」

「でも、」

「見ねえから」

カバンを持ってそそくさと教室を出て行った。

あーあ……。今日も失敗か……。

今日の結果。

三日目にして、僕はどうしようもなく呆れられたみたいだ。

四日目。

朝。

「小嶋君」

「……はっ……」

いきなり笑われた。

「ど、どうしたの？ 僕何かおかしいかな」

「いや、お前色んな意味ですげえな。見ねえっての」

「でも、面白いよ」

「どうでもいいわ。見ねえよ」

小嶋君が机に突っ伏した。

これ以上話を聞いてくれそうにもないし、仕方がない。引き下がろう。

昼。

「小嶋君」

「ぶはっ。またお前かよ」

前より大きく笑われた。

「お前マジなんなんだよ」

苦笑を浮かべながら小嶋君が言う。

「見ないっつの」

「それでも見てもらいたいんです」

「俺じゃないやつに見てもらえよ。いくら来ても無駄だって」

「で、でも……」

「もうくんなよ」

ひらひらと手を振って、男子達の輪に混ざって行った。
さすがにそこにツッコむ勇氣はないね……。
僕はすごすごと自分の席へ戻った。

放課後。

「小嶋君」

「ははは。またきやがった……」

あきれ返って笑いしか出ないみたいだ。

「あの」

「みないみない。じゃあ俺部活が忙しいから。もう来るなよ。時間の無駄だぞ」

僕の話を全く聞かずに去って行った。

うう……。ダメなのかな……。

今日の結果。

作戦開始から四日目、僕は小嶋君の笑顔が見れた。これは小嶋君との仲が進んだと言ってもいいのかもしれない。

そして、五日目。

精神攻撃してたっけ?!

「悪かった……俺が悪かった……」

ぶつぶつと口から何かが漏れているけどよく聞こえない。

「あの、これ。僕のおすすめアニメ」

コピーした最後の一枚。これが割られたらまたコピーする作業で土日を潰さなければならない。

小嶋君が僕の持っているDVDを一瞬見て首を振った。

「俺、見ねえって……。見ないから、そいつをしまってくれ……」

「でも、とっても面白いんだよ？　きっと小嶋君も気に入るよ」

「……やめてくれー……かんべんしてくれー……」

死にそうだった。

ど、どうしよう。こんな姿を見せられたら僕困ってしまうよ。もうこれじゃあ勧められない。まるで僕がいじめているみたいだよ。どうしようかと、おろおろしているところに誰かが声をかけてくる。

「オハヨウ優大。ン、ドウシタンダ？」

雛ちゃんが何故か棒読みでやってきた。

「あ、おはよう雛ちゃん」

「優大、イマハ、ドウイウ状況ナンダ？」

そんなことより雛ちゃんの状況の方が気になるよ。

「えっと、僕が、小嶋君にアニメを勧めているんだけど、小嶋君が遠慮しているっていう状況」

「ヘエ、……ダツたらあ、私が見てやるよ！ な！？ 優大のおすすめアニメ見てみたいなあ！ いいだろ？ 私に貸してくれ！ 優大のおすすめアニメを私に貸して仲良くなろうぜ！」

小嶋君に貸そうと思って焼いてきたけど……、まあ、仕方がないよね。小嶋君が見たくないっていうんだもん……。わざわざコピーしたものが誰にも見てもらえないなんて悲しいし、見たがっている雛ちゃんに貸そう。うう……。作戦失敗だよ……。

「うん。小嶋君が見ないのなら、雛ちゃんに――」

僕が雛ちゃんにDVDを渡そうと差し出したとき、それを横から奪われた。

僕の近くにいたのは雛ちゃんと小嶋君の二人しかいないので、奪ったのは当然小嶋君だ。

「ちょっと待てよ」

DVDを持って雛ちゃんを睨み付けている。

「んだよ。それは今から私が借りんだよ。てめえは寝てろカス」

「うるせえ。このDVDは佐藤が俺に貸すために持ってきたものな

んだよ。誰が有野に渡すか」

し、しまった。雛ちゃんと小嶋君は仲が悪いんだった！ 喧嘩が始まっちゃったよ！

「小嶋、てめえいらねえいらねえ言ってたじゃねえか！」

あれ？　なんで知っているんだろう？　今来たんじゃないのかな？

「はあ？　知らねえよ。これは俺が借りるんだよ。有野はどっかいってろ」

「んだとてめえ！　さっさとDVDよこせ！」

「うるせえ！　てめえは俺の次だ！」

バチバチと火花を散らす二人。

「小嶋の次なんて嫌に決まってるだろうが！　ブツ飛ばされたくないかったらそれよこせ！」

「ぎゃーぎゃー喚くな！　佐藤に決めさせればいいだろうが！」

「ああ、いいぜ。そうしよう」

おろおろと間近で見守っていた僕に二人の視線が集まる。

「う」

「佐藤。これは俺に貸してくれるために持ってきてくれたんだよな

？　なら、俺だろ」

「優大。こいつ見ねえぞ。嫌がってたじゃねえか。でも私は見る。ちゃんと見る。お前から勧められたから全部見る。二回見ちゃうもんね」

「俺だってちゃんと見るに決まってるだろう。適当言ってるじゃねえよ有野」

「うるせえ黙れタコ。なあ？　優大。私に貸してくれるよなあ？」

雛ちゃんの笑顔。

こ、怖い。何故だか怖い。

「これは俺に貸してくれる予定だったんだろ。なら俺に貸すべきだ」

「予定は未定なんだよ。いいからそれよこせ」

「渡さねえよ。俺が見た後に見ればいいじゃねえか」

「それが嫌だって言ってるのが聞こえねえのか？」

「あーはいはい。じゃあ、俺が先に」

「勝手に決めてんじゃねえ！」

うう！　怖い！　逃げていいかな！

「佐藤、俺に貸してくれるよなあ」

「優大、私だろ？ 私に貸してくれるよな！」

「う、うう……」

どうすればいいんだろう……。..
って、考えるまでも無いよ。

「その、小嶋君に、見てもらいたいな」

「よっしゃ」

小嶋君が嬉しそうにガッツポーズを見せた。
それとは対照的に雛ちゃんがとても悲しそうな顔で僕の肩を揺さぶってきた。

「ええー！ なんでだよ優大！ 私には見せたくねえってのか？！」

「ち、違うよ。その、あの、ここでは言えないけど……」

國人君の家にBDボックスがあったよって言いたい。けどお兄ちゃんのことを隠したがっているみたいだし言えないよ。あとで説明しておこう。

「とにかく、それは、小嶋君に貸すね」

「ああ、サンキュウ。月曜返すわ」

「……………ちくしょう……」

雛ちゃんが悔しそうに僕らの元から離れて行った。

「へっ。ざまあみやがれ」

雛ちゃんの後ろ姿を見て、小嶋君がとても嬉しそうに笑っていた。
……ちよつと聞いてみよう。

「あの、小嶋君、雛ちゃんのことを嫌いなのか？」

「……嫌いだな。大っ嫌いだ」

「な、仲良くすれば、いいと思うけど……」

「……まあ、そりゃ仲良いことはいいことだと思うけど。……..
お前は有野と仲良いな。どういう関係だ」

「僕？　僕はただの幼馴染だよ？」

「……それだけか？」

「うん。それだけだよ。ずっと話していなかったし、幼馴染未満かも」

「……そうか」

どこか安心している様子の小嶋君。

「どうしたの？」

「なんでもねえよ。これ借りるからな」

「うん。是非楽しんでね！」

「……………おう……………」

何故かげっそりした表情でDVDを眺めていた。

作戦五日目、金曜日にしてやっと小嶋君に渡すことができた。

よし、これで小嶋君がこのアニメを気に入ってくれたら、そこから話ができるね。

元気のなくなった小嶋君を残して、作戦成功に満足した僕は自分の席に戻って行った。

きっと今日から楽しい人生になるに違いないね。

優しい勘違い

「席につけー」

いつものセリフを言いながら先生が朝の教室に入ってきた。
みんなが席に着いたのを確認して先生が今日の連絡事項を伝える。
いつも通りだね。

「えーっと、今日から七月に入ったわけだが」

え、もう七月？ 気づかなかった。

「来週からテスト週間に入って、部活は全面禁止に――」

テスト週間か。

期末テストが七月十一日、十二日、十三日の三日間で行われて、
その一週間ほど前の七月四日から十日までの七日間がテスト週間になる。先生も言っていたけれど、この間は部活動禁止。放課後がと
ても静かになる一週間だ。部活のせいで勉強に時間が割けない人は
この一週間に全てをかけている。頑張ってもらいたいね。

僕は部活なんかしていないのに普段勉強していない怠け者なので、
僕もこの一週間に全てをかけている。頭が良くなりたいたいよ……。

「テストが終われば夏休みに入るわけだが、そこでだ。楠と有野と
佐藤には、文化祭で何をするのかを考えていて欲しいんだ。夏休み
に文化祭の準備をするのが通例になっているからな。準備をはじめ
ないところもあるが、年に一度の文化祭、われらが一年六組は気合
を入れて行こう」

文化祭。

文化祭は確か十月の第二週の土・日だったかな。

八月から準備をするなんて、気合が入っているね。

「テスト勉強も大切だが、出来れば夏休みに入る前に何をするのかを決めておきたい。勉強の合間でいいから、こっちの方もよろしく頼むぞ。楠、有野」

僕は華麗にスルー。確かにいいアイデアなんか出せないけどさ…

・ ・ ・

と、言うわけで。

放課後、楠さんの呼びかけにより、急遽委員長会議が開催されることになった。

誰もいない教室で四人固まって座る。

え？ 三人じゃないのか？ 一人多い？

うん、何故だか前橋さんがこの場にいるんだ。委員長っぽい見た目だからいてもいいよね。僕の方が場違いだし。

「三人は何かやりたいことある？」

楠さんが机に置かれたルーブリーフをシャーペンでコツコツと叩く。

「私は別に」

「有野さんが別に無いのなら私も無いです」

「なるほどなるほど。佐藤君は？」

僕も特にこれがやりたいって言うのは無いけれど。

「僕は、なんでもいいよ」

「そっか。なら、メイド喫茶と……」

何故か楠さんが分からないけれどメイド喫茶と書いていく。

「ちょっと待て！ メイド喫茶なんて嫌に決まってるだろう！」

雛ちゃんが猛然と抗議する。恥ずかしいよね。

「有野さんが嫌がっているんですから私も嫌です！」

「え、別にやりたいことが無いって言ってたから何でもいいのかと思っ

「やりたいことはねえけど、やりたくないことはある。それはその筆頭だ。誰がメイド服なんて気持ちわりいもん着るか！」

「私だってごめんです！ 着るのなら楠さん一人で着てください！」

「当然私だって嫌だよ。だから、みんなと一緒に考えよ？」

楠さんがにっこりと雛ちゃんに微笑みかける。

雛ちゃんは大きくため息をついて「分かったよ」と言った。

……楠さんと雛ちゃん、それほど仲が悪いようには見えないね。

「佐藤君もなんでもいいとかふざけたこと言わないでちゃんと考えてね」

「あ、はい。分かりました」

笑顔が怖い。

「じゃあ何かいいアイデアはあるかな？ みんながやりたがっていることってなんだろうね？」

「やっぱりサテンとか飲食系の店じゃねーの。私は嫌だけど」

「当然私も嫌です！」

「え？ 二人はどうして嫌なの？」

「面倒くさそうじゃん。別に対して稼げるわけでもねえだろうし、それなら忙しいことしたくねえ」

「私もそうです！」

「なるほどね。佐藤君は飲食系どう思う？」

「え、うん。僕は、別に、飲食系でもいいよ。みんなもやりたがるだろうし」

「君の意見を聞いているのに他の人のことを考えてどうするの」

「あ、そうだね……ゴメン」

「別に怒ってないからいいよ。とりあえず、どんなものがあるのか出していこう。他に何かあるっけ？」

「んーオーソックスなどところで行くとお化け屋敷とか劇とかか？でもどっちも面倒くせえなあ……」

「そうですよね！ 私もそう思います！」

前橋さんはやっぱり雛ちゃんと仲がいいなあ。

「あとは展示とか、発表とかかな……。佐藤君は何か思いつく？」

「えーっと……、僕は特に思いつかない、です」

「あっそ。やっぱりこの中から何か選ばなきゃいけないのかな。飲食系、演劇系、展示系、研究発表系。一旦この中からクラスのみんなに選んでもらおうか」

「そうだな。それがいいな」

「いえ、私は有野さんがすべて決めるのがいいと思うんですが……」

「そうになったらこのクラスは文化祭不参加になっちゃうからダメだな」

「では不参加で行きましょう！」

「駄目に決まっているでしょう」

楠さんが苦笑いを見せた。

「不参加は冗談としても、やっぱり私は楽なもんがいいなあ。優大も楽なもんがいいよな？」

「そう、かな？　せっかくの文化祭だし、忙しくっても、僕はいいけど……」

「有野さんの言うことを否定するんですか？！　佐藤君ふざけています！」

うう！　前橋さんに怒鳴られた！　正直前橋さんに怒鳴られるのが一番怖いよ！

「まあまあ落ち着いて。確かに、せっかくの文化祭なんだから一生懸命やろうよ、ね？　有野さん？」

「あー。まあそうだな。私一人の文化祭じゃねえし、楽なのがいいとかはもう言わねえわ」

「さすが有野さん……。心が広すぎます……。！　好きです有野さん！」

「はいはい」

……もしかして、百合？

とか考えたらダメだ！　友達をそんな目で見たらダメだよ！

「では、とりあえず時間が取れた時に私がクラスのみんなに何系が

いいのか聞いてみるから。次の話し合いはその系統の中でどんなものがあるのかを考えてみよう。大体何があるのかを私達で決めておけばクラスでの話し合いがスムーズに行くと思うし」

「そうだな」

「じゃあ早いけど今日はこれで終わろうか。これ以上話が進むわけもないし。次はクラスみんなでどんなものをするのかを決めてからでいいよね」

「んー。分かった」

楠さんが僕をちらりと見る。僕も何も文句が無いので頷いた。

「よし。それではまた次の機会に。でも、佐藤君」

「？」

楠さんが無の感情を見せる。

「佐藤君もつと積極的に話し合いに参加してよ。促されてからじゃなきゃ発言しないとか、面倒くさいからやめてよね」

「あ、ご、ごめん……」

「自分のわがままも出していこう」

そう言って少しだけ笑った。

「うん」

そうだった。そっちの方が楽しい人生になるってこの前楠さんに教えてもらったんだ。少しは自分の意見を通す努力をしよう。

「今日は突然集まってもらってごめんね。でも多分次の開催も突然になると思うから許してね」

「……。……ああ、分かった」

「さすが有野さん……。物わかりが良すぎです……。！好きです有野さん！」

「はいはい」

次は、積極的に行かなきゃね。

「優大」

解散した後、一人下駄箱へ向かって廊下を歩いていたところを雛ちゃんに引き留められた。

「どうしたの？」

振り向き雛ちゃんの顔を見る。その顔はすぐれない。

「え、な、何かあったの？」

もしかして、また僕が何か粗相を……?!

「いや……」

雛ちゃんが一度辺りを確認して僕に聞いてくる。

「お前、若菜と何かあったのか？」

「え？」

何かって、何だろう？

「特に何もないけど……」

最近はまともに声かけてもらってないしね。お弁当も一緒に食べてないし、僕は小嶋君にDVDを貸そうと躍起になっていたし。

「どうして？」

「……なんかさ、さっきの話合い中若菜がお前に対して刺々しかったから……」

「え？ そうだった？」

いつもの楠さんより優しかったけど……。
って、そうだ。

「ぼぼ僕は何も知りません?!」

「やっぱり何かあったんだな?!」

「何もないですよ？」

「嘘つけ！」

もう慣れてしまっていたけれど、僕は楠さんに脅されているんだ
った。忘れてた。

そのせいで楠さんは僕と二人きりの時ストレートな感情で接し
てくるのだけれど、その態度が今日少し漏れ出してしまったみたい
だ。雛ちゃんはその違和感を感じ取ってしまったようだ。うう、ば
れたらまずいよ。僕が楠さんに酷いことをしたってばらされてしま
う……。……してないのに……。

「なんか若菜の奴、お前のことを見下していたみたいだったよな……」

「そ、そうかな？ 普通だと思うけど。それに、見下されても仕方がないし」

僕だしね。

「……もしかして、小嶋がお前を殴ることと関係してんのか？」

「え、それは関係ないよ？」

「……。……やっぱりお前を殴ってたのは小嶋だったんだな」

あ、しまった。ばらしてしまった。誘導尋問にひっかかってしま
った……。

「で、でも、小嶋君は、多分もう殴ってこないと思うから、大丈夫だよ」

「……朝なんか貸してたもんな……。……私も借りたかったのに……」

落ち込んでいる雛ちゃん。そう言えば何も説明していなかった。

「大丈夫だよ雛ちゃん。あのDVDより画質のいいものが國人君の部屋にあったから。それを貸してもらえば見えるよ」

「誰があんなデブから借りるか。私はお前から借りたかったんだよ。お前から借りなきゃ意味ねえよ」

え……。僕から借りたかったって……。それって……。もしかして……。もしかなくても……。

……。それほど國人君のことを嫌っているってことだよ……。悲しいよね……。

落ち込みうつむいていた雛ちゃんが引き締めた顔を上げた。

「そんなことより今は若菜のことだ」

う。

「だ、大丈夫だよ？ 何も、何もないよ？」

「嘘つくな。私とお前の関係だろ、遠慮せずに何でも相談しろよ」

「う、うん。でも、本当に何もない、から……」

適当に笑ってごまかそうとしたけれど。

「優大」

雛ちゃんが僕の両肩を持って真剣な表情で見つめてくる。

「お前が悲しい思いをすると私も悲しいんだ。お前が嫌なことされると私も嫌なんだ。言えないようなことされているのかもしれないけど、私たちは……親友、だ。何も隠さないで相談してくれ。若菜に何をされているのか想像もつかねえけど、大丈夫。私なら何でも受け止める。どんな理由でいじめられているのか分からねえけど、私ならなんとかできる」

「い、いじめは、ないよ……?」

多分。

「いじめ『は』ないよってことは、他に何かされてるんだろ」

う。失敗した。

「他にも、何もないよ。僕なんかが楠さんと関われるはずないよ」

「嘘つけ。一緒に飯食ってたじゃねえか。それも何か関係してるんだな……。……もしかして、若菜に自分の弁当を食われていたとか……?」

「それはないよ。お昼を食べるときは何もされてないよ」

「お昼を食べるとき『は』何もされてない……。他の時に何かされ

てんだな……」

僕のバカ！

「い、嫌だなあ、他の時も、何も酷いことされてないよ？」

「酷い事か……」

え？！ 僕また失敗した？！

「優大。なんでも言ってくれ。若菜に口止めされているんだろうけど、私なら大丈夫だ。うまくやる。絶対にお前を困らせない」

「えっと……」

「私はお前のことを大切に思っている。お前のためなら何でもできる。私はお前を困らせたりしない、もうお前を悲しませたりしない……。……。だから、私はお前を悲しませている原因を取り除く。お前のためにしてやりたい。大丈夫、私なら、やれる」

真剣な雛ちゃんの顔。僕は内緒にし続けなければいけないのかな……。これだけ僕のことを想ってくれている人を心配させたまま、何も言わないでいなければいけないのかな。

「優大、お前は若菜に、何かをされているな？」

「……」

「優大」

僕の肩が優しく揺られる。

そのせいか、口から言葉が漏れ出した。

「……う、うん……」

「……。何をされているんだ？」

「……そ、その……、僕……」

言ってもいいのか。

脅されていると、言ってもいいのか。

僕は、何故だか言いたくない。

楠さんが持っている僕の脅す材料。

それがばれるのが怖いから、何だろうけれど……。

何か胸につつかえる。

何か、言いたくない別の要因がある気がする。

……。

それでも。

雛ちゃんに心配をかけるのはよくない。

僕を心配してくれている雛ちゃんに何も言わないのはよくない。

多分、言った方がいいのだろう。

言えば、きっと何かが変わるのだろう。

「……あの、僕……、楠さんに――」

「ふうー……ふうー……！」

どこからか聞こえてくる荒い息遣い。雛ちゃんの後方に伸びる廊下から聞こえる。雛ちゃんは僕から話を聞き出すことに一生懸命でそれに気づいていないようだ。

僕は気になりその息遣いの方をじっと見てみた。
柱の影からゆっくりと、前橋さんが顔を出した。

「ぐざぎざぎざ……！ あ、有野さんと、あんな間近で……！ 佐
藤優大……！ 佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐
藤佐藤佐藤佐藤佐藤佐藤……！」

「あばばばばば」

怖いつす。

「どうした優大？！」

突然怯えだした僕を雛ちゃんが揺する。

僕が一点を見ていることに気づいた雛ちゃん。

「誰かいるのか？！」

勢いよく振り向くが前橋さんはすでに顔を引っ込めている。

「……誰もいねえな……」

雛ちゃんがゆっくりと僕に向き直し、聞いてくる。

「………なるほど。……真実を言うことがそれほど恐ろしいって
ことか……」

「え？！ ち、違うよ？！」

「分かった、分かったよ優大。何も聞かない。口にするのが恐ろし

いっていうんなら何も聞かない。優大が若菜に対して恐怖を抱いているって事実だけで十分だ」

「え、いえ、それは本当に違くてですね！」

壮絶に勘違いをなさっていますよ?! 早く誤解を解かなければ!

「大丈夫だ優大。私に任せろ。何も聞かねえけど、何かヤバイことが起きているのは分かった。私に任せろ……!」

「ひひひ雛ちゃん?! 本当に、本当に違うんだよ?! その、僕が怯えているのは――」

「ちょっきん……ちょっきん……ちょっきん……」

前橋さんがまた顔を出していた。

僕に恨みのこもった視線を送りながら、左手で自分の綺麗な長い銀色の髪の毛を少し掴み、右手に握られたハサミで毛先を少しずつ切っていた。

「うなななななななな」

「優大。大丈夫だ、優大」

僕は勘違いしている雛ちゃんに優しく抱きしめられた。

前橋さんが毛先を切るのをやめ、左手に持っている髪の毛を剪断する勢いで噛みしめ泣きだした。当然、僕を呪い殺さんとばかりに睨みつけながら。

女の子に対してこんな感情を持ってしまうなんて失礼極まりないのだろうけれど、正直に言います。

ごめんなさい、とても恐ろしいです。関わりたくないです。怖すぎます。

目から涙がこぼれてくるくらい怖い。

「大丈夫だ、泣くな優大。安心しろ」

頬で僕の涙を感じ取ったのか、雛ちゃんが僕を抱きしめながらあやすように後頭部をポンポンと叩いてくれた。

違うんです、違うんです。

僕は目の前で繰り広げられているホラーショーに恐怖して涙を流しているんです。でも声がうまく出ない情けない僕。

「私が、何とかしてやるからな……！」

ぐっと、僕を抱きしめる腕に力を込めた。

今更ながら、この状況に気づき僕はドキドキしてしまった。

前橋さんに対する恐怖と抱きしめてもらっている緊張で、僕の心臓が過労死してしまうのではないかと言うくらい胸の中で跳ね回っていた。

そのあと一緒に帰ることになった僕ら。

道中「勘違いだよ」と言うことを伝えたと、雛ちゃんも「分かった。大丈夫だ。私を信じろ」と答えてくれたので多分誤解は解けたと思う。

多分……。

大丈夫だよね？

夜の郵便配達

まりも…へえ。なるほど。色々あった金曜日だったね。

ユウ…うん。でも、なんだかこれから楽しい毎日が続きそうな予感がするよ。

まりも…いい予感だね。それが当たることを願っているよ

ユウ…僕もそうになったらいいと思うよ

まりも…ところで、最近お姉ちゃんの話が聞かないね。何かあったのかい？

日常のことばかり話していたまりもさんとのスカイペ。

以前の僕には、遊び相手と言える人がお姉ちゃんと弟しかいなかった。で日常のことを話すとなれば自然とお姉ちゃんや弟のことが話題になってしまう。でもここ最近はお姉ちゃんと遊ぶことも少なくなっていたのでまりもさんにお姉ちゃん話をするのがほとんどなかった。

今まで毎日のようにしていた家族の話。突然それが無くなってしまったので、もしかしたら僕とお姉ちゃんの間にかあったのかもしれないと、まりもさんは心配してくれているのだろう。

ユウ…大丈夫だよ。何もないよ

まりも…本当かい？ 毎日遊んでくれていたユウ君が構わなくなっ

てしまってお姉ちゃんは悲しんでいるんじゃないかな

ユウ…お姉ちゃんには友達いっぱいいるし、それはないよ。むしろ僕にかまわなくなった分自分の時間が取れるようになったから喜んでるんじゃないかな

まりも…そうだといいいんだけどね。なんだか後々厄介なことになり
そうで心配だよ

厄介なことって、何だろう？

僕がお姉ちゃんと遊ばないことによって何かおもわしくない事が
起きるのだろうか。

想像もつかないや。

とりあえず、まりもさんの不安を取り除かねば。

ユウ…大丈夫だよ。お姉ちゃんと僕はずっと仲良しだから

まりも…それは嬉しいことだね。まあ、そもそも。私なんか口を
出していることではないのだろうけどね

うん。

無事に不安も取り除けたみたいだね。

何も心配することは無いよ。

家族内の関係も、僕の人生も。

僕はパソコンを切って伸びをした。少しめまいがして机に手をついた。うう、伸びをした時のこの意識が遠のく感じってなんなんだろう。もしかして僕の伸びの仕方が間違っているのかもしれないね。

深呼吸をして、窓の上にかかった時計に目をやる。

十一時前。

明日は休み。まだ寝るには早い。

時計の下から覗く星空を見たら、なんだか少し散歩がしたくなつた。

……うん。

少し散歩しよう。

心配をかけないために家族に一声かける。

そのときに、弟が「隣町で殺人があつて、犯人は捕まっているけど物騒な世の中だから気を付けて」と言ってくれた。

……散歩、やめようかな。

結局僕は散歩に出かける。

こんなにきれいな星空が見えるんだ。散歩しない手はない。

なんの偶然か今日は新月。

新月と言えば真っ先に國人君を思い出すけれど、もう新月の災厄は起きないはずだから何も心配することは無いよね。

新月の夜は星がよく見える。

でも、月が見えた方が夜空は素敵だよね。

暗い夜道。もう人通りも車通りも少ない。明りが消えている家もある。

とっても静かな街並みだ。

虫の声が季節を感じさせる。

もう夏だね。

七月一日。

あと三週間もしないうちに夏休みになる。待ち遠しい。

この夏休みは何をしよう。宿題は早く終わらせよう。お姉ちゃんたちと海へ行こう。弟と山へ行こう。何か目標を立ててそれを達成しよう。文化祭の準備もある。一生懸命頑張ろう。できる事なら、

今年の夏は、友達と沢山過ごしたい。僕は人を誘うことを今までしてこなかったけれど、今年は僕から誘ってみよう。断られることを恐れずに、僕から声をかけよう。きっと、そのほうが、いつもの夏より楽しくなるから。

そんなことを考えながら、暗い夜道をひたすら歩く。
マンホール。

何となくその上で立ち止まってみる。

いつもは聞こえない水の音が、底の方から響いてきた。

音まで昼とは違う。

夜の散歩も悪くない。

楽しいな。

……………弟から話を聞かなければ……………。

正直怖いです。

何も気配を感じていないのに無意味に何度も後ろを振り返ったりして風景を楽しめていなかったりする。

……、もう、帰ろう。

何もないのだろうけれど、こんな気持ちじゃあ楽しめないよ……………。

夜の散歩は十分ほどで折り返し。僕は来た道を引き返して家に向かった。

・
・
・

……。

……………大変だ……………。

家の前に、怪しい人がいる……………。

夏なのにニット帽をかぶり、顔を隠している。背は僕と同じくらいで高くない。多分、女の子……………。

泥棒……………？

怖い……………。

襲われちゃうかもしれない。

殺されちゃうかもしれない。

でも。

でも、あそこには僕の家族がいる……。お父さんお母さんお姉ちゃん弟……。

そうだ……。僕の人生に必要なのは勇気だって教えてもらったじゃないか。それに、今は僕だけしか気づいていないんだ……。

僕がやらなきゃ誰がやる！ 強気に行けば相手だってびっくりして逃げるはずだ！ ガツンと言ってやる！

「あ、あのー……、す、すみません……」

僕は近づいて声をかけた。

「?!」

ニット帽の人は、僕の存在に気づき慌てて逃げて行った。

……。

……とりあえず、追い返すことができたね。僕の勇気の勝利だ。でも本当に泥棒だったのかな？

郵便受けの中に手をつ突っ込んでいたから、もしかしたら夜の郵便配達だったのかな。だったら悪い事しちゃったなあ。びっくりさせちゃって申し訳ないよ……。

僕は郵便受けの中を確認してみた。

「あ、何か入ってる」

やっぱり夜の郵便配達だったんだ。

「ごめんね」

「いい一体誰が?!」

がたがた震える僕の手から、と言うより手紙の間から何か白っぽい糸のようなものが落ちた。

なんだろうかと思い、しゃがんで拾い上げてみた。

「……」

ぐわー。

これは銀色の髪の毛だー。

「……前橋さん……」

どこからどう見てもクラスメイトからの呪詛ですね。

「なんで……」

手紙の本文は『呪われろ』だけではなかった。
続きを読んでみる。

「えーっと……」

いろいろと雛ちゃんへの思いが書かれていたが読み飛ばす。

……ざっと読んだところ、重要だと思うところはこの一行だけ。

『有野さんの邪魔になる人間は排除します。排除します。排除します』

三回言わないで。怖いよ。

やっぱり、どうにも、僕は、前橋さんに嫌われまくっているよう

だ。

わざわざ僕の家まで来てこんな手紙を入れていくなんて……。

……やっぱり、今日雛ちゃんに抱きしめてもらったことが原因だよね……。

……なんとか前橋さんと仲直りしたいよ……。こんな身近なホラ
ー嫌すぎるよ……。

僕は手紙を封筒の中に戻し机の中にしまった。

……。うん。

とりあえず、今日のところは寝よう。

何もかも忘れよう……。

僕は眠った。

逃げるために、忘れるために、夢だと錯覚するために、眠った。

でもそれは間違っていた。僕はこの時点で前橋さんからの手紙の意味をよく考えてみるべきだった。

——この手紙は、僕だけに宛てられたものではなかったのだ。

委員長会議にて

七月四日。

今日からテスト週間だ。

部活が禁止になる一週間。勉強に打ち込むための一週間。

僕もこの一週間のうちに詰め込まなければ大変なことになってしまふ。頑張らねば。

とりあえず、前橋さんの恐怖は忘れ去ろう。勉強の邪魔だからね。頭の悪い僕は朝から勉強。これくらいしなくちゃ赤点取っちゃうよ。

僕はカリカリ勉強する。

カリカリカリカリ。

「……おい、佐藤」

僕のような人間に声をかけてくれる人間が。誰だろうかと顔を上げる。

「え？ あ、小嶋君。おは、よう……」

え、殴られるの？

身構えたけれど、殴るモーションも連れ去るモーションも見せない。い。

どうやらなにもされないみたい。

「……その、なんだ。……佐藤から借りたDVD……。……見た」

「え！ 本当?! どうだった?!」

と、聞いてみたけれど、何やら表情が冴えませんね。これは、面白くなかったみたいだね……。

「あの、ごめんね……。面白くないものを貸してしまって……」

殴られちゃうのかな……。

「……なんだ、その、まあ、あれだ。なあおい……」

「面白くなかったよね……。小嶋君にアニメとかは似合わないよね……。ごめんね……」

「まあ、俺には、アニメなんか似合わないけど？ ……でも、まあ、勧められたら見るのが義理だし？」

「ありがとう……。僕の為に時間を割いてくれて……」

「これくらい、大した手間じゃねえから、いつでも、いいぜ」

「あ、ありがとう……」

酷いことされたけれど、小嶋君もいい人だなあ。

「それで、このDVDを有野に貸せばいいんだよね」

「あ、うん」

國人君からは借りたくないと言っていたから、これを貸した方がいいんだよね？

「うん。雛ちゃんに貸してあげて」

「……分かった……」

小嶋君がDVDを持って雛ちゃんの方へ向かっていった。

でも、残念だな……。小嶋君的には面白くなかったかあ。気に入ってくればその話で盛り上がって仲良くなれると思ったのに。でも見てくれただけで嬉しいね。小嶋君が優しいってことが分かったし、作戦は成功したって言うてもいいよね。何となくだけど、もう殴られることも無い気がする。

目で小嶋君を追う。

雛ちゃんに話しかけている小嶋君。あ、言い合いが始まった。小嶋君がDVDを押し付けて、雛ちゃんがそれを突き返した。小嶋君がもう一度押し付けて雛ちゃんがまた突き返す。……前橋さんが教室の隅で小嶋君を睨み付けている……。早く……！ 早く逃げて小嶋君！ 切り刻まれちゃうよ！

あ、帰ってきた。

「なんだよあいつ！ 何が『てめえから受け取るわけねえだろクズ！』だ！ 俺から受け取ろうが佐藤から受け取ろうが何も変わらねえだろうが！」

「ま、まあ、まあ。きつと、見る気が無くなっちゃったんだよ」

「だとしても言い方ってもんがあるだろう！ 畜生！ あいつふざけやがって！」

お、怒ってるね……。

どうすれば仲良くしてくれるのかな。

「……これ、とりあえずお前に返す」

「あ、うん」

小嶋君からDVDをもらった。

「……佐藤？ 別に他の奴を借りてもいいけど？」

「へ？」

何を言っているのか分からない。

「お前のおすすめのDVDがあればまだ見てやろうかなって言うんだ」

「え？！ ほんとう？！」

もう一回チャンスが貰えるんだ！ ありがたいね！

「今度はきっと面白いものを持ってくるから！」

「え？ あ、そうだな。次はもっと面白いものを見せろよ」

「うん！」

小嶋君が難しい顔をして離れて行った。

その表情の意味は分からなかったけれど、次は笑顔を作れるように頑張ろう。

今度は失敗しないぞ。

「席につけー」

先生が教室に入ってきた。
みんなが座る。

「えーっと、今日からテスト週間だな。部活も無くなるし、放課後
ダラダラ残ってないで勉強頑張れよ」

今日はあっさり終わった。次の授業まで少し勉強できるね。
と思ったのだけれども。

「先生」

楠さんが手を挙げて教室中の注目を集める。

「どうした、楠」

「文化祭のことで少しいいですか」

「ああ。なんだ？」

「放課後までに、みんなにどういう系統の催しをするのかを考えて
いてほしいんです」

「系統？」

「はい。飲食系、演劇系、展示系、研究発表系。とりあえず大まかに
やりたいことを決めようと思うんです。もちろんこの四つ意外に
何かやりたいことがあればどんどん行ってもらって構いません。放
課後にもう一度聞こうと思うので――」

・ ・ ・

結果、クラスの大多数は飲食系がやりたいとのことだった。
結果が出たので放課後、早速委員長会議が開かれた。

今日も前橋さんがいるので四人。

「やっぱり飲食系か……」

アンケート結果を眺める楠さん。

「文化祭と言えば飲食系だもんね。他のクラスも喫茶店とか焼きそばとかやりたいだろうし他のクラスと差別化を図らなきゃね」

「……。そうだな……」

どこか元気のない雛ちゃん。どうしたんだろう？

「飲食系で他のクラスがやらないようなものって、何かあるかな？」

僕に視線をくれる楠さん。

「え、えーっと……。アイス屋とか……」

「十月なんだから寒くて客こないでしょ。そりゃどのクラスもやらないよ」

「じゃあ、焼肉屋とか……」

「衛生管理されていないこの教室で保存された肉誰も食べたくないよ」

「なら……綿菓子、とか」

「露天じゃないんだから」

「そ、そうだね……」

困った……。どうしよう……。

無い脳みそを絞って考えてみるけれど、くだらないものしか出てこない。

「えーっと……。雛ちゃんなら――」

と、僕が隣に座る雛ちゃんにへらへら笑いながら声をかけようとしたら、その隣にいる前橋さんにもものすごい目で睨まれた。

「ひっ」

勝手に体が畏縮する。この前もらった手紙が効いているよ……。

「優大?!」

突然怯えだした僕に雛ちゃんが声をかけてくれる。

僕の肩に手を置き僕の目を見てくれる雛ちゃん。

「大丈夫だ。私がいるだろ」

「え、うん」

雛ちゃんがいれば前橋さんに襲われることは無いってことかな。

「……！」

何故だか分からないけれど雛ちゃんはものすごい勢いで楠さんを睨み付けていた。

楠さんは僕の正面で「有野さんどうしたの？」と言った笑顔で首をかしげている。

ちなみに前橋さんは雛ちゃんの横で「佐藤どうしてやろう？」と言った笑顔で首を不自然に曲げている。怖い。

雛ちゃん声は掛けられないみたいだし、僕が考えなくちゃ……。

「えっと、その、漫画喫茶とか、どうかな」

「入り浸る人が出て回転が悪くなっちゃうよ」

「なら、ダーツ喫茶とか……」

「ダーツバーみたいなの？　　どうかなそれ……」

「うーん……」

どうしよう。

他のクラスがやりそうになくて、教室でできそうなもの……。

「コンビニ……とか……」

「飲食店じゃないでしょ。ふざけてるの？」

「い、ごめんなさい……」

確かに、今のはちょっとふざけた解答かも……。申し訳ないね……。

僕は落ち込み顔を伏せようとしたが、突然鳴った大きな音にびっくりして目を見張った。

雛ちゃんだ。雛ちゃんが机を思いっきり叩いた音だった。

「おい若菜……。てめえ自分から優大に聞いたくせになんだよその態度。ふざけてんのはお前じゃねえか」

僕と同じように驚いていた楠さん。

雛ちゃんの言葉に悲しそうな笑顔を作った。

「……ごめんね……。確かにちょっと言葉がきつかったかも。ごめんね佐藤君」

「え、う、うん……。その、僕が悪いから、楠さんは悪くないし、あの、二人とも、喧嘩は……」

「そーです！ 悪いのは佐藤君です！ 即刻謝罪を要求します！」

何故前橋さんがここで話に入ってくるのかが分からないけど、謝ろう。

「ふたりとも、ごめんね……」

「だから、悪いのは私だって。謝らないで」

につこりと無理な笑顔を作っている楠さん。顔が引きつっている。

「そーです！ 悪いのは楠さんです！ 即刻委員長の座を有野さんに明け渡してください！」

「えーっと、それは、ちょっと……。みんなが選んでくれたんだし、そう簡単に私の意志で明け渡すわけには……」

苦笑いで返す楠さん。

前橋さんは以前ぷりぷりしている。

「しかし有野さんを怒らせた楠さんは委員長にふさわしくないと思いますが！ 明日署名を集めようって今日の夜決心しますよ！」

……。なんで今日の夜？ 今じゃダメなの？

「まあ、クラスの総意なら仕方ないけど……」

「な？！ ……今、私を馬鹿にしましたね？！ どうせ署名は集まらないからやっても無駄だって、そう思いましたね！？」

「……全然そんなこと思っていないよ？」

「くううう……！ これが勝者の余裕と言う奴ですか……！ 分かりました！ そこまで言うのであれば――」

「未穂」

と、雛ちゃんが前橋さんを睨み付ける。

「——ご、ごめんなしい……。静かにしましゅ……」

「……」

鋭い眼光のまま楠さんの方を向いた。

「……えっと、ごめんね？ 有野さん」

「……」

ふん、と一度鼻を鳴らし面白くなさそうに腕を組んで目を閉じた。

……。

……。

……。

重たい沈黙。僕は耐えきれません。

「あの、何するのか、考えては、みませんか……？」

「……そうだね。せっかく集まったんだし、考えようか」

極力明るい調子で言う楠さん。

「えーっと、有野さんは、何かいいアイデア、あるかな？」

「……別に」

「別に無いですよ！ もちろん私もありません！」

「そ、そっか……」

二人の答えと困った笑顔の楠さん。
また沈黙が流れる。

……。なんでずっと雛ちゃんは機嫌が悪いのだろう。
聞きたいけど、怒られそうだし……。

みんなが黙り込んでいた。

どこに地雷があるのか分からないこの空間。

うかつに歩く人間誰もいなかった。

楠さんが、足元を確かめるようにゆっくりと声をだす。

「じゃあ、今日はもう、解散……しよっか。また明日の放課後集まろう？　それでいいかな、みんな」

あつという間に終わってしまった。何も話し合っていない。これじゃあ集まった意味ないよ。

でも、もう続けられる気配でもないし……。

やめた方が、いいのかな……。

あまりよくない気がするけど……。

「……ああ……。分かった。優大もそれでいいよな？」

「え？！　う、うん」

突然問いかけられて思わずうなずいてしまった！　僕のバカ！

「ならもう帰ろうぜ」

雛ちゃんがカバンを持って立ち上がり僕らを促す。

「もうテスト週間だ。早く帰らねえと勉強する時間が無くなっちゃまうぞ」

じつと僕を見たままそう言った。
そうですね。僕バカだから早く帰らなきゃ大変なことになるよね。

「……なら、明日までに、どんなものがあるのかを考えてきてね、みんな」

「……」

また楠さんを睨み付ける雛ちゃん。
それに対して、楠さんも少し強い視線で返す。

「……。……あのーなんで怒らせたのかを聞いてもいいかな」

「別に」

機嫌悪そうにそっぽを向いた。

「別になんでもありませんよ！ もともと敵同士なんですから、慣れ合うつもりは皆無です！」

イーッ！ と前橋さんが楠さんを威嚇した。

「……そう。分かった。私が気に入らないんだね。それはまあ、しようがないことだよ、うん。それに関しては何も言わない。でも、文化祭の話し合いはちゃんとしよう？ ね？ みんな楽しみにしているんだから」

「……」

楠さんに攻撃的な目を向ける雛ちゃん。

「……………ああ……………」

不機嫌な顔のままだったけれど頷いた。

「優大、帰るぞ」

そう言っ、僕を待たずに先に教室を出た雛ちゃん。前橋さんもそれに続く。

「えっと……………。その、さようなら……………」

恐る恐る声をかけてみる。

「……………さようなら。さっさと帰れば」

予想通り、楠さんの機嫌は最高に悪かった。

「あの、きつと、何かあったんだよ」

「うるさい」

「う……………。ごめん……………」

「これ以上機嫌を悪くしないために早く有野さんの元へ行ってよ」

「うん……………」

楠さんは一度も僕を見ることは無かった。

前橋さんと校門で別れ、雛ちゃんと一緒に帰っている途中、色々聞いたのだけれども、何一つ教えてくれることは無かった。ただ「大丈夫だ」と、その言葉を繰り返していた。

なんだか、金曜日のことをまだ勘違いされているような気がする……。

僕の部屋のスタンドが机の上の教科書とノートを夜の暗い部屋に浮かび上がらせている。

うーん。困ったなあ。

机に向かうけど勉強がはかどらないよ。

なんだか色々と考えてることが多いなあ。

シャーペンを放り投げて伸びをしてリラックス。

うーん……。小嶋君に何を貸せばいいんだろう……。多分ハーレムとかラブコメとかは苦手だと思うんだ。だからそうじゃないものを貸さなきゃなんだけど……。なにがいいのかなあ。

椅子から立ち部屋の電気をつける。そして本棚と向かい合った。

なにか、いいものは……。

スライド式の本棚を動かし本を探す。

上から下へ、眺めてる。

そしてある本へと惹きつけられた。

そうだ。これにしよう。

僕は本棚から一冊の本を抜き出した。黒い表紙に赤い文字。

「ブラクララグリーン」

ブラクララグリーンとはブラウザクラッシャーとは何一つ関係なく
タイのとある町でのアウトローなお話。

きつとこれなら小嶋君も見えてくれるよね。

さすがに学校にDVDボックスを持っていくのは恥ずかしいし小
嶋君も嫌がると思うので録画したやつを持って行こう。

よし、問題が一つ片付いた。

次は前橋さんからもらった手紙。

僕は手紙をしまった引き出しをあけ、ゆっくりとしめた。

うん。どうしようもないや。

次に行こう。

次は文化祭の催し物。

うーん。僕なんかじゃあいアイデア思い浮かばないよ。

……。うーん。

……。うーん。

……。うーん。

……。あ、そうだ。

多分却下されるだろうけど、思いついたのでメモしておこう。

……。

よし。

一つ考えれば十分だよね。

さて。

最後の問題だ。

楠さんと雛ちゃんの喧嘩……。

きつと雛ちゃんは僕の為に怒っているんだ。僕と楠さんの間にあ
る問題を大げさにとらえてしまっているんだ。誤解は解いたと思っ
たのに、まだ解けていなかったみたいだ。

うん。明日また誤解を解こう。

とりあえず、手紙以外の問題は片付いたし、勉強しよう。

僕は椅子に腰を下ろした。

頑張ろう。

とっても勘違い

火曜日。

今日も一日頑張ろうと、気合を入れて校舎内に入った僕だったけれど、下駄箱でその気合がへし折られた。

「手紙が……入ってる……」

この前もらった手紙と同じ封筒だ！

手紙を持って慌ててトイレへ。

うう……。ラブレターじゃないのが悲しい……。

個室に入り手紙を開封。

まあ、当然呪詛でございます。

えっと、

『警告したはずです。有野さんに近づくなと』

そんなの、自分勝手だよ。

封筒の中身は手紙だけではなかった。

「……！」

粉々に切り裂かれた僕のライトノベルだ。その破片が封筒の中に入れられていた。

やっぱり前橋さんが切り裂いていたんだ……！

「……。どうしよう……」

どうすれば前橋さんに許してもらえるんだろう。

雛ちゃんに近づかなければ怒られないんだろうけれど、そんなのは嫌だ。雛ちゃんは高校初めての親友だもん。理不尽なお別れは絶

対にしたくない。

でも、どうしよう……。

なんだかこのままでは命が危ない気がするよ……。

いい考えが浮かばない僕は、とりあえず手紙をしまつて教室へ行った。

教室にたどり着き、扉に手をかけたところで僕は引き止められた。

「佐藤、佐藤っ」

小声で僕を呼んでいる。誰だろう？

辺りを見渡してみると、柱の影から誰かが僕に手招きをしているのが見えた。

柱の影から覗いているというのはこの前の前橋さんを連想してしまふけれど、今度は男子みたいだから安心していいよね。

近づいてみる。

「あ、小嶋君。おはよう」

「お、おう」

「どうしたの？」

何か、秘密の話かな……。

え。もしかして僕殴られるの？

「その、DVDは……」

「あ、うん。僕小嶋君が気に入るようなアニメ——」

「しーずかにしろお……」

「え？ うん……？」

アニメっていうのが恥ずかしいのかな。

「よし、今渡せ」

あたりをきよろきよろと見渡している小嶋君。そこまで警戒しなくともいいと思うけど。

「うん。はい」

僕はカバンの中からDVDを出して渡した。

「しょ、しょうがないから、見てやるんだからな。別に佐藤の為じやねえんだからな」

「え、あ、うん」

ツンデレだ。

「明日返す」

「え、明日？」

「あ？ 明日は都合悪いとでもいうのか？」

「う、ううん。そんなことは無いけど……」

結構長いから明日は無理だと思うけど……。まあ、いいや。

「うん。分かった。もしよければ、他のも持ってくるから」

「ん、ん？ そうだなあ？ まあ、佐藤がどうしてもっていうんなら、見てやる」

「うん。どうしても」

「しょうがねえな。見てやる。見てやるから、持ってこいよ」

「うん」

やった。またチャンスをくれるんだ。いい人だなあ。

「じゃ、じゃあ、そういうことで」

そそくさと教室に入って行った小嶋君。

なんだか様子がおかしいけれど、見てくれるのはいいことだから問題はいいよね。

僕はいい気分で教室に入った。

が、前橋さんと目が合って背筋に冷汗が流れる。
目が合うだけで怖い……。

「よう、優大」

ドアの前に突っ立っているところ、後ろから肩を叩かれた。

「あ、雛ちゃんおはよう」

「おはよう。どうしたんだこんなところで突っ立って」

「え、あ、なにも無いよ」

「……また何かに怯えてんな……。若菜か……」

ほにゃんとした目を恐ろしい目に変えて教室を見渡す。

「あの、雛ちゃん」

「なに」

う、そのままの目で僕を見ないで……。ちょっと、怖いです。

「その、僕が楠さんに何かをされているっていうの、勘違いだからね？」

「ああ、分かってる。私には全部分かってるから。そうだな、お前は何もされてない」

「本当だよ？　僕何もされてないよ？」

「何もされてないな。うん。そうだな」

「……本当に、分かってくれた？」

「もちろんだ。何もかも分かってる。お前が心配するようなことは、何もない」

「う、うん。なら、いいんだけど……」

……本当かな？

「有野さん！ おはようございます！」

突然僕を押しつけ前橋さんが雛ちゃんの前に立った。

「おはよう未穂。今日も楽しそうだな」

「はい！ とっても楽しいです！ ……ある人間がいなければ……」

きらりと光を反射しているレンズ。きっとその下では僕を睨み付けているんだろう。

「ぼ、僕、自分の席に戻るね」

「え、ああ、私も行くわ」

「……佐藤……優大……」

名前を呼ばれるだけで怖い！

「ななななんだか今日は眠たいからちょっと僕寝ようと思うんだ！
？ その、前橋さんも雛ちゃんと一緒にいたいみたいだし今日のところは僕一人にしてくれないかな？！」

「なんだ？ 夜遅くまで勉強してたのか？」

「うん！ そうなんだ！ 僕バカだから、毎日たくさん勉強しないと大変なことになるからね！」

「ならしうがねえな」

雛ちゃんが前橋さんを引きつれて自分の席へ。

「……佐藤……優大……」

もうやめてください……。

なんだか最近学校で落ち着けないなあ……。

僕の平和な日々はどこへ行ったのだろう……。

「……」

あつという間に時間が過ぎて、放課後になった。
今日も委員長会議が開かれる。
当然、前橋さんもいらっしやる。

「……」

空気が重い。

雛ちゃんは怒っているし楠さんはムツとしているし前橋さんは雛ちゃんを見てうっとりしているし……。

……よし、ここは、僕が一つ、ガツンと気合を入れよう！ 委員長会議はクラス皆の為に開かれているものなんだから、僕らの個人的な事情は置いておかなきゃね！ それに勇気が必要だって教えてもらったんだし、ここでそれを実践しなくちゃ僕はダメになる！
ビシッと言って、みんなを引き締めよう！

「あ、あ、あの……、みんな、その……話し合い、しよう？」

「……」

「……」

「はあ、はあ」

う……、誰も答えてくれない……。

強引にでも進めた方がいい気がする。

「昨日、楠さんが言っていたこと、その、僕、考えてきたよ」

「……ふーん。そう」

「ふーんそうって……。お前せっかく優大が考えてきたんだから、褒めるなりなんなりしろよ！」

「それはごめんなさい。代わりに有野さんが褒めてあげて」

「はあ、はあ、あ、鼻血……」

前橋さん、自重して……。

楠さんと雛ちゃんの関係、明らかに昨日よりもギスギスしている。
……はあ……。

実は、放課後にいたるまでに、この二人は何度も衝突しているのです……。

雛ちゃんはずっと楠さんのことを睨んでいたし、楠さんも最初は我慢していたようだけど、さすがに限界が来たみたいで本当の楠さ

んがちらちらと顔を覗かせている。
一触即発だよ。

「優大、よく考えてきたな」

楠さんに言われたのかどうかは分からないがにっこり笑顔で僕を褒めてくれた。

「考えることは小学生にもできるけどね。その内容が重要なのにそれも聞かずに褒めるなんて……」

「うるせえな。考えてきたことは偉いだろうが！」

「そうですね。偉い偉い」

「てめえ……」

「そんなに怖い顔で睨まないでよ。私は女の子なんだから」

「私『は』ってなんだよ……。まるで私が女じゃねえみたいな言い方だな」

「そう捉えるということは自覚があるんじゃない？」

「……あはは。若菜は面白い奴だなあ……！」

雛ちゃんのこめかみに青筋が浮かんた。

こ、こここれはたまた大変だああああ……！

二人で会話をさせていたらとんでもないことになる！ 間違いないよ！

前橋さんは雛ちゃんを眺めることで精いっぱいだし、僕が何とかせねば……。

「あの、みんなは、何か、考えてきた、かな？」

とりあえず会議を進めれば……！

「私は何も考えてないかな。ちょっとイライラしててね」

「奇遇だな。私もイライラして何も考えられなかったんだ」

「へえ、そう。でも一緒にしないでほしいな。私は理由があるけど有野さんには理由がないでしょ？」

「あるに決まってんだろ。大切な友達に酷い事している人間がいるんだ。ムカつくだろう」

「それが私だって言いたいの？ 言いがかりはやめてもらいたいね。私が何したっていうの？」

「……それは、何も聞いてねえけど……」

「へー。もしかして、私がおの人に何かをしているっていうのも、有野さんの妄想なんじゃないの？」

「く……！ でも、確かに若菜を見て怯えているんだ！ 何もしてないっていうんなら、その理由はなんなんだよ！」

「さあ？ 怯えているのも気のせいじゃない？ 妄想力豊かだねホント。全然羨ましくないけど」

「ぐぐぐ……！ て、てんめえ……！」

くやしそうだ！ 大変だよ！ 机をひっくり返しそうな勢いで握りしめているよ！

「あ、あの、今は、会議だし、その、ね。喧嘩は、やめようよ！」

僕が止めなきゃ……。

だって、前橋さん雛ちゃんの横でトリップしているんだもの……。僕以外にいないよ……。

「……優大？ お前、若菜に何かされてるよな？ 何されてる？」

雛ちゃんの優しい笑顔。

でも内心穏やかじゃないね……。

「僕、何もされてないよ？」

楠さんの目の前ではらせないよ。

「優大。安心しろ。お前は私が守る……！」

「雛ちゃん……」

「佐藤佐藤佐藤……！」

前橋さんが雛ちゃんの後ろで修羅っていた。

「ひっ」

怯えた僕を見て雛ちゃんが叫ぶ。

「あ！ ほら見ろ！ 優大が怯えてるじゃねえか！」

「それは有野さんに対して怯えているんですよ。怖いもの」

「怖くねーよ！ なあ？ 優大……？」

とても怖い顔で同意を求められた。

「は、はい……怖くないです……」

「ほら見ろっ、怖くないってよ！」

「いやどう見ても脅していたでしょ」

うう……ごめん雛ちゃん。少し怯えてしまいました……。

今度は楠さんがにっこり笑顔で僕に聞いてきた。

当然内心穏やかではない。

「私何もしないよね、佐藤君？ ……………レイプ……」

「ななな何もされていませんよー？！ まったく、何もされていませんよー！」

「どう見ても怯えてるじゃねえか！ あと若菜最後になんて言った？ レイク？ 湖？」

「え？ ううん？ プって言ったの。レイー——」

「そんなことよりもお！ 会議をお！ しょうよー！」

無駄にがたがた机を鳴らす僕。

「ちょっと佐藤君。暴れないでよ。うるさい」

「うるさくもなりますよ！ その、ね！ 僕考えてきたんだ！」

「それは凄い。ほら、褒めてあげてよ有野さん」

「褒めるよ！ 偉いなー優大」

「ぐるるるるる……」

前橋さん！ お願いだから僕を威嚇しないで！
とにかく、発表しないことには始まらない！

「僕が考えてきたのは、和菓子喫茶？ と言えいいのか……。
喫茶店じゃなくて、茶店、^{ちやみせ}って言った方がいい気がする」

「茶店？ 和菓子出すのか？」

雛ちゃんが話に食い付いてくれた。

「うん。普通文化祭の喫茶店って言ったらケーキとか、ドーナツとか、洋菓子を振舞うと思うんだ。でも和菓子ならちょっと珍しいかもって思っ」

「へえ……。結構いいんじゃないか？ 未穂もそう思うよな？」

「え?!」

突然振られて驚く前橋さん。

ものすごく葛藤している。

雛ちゃんと仲のいい僕を褒めることは死んでも嫌だけれど雛ちゃんを批判することも死んでも嫌だ、と。

その結果。

「い、いいんじゃない、でしよう、か……と、思い、ます……」

苦悶の表情で雛ちゃんに同意した。地獄の苦しみを味わうことになったみたいだ。

「ふーん。佐藤君の割にはまともな意見だね」

「てめえ優大の割にってのはどういう意味だ! 優大は凄いだろうが!」

「具体的にどんなところが?」

「……そりゃ、優しいところとか……」

「他には?」

「……可愛いところとか……」

「他には?」

「……」

「え？ 他には？」

「……」

「なにになに？ 他には？」

「……っ」

「まさか、もう打ち止め？ 有野さんの言う優大（笑）のすごいところってそれだけなんだ。それは凄いねー」

ちょっと待って？ なんで今僕の名前に（笑）がついたの？

「う、うるさい！ 優大は言葉じゃ言い表せないくらいすごいんだ！」

とっても恥ずかしいけど、嬉しいね。でも、嬉しいんだけど、前橋さんのいないところで褒めてほしかったかな！ 多分僕無事に家に帰れないんじゃないかな！？

「まあ、冗談は置いといて、（笑）君の意見いいと思うよ」

（笑）をとるんじゃないくて僕の名前をとるんだ。

「あ、ありがとう。でも、これを思いついたのは楠さんのおかげなんだ」

「私のおかげ？」

「……なんでだよ優大……。てめえ、どういふことだよ……！」

ななななんでこんなに睨まれているの？！

「はあ、はあ……。あ……。貧血気味……」

前橋さん……。お願いだから、床の掃除は自分でしてね……。

「あのときに食べさせてもらったおはぎがとってもおいしかったから、みんなも食べたらいいのになあーって思っ」

「ああ、あの時の手作りおはぎ……。……なるほどね……」

納得の表情の楠さんと驚きにあふれている表情の雛ちゃん。

「ゆ、ゆうた？！　なんで、若菜の手作りおはぎなんて食べたんだ？！　いつ？！」

「え？　えーっと、この前楠さんが僕の部屋に来た時に……」

あれ？　これって言うてもいいのかな？　僕が連れ込んだってことになってたんだっけ？

「な、なな、な……！」

愕然としている雛ちゃん。まあ、確かに僕の部屋なんかには楠さんが来るなんて考えられないよね。衝撃受けても仕方ないよ。

「どーしてわかながゆーたのへやにいつてるの？！」

「え、えっと、その……」

窓の外に立っていたからなんて言えないよ……。信じてくれないし……。

ここで楠さんの助け舟。

「そういう仲だから、ね？ 佐藤君？」

「え？」

そう言う関係って、主従関係の事かな？ それなら僕の部屋に來てもおかしくないよね。頷いても問題ないよね？

「う、うん。そうなんだ」

頷いてみた。

失敗だったのかもしれない。

「……………あ、ががががががが……」

雛ちゃんが壊れた。

「ごめんね、有野さん。黙ってようと思ったんだけど……。ばれたら仕方ないね。私たち、そういう関係なの。くふ」

なんで最後に笑ったの？

「……………う、う……」

「え？！ ひ、雛ちゃん？！ なんで泣くの？！」

「ぐす……」

「間違いなく絶対に百パーセント雛ちゃん勘違いしていると思うよ?!」

「か、勘違い……。そ、そう……。……私、勘違いしてたみたいだ……。優大も私の事気になってるのかと思ってた……」

「え?! 雛ちゃんのことは好きだよ?!」

「うう……。もう、いい……。嘘はいいよ……。優大……」

「う、嘘じゃないよ!」

どこからどう見ても勘違いされているよねこれ! どういう勘違いかわからないけど!

「うるせえ!」

突然怒られた! 泣いている雛ちゃんに怒られた!

「てめえら……。! 覚えてやがれ!?!」

カバンを掴んで涙を散らしながら教室を飛び出した。

「ま、待ってください……。有野さん……。私、貧血で……」

前橋さんもよろよろとその後を追って教室を出て言った。
残された僕と楠さん。

今日も、楽しくない会議の終わり方だった……。
後で謝ろう……。

「……。怒らせちゃったね佐藤君」

「う、うん。でもなんで怒ったのか僕には分からない……」

「……ぷっ」

「わ、笑わないで……」

「これは、面白い。有野さん、いい気味だね」

「そんな……。なんで雛ちゃんをそんなに目の敵にするの」

「それは有野さんに言ってあげて。私は敵対心なんて持ってなかったんだから」

「……そういえば、雛ちゃんは前から楠さんに突っかかってた、ね……」

僕の言葉に楠さんが微妙な顔をする。

「……なんだかその勘違いは有野さんが可哀そうだから訂正しておいてあげよう」

「え？」

「有野さんが私に文句を言いに来ていたのは、周りの人が有野さんにそれを期待するからなんだよ。しょうがなく、有野さんは私に文

句を言っていたんだよ」

「え？　　どういふこと？」

「有野さんは、私に嫉妬している人のガス抜き役割を担ってくれていたの。嫉妬している人の代わりに有野さんが私に言うことで、その人のストレスを定期的に発散させていたっていうこと。溜まって溜まって大変なことにならないように、私の為を想ってやってくれていたことなの。それを知っていたから私は別に有野さんのことを嫌っていなかったし、うるさいとか思っていなかった。昨日まではね」

「そうだったんだ……」

「でも昨日からなんだか普通に突っかかってくるようになってね。しかもどうやらそれは君が私のことをばらしたからみたいだね……。どういふつもり？」

「え、ぼ、僕ばらしてないよ?!」

まだ。

「……まあ、さっき有野さんもそう言っていたし、そうなんだろうけど。でもだとしたらなんでばれたの？　私は完璧だったはず……。君もいつも通りに見えた。原因は何？」

「えっと、その、多分勘違い……」

「勘違い？」

昨日あったことを話す。

雛ちゃんが楠さんと僕の関係がおかしいと違和感を持ったこと。そしてその時にたまたまいた前橋さんを見て僕が怯えたこと。それを雛ちゃんが、僕が楠さんに対して怯えているだと勘違いしたこと。僕が言いそうになったこともちゃんと言ったよ。

「……ふーん。なるほどね……。でもそれが間違いじゃないっていうのが勘違いだと一概に言えないところだね……。まあ、もはやどうでもいいけど。また明日から睨み付けられる生活が始まる。いえ、もっとすごいことになりそうだけど」

「勘違いだよって、教えてあげれば解決するよね」

「無理だね。私たちの脅し脅されの関係を言わない限り納得しないと思うよ。思い込み強いでしょ、有野さん」

「え、う、うーん？　そういうところも、あるかな……？」

あるね。

「そう言うわけで、有野さんはさらに勘違いしてしまっているのです」

「さらに勘違いって、いったいどういう勘違い？」

「本当に鈍いね。でもどうしようもないからそのまま生きていくしかないと思うけど。じゃあ私は帰る。あ、明日君の和菓子喫茶、みんなの前で発表するから。佐藤君が考えましたって。いいでしょ？」

「え、う、ん。もちろんだよ」

却下されなかった。よかった。

「それじゃあね。ばいばい。優大（笑）くん」

「それやめてよ……」

今までの人生にお別れを

七月六日。

水曜日。

刻一刻とテストの日が近づいてくるけれど、勉強は一向にはかどらない。

来週の水曜日はテスト最終日だ。あと一週間ですべてが終わる——などと言ったら世界の終わりが近いような錯覚に陥ることが出来るのだけれども、実際のところは僕自身が終わるだけで世界は何ら変わらない。電車が遅れることも無いだろうし、バスが早く来ることも無いだろう。

僕の人生が終わろうが誰も気にしない。

何人かは悲しんでくれるのかもしれないが、その程度だ。

こんなことだって多くの人が考えていることだ。

その他大勢が考えるようなことで悩む。そう、僕は普通なのだ。平凡。凡人。どこにでもいる、いや、平均を大きく下回っている。勉強もできない、運動もできない。いつも周りの人を怒らせている。大勢の人に褒められたことなんて一度も無い。賞賛とは無縁の生き物だ。

何か一つでも得意なものがあれば自信がつくのに、何も見つからない。

姉や弟と比べても僕だけ異常に劣っている。

可愛い姉と、可愛い弟。

姉は勉強できるし、弟はなんだってできる。

それに比べて僕は——

と、こんなことを考えながら通学路を歩く。

順調にいかない勉強のことを頭から追い出そうとしていた僕。

結果、失敗。

負の連鎖に巻き込まれてしまった……。

朝から憂鬱だ……。

どす黒いオーラを放出したまま学校へ到着。

僕は手紙が入っていないことを祈りながら下駄箱を開けた。

今日は何も入っていない。一安心だ。

「……佐藤……！」

安心して突っ立っていた僕を誰かが呼ぶ。昨日と同じならば、小嶋君だ。

手招きをしているのはやはり小嶋君だ。

「小嶋君、おはよう」

「そんなことより、これ」

DVDを差し出してきた小嶋君。

昨日貸した2クルルのアニメが今日返ってくるということは面白くなかったということだ。お気に召さなかったようだ。

「面白かったわ」

「え？」

面白かった？ それはつまり見たということ？

「あ。いや別に普通だった。勉強しながら流してたから内容はよく覚えてねえ。とりあえず一通り再生したから返す」

「うん……」

テスト週間でなければちゃんと見てくれたはずなのに……。

「……で、次のを貸したいとかあれば借りるぞ」

「あ、うん。今度のはきっともつと面白いよ。はい、これ」

「おう。明日返すわ」

「え」

これも2クールあるから一日で見るのは大変だと思うけど……。

「明日も、何か持ってきてくれよ」

「う、うん」

小嶋君が笑顔で去って行った。

……？

なんだか、楽しんでくれているような気がする……。

……。

気のせいだね。

朝の教室に入って一番に雛ちゃんの元へ向かう。

当然昨日のことを謝るためだ。

金色の髪の人が机に伏せていた。僕はその人に近づく。

「雛ちゃん……昨日は、ごめんね……」

「……」

顔を伏せたまま無言で僕に中指を立ててきた。

「その、楠さんが僕の部屋に来たのは事実だけど、変なことはしてないから」

中指を立てていた左腕が力なく机に垂れる。

「雛ちゃんが心配するようなことは何もないからね」

「……心配なんてしてねえよ……」

こもった声が聞こえてきた。

「失せろー」

「ごめんね。何か、僕が嫌な思いをさせちゃったんだよね」

「失せろー」

「僕、なんでもするから、許してくれないかな……」

「なら失せろー。別れろー」

「う、うん。雛ちゃんがそれを望むのなら失せる……。でも、別れるのは嫌だよ」

別れるって、雛ちゃんとだよね？ 親友やめろってことだよね？
そんなの嫌だよ。

「……優大。五秒以内にそこから逃げねえとブツ飛ばす」

「え？」

「ご、よん、さん、に——」

「ご、ごめんね！」

殴られたくなかったので僕は慌てて逃げた。情けない……。雛ちゃん、許してくれそうにないよ……。

今日の四時間目はLHR。

先週は副委員長を決めたね。なんだか、密な一週間だった気がする。

本日の議題は当然文化祭について。

出し物を決めるみたいだ。

先生が教室の隅で見守る中、楠さんが教壇の上に立ちみんなを見渡す。

「先日、皆さんには『飲食系』がやりたいと意見をいただきましたが、今日はその内容を決めたいと思います」

うう……。僕の言った和菓子喫茶が発表されるんだね。どきどきするよ。

「一応、こちらでも考えまして、佐藤君からとてもいい案が出たので候補の一つとして上げさせていただきます。あくまで、佐藤君の意

見は第一候補です。まだ決定ではありませんので、他にやりたいことがあればどんどん言ってくださいね」

みんなが僕の方をちらちら見てくる。とっても恥ずかしいね……。でも、楠さんも雛ちゃんもいって言ってくれたから、少し自信がついたよ。早く発表してほしい位だ。

楠さんが一瞬僕に視線を送る。発表するみたいだ！ わー！ 恥ずかしい！

「佐藤君が昨日提案してきたのは『女子高生が握るおはぎ喫茶』と言うものでした」

……………え？！

教室中がざわめく。

当然だよ！ 僕の心だってざわめいているもの！

こんなにかがわしい匂いのする喫茶店僕提案してないよ！？

「とても素晴らしいアイデアですね。私たちが握っているの姿を公開しながら、完成したものを法外な値段で販売する。これは繁盛しますね」

教室のあちこちらから「サイテー」とか「きもちわるい」とか聞こえてくる。

ちょ、ちょっと僕これは嫌だ！

「あ、あの、楠さん？！ 僕そんなこと言っていないけど？！」

僕は立ち上がって抗議した。

「え？ どうしたの佐藤君。昨日あんなに楽しそうに語っていたじゃない（笑）」

昨日から楠さん（笑）を多用してくるね！？ それよくないよ！
メールじゃないんだから！

「僕が言ったのは和菓子喫茶だよ？！ なんで『女子高生が握る』
っていうのがついてるの！？」

「昨日佐藤君が言ったからだよ？ もー、なに？ 恥ずかしがって。
いいアイデアだと思うよ？ 私は」

全然そんなことないよ？！ クラス中の女の子が僕を冷たい目で
見ているもの！

「そ、そうだ！ 雛ちゃん！ 僕そんなこと言ってないよね？！」

「……うるせえ……」

ぐったりと机に顔をつけた状態の雛ちゃん。

「雛ちゃん？！ お願いだから僕を助けて！」

「うるせえ」

「あの、その、雛ちゃん！ 僕の無実を証明して！」

雛ちゃんが勢いよく立ち上がった！ 助けてくれるのかな？！

「うるせえって言ってんだよこの野郎！ てめえブツ飛ばすぞ！」

「え！　ご、ごめん！」

怒られてしまった。やっぱり、許してくれてないよね……。

「お前と若菜は私の敵だ！　誰が敵を助けるか！　死ね！」

そう言って椅子に座って僕から顔をそらした。

「ブラボー！　ブラアボオオオ！」

前橋さんが一人で拍手して一人で喝采を送っていた。

雛ちゃんの大きな声に静かになった教室。

そんなこと気にした様子もなく楠さんが言う。

「話し合いは済んだ？」

「すみました……」

涙目でうなづく僕。

僕は雛ちゃんの敵みたいだ……。悲しい……。

「では、そう言うわけで私たちのクラスは『女子高生が握るおはぎ喫茶』に決定しました」

「「「「「「「……え……？」「」「」「」「」「」

気づいたときには、もう手遅れでした。

僕らのクラスの出し物は、JNO（女子高生が握るおはぎ）喫茶になってしまった。

雛ちゃんの怒鳴り声を聞いたクラスメイト達は意見する気を全部押し殺されてしまったようで、誰も楠さんに反対しようとはしなかった。

僕は雛ちゃんに敵だと言われたことにショックを受けそのあとのLHRは一切覚えていない。それどころか午後の授業丸々覚えていない。テストが近いというのに……なにをしているんだろう……。もうすでに帰りのホームルームが始まっている。

これが終わっても今日の放課後は委員長会議が無いと言っていた。都合がいい。

雛ちゃんにちゃんと説明して許してもらおう。

でもなんて説明すればいいんだろう。

そもそも何を怒っているのだろう……。

僕と楠さんの関係を勘違いしているから怒ったんだよね……。でも、一体どういう勘違いをすればそこまで怒るような事態に陥るのだろう。ちよつと想像がつかないよ。

……。

本当のことを言おう。

雛ちゃんは親友になってくれた。

本当は思っていないなくても、僕のことを親友だと言ってくれた優しい雛ちゃんとの関係が終わるのは嫌だ。

楠さんのことは言わないで、僕が脅されているんだということを言うだけならば誰にも迷惑がかからないはず。楠さんの印象が少し悪くなるけれど、ごめんなさい。今回は、自分の事情を優先させてもらおう。

考え事をしているうちに帰りのホームルームが終わった。

僕は立ち上がり教室を見渡した。

雛ちゃんが前橋さんと一緒に教室を出ようとしていた。

僕は慌てて追いかける。

教室の前の廊下ですぐに追いついた。

「ひ、雛ちゃん」

「ああ？」

怒った顔で振り返った。とても怒ってらっしゃる。

「なんなんですか佐藤君！ 有野さんはこれからご自宅に帰られるんですから邪魔をしないでください！」

「あ、引き止めて、ゴメン……。でも、その、許してほしくって……」

「許してほしいだあ？ 別に怒ってねえけど？ 優大なんか親友でもなんでもないんだから話しかけてくんない！」

「え……。や、やっぱり、そうだったんだ……」

親友になろうって言うてくれたのは僕を氣遣ってだったんだね……。でも、ものすごくショックだ……。ちよつと泣きそう。

「やっぱりってなんだよ！ お前私のことを信じてなかったのか？！」

「失礼ですよ佐藤君！ ……早くどっか行ってください」

僕の言葉が悪かったみたいだ。

「雛ちゃんは優しいなって言いたかったんだ。ごめんね、変な言い方して。ごめんね……」

僕の謝罪を聞いて少し表情を緩める。

「……ならいいけど。で？ 友達でもなんでもない優大が何の用だよ」

「あの、昨日の事なんだけど……」

「なんだよ。自慢しに來たのか。はいはいおめでとうすごいね。これで満足だろ。じゃあな」

僕の肩を軽く押して雛ちゃんが帰ろうとする。

僕はそれを慌てて引き止める。

「雛ちゃんっ」

雛ちゃんの右手を掴んだ。

とっても暖かった。

「なんだよ」

振りほどくこともせず、面倒くさそうに振り向いてくれた。

「あの、その、僕、話したいことがあるんだ」

「なに。何だよ。言ってみろよ」

「ここじゃあ、言えなくて、えっと、人のいないところで、話した

いんだけど……」

「なら私のいないところで一人でしゃべってろ」

「雛ちゃんに聞いてもらいたいんだ」

「……。知るかよ」

雛ちゃんが手を振りほごうとする。でも僕はしっかりとつかんで離さない。

「お願いだから、僕の話聞いてほしい」

「……それを聞いて私はどう思う。その話を聞いた結果、私はどうなる」

「……えっと……、さあ……」

「……ふん」

「佐藤君?! 有野さんの手を握らないでください! 有野さんの手が汚れてしまいます!」

僕の腕にチョップをして手を離させようとする。でも僕は離さない。

「い、痛いよ、前橋さん……」

「なら離してください! ハサミを持ち出そうとカバンに手を入れますよ?!」

それは怖い！
でも、離さない。

「こ、こうなったら……。カバンに手を入れます！」

うわっ、カバンに手を入れた！　ハサミが出てくるのかな？！
それでも僕は離さないぞ！

「……未穂、いいから」

雛ちゃんが優しい声で前橋さんに言った。
それを聞いて前橋さんが見るからに落ち込む。

「は、はい……。有野さんが、そう言うのであれば……」

悲しそうにカバンから手を出した。でもしっかりとハサミが握られていた。いや、しまおうよそれ。離そうよ。

「……私にだけしか、話せない話なのか？　他の奴に聞かれたらまずいのか？」

「う、うん。雛ちゃんにだけ、話したい……」

「……そっか。なら、秘密基地で待ってる」

「え……。あ、ありがとう！　雛ちゃん！」

「別に。いいからそろそろ手を離してくれねえかな」

「あ、ごめん」

僕はすぐに手を離した。

雛ちゃんは僕の手から解放された右手を眺め握ったり開いたりしていた。

三回それを繰り返し、僕を見る。

「やっぱり私、耐えられないかも」

「え？」

「こっちの話。じゃあまたあとで」

振り返り真っ直ぐに廊下を進んでいく。前橋さんが一度僕を睨み付け慌てて雛ちゃんを追った。

雛ちゃんは振り返らない。真っ直ぐに真っ直ぐに歩いた。

……。

ふう。

よかった。とりあえず話の場を設けることができた。僕は脅されていますと、言ってしまうおう。

「佐藤君？」

後ろから綺麗で恐ろしい声が聞こえてきた！僕はそれに戦慄を感じた。

「佐藤くん。一体、有野さんと何の話をしようとしているのかな
ー？」

誰かが、僕の肩に手を置いた。

その手を見てみる。

心が不安定になるくらい綺麗な手だった。
間違いなく楠さんの手だ。

「佐藤君、ちょっと来て」

楠さんが僕と位置を交換するような形で肩を持った手を引き勢いよく前にでた。体勢を崩す僕を放って、楠さんが空き教室へと向かった。

楠さんが先に入った空き教室に僕も入る。

「佐藤君。まさか君、全部ばらす気？ 有野さんに許されたいからって、全部ばらす気？」

僕が入ってすぐに聞かれた。

楠さんは椅子に座って僕を睨み付けている。怒っていらっしやる……。

「君、有野さんに嫌われたからどうでもいいやって思ってるの？
止めてよ。私まで巻き込むなんてとっても迷惑」

「そ、そう言うわけじゃなくて、その、あの、僕が脅されているって
いうことだけを言おうと思って……」

「脅されている理由にまで話は飛ぶでしょう。なんて説明するの」

「えっと、黙秘……？」

「黙秘、ねえ……。君にそんな高度なことができるとは思わないけど……」

高度なんだ……。

「もしそれができたとして、私が君を脅しているっていうことを教えてしまえばそれだけで大変なことになるでしょう。私の嫌な噂が一気に広まっちゃうよ」

「それはきっと大丈夫。雛ちゃんはいふらしたりしないから」

「でもより一層私を見る目が厳しくなるだろうね。そんなのごめんだけど」

確かに、それは嫌だよね。

人に嫌われるのなんて、誰だって嫌だもん。

「……でも、僕は言うよ」

「……へえ。私が嫌がることをしようっていうんだ。いい度胸だね」

そう言って、携帯を取り出した。

「君は私に命を握られていることを忘れているみたいだね」

「忘れてなんかいないよ」

「なのになんでそんな行動をとるの？」

僕は、まっすぐに楠さんを見据える。

「……僕、今回は自分勝手に生きてみようと思うんだ」

「……自分勝手に？ 何言ってるの？」

え。えっと……。

「その、楠さんが前言ってくれたことを、実践してみようと思って……」

「私そんなこと言ったっけ？ 覚えてない」

僕の心には深く刻み込まれたのに楠さんとしてはそうたいしたものではないみたい。
少し衝撃だ。

「えっと、その、勇気を出せとか、自主的に生きろとか」

「……ああ。それね」

「うん。だから、僕は勇気をもって我儘を言ってみる」

「……私が嫌がっても？」

「うん」

「この私が嫌がっても？」

「う、うん」

なんでこのをつけたんだろう。

「君は可愛い私を傷つけてもいいっていうの？」

「うん。本当は嫌だけど、雛ちゃんとの関係が終わるのはもっと嫌だから」

「……そう」

楠さんが俯いた。

これで僕の悪行がばらされたらどうしよう。雛ちゃんには本当のことを言おう。きつと信じてくれる。でもみんなは僕を責めるはず。悲しいけれど、雛ちゃん一人が信じてくれるのなら僕はそれでいい。

「……私が脅していることだけを教えるんでしょ？」

「え？ あ、うん」

「その理由は言わないんでしょ？ 私の性格が腐っていることは内緒にしておいてくれるんでしょ？」

「うん。言う必要ないもん。それに、楠さんの性格が悪いだなんて僕思っただけだよ」

「はいはいフォローフォロー」

本当にそう思っているのに……。

「なら、いいよ。仲直りしていいよ」

「え、あ、うん」

「きっと私が君を脅していると知ったら有野さんは私のことを今まで以上に敵対視してくるだろうけどいいよ」

「う、うん」

「それを見た私を嫌っている人間達がそれを見て有野さんの味方になって私の居場所がなくなっていくだろうけどいいよ」

「……う、うん……」

「それで居場所がなくなった私は学校に来なくなって一人部屋の隅で丸まって飲み終えたジュースのストローを噛みながら出会い系で男を探して――」

「もう勘弁してください!」

聞きたくないよそんな話!

「これからが面白いところなのに」

何一つ面白くなかったよ!

「あの、やっぱりやめた方がいいよね……?」

どう見ても嫌がっているよね、楠さん……。でも、嫌がっているはずの楠さんの顔は晴れやかだった。

「ううん」

楠さんが立ち上がり、笑顔まで見せてくる。

「本当に、いい傾向だと思う。君はもっとそうやって生きていくのがいいと思うよ」

「う、うん……。本当にいいの？」

「いいってば。もうちょっとわがままで、もうちょっと自分の言いたいことを言えばきつと楽しいと思うよ」

「そう、なのかな……」

「そうだよ。間違いなく。昨日の委員長会議で良い案を出してくれ
たし、たまには君のやりたいことをやらせてあげないとね。自棄に
なられて全部ばらされたら困るからね」

「そんなことはしないけど……」

「先の事なんて誰も分からないでしょ」

そうだけど……。

「嫌な目で見られるのくらい、もう慣れっこだし。それが一人増え
たところで問題ないよ」

「……あの、ごめんね……」

「悪くない。君の人生が明るくなるのならそれは嬉しいことだし」

「……」

優しいなあ……。なんでだろう……。

「あの、楠さん、聞いても――……。その、なんで僕にそんなに優しくしてくれるの？　僕の人生の心配をしてくれるなんて、その、嬉しいけど、申し訳ないというか……」

「なんでだろうね。私も分からないよ」

苦笑いを見せる楠さん。

「でも何となくは、分かるかな」

「何となく？」

「君は多分私とは正反対の生き物だと思うんだ」

「う、うん……。容姿もよくないし、勉強もできないし、運動もできないし……」

「そう言うことじゃなくって、根本的に。私が陰だとしたら君は陽。でも明は私で暗は君。そんな感じ」

「……何となく、分かったかも……。でも、それでなんで人生の助言を……？」

「正反対すぎるから、逆に似ているのかなって。だから似た者同士もっと人生を楽しんでほしいと思っているんじゃないかな。確かな

ことは言えないけど」

「う、うん……?」

よく分からないや。

「まあ、とりあえず、早く秘密基地に言って事情を説明しなよ。怒って帰っちゃうよ」

「あ、そうだった。ごめんね、楠さん……。迷惑をかけちゃうね……」

「いいよ。たまには自分も損もしなきゃ。でも、報告は聞くからね」

「うん」

「よし。なら……行ってらっしゃい」

笑顔の楠さんに見送られ、僕は教室を出た。
なんだか、失敗する気がしない。

変わっていく日常

僕が待ち合わせ場所にたどり着いたとき、雛ちゃんはつまらなそうに秘密基地を眺め立っていた。

「お待たせ……」

同じようにつまらなそうな目で僕に視線をくれる。

「待ってねえよ。お前だってすぐに学校出たんだろ。待つわけねえだろ」

「そうだね……、ごめんね……」

「……」

僕の謝罪に答えることなく、雛ちゃんが再び秘密基地を見た。

そして、出来る限り感情を殺した声で、まるで僕に心の内が悟られまいとでもしているかのように言う。

「ここは変わらねえな」

「え？」

いきなりすぎて僕は何も言えなかった。

「ここはずっと前から変わらねえな。汚くって小さくって。でも立派だよな。何年も放置したのにちゃんとそのままの形で立ってる。しっかりしてるよな」

「うん……」

「壊れてくれていた方が良かったのかもしれないな」

「え？」

「ここは……あまりにもあの頃を留めすぎだ。色々と思いだしてしまおう」

「色々……？」

「ああ。友達顔とか、強い日差しとか、セミの声とか、あと、初恋とか」

「……初恋……」

「目を閉じればあの時の音が聞こえてくるみたいだ」

僕と同じことを思っている。

でも聞こえてこないんだ。

もうあの頃は帰ってこない。

「昔と同じだ。だから、我慢がきかなくなる」

「我慢？ 何が、我慢できなくなるの？」

「うるせえ」

怒られてしまった。聞いてはダメなことみたいだ。

「で、いったい何の話をしようっていうんだ」

改めて僕を見る雛ちゃん。昔を思い出したせいなのか、少し悲しそうな目だった。

「……僕と、楠さんの関係を、雛ちゃんに知ってもらいたいんだ」

「もう知ってるよ。んなもん改めて突きつけてくんなよ」

「違うよ。雛ちゃんは勘違いしているよ」

「……勘違いか……。それだとどれほどいいか」

「勘違いだよ。絶対」

「やけに自信たっぷりだな。ならなんだよ。言ってみろよ」

「……うん……。僕と、楠さんは――」

……。

何故だろう。言葉が出てこない。

「……なんで黙るんだよ」

「えっと……」

僕にもわからない。

ただ、妙な不安を覚える。

誰かに見張られているような不安。

世界が僕を監視しているようだ。

僕が雛ちゃんと同様にするのを嫌がっているような、僕がちゃんと言えるのかを見守ってくれているかのような。

「なんだ。やっぱり言いたくねえのか」

「そうじゃなくて……」

物凄い敵意がこもった視線と、それを打ち消してしまうほどの安寧な視線。

ひたすらに気持ちが悪い。不安が僕を飲み込む。

矛盾した二つの視線の間で僕は言葉に詰まってしまった。どうすればこの胸騒ぎを取り払うことができるのだろう。

そもそも、一体何が僕を不安定にしてくるのだろう。

原因の分からない不協和音。

それを止める手段を僕は知らない。

「優大」

頭の中で鳴り響く噪音を突き抜けて雛ちゃんの声が僕の耳に入ってきた。

「お前は、なんで若菜との関係を私に言おうと思ってるんだ？」

「……それは、その、許してもらいたくって……」

「なら、なんで言いたくねえんだ？」

「……分からないけれど、よくないことが起きそうで……」

「……そう言うことなら、安心しろ」

雛ちゃんが少しだけ笑みを作って僕との距離を縮めた。

「私はどんなことでも受け止めるから。何を言おうとしているのかは、まあ、分からねえけど、優大が私との関係をまだ続けたいって思ってるのなら、どんなにつらいことでも受け入れる。だから何も不安に思うな。私を信じろ」

そう言って、僕の肩に手を置いてくれた。

その瞬間僕は気付く。

僕は雛ちゃんと向かい合って、雛ちゃんに許してもらいたいんだ。それなのに僕は理解不能な不安に惑わされて目的が見えなくなっていた。

何が不安だ。

そんなことより僕は雛ちゃんに許してもらいたいんだ。雛ちゃんと親友を続けたいんだ。

何をためらうことがある。

このために僕は楠さんに申し訳ない事をする決心をしたではないか。楠さんだってそれがいいって言ってくれたではないか。臆病者の自分に嫌気がする。ここで言わなければ、今感じている不安なんかの比ではない最低な人生が待っているに違いない。

僕は雛ちゃんの顔をまっすぐに見た。

「言ってくれ、なんでも」

「うん」

僕は不安に蓋をした。蹴散らすことはできなかったので、僕は不安を無視した。

「……実は僕、楠さんに……その、えっと、何と云えばいいのでしようか……あの……」

ズバッと言えない自分が情けない。

「優大。大丈夫だ」

いつかのように、雛ちゃんが僕を優しく揺すってくれた。
だから、言える。

「……僕、少し前から、楠さんのいうことに従わなきゃダメになったんだ……」

無言。

しばらく無言。

その後に。

「……は？」

僕の言っていることが理解できていない雛ちゃん。
確かに、僕の言っていることは非現実的だ。ありえない。

「ほ、本当なんだ！ その、そうなった理由は言えないけど、僕と楠さんは、主従に近い関係なんだ……」

「ま、まで、まで……。……あの若菜が？ 優大を従えている？
……なんで？」

「その、理由は言えないけど……。僕は脅されているんだ……」

「おどっ……。じゃあ、この前若菜がお前の家を訪れたっていうのはなんだ？」

「えーっと……。僕を脅すネタを増やすためにきたみたい……」

愕然としている雛ちゃん。

そりゃそうだよ。こんな誰も信じられないような話聞かされたら、相手の頭を疑っちゃうよね……。

「脅されているってことは、お前が悪い事したってことか？」

「え、えっと、多分……」

「多分って……。いや、そう言えば理由は言えないんだっけな」

「うん……。ごめんね、雛ちゃん……」

「悪くない」

僕の肩をぎゅっと握りしめる。

「……あいつ……。私の優大を脅すなんて許さねえ……」

雛ちゃんの表情が冷たくなる。

「許さねえ」

ほにゃんとした目が鋭くなる。いつも以上に、見たことのないくらい。

「あの、雛ちゃん」

「大丈夫だ。私に全部任せておけ。もう脅させねえ」

「そ、そうじゃなくて、そのね」

「うまくやる。私なら、うまくやれる……！」

「雛——」

「あいつ……ブツ飛ばす……！」

「雛ちゃん！」

僕以外のところに意識を持っていた雛ちゃんを、大声を出して無理やりこちらに引き寄せる。

「なんだよ。普通に目の前で話してるんだから大声出さなくっても聞こえる」

「雛ちゃん、ダメだよ。ダメ。絶対にダメ」

「なにがだよ。脅しのネタがばれるのが嫌なのか？　大丈夫。絶対に——」

「そう言うことじゃなくて！」

また目の前で出された大声にうるさそうな顔をした雛ちゃん。

「……ならなんだよ」

「喧嘩は、ダメだと、思います」

絶対に、よくない。

「……ならどうするんだよ。どうやって解決するんだよ」

「……解決……」

そんなこと考えたことも無かった。
でも、それなら簡単だ。

「……解決は、いいよ。何もしない。解決しなくていい」

今まで考えてこなかったということは、解決する必要が無かった
ということだ。

「良いわけねえだろそれ。このまま脅されて生きていくのか？」

「うん。脅されているって言っても、よく考えたら僕あまり嫌なこ
とされてなかったかも」

「『あまり』嫌なことされてなかった『かも』。曖昧だぞ」

「う……。い、いや、本当に嫌なことは、されていないよ？」

「でもな、私に任せてくれれば、ちよつとも嫌なことされねえんだ
ぞ？」

「だいじょうぶ。だいじょうぶ。きっと、いつか、自分で解決して見せるから」

僕の言葉を聞いて雛ちゃんが不満そうな顔を見せた。

「私は嫌だな。優大がそんな目に遭っているのに、何もしないなんて」

「そんな目、って言うほど大層なものじゃないよ？　僕は今日、それのことを相談しに来たんじゃなくて、雛ちゃんに事情を説明して仲直りがしたかったから来たんだ。だから何もしなくて大丈夫だよ」

不満そうな顔は戻らない。

何か考えるためなのか、一度下を向く、すぐに顔を上げた。

「……我慢できるのか？」

「大丈夫」

僕の返答に雛ちゃんが目を瞑りしばらく黙りこみ、

「よしわかった。優大がそう言うのなら何もしない。自分で解決しようとするのを邪魔しちゃ悪いからな」

「うん」

解決するつもりなんてないけれど。というより、解決できる気がしないけれど。

「でも私は若菜を許さない。やっぱり若菜は私の敵だ。一番の敵だ」

「え、そんな。ダメだよ喧嘩は」

「これは私の問題だ。お前の問題じゃない。私はあいつが優大に謝るまで若菜を仇だと思う。優大に何と言われようともう決めた」

「で、でも……」

「優大が私に手伝わせてくれないように、私も譲らない。あいつは私の敵だ!」

そう言われたら、僕には何ともできない……。

でも何とかしたいなあ……。

多分、何もさせてくれないのだろうけれど。

何かいい考えは浮かばないものかと無言で考えているところ、雛ちゃんが言う。

「悪かったな。なんか、勘違いしちゃってたよ」

謝ってくれた。

「え、いや、ううん。全く問題ないよ?　ところで一体どういう勘違いをしていたの?」

全然わからないよ。あそこまで怒る勘違いってなんだろう。

「……え、お前、鈍すぎ……」

え?　驚かれた。なんで?

「まあそれがお前のいいところだからな」

「い、いいところ？」

よく分からない。

「分からなくていいよ。それがお前だ。お前は変わるな」

「……」

僕は、変わるな。

楠さんは言っていた。変えた方がいいって。

変わった方がいいのか、変わらない方がいいのか。どっちがいいのだろう。

僕としては、変わらないで生きたかったけれど、勝手に色々と変わってしまった。

僕は変わっていないのかもしれない、でも僕の人生は激変している。

波風のない穏やかな人生を送っていきたかったのだけれども、最近人は怒らせたり人に恨まれたりしている。

できる事ならば、何事もなく死んでいきたかった。

しかしもう毎日は変わった。

穏やかさから離れてしまっている。

でも、何故かそれを残念だとは思わない。

多分、いい機会なのだと思う。

楠さんは言っていた。勇気を出せば人生が楽しくなる。

おそらくこれが最後のチャンス。

穏やかな人生を過ごすのか、波のある人生を過ごすのかを選択する最後のチャンスだ。

これを逃せばきつとこれから先穏やかで何もない人生を送ること

になるのだろう。

ずっと一人で本を読んで終わる毎日を選ぶのか。脅されたり、怒られたり、殴られたり、恨まれたりする毎日を選ぶのか。

——僕は思い出す。

屋上で、楠さんと一緒に食べたお弁当は、とってもおいしかったな。

僕は。

僕は——

「僕も変わりたいくないって思っていたけれど、多分、変わった方が楽しくなると思う」

「いや、お前は変わらない方がいい。そのままの優しい優大でいてくれよ」

「——僕は臆病なんだね」

「……は？」

いつか言われた言葉だ。

僕は臆病。

「臆病じゃねえ。優しいんだ」

「ありがとう。でもきつと、僕は臆病者なんだよ。人と距離を縮めるのが怖かったんだね」

「いいじゃねえかそれでも。お前が距離を離そうとするのなら私がお前の方に走って行くから。お前は変わらないでいい。お前と距離を縮めたい奴だけ距離を縮めればいい。優大だって私がいれば充分

「だろ？」

「うん。雛ちゃんは優しいもんね。雛ちゃんといると楽しいし。でも雛ちゃんが僕との距離を縮めてくれるなら、僕もそうする。そっちの方が早く距離を縮められるもんね」

「……まあそうだけど……。優大が大勢と仲良くするなんて、なんかいやだ」

「え、ダメかな……」

「あーいやいや、ダメじゃねえけど。……まあそうだな。お前の人生だもんね。口出しできねえよ」

納得してくれたみたいだ。

「勇気を出して進んでいった方がいいんだよね」

「……」

怪訝そうな顔の雛ちゃん。

「でも、お前どうしたんだ？　これまでずっと、一人がいいみたいな態度を取っていたじゃねえか。何があった？」

一人でいたいっていう態度だったんだ、僕……。なんだかちょっとショック……。

「うん。楠さんに言われたんだ。勇気を出せば人生楽しくなるよって」

「……若菜に……」

「そう。だから勇気を出してみようって思っ」

「……………そうかよ」

眉をひそめる雛ちゃん。

敵だと言った楠さんを僕が褒めたからだろう。

「でも、雛ちゃんのおかげでもあるよ」

「……私のおかげ？ 私は別に何も言った覚えねえぞ。変わるなって言っ」

「雛ちゃんが、國人君に会わせてくれたから。僕も変わるんだって自信がついたんだ」

「……ちっ。あのくそデブ……！」

また眉をしかめた。雛ちゃんのおかげなのに……。あ、もしかしてこれは國人君のおかげと言うことになるのかな。だから雛ちゃんは苦い顔をしたのかな。

「変わってどうなる。変われば何か起きるのか？」

「分からないけれど、楠さんが楽しくなるって言ってたから」

「……なんでお前は脅してくる相手の言葉を信じるんだよ」

「え、その、いくら脅してくると言っても、楠さんは凄い人だから。何でもできる人だから、信じようと……」

「……なんだそりゃ」

あきれ返っていた。

……そうだよね……。雛ちゃん、あれだけ楠さんに対して怒ってくれていたのに、当事者の僕がこんなこと言うなんてもうどうしようもないよね。呆れもするよ。

「……でもま、優しい優大らしいよ」

笑いながら、そう言ってくれた。

「でも私は今の優大が好きだぜ。だから、変わってもいいけど、頼むから私のことを忘れないでくれよ。そうすれば、文句はねえ」

「うん。僕だって、雛ちゃんとずっと一緒にいたいもん。親友だから」

「……そっか」

柔らかな笑みを浮かべた。

でも少しだけ悲しそう。

僕にはわからない感情だ。

「じゃあ、そろそろ帰るか。テスト勉強しなくちゃいけねえもんな」

忘れてた。今週はテスト週間だった。

「急いで帰らなきゃ」

「そうだな」

僕らは一緒に山を下りた。あの頃のように。

それなりに荒れた道で、さらに大好きな秘密基地から遠ざかって
いるというのに、まったく苦ではなかった。

大間違い

山を下りた僕はすぐに引き返して山を登ることになってしまった。草木の生い茂る山道からアスファルトで舗装された道路に変わり四歩進んだところで僕の携帯が鳴った。

『一人で秘密基地に集合』

敢えて誰からのメールかは言いません。ただ僕はこれに従わざるを得ないと言っておきましょう。

僕は人には見せられないものを落としてしまったから拾いに行ってくると、一緒に探してくれようとする雛ちゃんとか別れて秘密基地へ向かった。

二度目の登山は大変だった。

「はあはあ……」

やっとのことでたどり着いた。

「はあ……はあ……」

「ちょっと。何興奮してるの。もしかして私を見て興奮しているの？ やめてよ気持ち悪い」

秘密基地の前で暇そうに座り込んでいた。息の切れている僕に冷たい視線を送っている。

「ち、違うよ……ご、誤解……だよ……」

疲れた……。

「まあいいや。思ったより早かったし。有野さんと別れるのに苦戦すると思っただけ、なかなかいい切り抜け方をしたんだね」

「……まあ、うん……」

人に見せられないものを落としたと言ったら、「ああ、お前も男だもんな。ゆっくり探せよ」と言って苦笑いで帰って行った。
絶対に勘違いされているよ。

「あの、それで、どうしてここにいるの……？　その、もしかして……」

「ぜーんぶ聞いてたけど」

う。それはなんだか、申し訳ないや……。
あの時感じた不安の正体は楠さんだったんだ……。

「その、ごめんね。悪口言っちゃって……」

「いつ君が私の悪口を言ってたのかな。覚えがないけれど」

「その、脅されているとか、主従関係とか……」

「それ君の中では悪口にカテゴライズされるんだね。そのくらいなら気にならないからいいよ。謝らないで。それより有野さんの目が怖かった」

「それは……。その、やっぱり、雛ちゃん怒っちゃったみたいで……」

…」

「うん。想像通りだったよ。だから平気だよ、フォローなんかいないから」

「……う、うん……」

なんだか、悲しいな。

「わざわざ秘密基地まで戻ってきてくれてありがとう。もう用事終わったよ」

「え?!」

衝撃だよそれなりに! 電話で済ませてくれて……。

「直接伝えた方がいいでしょ。それと、一刻も早く伝えた方がいいでしょ。その二つを満たすために帰ってきてもらったというわけです。ごくろうさま」

「う、うん……」

もう、帰るのかな……。寂しいな……。

「それにしても君、勇気を出してたね。偉いよ」

う。なんだか楠さんに褒められたらむず痒いような感じが……。

「でも、私が言ったからとか、言わない方が良かったね」

「え？ どうして？」

「自分の意思じゃないみたいだし、有野さんとしても気分悪いだろうし」

「その、楠さんは、有野さんの敵、だから……？」

「違う違う。君は本当に鈍いなあ。よくないよ、それ」

うう……。僕のいいところなのか悪いところなのか分からないよ……。

「悪かったね、引き返してもらって。じゃあ、帰っていいよ」

「え？ 先に帰っていいの？」

「別にいいよ。なんで私が先に帰るっていうルールができてるの？」

「その、いつも先に帰ってたから……」

「ふーん、そっか。でも今日は先に帰っていいよ。私、ここですることがあるから」

「え」

ここですることって……あ、そっか。

「うん。分かった。じゃあ、僕先に帰るね」

「はいはい。じゃあね」

僕に対する興味をもう無くしてしまったみたいで、背を向けてカバンの中からグローブを取り出していた。ボクシングの。

楠さんは、今からここでストレスを発散するみたいだね。

僕はもう何も言わずに山を下りた。

僕は何もかも間違っていた。

小嶋君とアニメ

七月七日。

七夕だ。

年に一度織姫と彦星が出会える素敵な日。

短冊に願いを書けば僕たちの願いを叶えてくれる素敵な日。

年に一度の恋人との再会なのに、僕たちの願いをかなえてくれようだなんてすごいね。見習いたい。

とりあえず今日学校から帰ってきたら頭が良くなりますようにって短冊を書いておこう。

これでテストはばっちりだね。

おっとっと。卵焼きが焦げちゃう。

四人分のお弁当と朝ご飯を作り終え、家族が勢ぞろいした食卓につく。平日一緒にご飯が食べられるのは朝くらいだ。少しさみしい。夜は大体お姉ちゃんと僕と弟の三人だけだ。忙しいのは分かるけれど、あまり無理はしないほしい。

でも恥ずかしいから言葉にはできない。

いつかは伝えたいな。

「兄ちゃん。また隣町がニュースになってるよ」

弟が指さす先を見る。

『——小学校のガラスが大量に割られるという事件が、ここ——』

「物騒だね」

「うん」

隣の街なのになんでここまで治安の差が出るのだろうか。この前

も誰かの命が奪われていたし、その前も交通事故が……。危ない世の中だ。負の連鎖が続かなければいいのだけれど……。……

…お、お姉ちゃん、苦しい、苦しいから。

何故か僕の口にパンを押し込んでくるお姉ちゃんを何とかなだめて再びテレビに視線を戻す。

あ、今日の占い、天秤座が一位だ。きっと幸せな一日になるね。占いのおかげでとても清々しい気持ちで家を出ることができた。

僕の世界はとても狭くって、定員は一人だけだった。

僕はそこで本を読んだり、アニメを見たり、パソコンをしたりして過ごしていた。

それを心の底から、悲しいとか、寂しいとか、つらいだなんて思ったことはない。

だって、僕はその狭い世界しか知らないのだから。

他の世界を見ることが無いから、それが普通だと思っていた。

狭い狭い半畳の世界が普通で、たまにそこから出て誰かと過ごし、また半畳の世界に帰ってくるものだと思っていた。

美人とか、勉強ができるとか、運動ができるとか、人気があるとか、人がいくら集まろうと、なんだかんだ言っても、結局は最後に狭い世界に戻っていくのだと思っていた。

最後は結局一人なんでしょ？って。

一人の時は自分のことしか考えていないんじゃないでしょ？って。でも全然違った。

楠さんに脅された時は、キスをされてドキドキしてずっとそれが忘れられなくて。

雛ちゃんと親友に戻れた日はずっと嬉しくて顔がにやけっぱなしで。

一人になっても一人じゃなかった。

それを知れたことはきつとこれからの人生の中で重要な意味を持つことになる。

きつと、勇気を出せばもつと世界が広がるのだろう。

半畳の部屋から抜け出せるのだろう。

勇気は扉を開ける力なんだね。

「佐藤……」

下駄箱を開け、靴と上履きを交換したところで、いつものように小嶋君に声をかけられた。

「おはよう」

へらへら挨拶する僕とは対照的に小嶋君の顔はとても怖い。

ま、まずい気がする。

「ちょっと、こい」

指をくいくいと動かしどこかへ先行していった。

……。

嫌な予感しかないよ……。

僕が連れてこられたのはいつものように校舎裏。

ここではないいい思い出が無い。

痛い思い出だけだ。

校舎裏。

いい思い出のない校舎裏。
そこで早速土下座で謝る。

「すまなかったぁー！」

小嶋君が。

「ななななんで?! やめてください！」

慌てて体を引き起こす僕。当然だよ。こんなのだれも望んでないよ！

いくら引き起こそうとしても僕と小嶋君とでは力の差がありすぎてびくもしない。

こんな時に自分の非力さが恨めしい。

訳が分からないよ！ なにこれ?!

「なんで小嶋君が僕のような下賤な人間に頭を下げているの?! 間違っているよそんなの！」

「後半のセリフ主人公っぽいのに前半情けなさすぎだろ」

「早く頭を上げて！ お願い！」

こんなところ見られたらみんなに怒られてしまうよ！
でも小嶋君はかたくなだった。

「いや俺は頭を上げられねえ。お前の顔をまともに見れねえ」

「なんで……！」

「何でもなにもねえだろ。俺は佐藤に酷い事をした。悪かった」

「ゆ、許すから、頭を上げて……！」

そもそももう気にしてないから！

「……いいのか？ あんなひどいことをした俺を許してくれるのか……？」

「ゆ、許す、許すから、お願いだから頭なんて下げないで」

「うう……。なんて優しい奴なんだ……」

ごしごしと目をこすりながら立ち上がる小嶋君。

「あの、それを気にして、元気ないの……？」

さっきから妙に元気のなかった小嶋君。僕のために落ち込んでくれたのならうれしい。

「え？ あ、いやこれはアニメを二周見たから寝不足で」

二周？！ 2クール二周！？ そりゃ寝不足にもなるよ！

「アニメも馬鹿にしてたけど、面白いな」

「え、面白いの？」

つまらないと思っているのかと感じていたけれど、そんなこともなかったんだね。

「面白い。アニメなんて萌えとかそんなの、なんか気持ち悪いと思
ってたけど、そんなものばかりじゃねえんだな。昨日借りたやつ、
なんだアレ？ 面白すぎだろ……」

「あ、よ、喜んでくれてたんだ……」

よかった……。作戦成功だね。

「やべえだろあのシュイタンスゲートってやつ。もう一周見てえよ。
見ていいか？」

「う、うん」

「サンキュウ。あ、今日も持ってきてくれたんだろ？ それも貸し
てくれよ」

「う、うん」

「でさあ、佐藤は俺の為を思ってガキ臭くないアニメを持ってきて
くれてるんだと思うけどさあ、次は萌えっていうのを貸してくんね
ーか？ ちょっと見てみたいんだよなー」

「う、うん」

なんだか、予想以上にはまっていて、國人君がかぶるよ。

「頼んだぜ！ 楽しみにしているからな！」

若干陰の見える、元気な笑顔を見せて、二度僕の肩をたたき小嶋

君がスキップ気味に戻って行った。

「……。うん。作戦、成功だよね！」

……いいこと、だよね？

小嶋君の人生、狂ってきてないよね？

前橋さんと雛ちゃん

小嶋君に貸したアニメは時間を移動するお話。

もし現実タイムマシンがあるのだとしたら、僕はどこへ行こうかな。

未来を見れば安心する気もするし、過去に戻りたいという気持ちもある。

未来を知っていればどう行動すればいいのか分かるし、過去へ行けば今後の対策を教えてあげることができる。

でも、今は別にどちらにも必要が無いと思う。

少し前ならば、変えたいような過去も無いので、おそらく未来に行ってこれからの調べていただろう。

静かに暮らし続けた僕は将来どうなるのかずっと気になっていた。相も変わらず波風を立てないで生きているかなと、確認していただろう。

今は。

今は未来になんか行きたくない。

勇気を出そうと決めた矢先に、未来を突きつけられるなんて嫌だから。

何が起こるか分からないけれど、勇気を出して未来を変えようと決めたのだから、どんな未来が待っているようと僕は後悔しないぞ。

校舎裏を離れて教室にたどり着いた。

僕は教室の扉に手をかけた。

一日の始まりだ。よし、頑張ろう。

気合を入れ、扉を開こうとしたところ、

「どいてください佐藤君!」

「ひいひいひい!」

突然後ろから怒鳴られた！

しかもこの声は前橋さんだ！ 切り裂かれる！
がたがた震えながらすつと横に避ける。

「何を怯えているんですか！ 失礼ですよ！」

う。そうだね。何もされていないんだから。
僕は恐る恐る振り返り前橋さんの顔を見た。

「おは、よう……」

「なんでそんなにびくびくしているんですか！ 千切る必要がありますね！」

「千切らないでください！」

どこを千切るの？！

前橋さんが僕の顔を見て重々しくため息をついた。な、なに……？

「全く……。なんであなたのような情けない男が有野さんに気に入られているんですか……」

「お、幼馴染だからじゃないかな……」

「前も聞きましたよそれは！ 全く！ 情けないは百歩譲っていいとして男だというのが許せないです！」

「そっち?!」

どうしようもないよ！

僕が謝っていいものかどうか悩んでいると、前橋さんがメガネをかけ直しにやりと笑った。

「まあ今日は気分がいいので暴力を振るおうかなーとか考えませんよ」

「あ、そ、そうなんだ」

今度はお礼を言っているものかどうか悩むところだ。

「ふふん。今日有野さんは佐藤君なんかより私の方が役に立つと気付くはずですよ！ 残念でしたね佐藤君！ 有野さんの天下統一に必要なのは私なのですよ！」

「そう、なんだね。うん、僕なんかより前橋さんの方が、天下統一？の役に立つと思うよ」

「……ぐぐぐ……！ ま、またそんな余裕な態度を見せて……！ ふん！ いつまでそのふざけた態度を取り続けていられますかね！」

「ふ、ふざけてなんか、いないよ」

「本気だっているんですか？！ ますます腹立たしいです！ 許しませんからね！」

一度苛立たしげに銀色の髪を振って教室に入って行った。
ふ、ふう。怖かった。

前橋さんの後、少し遅れて僕も教室に入る。

廊下で言いあってた声が聞こえていたのか教室中の女子から冷たい目が注がれている。男子からは好奇の目で見られており、みんなからの注目を集めた僕の顔は真っ赤になっているだろう。

早く目立たない自分の席へ行こう。

僕は自分の席に座ってカバンに手を突っ込む。

勉強をしなくちゃね。

僕は何をやっても要領が悪い。

勉強はもちろん運動も。でもそれ以上に僕が自分自身の一番要領が悪いと思うところは人づきあいだ。

誰が相手でも恥ずかしい。

恥ずかしくて遠慮してしまう。

だから距離が縮まらない。

でもこれからは違う。

遠慮せずに行こうと思う。

楠さんが言っていた、もうちょっと自分勝手に生きればいいということを実行してみようと思う。

自分のない人間なんて面白くないのは当たり前だ。もっとわがままを、個性を出していけばきっとみんなと仲良くなれるはずだ。

雛ちゃんとだって、もっと仲良くなれるよね。

「おはよう優大」

雛ちゃんのことを考えていると、タイミングよく雛ちゃんが登校してきた。

にこにこ笑う雛ちゃんの顔を見るのは久しぶりだ。昨日までは怒らせてしまっていたから。

「おはよう」

僕も笑顔で返す。素敵な朝だと思う。

雛ちゃんが僕の前の机の椅子を引き僕の机に右ひじを置く。

「勉強してんのか。朝くらいゆっくりしなうぜ」

「でも、僕頭よくないからたくさん勉強しなくちゃ大変なことになっちゃうよ」

「んなことねえって。大変なことになんてならねえよ。……ん？
その前に優大この前何番だったんだ？」

「ぼ、僕は、えっと、百番と、ちよつと……」

約三十三人×六クラス。一学年約二百人。

大体普通。結果が張り出される上位三十名の中に名を連ねている雛ちゃんとは雲泥の差がある。

「それだけあれば十分じゃねーか。いいよいいよ。楽しく話そうぜ」

「え、うん」

「勉強ならさ、私が教えてやるから」

「え、いいの？ 雛ちゃんも勉強しなくちゃいけないのに」

「もちろんだ。テストでいい点とるより友達と一緒に過ごす方が大切だろ」

「雛ちゃん……」

優しいなあ。

「だから今度の休み勉強しようぜ」

「ありがとう！」

「いいってこと。優大の部屋でいいよな？」

「え？　僕が行くよ？」

「優大の部屋でいいよな？」

「え、その、悪いよ。雛ちゃんの家のリビングとかで……」

「優大の部屋でいいよな？」

「あ、はい」

雛ちゃんの家は都合が悪いみたいだ。

「よしよしよしよし。これで互角だな」

小さな声で呟いていた。

僕にはしっかりと聞こえているよ。

でもなにに対して互角なのかはわからない。
だから聞いてみよう。

「何と？」

「うるせー。何でもいいだろ」

ぷいと顔をそむけた。お、怒らせちゃったのかな？

「雛ちゃん……？」

怒らせたのなら謝らないと。

「あの、ごめ——」

「ちっ！」

僕から顔を背けていた雛ちゃんがものすごく大きな舌打ちをした。

「え？！ ゴメン！」

僕が悪いですよね！

「……ちげえよ」

うんざりしたような顔を僕に向けてきた。

「え、ならなんで……」

僕は先ほどまで雛ちゃんが視線を向けていた方を見る。

「あ……」

楠さんが教室に入ってきていた。

「あいつ……」

雛ちゃんが僕の机に向けている視線には物凄い怒りの感情がこもっていた。

「雛ちゃん……？ その、喧嘩しないでね」

「分かってるよ」

はあとため息をついた。

僕の為に怒ってくれているのだけれども、僕としては二人が仲良くなってくれるのが一番なんだけれど……。
何とかしたいな。

楠さんと僕

お昼休みになるまでに、楠さんと雛ちゃんが三度喧嘩していた。何とか雛ちゃんをなだめようとしたけれど雛ちゃんの機嫌は全く治らなかった。

僕のせいで楠さんと雛ちゃんが喧嘩するのは申し訳ない。何とか止めたいのだけれども……。

「てめえ、なにガン飛ばしてんだよ」

また始まってしまった！

「飛ばしてないから……」

うんざりした顔で首を振る楠さん。

朝からずっとこんな感じだ。

雛ちゃんが言いがかりに近いことで楠さんにつつかかる。

僕の為に怒ってくれているのだけれども、ちよつと楠さんがかわいそう……。

周りの人たちもずっとびくびくしている。誰も止められそうにもない。

「こっちをじろじろと見ていただろうが！」

「見てない」

「……お前……！」

「ひ、雛ちゃん！」

少し離れてみていたけれど堪らず割って入る。

「優大。どうした？」

「その、喧嘩は、やめようよ」

「喧嘩なんかしてねえよ」

「……はあ……」

楠さんはとっても疲れた表情をしていた。
とりあえず、二人を離そう。楠さんに用事もあるし。

「あの、楠さん、ちょっと、話があるんだけど、今からいい、ですか？」

「ああん?! 優大! こんな奴に話ってなんだよ!」

「そ、その、ちょっと……」

怖いよ雛ちゃん……。

「……はあ。ちょうどいいや。ここじゃあ落ち着いてご飯食べられないし、屋上に行こう。お弁当持ってきて」

楠さんが取り出したばかりのお弁当を持って教室を出て行った。
それを見届けたあと、すぐに雛ちゃんが僕に詰め寄ってきた。

「優大っ! 一体何の話をしようってんだ!」

「あの、その、色々……と」

「色々お？　なんだよ、色々って」

「その、えっと、今後について……」

「今後？　……ああ、なるほど。ガツンと言ってやるわけだな。それがいい。一度あいつを困らせてやれ！」

なにか勘違いしてくれた。

「う、うん。じゃあ、行ってくるね」

そんなつもりはないけれど、とりあえず楠さんと二人きりになることができた。早く屋上へ行こう。

雛ちゃんに肩を叩かれ、僕は教室を出た。

屋上では楠さんが疲れた表情で屋上の端に座り込んでいた。

「楠さん……」

「……はあ……。こんなにぐいぐい来るとは思ってた。ちょっと疲れる」

「あの、ごめんね……。僕のせいで……。僕が脅されているって教えてしまったから……」

「本当にね……と言いたところだけど、私はそれを許可したわけだし君が悪いと責めるつもりはないよ。謝らないで」

「ううん。僕が悪いよ……」

「悪くない。で、私をここへ連れてきた理由は？」

うじうじする僕が面倒くさかったのかさっさと話を進めようとする。しかし僕の用事はすでに始まっている。

「えっと、謝ろうと思って」

「……必要ない」

「必要あるよ」

「無い。それ以上謝ったら怒るよ」

「う」

大きな目で僕を睨み付けてくる。若干ひるんでしまったが、後ろへは引けない。

「……その、前に、楠さんが言ってたよね……?」

「なんて? 謝れって? 言っていない」

「そうじゃなくて、その、もっと、自分を出して行けって」

「言ったね。で、今その話がなんで出てくるの?」

「え、あの、だから謝ろうかなって……」

楠さんが眉を寄せて意味が分からないと言った表情を僕に見せる。

「わがままに生きて行けばって言ったのに、それが何で今謝っていることにつながるの？」

「その……僕が、謝りたいから、謝ろうかな……って……」

僕のわがままを聞いて楠さんが驚きあきれた。

「何言ってるの君？ それわがままでもなんでもないでしょ。今までの佐藤君と何ら変わらないじゃない。謝って済ませようっていうし、もう無いスタンス。勇気出して行った方がいいって言ってるのに」

「あの、だから、その結果が、これ……なんだけど……。……ダメかな……。？」

「なんで謝ることがわがままになるの。おかしいでしょそれ。納得できる説明をしてよ」

「う、うん。あの、無意味に謝るなって言われたけど、今回は僕が悪いと思うし、謝らないと気が済まないから、楠さんが何と言おうと、謝ろうと思って……」

楠さんがはぁ？ と言いおでこに手を当てた。そして首を緩く振りながらため息をついた。

「その、ダメかな……?」

「……」

「あー」

うめき声のような声を上げながら楠さんが空を見上げた。つられて僕も空を見る。快晴だった。暑いね今日は。

「そう言えば、前も同じようなことがあったっけ」

「え?」

何のことだろう? 分からなかった僕は楠さんに視線を戻した。

楠さんはまだ空を見上げたままだった。

「同じようなことって、何?」

僕は聞いてみる。でも楠さんは僕の言葉に反応しないでじっと天を仰いでいる。

「あ、あの、楠さん……?」

首が疲れてしまいますよ?

……。

しばらく無言が続く。何と声をかけていいものか……。

……。

先に声を出したのは楠さんだった。

「佐藤君」

視線を急降下させ僕に焦点を合わせてきた。

「はい……?」

同じようなことがあったっていうのが、何のことを言っていたのか教えてくれるのかな?

「佐藤君、とりあえず、ご飯でも食べようか」

自分のすぐ右のコンクリートを叩いて僕に座るよう促す。

そう言えばまだご飯を食べていなかった。お腹が空きすぎて死んでしまうので素直に楠さんの横でご飯を食べよう。

僕は楠さんと三人分スペースを開けて座った。

「ちょっと遠いね。もっと近くでもいいよ」

「え、いや、僕はここで……」

「ふーん」

どうでもいいやと言うようにお弁当箱を開ける楠さん。それにならい僕もお弁当のふたを開けた。

昔はお弁当の中に何が入っているのか楽しみだったけれど、今は自分で作っているのでその楽しみは無い。少しさみしい。

「それも自分で作ったんでしょ?」

楠さんが僕のお弁当を覗き込み言った。

「うん」

「おいしそうだね」

「そうかな？　ありがとう」

「なにかちょうだいよ」

「え？」

「あ、卵焼きちょうだい」

楠さんが立ち上がって僕のそばに寄ってきた。

「え！」

そのまま僕の隣に座り僕の手収められたお弁当箱の中から卵焼きを奪って口に運ぶ。

「甘いね」

今僕と楠さんの間には二十センチ程度の隙間しかない。折り畳み式の携帯電話を開いた長さと同じくらいだ。

「う、う、ん。その、あの、お、お姉ちゃんが、甘いのが、す、すき、で……」

僕としてはこの距離近すぎだよ！　近すぎてドキドキしてしまうよ！　何も考えられないよ！

「へえー。自分の分だけじゃないんだね」

「は、はい。自分の分と、あと、三つ、両親と、姉の分を、作らせてもらっています」

「すごいね」

「すごく、無いですよ?」

「すごい。じゃあ、はい」

楠さんが自分のお弁当箱の中身を僕に見せてきた。

「……? えっと?」

おいしそうだね、とか、綺麗だね、とか褒めればいいのかな……?

「卵焼き食べちゃったから、私の一つあげる」

「え? だ、大丈夫、だよ?」

「大丈夫とかそういう問題じゃないの。交換だよ交換」

「えっと……」

いいのかな……。あとでお金請求されたりしないよね……。……
人の好意を疑ってかかる僕最低だ……。

「もー」

一向に取ろうとしない僕に耐え切れなくなったように楠さんが自分の弁当の中から卵焼きをつまんで僕の弁当箱の中に投下していた。

「え、あ、ありがとう」

「お礼を言う必要はないでしょ。交換なんだから」

「う、うん……」

僕はお弁当箱の中を眺める。

僕の作った卵焼きとは明らかに色の違う卵焼きが一切れ。なんだか、どのタイミングで食べればいいのか分からないね……。

「ねえ佐藤君」

「はい?!」

変なこと考えていると思われたのかな?! 楠さんの方に顔を向けてみたけれど、距離が近すぎるので恥ずかしくてすぐに弁当箱に視線を戻した。

「なんでそんなに固くなってんの。いつも通りでいてよ」

「う、うん……」

無理だよ……。何とか距離離せないかな。座り直すふりをして少し距離を離してみる。ちょっぴり遠くなった。

「あのさ」

え！ 今の行動怒られちゃうのかな？！ 確かに距離をあけるの
って失礼かも！

「君音楽とか聞く？」

「へ？ あ、うん。少し」

関係なかった。よかった。

「この前でたみチスルのCD買った？」

なんと、偶然にもそれはこの前始まったアニメの主題歌ではない
か。

「うん。買った」

「聞いた感想は？」

「とってもかっこよかったよ」

「ふーん、そうなんだ。やっぱり買おうかな」

「あ、それなら、貸そうか？ 一回聞いてみてから決めたらいいん
じゃないかな」

「そうだね。なら借りようかな。借りていい？」

「うん。明日もってくるね」

「ありがとう。でも実はこんな話がしたいわけじゃなかったんだよね」

「え？」

「どうということだろう？」

「君のことだから感想を聞いたら『僕は好きだけど』みたいな答えが返ってくると思ったんだけどね。でもよく考えたら君は褒めるよね。そう言う人間だった」

「う、うん？ その、僕は好きだよって行った方が良かったの？」

「その逆。『自分は好きだけどなあ』みたいなことを言ったらどうしてやろうかと思った」

「え、どうして？」

「『私は好き』とか、『俺は嫌い』とか、そんなの感想でもなんでもないでしょう。よかったか悪かったかを聞いているの。別にあなたの好き嫌いは聞いてない。そんなの言われても参考にならない」

「そう、だね……？」

「そうかな……？」

「あの、でもそれなら、『私はよかったと思う』とか、『俺は悪かったと思う』っていうのも、あまり、参考にならないよね……？」

「よかったか悪かったかの判断がされている分そっちの方がまだましだよ。でも頭に『私は』とか『俺は』がついているのが気に入らない。逃げ道を作っているみたいでウザい」

「逃げ道？」

「そ。逃げ道。私はいと思うけど他の人はどうかな？　みたいな。はつきり言ってよね。全然ダメとか、サイコーとか。『自分は云々』っていうのは二人の意見が食い違ったときだけにしてよ。私と佐藤君の意見が違ったときに佐藤君が『僕は好きだけどなあ』っていうのは許される。でも貸す時に『僕は好きだけど』っていうのをつけるのはよくないと思う。参考にならないにもほどがある。私は知るかそんなことって思う」

何となく分かるような、全然分らないような……。

「『自分は好きだ』っていうのは感想を伝える際には最低の答えだと思う。そんなことはどうでもいいからどこが良かったとかどこが悪かったとか言ってよね。お互いの感想が違ったときにだけそれを使ってよ。分かった？　佐藤君」

「う、うん。注意する」

僕言っていないけど。

話が一段落したようなので僕は先ほど貰った卵焼きを食べてみることにした。

「あ、おいしい」

普通の卵焼きなのに、なんでこんなにおいしいのだろう？

「おいしいね、楠さんの卵焼き」

「あっそう。ありがとう」

う……。とってもそっけない。僕に褒められても嬉しくないよね……。

「ねえ佐藤君」

「あ、はい。なんでしよう」

落ち込む僕に楠さん。

「聞こえているのに聞き返す人間ってどう思う？」

「え?! もしかして僕の事?!」

何か聞き返しちゃってたのかな!?

「違う違う。君はそんなことしないでしょ。世の中にはそういう人間がいるでしょ?」

「あ、うん。そうだね。いるね。でも聞こえてないんじゃないかな?」

「毎回最初の言葉だけが聞き返されるんだけどね。最初の言葉だけ聞こえないとか不便な耳してるね」

「そう、だね。集中してないから、最初だけ聞き逃しちゃうんじゃない」

ないかな？」

「へえ。集中してなきゃ聞こえないんだ。大変な人生だねそれ」

「大変、だね」

「でもさ、絶対に聞こえてるよね、そういう人って。だって、あまりにも何度も同じことが起こるからその人に話しかけるときは大きな声でゆっくりと話すようにしてるもん。でもそれでも聞き返してくるあいつって、なに？ 何が目的なの？」

「えっと……たしか、何かで聞いたような……。……。あ、そうだ！ たしか、聞き返す人はプライドが高いみたいな話を聞いた気がするよ」

「プライドが高い？ どうしてそうなるの？」

「えっと、たしか、あなたのことは気にしてないですよ、だから気づいていないんです、っていう感じだったような気がする」

「……へえ……。なんだか、むかつくねそれは。わざわざ人に同じ話をさせるなんてどれだけお前は偉いんだって思うね」

「う、うん」

「四回に三回は聞き返してくるんだよね。そう言われてみればプライドが高い人にそういうのが多い気がする。今後注意するんだね、聞き返しちゃだめだよ佐藤君」

「う、うん。注意する」

あまり聞き返していないと思うけど。
話がひと段落したのでご飯を食べる。

……なんだか僕の卵焼きは甘すぎる気がする……。

「佐藤君」

「うん？」

楠さんはやっぱりおしゃべり好きだね。会話が止まらないよ。

「佐藤君は友達いる？」

なんだか急に心をえぐり取るような質問が飛んできたね。
少しだけ胸の痛みを感じながら答える。

「僕……あまり友達いない、みたい」

「ふーん。有野さんくらい？」

「うん。雛ちゃんは、僕のことを親友って言ってくれる。僕もそう
思ってるから、親友だよ」

「へー。小嶋君は？ 最近仲良いみたいだけど」

今朝謝ってくれたけど、友達と言えるのかな……。

「僕としては、何とも……。……友達って、どこから友達なのかな
……」

僕にはわからない。

アニメを貸すのは友達なのかな。小嶋君は僕のことを友達と
思ってくれているのかな。

どうすれば友達と思ってくれるのか、分からないや。

「お互いのことをよく知っていれば友達なんじゃない？」

なるほど。

「……お互いのことをよく知らなきゃ、友達になれないのなら、僕は多分小嶋君と友達じゃないね……。僕小嶋君の事あまり知らない……」

「ふーん。でもお互いのことをよく知っているから友達っていうのもおかしい気がするね。友達になって徐々に知っていくことだってあるだろうしね」

「そうだね……」

なら、友達って、何だろう？

うーん。分からないや。

「でもさ、何となくだけど」

「うん？」

「一緒にお弁当を食べたらもう友達なんじゃないかな」

楠さんがそう言った。

「……え？」

僕、今楠さんとお弁当を一緒にしているよ？

「あの、その、だったら、楠さんは、僕の、友達？」

「君はどう思う？」

「……その、僕なんかが、楠さんの友達になるのは、申し訳ないというか……」

「悪い癖がここで出たね。自分を卑下する。やめた方がいいんじゃない？」

「え、う、うん」

「お互いのことを解く知っていれば友達って言ったけど、それならやっぱり私たちは友達なんじゃないかな。私の本性を知っているのは君だけだし、私もそれなりに君のことを理解しているつもり。関係はおかしいけれど、友達と言えば友達なんじゃないかな」

「そ、そうかな？」

「なに？ 嬉しくないの？」

楠さんがジト目で僕を見てきた。

「あ、もちろん嬉しいです」

当然だよ。だって、学校一の美少女だもん。

「なら、私たちは友達ね」

「うん……」

……でも。

「その、本当に僕のような人間が友達でいいの？　僕なんかと友達だって言ったら、楠さんの評価が下がっちゃうよ……。僕みたいな底辺の人間楠さんと釣り合わないよ……。？」

「……全く佐藤君は……。『僕のような人間』とか『僕なんか』とか『僕みたいな底辺の人間』とか、卑下しすぎだよ」

「で、でも、本当のことだから……」

「関係ない。君は本当に鈍いね。相変わらずイライラさせてくれるよ」

「う。ごめんなさい」

でも、鈍いって何に対してだろう。

「はつきり言わないとダメみたいだね」

楠さんが隣に座る僕をまっすぐ見てくる。僕は視線を逸らしたかったけれど、真っ直ぐ見てくる相手にそんなこと失礼だね。恥ずかしいけれど我慢しよう。

視線が合ったところで言う楠さん。

「私、佐藤君の友達になりたいなって」

「えっなんで?!」

素で聞いてしまった。当然だよ。僕と楠さんは正反対の人間だも
ん。

主従関係がお似合いだったのに。

「君は本当の私を知っていても嫌がったりしないから」

「嫌がるなんて、僕じゃなくても……誰も嫌がったりしないと思う
けど……」

「そんなことはありえない。私は知っている。知っているからこそ、
君が珍しい。君は普通の人とは違うよ」

「よ、よく、分からないけど……」

なんだか恥ずかしい。

僕を脅していた楠さんからこんなことを言われるだなんて。

「私達、友達かな」

「え、その……」

「佐藤君が嫌ならいいよ。普通に君の悪行をばらすから」

「僕たちは友達ですよねっ！ 粉うこと事なき友達でございます!」

「そっか。そうだよね」

脅されて友達になるのはなんだか違うような気がするけれども、今後友情がはぐまれる気がしないけれども、友達と言うよりやっぱり主従関係無きがするけれども――

「そっか。うん」

――楠さんの素敵な柔らかい笑顔を見ていたらそんなことどうでもよくなってしまう。

この笑顔を間近で見られた僕は、きつととても幸せな人間なのだろう。

「ご飯食べなよ」

ぼうつと惚けていた僕に楠さんが怒ったように言う。

「え、あ」

楠さんのお弁当箱を見てみると空っぽだった。いつの間に。僕は慌ててご飯を食べる。

「ゆっくりでいいよ」

いつもは急かす楠さんだけでも、今日はゆっくりでいいと笑いながら言ってくれた。

なんだかとても幸せだった。

ここに雛ちゃんがいれば最高だと思う。

二人が仲良くなってくれれば、僕は言うことなしだ。何とかしたいな。

ご飯を食べ終え、二人で教室に戻る。毎回先に帰っていた楠さんだったけれども、今日は僕と一緒に帰ってくれるみたいだ。

なんだか教室に入るのが恥ずかしいや。でも一緒に帰ってくれるのだから、最後まで一緒に帰ろう。

そう言うわけで一緒に廊下を歩く。

「佐藤君、明日も一緒に食べようよ」

「え、いいの？」

「いいよ。なんなら、有野さんも誘ってみようか」

「え?! いいの?!」

「いいよ。私だってずっと睨まれるのは嫌だもん。ちょっとは仲良くしたいよ」

「……でも、それだと、楠さんが山でしていることを言わなきゃいけないんじゃないかな……」

「それは最終手段。できる事をやってからそれをする」

「……うん。それがいいね」

「佐藤君も協力してね。協力しないとばらすから」

「うん」

当然だよ。喜んで協力するよ。

なんだか、人生がうまく行きすぎている気がする。

突然、学校一の美人が友達になってくれるなんて、すごいことだよこれは。

今ならどんなことが起きても乗り越えられるね。

「何笑ってるの？」

僕らの教室の前。楠さんが僕のへらへら顔に気づいた。

「え、あ、ううん。別に」

何もないよと白を切る。

やっぱ、勇気を出すことによって人生が変わったんだね。すご

いや、勇気。

「変なの」

と、楠さんが首をかしげながら僕らの教室の扉を開けた。

楠さんが先に入り、僕もすぐに続く。

僕が一步教室に足を踏み入れた時、教室のおかしな空気が僕の胸を締め付けた。

突然不安に襲われる。

なんだろう。

楠さんもそれを感じ取ったようで足が止まっていた。

僕らは二人、ドアのすぐそばに立ち尽くす。

「……優大……」

雛ちゃんが僕に気づき呟いた。先ほどの怒りは治まっているようだ。

「……一体、何が起きているの？」

楠さんが教室全体に問う。

誰一人として返さない。

それどころか、全員が僕らを、いや、楠さんを冷たい目で見ていた。

「……一体、なにが……」

楠さんがもう一度問う。

それに、やっと答えが返ってきた。

――銀色。

「楠さん。みんなはあなたに失望しているのですよ」

銀色の髪を持つメガネをかけた女子、前橋さんが教卓の前に立ち冷たい冷たい笑顔で楠さんを見下ろしていた。

「もう、あなたは終わりです」

そう言って、携帯を操作して、たぶん、動画を、流し始めた。

映像は見えないけれど、小さな音が聞こえてくる。はつきりと聞こえてくる。

『くそっ、このやろうっ！ 全員ムカつく！ みんな、ウザい！
べたべたしてくんな男子ども！ 媚を売るな女子ども！ みんなう

っとおしい!』

携帯から聞こえてくるのは、楠さんの声だった。

決心

「これは、どういふことですかね？」

前橋さんが楠さんに詰め寄る。

「……」

楠さんの顔は真っ青だった。こんな楠さん見たことが無い。

「これって、一体何事ですか？」

「……。さあ」

無理のある白の切り方だ。楠さんならもっと華麗にやり過ごせるかと思ったけれど、この状況では難しいみたいだ。

「さあじゃないですよ。ここにあなたの悪行が映し出されているんですよ。何か説明してくださいよ。みんなを馬鹿にしている大層な委員長さん」

「……」

何の言い訳も出てこない様子だ。楠さんのこれを知っていた僕に出来ることは無いだろうかと一生懸命考える。でも僕にできそうなおことが見つからない。このままでは楠さんが責められてしまう。何とかしないと。

「あ、あの――」

「優大はこっちにこい」

「あっ」

横から雛ちゃんに引つ張られ僕は楠さんから離れた。

「優大は知ってたのか？」

みんなの視線の外で雛ちゃんが僕に聞いてくる。

「……」

僕は黙る。何も言えない。

みんなの視線の先には楠さんと前橋さん。

「楠さーん？ 黙っているだけじゃ何もわかりませんよー？ これは一体何なんですかー？」

「……っ」

顔面蒼白の楠さん。助けたい。でもどうすれば……。

前橋さんが楠さんに詰め寄り、楠さんが押し黙る。

みんなが黙り込み疑いの目で楠さんを見る教室はとても居心地が悪い。

そんな中、誰かが声を出す。

「それが、私たちのことを言っているとは限らないでしょ！」

山口さんだ。いつも楠さんの後ろをついて回っている、楠さんが

大好きな女の子。

「私たちのことを悪く言っているっていう証拠が――」

『山口さんも、べたべたべたべた……！ 私のご機嫌をとつても何も出てこないってば！ 媚を売る人間はみんなウザい！』

「……」

携帯から流れてくる声を聞いて山口さんが愕然としていた。

「楠さん……」

山口さんの口からかすれた声が漏れる。

「あらー。名前まで出しちゃいましたね。言い逃れできませんねこれは」

「……」

ぐっと唇をかみ悔しそうな顔をしている楠さん。

「どういうこと？」

先ほどまで楠さんを庇おうという姿勢を見せていた山口さんが言う。

「にこにこ笑いながら、心の底ではこんなふうに思っていたの？ サイテー」

そこから次々に楠さんを責める声が上がりはじめ。

「若菜ちゃんどういうこと!? 俺たちの事嫌いなのか?！」

男子が叫ぶ。

「楠さんずっとこんなこと思いながら私達と接していたんだね」

女子が言う。

「クラスのトップがこんなことを思っているなんて、どうなんですかね? 楠さん?」

前橋さんがニコニコと笑いながら、うつむいている楠さんの顔を覗き込む。

「……ふん」

楠さんは諦めたように顔を上げサッと教室を見渡した。その一瞬、僕と目が合ったような気がしたけれどきっと僕の自意識過剰だろう。眺めた後は目を瞑りみんなから視線をそらす。そして、

「だったら何?」

開き直ったように言った。でも相変わらず顔は真っ青で声にも元気がない。

「私がみんなのことを悪く言うのがそんなに悪い事なの?」

「な……! いいわけないだろう!」

いつも若菜ちゃん若菜ちゃん言っていた男子が叫んだ。
それにつられるようにみんな口々に責める。

信じてたのにとか、失望したとか、最悪とか、騙されたとか。
みんな、勝手だよ。

「……少し、可愛そうな気もするな」

僕の隣で雛ちゃんが静かに言った。

「優大がいったいどんなことで脅されているのか分かんねえけど、
それをばらしたりしねえよな」

「……分からない、けど……」

みんなの気がそれるのならそれもいいと思っている僕がいる。

「でも、今なら証拠が無けりゃあ若菜の言うことは誰も信じないだ
ろうな」

「……」

「あいつ、証拠もってるのか？」

「……多分……」

携帯の中に写真が入っているはずだ。でも、それも今は無意味。

「脅されることは、もうないと思う……」

楠さんが言っていたことを思い出す。「私と君の言葉、みんなはどっちを信じるかな」。楠さんの信用があってこそ通じる『僕が無理やり楠さんにキスをしている』写真。でも今は楠さんは誰にも信用されていない。地に落ちてしまった。

だからきつと、僕が説明をすればみんなそれを信じてくれるはず。そのあとに録音された僕の声も、無効になるはずだ。

もう、脅されることは無い。

「どういう事情かは分からねえけど、お前はもう脅されねえんだな」

「……うん」

なんだかとっても嫌な気持ちだ。

脅迫から解放されたのに、全然嬉しくない。嬉しくないどころか吐き気がする位心が沈んでいる。

「よかったな、優大」

そう言って笑顔を見せる雛ちゃんだけど、雛ちゃんの顔もすつきりしない。

「……本当に、よかったのかな」

僕の口が勝手につぶやいた。

「なんだよ。お前の抱える問題が解決したんだぞ。いい事じゃなけりゃあ、何なんだよ」

怒っていいのか僕に同意していいのか悩んでいる様子が感じ取れる。

「誰かが傷ついて誰かが助かるのって、いい事なのかなって思うんだけど……」

「んなもん知らねーよ。自分勝手に生きようぜ。自分が助かることだけを考えればいいんだよ。人を蹴落とすくらい、みんなしてら」

「……」

そういえば、楠さんが言っていた。「人間はみんなクズ。どうやって上に立つ人間を蹴落とすかしか考えてないんだから」。

だから前橋さんは、こういうことをしているのかな。楠さんの嫌がることをしているのかな。

「私はお前が脅されるようなことをするとは思えない。きっとそれも若菜が悪いんだろ？」

「……」

「だったらさ、いいじゃねえか。もういいじゃねえか。ラッキー、くらいに思っておけばいいじゃん」

「……でも……」

「優しいのも大概にしとけよ。私は優大のそう言うところが好きだけれどさ、もっと自分を大切にしてもいいと思うぜ」

「……わがままに、生きろって言うこと?」

「まあ、そう言ってもいいかな」

楠さんも言っていた。自発的に過ごさせて。やりたいことをやった方がいいって。

僕のやりたいことって、何だろう。

扉の近くでは相変わらず楠さんが追い詰められていた。

みんなが自然と楠さんを取り囲むように集まっている。

「あなたはこのクラスのトップにふさわしくない。有野さんの方がふさわしいです！」

「そうだそうだ！」

「楠さんは辞めた方がいい！」

「……っ」

目を瞑りツンと顔をそらしているけれど、顔は青い。人だかりの隙間から覗く程度しか見えないのではつきりとは分からないが、目じりには涙が浮かんでいるように見えた。

「なんで、みんなこんなに楠さんを責めるの？」

少し、腹が立ってきた。

「そりゃお前、信じてた人間が自分のこと悪く言ってんだから、裏切られて腹を立てるのは当然だろう」

「でも、信じたのってその人の勝手でしょ？」

「いや、若菜の場合は信じさせたって言った方がいいんじゃないか

な」

そういえば、そんなことも聞いた気がする。「信頼されているんじゃないくて、信頼させている」。信頼していると思わせておいて、実はそうさせるように仕向けていた楠さん。

「信じるなっていう方が難しいだろ、あれは。すげーもんあいつ」

素直に褒める雛ちゃん。やっぱり仲が悪いというわけではないみたいだ。僕がいなければ、きっと仲のいい友達になれているはず。僕のせいで仲良くなれないんだ。僕が悪い。

「すごい奴だからすごい信頼を集めてた。その分、裏切られた時の失望が大きいんだろうよ。勝手って言えば勝手だけど、結局はその信頼を裏切るような真似をした若菜が悪いんだろ。言い方が悪いけど、自業自得だ」

「……」

何か、違うよ。

「優大は一体何が気に入らないんだ？」

不満が顔に出ていたのか、雛ちゃんが浮かかない顔で僕を見ている。

「僕は、みんな仲良くすればいいのについて思う……」

「そりゃそうだけど、もう無理だろうな。若菜、これからどういう扱い受けるんだろ。あまり想像したくねえな」

やっぱり優しい。雛ちゃんだって楠さんに言いたいこととか思うところがあるはずなのに、その相手のことを考えて悲しい顔をしているんだもん。優しいよ雛ちゃんは。

「どうしよう」

優しい雛ちゃんに聞いてみる。

帰ってくるのは分かりきった答え。

「どうしようもねえよ。みんなをおちつけさせることができて、もうどうしようもねえよ」

雛ちゃんなら、きっとこの人ばかりを散らすことができる。でも、だからなんだっていうんだ。何も変わらない。楠さんの信頼が取り戻せるわけではない。未来は何も変わらない。誰も変えられない。

「……でも、なんで前橋さんは、あの動画を撮れたんだろう……」

「偶然って言ってたぜ。昨日未穂が偶然あの山に登った時に、私たちの秘密基地で陰口を言っている若菜を見つけたって言ってた。私たちが話した後に、あそこで起きたことらしい。私たちがもうちょっとあそこで話しこんどけばこう自体にはならなかったんだろうな」

「……うん」

……きつと、雛ちゃんの後をつけていたんだ。

僕と雛ちゃんの話聞いていて、僕らが山を下りて、楠さんが出てきて、僕だけが戻ってきて、僕が帰って、楠さんがストレスを発散して……。そしてそれを携帯で撮って……。

酷いよ。

「そう言えば、優大昨日落とし物したって秘密基地に戻っていったな。落とし物は見つかったか？」

「……うん。あれ、実は楠さんに呼び出されたんだ」

「え?! なんでだよ! その前になんで若菜がそこにいるんだよ! 私達が話しているときにはもうあそこにいたってことか?!」

「うん……。隠れて聞いていたみたい」

「……趣味わりいな。監視かよ」

「監視と言うか、多分、結果が知りたかったんだと思う」

「結果ってなんだよ」

「僕が、ちゃんと脅されているって言えるかどうか」

「……なんで脅している相手がそれをチェックすんだよ。おかしいだろそれ」

「楠さん、言ってたんだ。勇気を出せば人生変わるって。わがままに生きた方がいいって。だから、僕が嫌なことをされているって、雛ちゃんに告白できるかどうか、見守っていたんだと思う」

「……お前、脅されていたっていう割には若菜のことを信頼してるんだな」

「うん。脅されていたけど、酷いことはされていないから。だから、

脅されていたって言っても、なんでもできる楠さんは信頼に値する人だと思う」

「……そうかよ」

ちょっとだけ不機嫌になった雛ちゃん。僕の中途半端な立場が気に入らないんだと思う。

ぼそりと雛ちゃんがつぶやく。

「あの時、若菜もあそこにいたのか……」

「うん。そして、多分、前橋さんもいたんだと思う」

僕を見守っていた楠さんと雛ちゃんを見守っていた前橋さん。なんだか、不思議だ。

「そう言うことが言いたかったんじゃないけど……」

「え？」

「何でもねえ。でも、そっか。あそこに二人いたのか。どっちも褒められたことじゃねえな。人の話を盗み聞きするなんて」

「……そうだね……。あまり、いい事ではないね……」

盗み聞きした前橋さんも悪いから、どっちもどっちっていうことにはできないかな。できないよね。

「……」

どうしよう。

「みなさん！ 楠さん、委員長にふさわしくありませんよねー？」

そうだそうだ。

辞めちまえ。

信じた私がバカだった。

もう学校も辞めればいい。

酷い言い草だ。

「……。僕、こんなの嫌だ」

「若菜が責められることがか？ なんだ優大。お前若菜に惚れてるのか？」

「そう言うことじゃないよ……。そうじゃなくて、間違ってる気がする」

「間違ってるってなにがだよ。陰口を叩いてた若菜が悪いだろ。それを責めることの何が間違いだ」

「……責めなくても、いいと思う……。けど……」

「それじゃあ全員気が治まらねえだろ」

「……悲しいね、それ」

「……悲しいけどさ。仕方ねえよ」

仕方ないで済ませていいのか。

……。

いいわけないよ。

「こんなの、絶対に間違ってる」

僕は一步踏み出す。すぐに雛ちゃんが僕の腕を掴んで止めた。

「……なにする気だよ。何もできねえんだから安全なところにいるよ。飛び火したら面白くないぞ」

「僕は、クラスみんなが仲良い方が、素敵だと思う」

「そりゃそうだけど、どうしようもないだろこれは。いいから大人しくしてろ」

「……僕は、勇気を出すって決めたんだ」

楠さんに言われて、そうするように心掛けてきた。

まだ全然そう言う行動はとれていないけど、それでも人生が変わった気がした。

楠さんの言っていることは間違っていないんだ。

「私と親友なだけじゃあだめなのか？ クラスの雰囲気も穏やかじゃねえとお前は満足できねえのか？」

「雛ちゃんが親友なだけで僕はいいよ。でも、クラスのみんなが仲が良ければもっと思いいと思う」

「そりゃ、そうだろうけど」

「僕、雛ちゃんの親友として恥ずかしくない人間になりたい。雛ちゃんが僕のことを好きだって、胸を張って言ってくれるような人間になりたい」

僕の臭いセリフに雛ちゃんの顔が赤くなる。僕も恥ずかしいよ……。

「……わ、私は、もう優大の事、す、好きだぜ。これ以上ないってくらい」

「でも、もっと好きになって欲しい。僕も、雛ちゃんと一番の仲良しだって、自信を持って言えるようになっていたいんだ」

「な、な、な……！　そ、それって、お前、あれじゃねえか、あれ……ほとんど、こ、告……白みたい……」

「うん。僕今告白したよ」

「……！　優大……！」

雛ちゃんの事大好きだから、もっともっと仲良くなって友達の絆を深めたいよね。その気持ちを告白したけど、素直に言うのは恥ずかしいけど気持ちがいいね。

「あはははは！　なら、しょうがねえな！　行って来い！」

僕の素直な気持ちを聞いて納得してくれたようで、真っ赤な顔の雛ちゃんが、掴んでいた僕の手を離してとてもいい笑顔で笑ってくれた。

「優大ならできるぜ！ ああ、出来る！ 出来なくても、私は行動するその気持ち、すごいと思うぞ。失敗しようが、成功しようが、関係ない。優大の勇気はかっこいいぜ！」

「あ、ありがとう……！」

褒めてくれた！

「だからさっさと行って帰ってこい。ほら、さっさと終わらせてくれ。この一件が終わるのが待ち遠しすぎる」

僕が勇気を出すのが楽しみだということか。うん、期待されているし、僕は頑張るぞ。

「行ってくるね」

「行って来い！ あ、今日一緒に帰ろうぜ！」

「うん」

とても嬉しそうに僕を送り出してくれた。
頑張ろう。

誰かにとってのハッピーエンド

人込みの後ろの方で僕はみんなに声をかける。

「あ、あのー、みんな？」

ぎゃーぎゃー騒いでいるみんな。誰も僕に気づいていないようだ。

「えつとですね、その、ちょっと、みんな落ち着こうよ」

誰も聞きやしない。

そう言えば、楠さんにアピールしまくっていた小嶋君はどうしているのかな？

教室を見渡し小嶋君の姿を探す。

ぐっすりと眠っており教室の様子に気づいていないようだ。寝不足なんだね……。僕のせいで……。

小嶋君を探す際にクラスの男子ナンバーワンの沼田君も見つけた。教室のざわめきを一切気にしている様子もなく黙々と勉強していた。……なんで気にならないのかな……。

僕は改めて人だかりを見る。

相変わらず楠さんを責めたてていた。

酷く罵るみんな。楠さんはギュッと目を瞑りそれに耐えていた。最低だよみんな。

「……あの、みんな」

僕は後ろの方で声を上げている人の袖を引っ張った。

「なんだよ！ 邪魔だ！」

荒々しく振りほどかれ睨まれた。
そんなに罵るのに忙しいの？

僕は人を変え同じように袖を引っ張った。

「ねえ」

「いま大変だから」

また荒々しく振りほどかれた。

そんなに大変なの？ 僕の話聞く暇がない位大変なの？
もう一度、チャレンジしてみる。

「僕話を聞いて」

「触るんじゃねえよ！」

振りほどかれるどころか力いっぱい押された。

少し体勢を崩したけれど何とか踏ん張る。

僕を押した人はまた楠さんを罵る仕事に戻っていた。

酷いよみんな。

なんで楠さんを罵る方を優先させるの。

なんで人を傷つけることに一生懸命になるの。

絶対におかしいよ。

人の中から覗く楠さんの顔。

固く瞑る目からは、堪えきれなくなった涙がぽろぽろと溢れていた。

「楠さん、泣いてるよ」

叫んじやった。

叫ぶついでに両手で教卓を何度もたたき大きな音を立てる。

「罵るのは終わり！　今から僕の話聞いて！」

最後に全力で教卓を叩く。

僕の望み通り教室中が静かになり、みんな僕に注目していた。勉強をしていた沼田君も、眠っていた小嶋君も、明るく送り出されてた雛ちゃんも、中心となって責めていた前橋さんも、ギョツと目を瞑っていた楠さんも、みんな僕を見ている。
教室に僕の乱れた息遣いだけが響く。

「……一体、何事ですか佐藤君」

前橋さんが驚いた表情でメガネをかけ直した。

前橋さんだけじゃない。みんながみんな驚いた顔をしている。

「みんな……間違ってるよ！　楠さんがかわいそうだよ！」

僕の声聞いて静寂が壊れる。

「可哀想って、楠さんは私たちを馬鹿にしていたんだよ！？　かわいそうなのはこっちでしょ！」

クラスメイトの女子が声を上げる。

「俺は若菜ちゃんが好きだったんだ！　裏切られた気持ちだ！」

クラスメイトの男子が叫ぶ。

「あなたは有野さんの役に立ちたいんじゃないんですか?! 何故楠さんを庇おうとするんですか!」

前橋さんが苛立たしげに僕を責める。

「ぜ、全部関係ない……! 可愛いそうだから、可愛いそうだって言った、の……」

「なんなんですかそれは! そんなふざけた理由で私たちが間違っているというんですか?! 結局佐藤君は楠さんが可愛いからって庇おうとしているんでしょう! 黙っていてください!」

黙れ! とか、消えろ! とか、ウザい! とか。今度は僕が罵られる。

罵られているはずなのに、少しほっとしている僕がいる。みんなの注意を楠さんからそらすことができてよかったなと思っているんだ。

「みんな、ま、間違っていると、思うんだけど……その、僕だけ?」

「佐藤君だけです! 死んでください!」

「し、死にはしないけど、その、おかしいよ……。責めることはないよ……ね?」

「責めずにいられますか! 期待が大きかった分、失望も大きいんですよ! これは罪です! ギルティです!」

前橋さんにつられてみんなの表情が険しくなる。それで僕を睨み付ける。

「誰が間違っているかはあなたに言われなくても分かりきっています！ 正義は私たちにあります！ 私たちは間違っていない！」

人だかりのあちこちから賛同の声が飛んでくる。それに背中を押されたのか前橋さんがどんどん僕を責めたてる。

「私たちが間違っているというのであればどこがどう間違っているのか説明してください。説明できないのであれば黙って勉強でもしててください！」

「そ、その、どこが間違っているかって、聞かれたら、その、困るけど……」

「だったら黙ってなさい！ 邪魔ですよ佐藤君！ 今忙しいんですから、邪魔はしないでください！」

「そ、そんな。人を泣かせるのに邪魔とか、酷いよ……」

「いい加減黙れ！ いいからその高い位置から見下ろすのを止めて一人トイレでお弁当でも食べてなさい！」

「も、もう、お弁当食べちゃった」

「そんなの知るか！」

そうですね。

「楠さんは最低のクズです。それを庇おうというのなら、佐藤君もクズ認定しなければなりません……!？」

前橋さんの言葉に、その後ろに立っていた楠さんが俯いた。また心が傷ついたんだ。

「……前橋さん。そう言う言葉、人に使わない方が、いいと思う」

「本当のことを言っているだけです！ 本当のことを言って――」

「悪いに決まってるよ！」

自分の手が痛くなる位強く目の前にある教卓を叩いた。
ざわついていた教室がまた静かになった。

「楠さんが何をしたって言うの?! そんな言い方されるようなこととしてないよ！」

「……しているじゃないですか。みんなを口汚い言葉で罵っていたではないですか。陰でこそこそとこんなこと言う人間最低でしょう」

違う。それは違うよ。

「……だったら、みんなはどうなの……」

「どういう意味ですか」

「みんなは、人の悪口言ったことないのかって聞いているの。悪口くらい、みんな言うよね」

「……それはそうですけど、みんなの悪口を言うわけじゃないじゃないですか。それにこの楠さんの陰口は最早言いがかりですよ。媚を売るとか、べたべたするとか。そんなつもりもないのにそう言う風に言われたら誰だって腹を立てるでしょう」

「……楠さんがそう感じたのなら、そうなんだよ。楠さんがどう取ろうと、楠さんの自由だと思う」

「なんですかそれは！ 勘違いで貶されるなんて堪ったもんじゃないですよ！」

「誰も貶してないと思うのは、僕だけなのかな……」

「貶しているじゃないですか！ ここに証拠もあります！」

前橋さんが僕に携帯を突きつけムービーを再生する。聞こえてくるのはやっぱり楠さんの声。

「でもそれ……盗み撮りでしょ……？ それを見て貶されたっていうのは、勘違いだよ」

「なーにが勘違いですか！ しょ・う・こ・が！ ここにあるじゃないですか！ 現に今も貶され続けていますよ！」

イライラが限界に達する直前なのか、携帯を持つ手が震えている前橋さん。

でも、間違っているのは前橋さんだ。

「だって、一人で悪口を言っているんだよ？ それは、悪口になら

ないでしょ？」

「何を言っているんですか？ 意味が分かりません。このムービーが見えないんですか？ 貶されていますね、私達。何名かは名指しで貶されています。それが悪口ではないと？」

「だって……一人で言っているし……」

「だあかあらあ！ 説明してくださいと言っているんです！ 一人で悪口を言っていることは何故貶すということにならないんですか！ それを納得できるように説明しろと言っているのに、あなたは本当に頭が悪いですね！」

「う……。そ、そうだよ、説明がなきゃ納得できないよね……」

頭が悪いと言われてしまった……。僕が悪いから仕方がないけれど……。

「あの、楠さんのそれは、みんなが心の中で思うのと、同じだと思うんだけど……」

「意味が分かりません！ この国の言語で話してください！」

「え、その、その、僕、一応日本語で言ったつもりだったんだけど……、その、ごめんね。なら、もう一回。一人で言う悪口は、心の中で思うことと、同じなんじゃないかなーって」

「全く同じ説明を二度もしないでください！」

なんか理不尽だよ。

「なんですかその理論は？ 同じじゃないでしょう！ ここにこうやって証拠映像が取られているんですから！」

「そ、それはたまたま前橋さんがそこに居合わせちゃっただけで、楠さんは別に誰かに対して言っている訳じゃないんだから、みんなが心の中で思っているのと同じでしょ？ ただそれを口に出すか出さないかで、別に誰かとその悪口を共有しようとしていないんだから」

「でも現にここにムービーがあるんですよ！」

「ま、前橋さん。だからそれは違うんだってば。えっと、それは、その、心の声だから、悪口じゃないよ。みんなだってそうでしょう？ 友達と本音を言い合える人は何人いる？ 相手のムカつくところとか、気に入らないところとか、間違っていることを指摘しあえる関係を持っている人はこの中にいる？ いないはずだよ。みんな心の中では少なからず相手の嫌なところの文句を言っているはずだよ。ただそれを、楠さんは声に出したただけなんだ。みんなのことを悪く言おうと思ったつもりじゃないよ。だから、悪口じゃない」

僕の説明を聞いて、前橋さんが呆れたように大きなため息をついて言う。

「ですからあ……、もうそんなことはどうでもいいんです。ええ、分かりました分かりました。楠さんは悪口を言っていませんね。はいそうですそうです。でも、そうだとしてもですね、楠さんがどう思っているのかが分かってしまったじゃないですか。クラスの人みんなを馬鹿にしているということが分かってしまったではないですか。ええ、確かに私達だって誰かに何かしらの不満は抱いています。で

もそれは誰にもばれていない。ばれたら険悪になってしまうと分かっているから心にしまっています。でも楠さんはそれがばれたんです。悪口かどうじゃなくて、楠さんがみんなのことが嫌いと言う事実だけで、我々は責める権利があると思うのですが」

さっきと論点が変わっているよ。でも、前橋さんの言っていることは正しい。最後を除いては。

「せ、責める権利は誰にもないと思う……。みんなだって、結構酷い事、してるよね……?」

「なーにを言っているのですか！ 酷い言いがかりですね！ 佐藤君のその方が酷いことじゃないですか！ 私達は何をしたというんですか！」

「えっと、その、たとえば、僕のことだけど、楠さんは関係ないけど、僕のことを殴ったり、僕のことを悪く言ったり……」

「それがなんだというのですか！」

「えっ。だ、だから、人の事言えないんじゃないかなって……」

「かんけーないですね！ 君はバカにされても仕方のない人間ですからね！」

う、今もひどいこと言われたよ。もしかして僕は、前橋さんを責める権利があるのかな？

責めないけど……。

「顔を殴ることより、ハサミを突き立てる事より、本を切り裂くこ

とより、楠さんのしていることは酷いことじゃないよ。そういうこととする人は、人の事責められないよ」

「あーはいはいはいはい。そうですね！ ハサミを突き立てたり君の本を切り裂いたりした私は君を責める権利はないですね！ でもそれは君を責める権利です！ 我々は楠さんに対して何もしていないのですから責める権利はあるはずです！」

楠さんを指さす前橋さん。

気に入らない。本当に気に入らない。

「嘘だよそれ」

僕は聞いたんだ。

「何が嘘ですか！」

「僕、知ってるよ。みんなが、雛ちゃん経由で楠さんに文句を言っているの」

「……」

初めて前橋さんが黙った。

ちらりと雛ちゃんの方をしてみる。ぽかんとしていた。

黙る前橋さんに視線を戻す。

「そう言うことをしている人は、今していることを恥じるべき。もともと楠さんのことが好きじゃなかったんだから、その人に嫌われていると分かったからって責める必要ないでしょ」

うぐぐ、とうなって前橋さんがいう。

「確かに、そう言う人もいました。私も心を痛めていました。有野さんにそんなことをさせるなんてひどいと。でもですね、君がそういうのなら、楠さんを本気で信じていた人たちは責めてもいいということになるのでしょうか？　ここにいる人の大半は楠さんに対する文句を言ってないはずです。つまり、その人たちは責めてもいいということになりますよね？」

「そもそも、人の好き嫌いに文句を言う権利なんて誰にもないんだよ。みんなが言っていることは、自分のことを好きじゃないなんてありえないってことでしょ？　自分のことを好きじゃなかったのはいけないことだって言ってるんだよ？　無理やり好きにさせるって、おかしいよ」

やっと話がまとまってきた気がする。

クラスメイト達はみんな顔を見合わせ僕の言い分を納得しているものかどうか逡巡している。

あと一歩だ。

「好き嫌いには文句言えないよ。だから嫌いになった人は嫌いになればいいし、それでもまだ好きだっていう人は好きでいればいいだけなんだ。楠さんを泣かせるのは、間違っているよ」

無言の教室。みんな納得してくれたみたいだ。

前橋さんも納得してくれたのか、悔しそうに僕を睨み付けている。怖い。

僕を睨み付けたまま携帯をしまった。

そして、

「……分かりました。責めることはやめましょう」

やった！ 楠さんを責めさせることを防げたよ！

「しかし」と、前橋さんが続ける。

「委員長にはふさわしくないのは事実。その役職から降りていただきましょう」

これにみんなも賛同する。

……あれ？ もしかして僕、何も解決できていないんじゃないかな？

嫌いになりたい人だけ嫌いになればいいって言ったけど、みんな楠さんのこと嫌いになっちゃうんじゃないかな……。そんなの僕望んでないよ！ みんな仲良くっていう未来を望んでいたのに！

「では、とりあえず次の委員長は有野さんで——」

「ま、待って待って！」

勝手に進んでいく話に割って入る。

「なんですかうるさいですよ。委員長には一番信頼されている人間が就くべきです。今の楠さんを信頼している人間はゼロなんですから、当然代わりに有野さんが天下を取るべきです」

天下って……。そう言えば前橋さんは雛ちゃんに天下を取らせたみたいなのを言っていたね。

「その、あの、みんな、楠さんと仲良くしようよ。ね？」

「無理です。嫌っている相手と仲良くしようだなんて思いません」

「でも、みんな今酷い責め方したし、お互い様っていうことには、ならないかな……？」

「なるわけないでしょう何言っているんですかバカ」

バカって言われた……。

って落ち込んでいる場合じゃない。

「その、あ、あの、えっと……」

「うつむいてもごもご言っても何も聞こえません。こっちを見てはつきりとしやべってください」

こういうとき、どうすればいいんだろう。

きっと、ライトノベルの主人公なら心に響くことを言って華麗に解決して見せるんだろうな。

もしくは回転の速い頭をフルに使ってうまい事切り抜けたりするんだ。

でも僕は主人公になり得る要素を持っていないし、心に響く言葉も持っていないし、頭の回転なんて回転寿司のお皿より遅いんだ。何事もなく切り抜けるなんて僕にはできないんだ。

「えっと、だから……」

「なんですか？ 何もないのなら黙っていてください」

特殊能力を持っている主人公ならみんなの記憶を消したりするんだ。人望のある主人公ならきつというんな人が助けに来て丸く収ま

るんだ。でも僕は特殊能力なんて持っていない。人望だってない。何もないよ。

少しだけ顔を上げ雛ちゃんの顔を見た。

力強い目で、僕を応援するように見つめてくれていた。

次に僕は楠さんに目を向ける。

涙のたまった目で僕を見ていた。楠さんには似合わない不安そうなすがらような目。

僕は思わず目をそらしてしまった。

ヒーローじゃない僕に、何ができるのだろう……。何も思いつかない。妄想が大好きな僕だけど、うまく切り抜けられる未来が想像できない。

いっそのこと、隕石でも振ってきてくれれば……。

……。

頭を振って現実に戻ってくる。

そんな不幸な終わりは誰も望んでいない。

みんなが幸せになりたいんだ。

この状況で何とかしようとしているのは僕しかない。だから、僕しか何とかできないんだ。

クラスメイトたちを仲良くしようとしているのはこの教室で僕だけ。その目標に一番近いのは僕なんだ。僕だけそれに向かって足を踏み出しているんだ。一歩だけだけど、一歩も動いていないみんなと比べたら、僕は平和に一番接近している人間なんだ。

僕だけしか、手が届かないんだ！

僕はみんなを見渡した。

……どうしよう。

決心を固めたところで何も思い浮かばない……。

……ああ、きつと、漫画とかの主人公なら、何とかして見せるのに……。

そう言えば、この世で一番主人公に近いと言っても過言ではない沼田君はどうしているのかな？

見てみると、腕を組んで僕を見守っていた。

目が合うと、一度頷いてくれた。

ゴメン。意味がよく分からないよ。

ひょっとして、僕ならできるとか、そう言う過度な期待を抱いてくれているのかな。

まっすぐな目に耐え切れなくなって小嶋君に目をずらした。

寝ぼけ眼で雛ちゃんを見ていた。

……。うん。

僕が何とかしなければ。

みんなを見る。

みんな僕の言葉を待ってくれていた。

こいつはなんと言うのか、どんな馬鹿なことを言うのかと、待っていた。

こういう時、主人公なら、主人公なら。

——僕は主人公じゃないけれど。

そういう物語ならいくつも見てきた。

——僕は主人公にはなれないけれど。

主人公がこういう時になんて言うのかは、分かるんじゃないかな。妄想してきたじゃないか。

教室に暴漢が入ってきたらこうしようとか、お化けが出てきたら漫画で覚えた呪文を唱えてみようとか、いつか超能力が目覚めるのではないかとか妄想してきたじゃないか。

今日のこれだって、いつか妄想したはずだ。可愛いクラスメイトのピンチを僕が華麗に救って見せる。そこから始まるラブロマンス。

主人公がこういう時なんて言うのか。

——僕は主人公にはなれないけれど。

主人公の真似ならできる。

少し前に読んだもん。

僕はできる限り、精いっぱい凛々しい顔でみんなを見渡す。

こういう時は、主人公ならこういうんだ——

「――可愛ければ、なにをしてもオツケーだと思う」

……。

……。

え？

「……………は？」

前橋さんが理解できないと声を上げただけ。教室内は今まで以上に凍り付いてしまった。

え？ あ、あれ？ 僕今なんて言ったの？ え？ 顔がすべてのなニュアンスのこと言ったよね？ ち、違うんだよ？ これは、僕の言葉じゃなくて、この前読んだハーレム系の物語の主人公が、美少女しかいないコミュニティで、そのコミュニティのみんなを仲直りさせようとして言ってたんだよ？ 真似ただけだよ？ 今の僕の状況に似ているから、応用できるかなって、思っただけだよ？

「君は何を言っているんですか？ 今本気で密室殺人のトリックを考えてしまいました」

「う」

……。

……。

……

僕のバカ！

間違いなく選択ミスだよ！ 最低の答えだよこれ！

ふー！ 危ない危ない！ 選択肢前でセーブしておいてよかった！
早くロードし直さなきゃね！

「ろ、ロードは、どうすれば……」

あ、あれ？ ロードは……ロード……。

「優大……。お前、何言ってるんだ？」

いつの間にか雛ちゃんが僕の傍に立っていた。顔はとても優れな
い。

「ひ、ひ、雛ちゃん……」

「お前、それ最低だぞ。可愛ければ全部許されるってのか？」

「い、いえ、そんなことを言いたかったわけではなくてですね……」

「結局お前は顔か。人を顔で選ぶのか」

「ちがいます……。ごめんなさい……」

「お前、人を見た目で判断するなど言っておいて、自分はそれか
よ。なあ、その考えやめようぜ？ 私、悲しくなっちゃうわ」

「……ごめんなさい……」

「みんなに謝れ」

「はい……。みなさんごめんなさい……」

みんなに謝ったけれど、何の反応も無い。冷たい顔を僕に向けていた。

「……えーでは、とりあえず佐藤君には何も考えが無いようなので、委員長は有野さんということで」

前橋さんが勝手に話を進めていた。楠さんが皆に嫌われることは避けなければ！

「ま、まって！ まだ、僕の話は終わってないから！」

「ゆーた！ いいから！ 優大はこっちにこい！」

雛ちゃんが僕の首に手を回す。雛ちゃんの体は柔らかいなあとかそんなことを考えている場合ではない！

「あ、あ！」

そのまま雛ちゃんに教壇から引きずりおろされる。一瞬見えた楠さんはあきれてものが言えない様子だった。首を掴まれたままずるずると引きずられどんどん人だからから離されていく。

う……！

これじゃあ、ダメだよ！

僕何もできていないよ！

こんなの、みんな不幸になるだけだよ！

なんとか、しなきゃ！

楠さんは——僕の友達なんだから！

「あ、あの！ 僕！」

何とか声を出す。でももう誰も聞いていない。

「優大！ もう諦めろ！」

雛ちゃんが怒ったように言う。

「ぼ、僕、実は！」

でもあきらめちゃだめだ。

「この……いい加減に……！」

僕しか、何とかできないんだから。

「僕実は楠さんを脅しているんですー！」

思わずそう口が動いていた。

実際に自分が脅されているから、多分それに関係した嘘がとっさに出てきてしまったんだ。

その結果。

本日何度目か。教室内が静寂に包まれた。

しばらく僕の首をロックしたままフリーズしていた雛ちゃん。

「……優大、お前何言ってんだ？」

困惑した様子の雛ちゃんが、僕の首に巻きつけていた腕を離した。みんなも僕の顔を見て何が言いたいんだと目で言ってくる。

「優大、昨日は脅されているって言ってたじゃねえか。でも、いま、優大が若菜を脅しているって言ったよな？」

いろんな感情が混ざっているみんなの目から逃げるように、僕に問いかけている雛ちゃんの顔を見る。

困ったような怒ったような顔。

「そ、そう、そうなんです。昨日雛ちゃんに言ったのは全部ウソ！
実は、僕が一番悪いんです！」

「……何言ってるんだお前。なんで優大が若菜を脅しているんだよ」
「そ、それは、とんでもない秘密を、握ってしまったから……、脅
そうと……」

「優大がそんなことするわけねえじゃん。嘘だろそれ」

「う、嘘じゃないよ！ ぼ、ぼ、僕だって、おお男だから、その、
あの、えっちな、命令とか、したり……するの！ かな……？」

瞬間で雛ちゃんの表情が変わった。

「ああ?! えっちな、命令、だあ……? ……ゆうたあ? 嘘だ
よなああ?」

にこにこぴきぴき。

今日僕は死ぬかもしれません。

「う、うう、嘘じゃ、ないよ！」

とりあえず後ずさって雛ちゃんから少し距離をとった。
後ろから前橋さんの声が聞こえる。

「とんでもない秘密とはいったいなんですか？」

声の方を向く。

人だかりが割れて、僕の方を見ている前橋さんの全身が見えていた。

「その脅している材料を教えてくださいよ」

「そ、それは、とんでもないから言えないよ！」

「何故今それをばらしたんですか？」

「う。ど、どうしても、いいでしょ！ と、とにかく、楠さんがみんなの悪口を言っていたのは、僕の命令だったんだ！ あそこで悪口を言ってって僕が命令したの！ だから、僕が悪いの！」

「それ、嘘ですよね？ 楠さんを庇うために嘘ついていますよね？」

「嘘じゃないよ！ そう言う事情でもない限り、楠さんがみんなの悪口を言うわけじゃない！ あの楠さんだよ？！ 誰かに脅されているとか、複雑な事情がなかったら、みんなの事嫌いとか言うわけないよ！」

「嘘ですよ。どう見ても庇うために嘘をついていますよね。嘘をつ

くのならもつとまともな嘘をつけばいいのに、君はやっぱりバカです
ね」

「ほんとに本当だよ！」

「嘘じゃないのなら証拠を見せてください」

「え、しょ、証拠……」

証拠って言われても、僕脅してないし……。

「あ、そ、そうだ！ 今日、一緒にお弁当食べたよ！ 僕の命令に、
逆らえないから！」

証拠になるかな？

「何を言っているんですか君は。証拠になるわけないでしょう」

ですよね！

「う……。な、なら、そうだ。アドレス、アドレスは？ 男子で、
アドレスを知っているのは僕だけだよ！」

「……まあ、それは確かにおかしいですけど……、でも証拠と言え
るようなものでもないですよ。ただ仲がいいだけじゃないですか。
仲がいいからアドレスを教えるし、一緒にご飯を食べる。証拠には
なりません」

「う、うう……！ 証拠なんて……」

証拠。

……証拠と言えば……。

あ。

「そうだ！ 決定的なものがあるよ！」

僕は携帯を取り出して例のデータを探した。

ディスプレイに映し出されるそれ。消さないでとっておいてよかった。

いつみても恥ずかしい。

う……。でも、これを見せてもいいのかな……。楠さんにとっても迷惑なんじゃあ……。

ええい！ 恥ずかしがっている場合じゃない！

「こ、こ、これを見れば、僕が楠さんを脅しているって分かるはずだよ！」

僕はみんなに向けて携帯を突き出した。でも距離が離れすぎているせいでみんな僕が何を見せているのか分からないみたいだ。

「こういう、酷い命令をしても、楠さんは断れないんだ！ これがその証拠！ だから、みんなの悪口を楠さんに言わせるくらい、僕にかかれば簡単なんだよ！」

みんなが見に来ないのなら、僕の方から近づこうと思ったけれど、後ろから肩を掴まれてそれができなかった。

「優大？」

……………怖い。

「優大？　まず私に見せてみる？」

優しい雛ちゃんの声。

「う、う、うう……！」

みせるしか、ない。

「こ、これが、僕が脅している証拠です……」

振り向き、雛ちゃんに携帯を渡した。

携帯がみしみしと音を鳴らす。

雛ちゃんの周りの空気が歪む。

ギンツと、僕をにらみつける雛ちゃん。

「……………優大」

「はははい」

「……………殺す！」

最後に見たのは、教室の天井と、僕を囲んで見下ろしているクラスメイト達。たぶん、吹き飛ばされたんだと思う。

七夕の日の放課後

僕の意識は保健室で覚醒した。

学生服を着たまま寝ているせいで布団が気持ち悪い。いい寝心地とは言えない。

それに全身が痛い。

高いところから床に叩きつけられたような痛みだ。

痛みを我慢しながら僕は体を起こして辺りを見渡した。

でもベッドを囲うカーテンが閉められていて何も見えない。

昼からの記憶がないけれど、今は一体何時だろう。まだお昼かな。でもカーテンの向こうから射す陽が少し赤みを帯びている。きっと、もう放課後なのだろう。つまり僕は五時間目と六時間目をここ保健室で寝て過ごしたわけだ。……うう……もうすぐテストがあるのに……。

何時かを確認するためにも、一度カーテンをあけなきゃ。

ベッドから足を投げ出し上履きを探す。見当たらない。仕方がないので靴下のまま床におりた。

そしてゆっくりとカーテンをあける。

「……えーと……」

誰もいないみたいだ。

ひとまず時計時計……。

四時。

ちょうど六時間目が終わったところだ。

うう……。確か午後からの二時間は英語と数学だったような気がする……。大切な二教科を逃してしまった……。

悔やんでも仕方がないのでぺたぺたと保健室の扉へ向かう。出て行く訳ではないけれど、とりあえず外の様子を見て見たくて。

扉に手をかけ、開けようとする。しかし、僕が開けるより先に向こう側から扉が開けられた。

「うわっ」

驚き足を滑らせてしまった。靴下のせいだ。

尻餅をつく僕と、それを見下ろす女の子。

誰だろうかと顔を上げてみる。

「あ、く、楠さん……」

楠さんが素敵な笑顔で見下ろしていた。

「おはよう。よく眠っていたね。もう大丈夫？」

「あ、うん」

何が起こったか正確に思い出せないけど。

「……あ、そ、そうだ！　楠さんは大丈夫？！」

「大丈夫って、何が？」

「え、その、クラスのみんなとの、関係……」

楠さんは、みんなから責められていたんだ……。あの後どうなったのか、僕は気を失ってしまったので分からない。

「……とりあえず、ベッドに戻ろうか。今起きたばかりなんでしょ？」

「え、あ、うん」

指示に従い立ち上がりベッドへ向かう。ベッドの横に腰をかけ楠さんに視線をやる。

「はいこれ。君のカバン」

保健室で眠る僕の為に教室からカバンを持ってきてくれたみたいだ。

カバンを受け取りベッドの上に置く。

「ありがとう。あの、その、僕の上履きは、知らないかな……」

「ベッドの下にあるよ」

「あ、そうなんだ。ありがとう」

保健室を出るときに履こう。

今はそんなことを気にしている場合じゃなかったね。

「あの、それで、楠さんは……」

「気になる？」

「う、うん。気になる……」

あの後、どうなったんだろう……。

「隣、いい？」

「え、あ、どうぞ」

横にずれて楠さんの座るスペースを確保する。

「ありがとう」

にっこりと笑ってそこに座った。

「何が起きたかは、覚えてる？」

「うん。気を失う前までの記憶はぼっちりあるよ」

「そっか。綺麗な弧を描いていたよ」

「……そこは覚えてない……」

やっぱり殴られたんだね、僕。

「ふふふ。それで終わりだよ」

「え？」

「そのあとは、ほとんど何もなし」

「え、え？　じゃあ、楠さんは、みんなから……」

僕のしたことは無意味だったのかな……。体を張っても友達を守ることができなかったのかな。

「ううん。私は、みんなと和解できたよ」

「えっ、あ、……よかった……」

これで一安心だね。やっと表情を緩められるよ。

「佐藤君が気を失った後、有野さんが言ったの。『優大が全部悪い。若菜悪くない。こいつがすべての元凶だ。でもなにがあったかは深く追求するな。この件を掘り返そうとしたら殺す』ってね。君が全部悪い事になって、みんな私に謝ってきてくれたよ。前橋さんもね」

「そ、そっか……」

喜ばしいことだけど、僕の人生終わったね。いじめられない事を祈ろう……。

「みんなとしては、うやむやのまま終わったみたいだけど、多分誰もこの件を探ろうとはしないよ。それくらい有野さん迫力があったから。みんなだって佐藤君みたいになるのは嫌だろうしね」

「そ、そんなに僕酷かったんだ……」

すぐに気を失ってよかったのかも。

「ねえ、なんで私を庇ったの？」

「え？」

不思議そうに、嬉しそうに聞いてきた。

「私を庇って、自分が罪を被って。君の一人損じゃない。なんでそんなことしたの？」

「……えっと、誰かが不幸になるのは、嫌だし、その、楠さん、僕の事を、友達って、言ってくれたから……」

友達の為に何かをするのは当然だ。それに僕は勇気を出す決心に決めたんだ。あそこで何もなかったらきつとこれまでの人生が続いていたことだろう。しかし、今日勇気を出したことで人生が楽しくなったのかな……。失敗した気がする。

「そのためには自分がひどい目に遭ってもいいの？」

「う、うん。誰かがひどい目に遭うよりは、自分が泥をかぶった方が、いいよね」

楠さんが、楽しそうに嬉しそうに笑う。

「バカみたい。人の罪とか重りを背負って、自分の人生泥だらけにしてさ。本当に自分に優しくない優しさだね。もっとうまく立ち回れば、君の事好きになるのに」

「う……ごめんなさい……。……って、え？」

今最後になんて言ったの？ 聞き間違いでなければ、嬉しいことを言われた気がするけれど。

「ぼ、僕今、好きって言われた？」

確認作業をとる僕の前に本当に明るい楠さんが現れた。

「あはは。君はうまく立ち回っているのかな？」

「う……そうですね、うまく立ち回っていないからこうなっているんですよ……」

つまりは別に好きではないということだ。

落ち込む僕に楠さんは何も言っていない。

いつもならうじうじするとかシヤキツとしろとか目障りだとか言ってくるのだけれども、今日は落ち込むことを許してくれるらしい。

そこから無言が続く。

おしゃべり好きの楠さんとこんな無言の時間を過ごすのは初めてだ。

なんだか緊張する。何か僕が話題を振った方がいいのかな。でも僕は何も面白い話を持っていないし……。

カーテンの開いた僕らの座るベッド。

保健室の先生がいなくてどこにいらっしゃるだろう。あちこちに視線を動かし探してみる。誰もいない。白い部屋に置かれた様々な雑品。左右に視線を滑らしたただけでは薬品らしきものは見当たらなかった。もっと恐ろしい薬品があってもよさそうなのだけれど。

目で確認できないのなら耳だ。耳を澄まして音を手繰り寄せる。

誰かの廊下を歩く音。外からは誰かの話声。テスト週間中なので部活の音は聞こえない。とても静かだった。静かすぎて、自分の脈がうるさい位に喉のあたりから鳴り響いていた。

目でも耳でもダメなら鼻に頼ろう。保健室特有の匂いが胸を締め付ける。不安なのか病気なのかは分からない。胸を押さえて床を転がりたいけれど隣に人がいるのでやめておこう。

保健室の中には特に何もない事が分かった。

することが無くなったので、目で、耳で、鼻で楠さんの様子をう

かがう。

綺麗な姿勢で真っ直ぐに正面を見ている楠さん。微かに息遣いだけが聞こえてくる。保健室の匂いに飲みこまれない良い香りが周りを包んでいた。

「佐藤君」

楠さんが突然僕の方を向いて話しかけてきた。
慌てて顔をそらす。

もしかして様子をうかがっていたのがばれてしまったのか。怒られてしまうのだろうか。

「君は本当に格好悪いね」

う。こそこそ観察していたことに対しての言葉なのだろうか。

「君は本当に格好悪い。好感度で言ったら100の内7くらいかな」

……ひ、低いね……。仕方がないけれど……。

「でも」

と僕に笑いかける。

「今のところみんなマイナスだから」

「……？ えっと……。つまりそれは……？」

七しかないけれど、他の人と比べたら僕の好感度が一番高いってこと、だよな？

「みんなのことは『大嫌い』だけど、君は『嫌い』くらいかな。喜んでいいよ」

「……う、うん」

素直に喜んでいいものかどうか微妙だ。複雑な気分。

「佐藤君は？」

「え？」

何が？

「佐藤君の中で、私の好感度はどれくらい？」

「え、えええええ！？」

いきなりの質問に思わず楠さんの顔をまじまじと見てしまう。
何その質問！ 答えづらいよ！？

「なに？ 私に言わせておいて君は言わないつもり？ 酷いねそれ。
好感度下げちゃお」

ジト目の楠さん。

「えっ、ま、待って待って！」

下げられたらもっと嫌われてしまうよ。そんなの嫌だ。
でも自分から言ってきたのに僕にもそれを強要するのは、その、

どうなのかな……。

そんなことを言う勇氣が僕にあるわけでもなく、僕は諦めていう。

「ぼ、僕の中での好感度は、も、もちろん、100だよ」

「ふーん。私のこと好きなんだ」

「え、違う、あ、違わないけど、その、あの、みんな、100……」

「……有野さんも小嶋君もみんな？」

「う、うん……」

「ふーん」

自分が一番ではないと分かって少し不機嫌そうだ。101と言っておけばよかったかな……。

「……まったく、君は臆病だね」

「う、うん」

臆病と言われ思わず顔を伏せる。

何度も言われた。僕は臆病。やっぱり変わっていないらしい。臆病者のままなんだ。勇氣を出したところで、臆病は根本から変えることができないんだ。

「でも——優しいね」

「え？」

先ほど俯かせた顔を慌ててあげる。

「こう言っただけなきゃ、これからやっていけないでしょ？ みんなに冷たい目で見られるんだから」

「う……つらいよ……」

僕、これからどうなるんだろう……。楠さんを脅して酷いことをしたウジ虫野郎という目で見られるんだよね……。憂鬱だ……。

「まあ、今までの生活とあまり変わらないのかな？ もともとみんなの評価が高かったわけじゃないし」

「そ、そうですね……」

評価が低いことは知っていたけれど、人から言われたらくるものがある……。

僕の人生、お先真っ暗だ……。

「みんなと仲良くなろうと頑張っていた君だけど、その結果は私と仲良くなっただけでした」

「……え？　楠さんと？　仲良く？」

「あれ？　嬉しくないの？」

驚いたように聞いてくる。僕は慌てて答えた。

「え!?! い、いや、嬉しいよ! もちろん、嬉しいけど……、その、僕なんかが……」

「お弁当の時と同じ問答を繰り返すの? 私が君と友達になりたいからそう言ってるの。あ、なるほど。もう一度私の口から言わせたかったんだね。酷い人。ピロリン、佐藤優大の好感度が1下がった」

「う?! ご、ごめん! そう言うつもりじゃなくて、その、あの、ごめんなさい!」

「良いよ。許す」

あれ。サクッと許された。

「だって、友達だもんね」

にっこりと、ほっこりと笑う。

「う、うん……」

なんだか小恥ずかしい。

「有野さんから私に変わったっていうことだね」

「……え? どういうこと?」

「今までは有野さんだけが君と仲良くしていたけど、これからは私だけが君と仲良くするっていうこと」

「え? どうして楠さんだけなの? 雛ちゃんはどうしたの?」

「ふふ。ブチ切れていたよ。君を消滅させる勢いでね」

「……そ、そうですよね……。早く、謝らないと……」

「許してくれるかな。親友だと思っていた男の子に突然クラスメイトとのキスシーンを見せつけられて怒らない人はいないよ」

「……そんなあ……」

……でも、まあ、仕方がない……よね……。

かなりショックが大きい。何も考えられない。今回の一件で、僕には得る物があったのかな……。無い気がするよ。

落ち込む僕の顔を楠さんが覗き込む。

「損しかしてないって思ってる？」

「え、う、うん」

「そうだね、損しかしてないよ。でも私はとっても得をしているよ。ありがとう」

「……うう……。素直に喜べない……」

「ふふふ……」

僕はこれから先どうなるのかな。

「さってと」

楠さんが勢いをつけて立ち上がった。それでもどこか優雅だ。

「佐藤君」

長い黒髪と、綺麗な横顔に見とれていた僕に、楠さんが正面を向いたまま話しかけてくる。

「いつまでベッドの上で落ち込んでいるの。そんなことをしている場合じゃないでしょう」

「え？」

何かあるのかな？

楠さんが顔だけ僕に向け言った。

「今は、テスト週間だぜ」

雛ちゃんを真似たような男前な口調で、男前な笑顔を見せてくれた。どんな表情でも、どこまでも似合う。

「……そうだったね」

そう言えばそうだった。

僕はバカだから、早く帰って勉強しなくちゃ。今日逃した二教科を取り返さなくてはいけないから、今まで以上に頑張らなければ。

「君が寝ていた授業の分のノート、見せてあげようか？」

「え?! いいの!？」

「いいよ。じゃあひとまず教室に戻る？　それとも、君の部屋に行こうか？」

「え、あ、じゃあ、教室でお願いします」

「ふふ、だよな。じゃあ、先に行って待ってるから」

綺麗な黒髪を掻き上げて、いい匂いを振りまく。

このいい香りはシャンプーなのかな？　とかそんなどうでもいいことを考えているうちに、楠さんは保健室を出て行った。

色々と、問題は残っているけれど。

今はとにかく勉強に集中しよう。

これからの人生を考えるよりも目の前に迫った危機を回避しなければ、それどころではないからね。

ベッドの下から上履きを引っ張り出してきて立ち上がる。

今日は七夕だ。

織姫星と彦星が出会える年に一度の日。

ついでに僕らの願いを叶えてくれるらしい。

今の僕なら、何を願うのかな。

なんでも叶うとしたら、僕はなんと短冊に書くのかな。

頭が良くなりたいし、運動神経もよくなりたいし、背ものびてほしいし、おいしいものも食べたいし、今日をやり直したいという気持ちもある。

なんて書くのかな。

——どうでもいいや。

「うん」

何故だかわからないけれど、何に対してかわからないけれど、僕は一度頷いてから楠さんを追った。

キョーハク少女

七月十三日。

今日テストが終わった。

僕の人生も終わった。

七夕から――あの日から、雛ちゃんと言も話していない。休日一緒に勉強しようと約束していたけれど、当然その予定は無くなっ
てしまい僕は一人悶々としながら勉強をすることになった。

あの一件からクラスメイトの視線はそれまでより六割増しで冷たい。話しかけてくれるのは楠さんと小嶋君だけだ。

楠さんはいつも通り僕に厳しく接してくれる。それが今はありがたい。小嶋君はどうやら國人君と同じ道を歩んでしまっているよう
でほぼ毎日徹夜で僕の持ってきたアニメを見ているらしい。だから、
多分今回のテストは悲惨なものになっていることだろう。ごめんね
小嶋君。

でも僕も人の心配をしている場合ではない。

雛ちゃんを怒らせてしまっていることやクラスメイトの冷たい視線が
気になってしまっただけで勉強どころではなかった。恐らく僕のテストも悲惨なものになっているだろう。織姫星か彦星どちらかが地球に落ちてきてテストも人間関係も全てリセットしてくれないかなと
本気で空を見上げることが増えてきた今日この頃。

親友を失ってしまったしテストも散々だった僕はもうどうしようもない位に憔悴していた。夏休みが待ち遠しい。色んな意味で待ち遠しい。人間関係をすべてシャットアウトして勉強に勤しもう。そうすれば自我が保てる……。

テストが終わり、みんながすっきりした表情で教室を出て行く中、僕は一人教室の隅で溜息をついていた。誰も僕に気づいていない。誰も気にしていない。今まで以上に僕が空気に徹しているからか。冷たい目で見られるのはもう嫌だ。

ちらりと雛ちゃんを見てみる。

あの日からずっと不機嫌だ。なぜかあの日からずっと機嫌のいい前橋さんを引きつれてさっさと教室を出て行くところだった。

うう……。謝りたいのに、何も聞いてくれない……。

悲しくなつてがつくりとうなだれた。

こんなことなら、一人の方が良かった……。

「さ、佐藤……」

「え？ わっ」

うなだれていたところに、死にそうな顔をした小嶋君がやってきた。

「見たぜ……、全話……」

「ぜ、全話って、昨日貸したのは五十話以上あるギャンダムだよ？
！ 一日で見る物じゃないよ！」

「だって……おもしれえんだもん……。な、なあ、次は、何を貸してくれるんだ……？」

まるでジャンキーだ。これは一度アニメ断ちをさせた方がいいのかもしれない……。でもそれをするならテスト週間中にすればよかった。テストが終わった今それをしてもし方がないか……。仕方がないので僕は持ってきたDVDを取り出し渡した。

「さんきゅう……。明日返す……！」

「出来れば、一週間後くらいに返してほしいよ」

「これからもっと見て行かなきゃならねえのに一週間もかけていられるか……！　ぐ、ぐふふ……夏休みが楽しみだぜ……！」

夏休みに勉強はしないらしい。これは、本当に、ごめんなさいとしか言えないよ……。

ふらふらした足取りで教室を出て行く小嶋君。

それを見届けてまた落ち込む作業を再開する。

ふう……。

どうしようこれから。夏休みと言っても、文化祭の準備とかがあるから雛ちゃんと何度も顔を合わせることになるのに。この気まぐれいまま委員長会議なんてできないよ……。

「はぁ……」

何度溜息をついても何も解決しやしない。

どうしよう。

「景気の悪い顔してるね」

また誰かが話しかけてきてくれた。でもすぐに分かる。この綺麗な声は楠さんだ。

顔を上げて確認する。

やっぱりそこには綺麗で眩しい楠さんの顔があった。

「テストの出来が悪かったの？」

「うん……。まあ、とっても悪かったけれど……」

「落ち込むことないよ。君はもともと勉強出来る子じゃなかったん

でしょ？　いつも通りだから気にしないでいいよ」

「それは、そうだけど……」

また俯く。

落ち込んでいる理由はテストだけじゃないからね……。

「そんなことより、ねえ佐藤君」

「え？」

「終わったことより、今からのことを考えよう」

「今からの事って、いったい何？」

楠さんが僕の前の椅子に座った。わざわざ僕と正面を向くように百八十度椅子を回して座ってくれる。そして僕の机の上で、両肘で頬杖をつき嫌味も何もない純粹すぎる笑顔を作った。ちょっと綺麗すぎる顔が近くて、僕は思わず後ろに体をそらして距離をとった。

「私さ、実は一週間前の例の一件について何かお礼をしたいと思ってたんだ。でもテスト期間中だから迷惑かなって思ってた。でも何も言わなかったけど、やっと終わった」

「お、お礼なんて、いいよ。僕のしたいことをしただけだから……」

「でも佐藤君今大変でしょう？　少し位良い目を見たって罰は当たらないよ。それに、お礼をさせてくれなかったら私がすっきりしないから」

そう言つてふふと笑う。

この近距離で楠さんと向かい合うことに耐えられそうもないので、僕は座り直すふりをして椅子を後ろに引いた。

「ねえ」

うっ。もしかして距離をとったのがバレたのかな。そうだね。距離をとるのなんて失礼だね……。

なんてことを前にも思つたなあ。

「お礼、させてくれない？」

この目のくらむような笑顔を前にしたら誰も断ることはできないよ。

「う、うん」

「よかった」

本当にうれしそうに笑う。いつも見ていた無表情より、やっぱり笑顔の方が可愛いよ。そんなこと言えないけど。

「それでね、お礼なんだけど——」

「うん」

おはぎでも食べさせてくれるのかな？　うれしいな。

「——一つだけ、君の言うことをなんでも聞いてあげる」

「……へ？」

とんでもないことを言われた気がする。

「あ、ああ！ その、聞くって、そう言うことでしょ？ 『はい聞いたー。聞くだけ聞いたー』みたいな……」

「そんなわけないでしょ。一つだけ君の言うことになんでも従ってあげる、って言えば満足？」

「う……」

とんでもないことを言われていた……。

「な、なんでもって……その、たとえば……」

「なんでもいいよ。私の好感度を100にしてもいいし、あの日みたいにキスをしてとかでもいいよ。本当に、なんでも、なーんでもしてあげる。——どんなことでも、私はやるよ」

笑顔が消え、真剣な顔の楠さんがここにいる。

「……」

なんでも、なんでも……。

こんなの、考えるまでも無いよ。

なんでも、だよ。頭に浮かぶのは一つしかない。

「楠さん……」

僕は真剣な顔の楠さんを出来るだけ真剣な顔で見つめる。

「……なにかな」

そんなことを言われたら、誰だって、こう言うお願いするはずだ。ちょうど教室には誰もいない。

恥ずかしいことをしても誰にもばれない。よし。

僕は、勇気を出すって、わがままに生きるって、決めただから。

「……あの、その……」

思わずつばを飲み込んでしまう。き、緊張する……。

「……何でも、言っていーいよ」

優しく微笑んで言われた。

……たまには、自分の人生の為に生きてもいいよね。

僕は、言った。

思い切って、言ってみた。

「お願いします雛ちゃんと仲直りする手伝いをしてください！」

僕は椅子から飛び降りてみっともなく土下座をした。

こんな大きなお願いをするんだ。これくらいの誠意は見せなくちゃね。

「……は？」

僕のとんでもないお願いに驚く楠さん。

「あー、そのー、えーっと、佐藤君？ なんでも、なんでもいいんだよ？」

楠さんの声に顔を上げる僕。

机から顔を覗かせて土下座をする僕を見ていた楠さん。ポカンとしている。

「え、あ、うん……。だから、その、雛ちゃんと仲直りの手伝いをしてもらいたいなって……」

「……それ、土下座までするようなこと？」

「え？ あの、多分……。雛ちゃんと仲直りするには、きっと本当のことを全部しゃべらないといけないと思うから……。そうなったら楠さんに迷惑がかかるし……」

酷いよね、僕。こんなことを楠さんにさせようだなんて。最低だよ。

「……あー……っと……。色々と、覚悟を決めてきたんだけど、そんなことでいいの？」

「え？ 覚悟って？」

「いや、それは当然、付き合ってくださいとか、キスしてくださいとか、それ以上のえっちなお願いに備えての準備をしてきたんだけど」

それ以上のえっちなお願い？

……。

はあ？！

「え、ええええええ？！　そ、そそそんなお願いするわけないよ！　そんなことしたら楠さんに嫌われちゃうよ！」

「それ込みで覚悟を決めてきたのに、なんだか拍子抜け」

「ぼぼぼ僕はそんな相手の意思を無視してまでそんなことをしたいだなんて思わないよ！」

とんでもないことを言っていたね楠さんは！　僕の予想以上にとんでもないことを言っていたよ！

「……まあ、いいんだけど」

楠さんが呆れたように言って立ち上がり椅子を元に戻した。

「そうだよね。君はそう言う人間だったよ。とっても君らしいお願いだね、うん」

呆れているのに、どこか楽しそうだ。

「あの、その、……いいかな……？」

土下座をしたまま恐る恐る聞いてみる。

「言ったでしょ。何でもするって。あー、嫌だ嫌だ。とっても憂鬱なお願いだけど、仕方がないね。佐藤君がどうしてもって言うから、お願い聞いてあげましょ」

「う……。ごめんね……。迷惑をかけて……」

立ち上がって膝を払う。

「謝らなくていいよ。お礼だもん。これくらいはしてあげなくちゃ、佐藤君がかわいそうだ」

「ありがとう」

「お礼もいいよ。さ、善は急げ。さっそく今から仲直りしに行こうか。今日中に解決してみせるよ」

「え、そんなに、急がなくても、いいよ？ 明日でも、かまわないよ？」

「何言ってるの。お願いの有効期限は今日までだから。急がなきゃ」

そう言って、笑顔で僕の手を握ってくれた。

「え、その、楠さん?! この手は?!」

「急がなきゃいけないからね。君、足遅いでしょ？ 引っ張ってあげる」

「い、いやその、僕、一人で走れますから！」

「遠慮せずに」

笑顔を見せてくれたと思ったら、グイッと引っ張って急発進する。僕は慌ててカバンを掴んで引きずられないように足を動かした。

速い。本当に僕なんかとは比べ物にならないくらい速い。

運動神経抜群だ。

その上多分、今回のテストでも一番をとっちゃうのだろう。すごいや。

僕なんかとは比べ物にならないよ。

下駄箱で靴を履いたら、また手が引っ張られた。

そのまま校門まで全力疾走だ。

正面から吹いてくる風に楠さんの髪の毛が踊る。

後ろを走る僕の顔を撫でる綺麗な黒髪。

僕に吹いてくる風は甘い匂いを伴って全身を駆け抜けていく。

強く握れば散ってしまうのではないかと思うほど柔らかい手に引っ張られ僕は走る。

不安、焦り、心配、後悔、全てを置き去りにして期待や希望に向かって全力で走る。

夏の厳しい日差しをものともせず、一心不乱に今を駆け抜ける。

流れ出す汗も今は心地よい。

しっとりと汗ばんだ手を、楠さんが握り直した。

一度振り向いて、笑顔で僕を確認してくれる。

僕も笑顔を返した。

僕は今走っている。

どうしようもないくらい青春を突っ走っている。

憧れの人に手を引かれ、僕を待ち受けている幸せな未来に向かって突き進んでいる。

親友を失いかけている僕だけど、クラスメイトから冷たい目で見られている僕だけど、一人の男の子を奈落へ続く沼へ突き落してしまった僕だけだ。

この一瞬を切り取れば、間違いなく僕は世界で一番幸せだ。

ライトノベルの主人公にはなれないけれど、
ライトノベルの主人公より幸せだ。

作り物よりも、

非現実な世界よりも、

友達と過ごす現実が一番楽しいんだ。

（第一章終わり）

僕と秘密基地と本物の変質者

突然だけど、僕には学校での居場所が無い。

とある事件をきっかけに僕はクラス中から軽蔑されることになってしまい、教室にいるときはずっと肩身の狭い思いをすることになっている。

きっと僕はみんなから悪く言われていることだろう。

それくらいひどいことをしてしまったのだから。

僕はみんなから最低の人間だと思われているんだ。

けれど、全然辛くない。

だって僕には友達がいるから。

親友だっている。

だから毎日が楽しい。

迫害される日々を送っているけれど、友達がいる学校は楽しい以外に言いようがない。それ以外の言葉が見つからない。

なんと言っても、学校一の美少女と友達になれたのだから！ 昔仲の良かった可愛い幼馴染とも、今では親友と呼べる仲に戻ることができたし、順風満帆だよ！

そういうわけで、夏休みに突入している今、僕は充実した毎日をお過ごししていた。

学校行って文化祭の話し合いをしたり、家で友達と宿題をしたり、外で一緒に遊んだり。

最近は僕のことが大嫌いだったクラスメイトの男の子が家に遊びに来てくれるようになった。

僕と一緒に僕の好きなアニメを見てくれる。

その話で盛り上がったり、僕の幼馴染を交えて騒いだり。

毎日が楽しい。こんなに楽しい夏休みは初めてだ。

まだ夏休みは始まったばかりだけれど、今年の夏休みは楽しい物だって言い切れるよ！

七月三十一日。

今は七月最後の日の朝だ。

残念ながら今日の予定は何もない。少し残念だけど、明日はまた文化祭の話し合いをする予定だ。今日は以前からしたかった用事を済ませよう。一人じゃないとできないことだから丁度いい。

僕は階段を下りて居間へ向かう。

今日は少し遅く起きてしまったので、居間にはお姉ちゃん以外の家族が全員そろっていた。

朝の挨拶をして朝食の置かれた食卓についた。

テレビからは物騒なニュースが流れている。

『――で人が刺さされているのが発見され、刺された男性は今もなお意識が戻らない状態です。現場で二十歳前後の男が目撃されており、警察はこの男性が事件に関係しているものみて行方を――』

隣町で起きた怖いニュースだ。いつも思うけど隣町は尋常じゃないくらい物騒だよ。もしかして無法地帯なのではないかな……。

隣り合っているというのに、僕の住むところは極めて平和だ。

こういうことを言うのは不謹慎かもしれないけれど、正直に言えばこの町でよかったと思う。

隣町の人に失礼かもしれないね……。ごめんね隣町の人。

僕はあとから起きてきて暑苦しくまとわりついてくる姉を大人しく食卓につかせ、手早く身支度を済ませて厳しい陽が降り注いでいる外へ出た。

歪むアスファルトが地面の熱さを主張してくる。卵焼きが焼けるね。

僕はどれだけ暑かろうが夏が大好きだ。

青い空に浮かぶ入道雲。それを避けるように走る飛行機雲。幼いころはどちらにも大した興味を持っていなかったのに、今になって

その二つの雲がどれほどこの夏にふさわしいものなのかが分かるようになった。夏の風物詩、とは少し違うけれど、夏を感じさせてくれる情緒あふれるものだ。

流れ出す汗も気にせず空を見上げ続ける。

空って、こんなにも青かったつけ。

もっと薄かったような気がする。青というより水色に近かったような。

今僕の真上に広がる空はとても青い。

神様が青い絵の具をぶちまけてしまったのだろうか。もしそうだとしたら、とても素敵だ。

入道雲の向こうにいる神様に手を合わせてから僕は歩き出した。暑い。

でも、夏だ。

肩から下げたカバンから水筒を取り出す。

こまめな水分補給が大切だね。

出来るだけ天からそそぐ白い色の日差しを避けながら目的地へ向かう。

南中にはまだまだ時間がある。太陽が真上に来れば日陰がぐっと減ってしまう。その前に用事を済ませよう。

少しでも早足で、僕は山へ向かった。

山のふもとにたどり着く。山というより草木の生い茂る小高い丘と言った方がいいのかもしれないけれど、若い僕らには正真正銘の山だった。だからここは山なんだ。

鋭く茂る茅で肌を切らないように注意しながら僕は山登りを開始する。

全方位から聞こえてくるセミの声。合唱というには少しまとまりがないけれど、それでも耳に心地よいのは確かだ。木の間を歩くとびにセミの姿を探す。捕まえたりはしないが、何となく、見つけづらいセミたちを探すのが楽しかった。

夏と言えばセミだね。

でもセミだけじゃない。

地面に目を向ける。

夏草が生い茂っている。

名前は分からないけれど、夏にしか出会えない草は多いはず。

いつか名前を調べてみたいな。

夏草たちをかき分けて僕は山を登る。

セミの声に包まれながらあの日を思い出す。

あの頃も、泥だらけになりながら山を登ったな。

服に引っ付いたくっつき虫をお互いに取り合いながら訳もなく笑った。

大きなクワガタを見つけてうらやましがったり悔しがったりした。土の上に寝っころがって、青々と茂る木の葉の間から覗く夕焼け空を見上げて明日の予定を立てた。予定なんか立てなくてもいつも同じ場所に集まっていたけれど。

僕は今、その集合場所に向かっている。

幼馴染と作った秘密基地。

僕は今でも通っている。

もう誰も待つてはいないけど。

それでもそこは僕にとって大切な場所なんだ。

やっこのことでたどり着いた秘密基地。いや秘密テント。

四本、四角く突き立てた木の棒と、その対角線が交わる中心にもう一本長い棒を突き立て、そこにビニールシートを被せただけの簡単な秘密テント。

今ならもつと立派なものが作れるとは思う。それこそ秘密基地と呼べるようなちゃんとしたものが。

でも、幼い僕らにとっては、雨風が凌げるだけでそれはもう立派な『建物』だったんだ。

僕が守り抜いてきた秘密基地。

最近来る機会が減ってしまったから手入れをしていなかった。
この秘密基地は僕が死ぬまで守り続けるんだ。あの頃の思い出も
一緒に。

頃から変わらないその様相。

あたりを見てみれば、ひょっこりとあの日の僕らが顔を出してき
そうだ。

でもそんなことは無い。僕は大きくなってここに立っているのだ
から。

変わらずちやちなままのテント。

あの日をとどめている。

……でも、今日は少し様子が違った。

秘密基地は壊れていない。いつもの通り汚いままだ。いつもと違
うのは、地面。秘密基地の周辺の地面に妙なものを見つけてしまっ
た。

足跡が、あった。

真っ直ぐに僕らの秘密基地へ向かっている。

足跡はテントの入り口で途切れていた。

ああ。しばらく僕が来なかった間に、誰かが中に入ったんだ。僕
らの秘密基地なのに……。

少し心が穢されたような気分になる。

知らない人にここを使われたくはない。

まったく、どこの誰かは知らないけど、もう来ないでよね。

少しでも気分の悪いものを感じながら、秘密テントへ近づいた。

……。

「あれ？」

入り口で途切れているということは、まだ中にいるんじゃないか
な？ 秘密基地の前に靴が脱がれて置いていないから中に誰もいな
いと判断したけれど、帰ったのなら足跡は途切れていないはずだ。

もしかしたら、靴を履いたままの誰かが、このテントの中にいるのでは……。

突然怖くなった。

なんでこんなテントの中に潜んでいるの？ 家に帰ればいいのに。

その前に、いったい、誰が、ここにいるの？

とてつもない恐怖が僕を襲う。

恐怖に駆られながらも、僕は、秘密基地を守るために、ゆっくりと、秘密基地に、近づいて行った。

そして、あと三メートルというところで、誰かがテントの中で動いた。

「!?!」

怖くて動けなくなってしまった!

やっぱり誰かがいる!

誰?! 出来ればこの前みたいにクラスメイトであって!

これ以上近づくのは怖いので僕はこの場所から声をかけてみる。

「あ、あのー……」

セミの声にかき消されて聞こえないのか何の反応も見せない。もつと声を張らなきゃダメみたいだ。

「あのー! すみませーん!」

テントの中の誰かが大きく動いた。驚かせてしまったようだ。

扉状に切れ込みを入れたビニールシートが誰かの手によって開かれる。

ゆっくりと、のっそりと。

その誰かが顔を出した。

その顔は、懐かしくも恐ろしい、いや、恐ろしくも懐かしいあの顔だった。

「く、く、楠さん、なの?!」

白馬だった。

あの時見た、白馬のお面がテントから首を出して僕をじっと見つめていた。

ひと月前にここで会ったクラスメイトがかぶっていたお面。僕の人生を変えた馬。それと同じものが今僕の目の前にいる。これは、あの時のクラスメイトなのか……。でも、お面は無くしたはずだし……。

じっと僕を見ていた馬がテントから出てくる。

「あ、あ、あ」

その人は、クラスメイトなんかではなかった。

誰だか分からないけれど、顔は見えないけれど、間違いなく、大人の男性だ。

「うわあああああああああ!」

僕は恐ろしくなって全力で山を下りた。

何度も振り返る。

お面を被った男の人は追ってきていないようで、その姿はもう見えなくなっていた。

でも恐ろしい。

ひと月前より恐ろしい。

あれは、誰だ。

体の大きな男の人だ。

怖い。

こわい。

コワイ。

僕は息切れしながらも全力で家まで逃げ帰った。

帰り着いたときには汗まみれで酸欠で、この瞬間僕は世界で一番
這う這うの体という言葉が似合う人間になっていた。

ユウ…ってことが朝あつたんだ！

まりも…同じような話をひと月前にも聞いたよ。ネタ切れかい？

ユウ…本当なんだよ？！ 前の話とは別！ 本当に変な男の人がい
たんだ！

まりも…君は嘘をつかないからね。本当なんだろう。それで、その
馬の正体は突き止めたのかい？

ユウ…まさか！ 突き止められるわけないよ！ 襲われたら勝てな
いもん！

まりも…やってみなければわからないだろう？ 気にならないのか
い？

ユウ…気になるけど……。危ない気がするし……

まりも…まあ、そうだろうね。でもいいのかい？ 君の秘密基地が
奪われたままで

ユウ…よくないよ。取り返さなくっちゃ

まりも…危ないことはよしなよ。秘密基地なんかより、自分の体の方が大切だからね

ユウ…うん。ありがとう

僕はスカイペを閉じてパソコンの電源を落とした。

スカイペの相手のまりもさん。ここ最近話していなかったのが嫌われてしまったのではないかと思っていたが、そんなことも無いようなので安心した。

とってもいい人だ。

名前も知らないし、当然顔も知らないけれど。

僕はこのまりもさんに惹かれていた。

あってみたい。

あって、みんなに紹介したい。

こんなにいい人なんかもん。みんなに知ってもらいたいよ。

せっかくの夏休みだし、今度聞いてみよう。

勇気を出すって決めたんだ。まりもさんにも積極的に接してみよう。

楽しみだな。

朝の通学路

八月一日。

勝手なイメージだけど、僕は八月からが夏休みだと考えている。

七月二十日からの十日間はロスタイムのようなもので気分としてはまだ夏休みという感じがしない。

でも今日八月一日からは夏休みがとうとう始まってしまったなど実感が湧く。

今日から少しずつ終わりに近づいていく夏休み。

日を追うごとに残念な気分が加速していく。

でも、学校に行くのも今は苦痛ではないので多分夏休みの終わりで悲しくなることは無いだろう。

学校は楽しいもんね。

さて。

その楽しい学校へ行こうかな。

今日は文化祭の話し合いだ。僕らのクラスでの文化祭の出し物、喫茶店について今週中に内容を詰めていく予定だ。

来週からは少しずつクラスのみんなで準備を始めて行くのだと先生は張り切っている。でも喫茶店だから準備するようなことはあまりないのだけれども。

まあ、とにかく。

朝から学校で話し合い。みんなに会えるのが楽しみだ。

僕は意気揚々と家を出た。

「よう」

家を出てすぐに声をかけられた。

肩にかかる位の金髪セミロングの髪を暑い風に遊ばせている美少女が制服に身を包み笑顔で佇んでいた。

僕の友達だ。

「おはよう。待っててくれたの？」

「まあな。一緒に行こうぜ」

「うん」

僕らのクラスの副委員長である有野雛ちゃん。僕の幼馴染で親友なのです。

つい最近その関係が崩壊寸前まで行くという危機に陥ったけれども無事に修復することができた。本当によかった。

危ないところだったよ。

雛ちゃんと一緒に昼ほどではないがそれでも暑い朝の通学路を並んで歩く。とても幸せなことだと思う。

「面倒くせえなあ」

嫌そうな顔の雛ちゃんが隣で言う。

「話し合いが面倒くさいの？ どうして？」

「面倒くせえだろ。そんなことよりどっかに遊びに行きたくねえか？」

「話し合いが終わってからでも十分時間はあるよ？」

「んなの待ってられねーよ。このままどっか行こうぜ」

「だ、ダメだよ。クラスの皆の為にちゃんと話し合いをしなくちゃ」

「まじめかお前は。いいじゃねえか、優大のことを悪く言う奴らの事なんか。ほっとけ」

「で、でも、僕、副委員長だし……、雛ちゃんも、副委員長だし……」

「大して関係ないんじゃないの」

「関係大ありだよ……」

面倒くさがっているように見えるけど、僕は知っている。雛ちゃんはこの言いながらもきちんとやり遂げてしまう責任感の強い人なんだ。僕は知っているよ。僕を待ってくれて一緒に学校へ行っていることがその証拠だ。

こんな感じで楽しくおしゃべりしながら学校へ向かう。
楽しいな。

この平和がいつまでも続いて行けばいいのに。

……なんだかこのセリフはフラグな気がするよ。嫌なことなんて起きないよね。

と思った矢先に。

「……最悪……」

雛ちゃんが道の先を見てものすごく嫌そうな顔を作った。何事だろうかと僕も見てみる。

「あ」

道の先に、腰にまで届こうかという綺麗な黒髪の後ろ姿が見えた。

僕らと同じ学校の制服を着ている。

「なあ、遠回りしようぜ」

反転して、僕の手を掴んで道を引き返そうとする雛ちゃん。

「え、え。でも、楠さん僕たちを待っていてくれるんだから、このまま行かなきゃ……」

「私は待ってねえ。あいつだって私は待ってない。だから迂回したほうがいい」

「で、でも……」

一生懸命僕を引っ張って別の道を行こうとする雛ちゃんと、足を動かすことをためらっている僕。

「いいからお前は私についてくればいいんだよ。あいつに関わると優大は不幸になる。そんなの嫌だろ」

「不幸になんてならないよ。楠さんは友達だもん」

「何言ってるんだ！ お前はあいつのせいでクラス中から冷たい目で見られるようになったんだぞ！ これからも不幸な目に遭うに決まってる！」

「その、でも、雛ちゃんと仲直りする手伝いをしてもらったし……」

「それだって若菜が原因だった喧嘩なんだから手伝って当然。感謝

するのは間違ってたんだろ」

「え、あれは、僕が悪いと……」

「何言ってるんだよお前は！ お前は一切悪くねえだろ！ あいつが無理やり優大にキスなんかしたから……！ 絶対に許さねえ！」

「あ、あまり大きな声でそう言うこと言わないでくれたら嬉しいな……」

恥ずかしいよ。

「私は三番目かよ！」

「え？ 何が？」

「なんでもねえよ！ いいから行くぞ！」

ぐいぐいと引っ張る雛ちゃん。僕はやっぱり遠回りするのが躊躇われる。このまま真っ直ぐ進んだ方がいいと思うよ……。

などと引っ張ったり抵抗したりなどをしていると、僕たちを待っていてくれる黒髪の女の子が僕たちの姿に気づいたようでパタパタと近づいてくる音が聞こえる。音がどんどん近づいてきて僕らのすぐそばで止まった。

「おはよう、二人とも」

「……ふん」

雛ちゃんが遠回りをあきらめて僕の手を離した。僕は振り返り挨拶

拶の主を確認する。

そこに立っていたのは究極に完成された美少女、楠若菜さんだった。

暑い中立っていたというのに汗一つ掻いていない爽やかなその笑顔。心をきゅっと握りつぶされたような苦しさに意識が飛びかける声をかけられただけでドキドキする。……色んな意味で。

「おはよう、楠さん」

「おはよう、佐藤君。おはよう、有野さん？」

「……ふん」

挨拶をされた雛ちゃんの不機嫌そうに顔をそらしただけで挨拶を返すことはしなかった。

無視された楠さんが困ったような顔で言う。

「あれ？ 日本語忘れちゃったの？ 『おはよう』はね、日本の朝の挨拶なんだよ？」

う。さっそく喧嘩が始まりそうだ。

「知ってるわ！ バカにすんじゃないええ！」

予想通り雛ちゃんが青筋を浮かべて怒る。それを前にして涼しい顔の楠さん。

「あ、ごめんね。髪の毛を脱色したときに知識まで落としちゃったのかと思った」

「あはははは！ 相変わらずふざけた奴だなあ！」

「ふざけた髪をした人に言われたくないよ」

「……」

「雛ちゃん！ 無言で殴ろうとしないで！」

危ないよこの二人は！

必死に抑える僕とそれを振り払おうとする雛ちゃんを優雅に眺めている楠さん。

楠さんがにっこりと笑顔でまた言った。

「おはよう、有野さん」

「……おはよう……」

雛ちゃんの体から力が抜けた。

ふ、ふう……。どうなることかと思った。

少し前から、雛ちゃんと楠さんの仲がとても悪い。僕のせいなのだけれども、これがどうにも僕が解決することは不可能なようでも困っているのだ。

僕がクラスのみんなから冷たい目で見られるようになったのは楠さんのせいだと雛ちゃんは言う。僕からしてみれば、それは違うけれど、雛ちゃんはそう信じて聞かないので楠さんに対してずっと不機嫌な態度を取っているというわけだ。楠さんも雛ちゃんの不機嫌な態度に不機嫌に応えるという悪循環。とてもよろしくないよ。なんとか仲良くしてもらいたいと考えているけれど、僕のようなどうしようもない人間が解決できる問題ではないみたいだ……。自分の不甲斐なさが情けない。

「じゃあ、行こうか佐藤君」

「え、あ、うん」

歩き出す楠さんを僕は追う。

「おい優大！　なんで若菜の言うことは聞いて私の言うことは聞かないんだっ！」

雛ちゃんが怒りながら追いかけてきて僕の隣に並んだ。

「え、あの、こっちから行った方が学校に近いから……」

「……まあ、そりゃそうだけど」

納得してくれたみたいだ。よかった。

「いいよ有野さん。さつき帰ろうとしていたんでしょ？　あとは私達二人で話をまとめておくから気にせず帰っても問題ないよ」

少し前を歩く楠さんが進行方向を向いたまま言った。

「誰が帰るか。若菜と優大を二人きりにしたら襲われちゃうじゃねえか」

「襲わないよ。なんで私が友達を襲うの」

心外だという顔で雛ちゃんを見る楠さん。

「襲うだろうがこのキス魔、痴女、変態」

「……失礼なこと言うなあ……」

「本当の事だろ」

……仲良くしてほしいなあ。

さっきまでの楽しい通学路は幻だったみたいだよ。現実には厳しいね。

夏休みの教室は特別な空間

「ああ、それ若菜だ」

夏休みの静かな教室。

日の照りつけるグラウンドから野球部の声が飛んできく。

その声をBGMに僕は三人で文化祭に向けての会議をしている。

僕と、楠さんと、雛ちゃんの三人だ。楠さんが学級委員長で僕と雛ちゃんが副委員長。僕なんかが副委員長だなんてみんなに申し訳ない……。でもできる事はやろう。出来るだけ自主的にね。

この三人での会議の途中、昨日の馬との出来事を報告した僕。

「優大が若菜の秘密を見たとき若菜馬被ってたんだろ。なら今回の変質者も、馬被ってるから若菜だ」

「私は昨日山へ行ってないし、そもそも馬の被り物は紛失したから持っていない。あ、さては有野さんが私に罪を着せる為に秘密基地で佐藤君を待ち伏せしていたんでしょう。やりそう」

「やらねえよ」

僕しか知らなかった楠さんの秘密。そのせいで色々と事件が起きたのだが無事に解決。僕が嘘をついてみんなをだまして、結果僕がみんなから嫌われるというハッピーエンドですべての問題にけりがついた。しかし雛ちゃんにも嫌われるというのはかなり心に来るものがあつたので、僕は楠さんをお願いして雛ちゃんにだけ真実を伝えることにした。その結果雛ちゃんと仲直りすることができた。けれど楠さんと雛ちゃんの間にはものすごく深い溝ができてしまったのだ。ごめんね二人とも。

そう言うわけで雛ちゃんは楠さんのストレス発散の件を知っている。

「つか、馬被って暴れるとかどこの野生児だよって話だな。優大、そういうわけわかんない奴は危ないぞ、あまり近づくなよ」

「あの――」

「暴力を振るってくる方が野生児と呼ぶにふさわしいと思うんだけど佐藤君はどう思う？」

「あの――」

「四六時中欲情している奴に言われたくねえよなあ？」

「えっと――」

「今のは自分のこと言ってたのかな。佐藤君大丈夫？　いつも力づくで何かされてない？」

「えっと――」

「ねつ造はよくねえよな。言い負かされそうだからって適当なこと言い出すのって、だせえよな」

「その――」

「力づくはねつ造じゃないよね。だって実際佐藤君殴られて気を失ったもんね。もう傷は治った？　佐藤君」

「その――」

とりあえず僕を介して会話をするのをやめていただきたいです……。

「そ、そんなことより、馬だよ、馬。馬が秘密基地にいたんだ。危ないね」

無理やり軌道修正だ。これくらいしなくちゃ話が進まないよ。

「変質者に私達の秘密基地が穢されるのは気分悪いな。何とか追いつ出すか」

「相手は大人の男の人だよ。危ないよ。雛ちゃんが怪我したら大変だよ」

「私の心配してくれんのか。優しいな優大は」

にっこりと笑顔を僕に向けてくれた。なんだか照れるね……。

「多分その変質者がかぶっているのは私の馬だと思う」

楠さんが何やら考え込む仕草をみせ、

「取り返したいな……。ちょっと行ってみようかな」

とんでもないことを言いだした。

「相手は男の人だよ。危ないよ。楠さんが怪我したら大変だよ」

「私の心配してくれるんだ。優しいね佐藤君は」

にっこりと笑顔を僕に向けてくれた。なんだか照れるね……。

「なんだよ優大っ！ 若菜の心配なんかしなくてもいいだろうっ！」

照れる僕に雛ちゃんがどなる。

「え、そ、そんなことできないよ。僕、危ないから気を付けてねっ
ていうことで変質者のことを教えたんだもん。二人とも行くことは
無いだろうけど気を付けてね」

僕らは何かとあそこでの思い出がある。楠さんと雛ちゃんがあそ
こへ行かないとも限らないから教えておいてあげないとね。

「まあ私と優大はあそこに行く理由があるからな。私たちの秘密基
地だからな。私達だけの秘密基地だからな。私と優大の秘密基地
からな。若菜は理由ねえから安心だな！」

なんだか妙に秘密基地を強調していたね。そんなに秘密基地が好
きなんだ。嬉しいな。

「何言ってるの？ 私にとってもあのあたりは思い出の場所になっ
たんだから行くことはあるよ」

まあ確かに楠さんの人生が変わり始めたのはあそこからだもんね。
楠さんにとっても思い出の場所だということが雛ちゃんにとつて
は面白くないようだ。

「何が思い出の場所だ！ 無理やり優大にちゅーしやがって……！」

思い出なんて綺麗な言い方すんな!」

あ、あまり、思い出させないでほしい……。

楠さんが怒る雛ちゃんを全く意に介した様子もなくつぶやいた。

「でも、実際問題私あのあたりに住んでるんだよね。家の近くに変質者が出るとか危なすぎ」

「え？ 楠さんあのあたりに住んでいるの？ 近所だったら、僕らと小学校中学校が一緒のはずだけど……」

「私引っ越してきたんだもん。高校から」

「あ、そうだったの？」

初耳だ。でも、確かに楠さんと同じ中学の人って聞いたことないや。

「まだ四か月ちょっとくらいかな。私はね。そういうわけでご近所さんだから仲良くしてね」

『私は』ってどういうことだろう。他の家族は違うのかな？ と
気になり聞こうとしたら、

「誰が仲良くするか!」

僕ではなく雛ちゃんが即答した。な、仲良くしようよ……。

「有野さんには言ってないよ。その前に有野さんの家ってどこ？
何星雲？」

「そんな遠路はるばる来ねえよ！　優大と幼馴染なんだから優大の家と近いに決まってんだろう！」

「知ってるけど」

「ははははは。優大、帰ろうか」

にこやかにブチ切れて立ち上がり、僕を引っ張り帰ろうとする雛ちゃん。

「ひ、雛ちゃん。落ち着いて。まだ文化祭についての話してないよ」

僕は立ち上がることなく雛ちゃんをなだめようとする。

「いいじゃねえか。もうどうせ話すことなんかねーって。あれだろ？　優大の提案した『女子高生が握るおはぎ喫茶』だろ？　それだけでインパクトあるんだからこれ以上凝っても仕方ねえだろ。話すことはもうない」

うん、僕はそんな提案してないからね？　誰かに聞かれて勘違いされるのは嫌だよ？　僕が言ったのは和菓子喫茶だからね？　本当に大きな声で僕が提案したとかいうのやめてね？

帰ろうとする雛ちゃんを一旦席につかせて、場を落ち着かせる。

場が落ち着いたところで楠さん。

「有野さんの言う通り話し合うことはもうないよね。メニューだっってもう決めちゃったし、シフトはみんながいなくちゃ話し合えないし。飾り付けだってそんな豪華なものを用意するでもないから、うちのクラスは当日が忙しくなるだけでこんなに前から準備に取り掛

かる必要はないよね。夏休みから準備を始めようって意気込んでいる先生には悪いけど、夏休みの準備は無くてもいいと思う」

「だな」

楠さんの言葉に雛ちゃんが頷いた。

別に何でもかんでも喧嘩腰で否定しているというわけではないんだ。正しいことや理解できることを言えばお互いちゃんとそれを認めるんだ。だからちゃんと話せば喧嘩になることは少ないと思うんだ。

「なあ」

雛ちゃんは何か気になることがあるようだ。

「今若菜がシフトって言ったけど、名前が『女子高生が握るおはぎ喫茶』ってんなら女子が裏で男子が表になんのか？」

「多分そうなるんじゃないかな。裏って言っても、おはぎを握るところも公開しながらになると思うけどね。それがどうかしたの？」

ほら、喧嘩にならずに仲良く話しているよ。

「優大は作る方がいいんじゃないかなって思ってたさ。料理得意じゃん」

「え？ でも僕男だから店のコンセプトに合わないよ？」

僕が握ったのなんか誰も食べたくないよ。

しかし楠さんは雛ちゃんの意見に賛同らしく笑顔で答えた。

「私も料理が得意だったら裏の方がいいと思うな。お店の名前を偽りの物にしたいくないというのなら佐藤君が女装をするということではいい決定。シフトの割り当てはみんながいるときにしよう。何時間交代がとかね。あと作っている姿を公開するのなら人もちゃんと配分しないかね。女子高生が握るおはぎ※ただし美少女に限る、だからね」

「お前失礼なこと言うな……。ならお前がずっと握ってるよ」

「あら、嬉しいこと言ってくれるね。まさかあの有野さんが私を美少女と言ってくれるなんて。隕石でも降ってくるのかな」

「降るかバカ」

楽しげに会話をしているけれど、僕は楽しくない。

「あの、ちょっと待ってね、二人とも。今僕の意見を聞かずに僕が女装することが決定しちゃったみたいだよ。これって、とっても、不自然だよね」

「んじゃあ今日の会議はこれで終わりか？」

「終わりでいいよ。特に準備はいりませんって先生に伝えておく」

「あー、なんか学校まで来た意味なかったなー。嫌な奴と顔合わせに来ただけじゃねえか」

「家に鏡が無いってこと？」

「お前の家こそ鏡ねえのか？ 毎日見てれば私が誰の事言ってるか分かるはずだろ」

「そのー、僕の女装の件は……」

「私は一応女の子だから毎日鏡は見ているよ」

「私も一応女だから毎日鏡見てるわ」

「またまた。嘘が下手なんだから」

「お前は嫌味がうまいな」

「ありがと」

「そ、その……」

「なんだよ優大。何かあったのか」

やっと僕の存在に気づいてくれた。

「あ、あのね、さっきの事なんだけど……」

「ああ、変質者の件な。何とかしとく」

「え?! あ、危ないよ！ ダメだよ、一人で何とかしようとしたら！」

「私なら大丈夫だって」

「そうだよ。有野さんなら大丈夫だよ」

「なんでお前が言うんだよ」

「心の底からそう思うからだけど。じゃあ、頑張ってね有野さん」

「言われなくてもがんばるわ」

う、やる気満々だよ……。危ないって言ってるのに。
せめて僕らも誰か力の強い人がついてきてくれれば。

「あ、そうだよ。國人君と一緒に行けばいいんじゃないかな」

この一帯で喧嘩最強と恐れられていた國人君なら何とかしてくれるよね。

「くにひとつて誰？」

楠さんは有野さんのお兄ちゃんのことを知らないらしい。そうだよね、引っ越してきたんだもん。知らなくて当然だよ。

「國人君は雛ちゃんのお兄さんだよ。喧嘩が強いことで有名だったんだ」

「へー。兄妹そっくりなんだね」

「似てねえよ！ ふざけんな！」

うん、確かに似てないよ。昔は似ていたけれど……。

「駄目かな、雛ちゃん。國人君にお願いできないかな」

「あーいやー……。あいつは多分山登れねえよ」

「……そう、なのかな……」

体が重いもんね……。

「でもま、一応聞いてみるか。今日家に来いよ」

「うん」

一緒をお願いしてみよう。

「佐藤君、有野さんの家に行くんだ」

「え？ あ、うん」

「ふーん」

どうしたのかな。何かきになることでもあるのかな？

「なんだなんだ？ 若菜、お前もしかして羨ましいのか？」

雛ちゃんがとっても楽しそうな笑顔を見せている。

楠さんは雛ちゃんの家に行く僕を羨ましがっているのかな？

ちゃんの家に行きたいってことだね。そうだね。

雛

「別に羨ましくないから」

ツンと顔をそむけた。

「ふ〜ん。そっかあ〜」

それを見て満足げな雛ちゃん。

楠さんも誘った方がいいのかな……。。

結局この後僕は楠さんを誘うことができなかった。みんなに仲良くしてもらいたいと考えているのに、行動できないなんて情けないよ……。

ボーイミーツおっさん

「ええー。なんで暑い中俺が秘密基地なんかに行かなきゃいけないの」

僕と雛ちゃんは、学校からすぐに國人君の部屋にやってきて國人君をお願いしたけれど、一秒も悩むことなく断られてしまった。

驚くほど早い拒否に僕は呆然としてしまった。

その理由は暑いから。

暑いから、秘密基地『なんかに』は行かない。

國人君にとって秘密基地とはその程度の物だったのだ。

「おいデブ。お前痩せろ。ダイエットだ、山に登れ」

「雛タン怖い……。優大タン、外で遊ぶより俺と一緒に添い寝しながら将来の事でも話し合おうよ」

「……うん……」

「え?！ まじで?！」

國人君の喜ぶ声に、先ほどまで飛ばされていた意識が現実に取り戻される。

「え? あ、ゴメン。聞いてなかった」

「どうした優大。なんか元気無くなったな。汗臭いからか? この部屋が汗臭いから元気無くなっちゃったのか?」

僕を心配してくれる雛ちゃん。優しいね。

「う、ううん。そんな、臭いは気にならないよ。それに僕は普通だよ？ 元気あるよ」

「何言ってるんだよ。私は優大の事なら何でも分かる。その私が元気ないって言ってるんだ。お前は元気ない」

「……うん……」

「優大タン。なんなら、俺の胸に飛び込んで来てもいいナリよ」

「……」

「無視されたにゃあ！ 優大タン俺のことが嫌いの？！」

「……」

「……本格的に無視されています……。悲しいです雛ちゃん。僕を慰めて」

「死ねデブ。……優大、本当にどうしたんだ？ あのデブが目障りなのか？ 目障りだから元気無くなっちゃったのか？」

「……そんなことは無いけど……。その、僕、もう帰るね……」

「え、ちょっと待ってよ優大タン！ もっと楽しいお話しようよ！」

「その、ごめんね。僕用事があるから……」

「優大たああああん！俺を置いて行かないでよおおおん！」

「黙れデブ！……優大、大丈夫か？」

「うん。何も心配することは無いよ。ただちよつと、用事を思い出ただけだから」

「……そうか。なら仕方ねえな」

たぶん、雛ちゃんは僕に何も用事がないと気づいている。
でも仕方がないと僕を送り出してくれる。

「うん」

「何かあったら私に言えよ」

「うん」

「優大たああああん！」

「うるせえよデブ！」

家に帰ってきて、部屋のベッドの上に寝転がる。

國人君も、あの秘密基地のことを大切に思ってくれているのかと思っていた。思い出を大切にしてくれているのだと思っていた。

全くそんなことは無かった。

かなりショックだ。

もしかしたら雛ちゃんも秘密基地の事なんかどうでもいいのかもしれない。思い出なんて、過去の出来事でしかないのかもしれない。あの頃に執着しているのは僕だけなのかもしれない。それは少し、いや、ものすごく悲しい。

あの頃に帰りたいとは思わないけれど、あの頃はとても素晴らしき時間だったはずだ。

忘れたくても忘れられない、それどころか年を取るにつれて輝きを増していく時間だったはず。それなのに、國人君にとっては『秘密基地なんか』と言ってしまえるほどに掠れてしまっている。青空の下元気に走り回っていたあの頃。知らない町へ行くこと冒険だったあの頃。道端で見つけた木の棒一つで勇者になれたあの頃。パレットに乗っているのは毎日違う色だった。

心覚えに描き込んだ極彩色の時代を大切にしていきたいと思っっているのは僕だけなのか。

ひょっとしたら僕は過去にとらわれすぎているのかもしれない。

大人にならなければいけないのかもしれない。

過去を肩からおろさねばいけない時が来たのかもしれない。

勇気を出して自分の人生を変えてやろうと思っている僕だけど、そのためには全てを切り捨てなければいけないのかもしれない。

自分の部屋のベッドの上で目を瞑る。

あの頃の思い出がよみがえってくる。夏のベッドの上で、目を瞑るだけで。

ただそれだけで。

……やっぱり、忘れられないよ。忘れたらダメなんだよ。

あの頃からは色々と変わってしまったけれど、変わることを世界に強要されているのかもしれないけれど、この世に変わらないものなんてないのかもしれないけれど、僕自身も変わろうとしているけれど。

思い出も、秘密基地も、失ってはいけない大切なものだ。

目をあけて体を起こす。よし。僕だけでも何とかしよう。

気合を入れてベッドから飛び降りる。

よし、行くぞ！

ぶーぶー！

「うわっ！　びっくりした！」

机の上で僕の携帯電話が唸っている。誰かからのメールみたいだ。びっくりしたー。

誰だろうかと携帯を開く。

「あ、雛ちゃんだ」

『お前秘密基地に行っていないよな？』

今から行こうとしていたよ。でも、とりあえず、返すメールはこんな感じだ。

『部屋にいるよ。どうしたの？』

きつと、僕が一人で秘密基地へ行ったのではないかと心配してくれているんだ。心配は掛けたくないし、雛ちゃんを危ない目に遭わせるわけにはいかない。一人で行こう。返したメールに嘘は書いてないから、行ったのがばれても怒られないよね。メールが返ってきた。

『別になんでもない』

心配してくれて、本当にうれしい。

僕だけが秘密基地を大切に思っているのだとしても、僕が秘密基地を取り返すのは僕だけの為じゃないんだ。

「行こう」

僕は魔王討伐の為に旅立つ勇者の気分で家を出た。
家の前で見上げた空は、灰色だった。

そして僕は秘密基地にたどり着いた。正確には秘密基地が見えるところ、だ。

少し先に見える秘密基地。誰かの足がテントから飛び出ている。
顔は見えないけれど、きっと昨日の人だろう。

どうしよう。怖いよ。

ここまで来たけれど、どうやって秘密基地を取り返せばいいのだろう。

力ずくか、話し合いか。

力では勝てないし、話し合いをするにしてもなんだか怖いし……。でも、結局僕が選べる選択肢は話し合いしかないんだよね……。だったら、ここでこそそそする必要はない。話し合って早く返してもらおう。

「よし……」

僕は出来るだけ音をたてないようにゆっくりと秘密基地に近づいた。

あと三メートルといったところまで近づくことに成功。男の人はまだ僕に気づいていない。この辺りから、声をかけてみよう。

「……あ——……」

……少し小さすぎたね。もう少し聞こえるように言おう。

「あ、あのー……」

ピクンとテントから投げ出されている男の人の足が反応した。テントの中でごそごそと動き這い出てくる。

「……」

また馬を被っていた。

「そ、そ、そ、その……あの……」

「んー？ ああ、昨日の少年か」

狭い視界で僕を捉えるためなのか、妙にぎこちない首の動きを見せる。怖い……。

「なにか用か。おやじ狩りなら他を当たってくれ」

しっしと犬を払うように手を動かす。

「そ、そんなこと、しません……！ その、あの……」

こ、怖い……。普通に怖い……。

僕の恐怖が馬の人に伝わってしまったのか、馬の人が両手を挙げて無抵抗をアピールする。

「そう怯えなさんな、と言っても住所不定無職の人間を信用しろとも言えないな。なら何と言おう。そうだ。間をとろう。怯えなくてもいいけど信用はするなよ」

「は、はぁ」

なんだか悪い人ではなさそうな気がしてきた。馬を被っているけれど。

「それで少年。一体俺に何の用だ。ここは俺が見つけた家だ。渡さないからな」

そんな！ それは違うよ！

「ち、ち、違います！ そっ、こは……僕たちの……秘密基地です……！」

少しだけ、語尾が強くなってしまった。

「ああ、そうだったのか。それは悪い事をした。無断で使って悪かった。この通り、謝るよ」

と言って、僕の言葉を疑うことも無くあっさりと頭を下げてきた。なんだか、少し拍子抜けだ。

どうやら、この人はものすごく良い人みたいだ。

「それならばこんなお面被って相手するのは失礼か」

馬のお面に手をかけいとも簡単に脱ぎ去った。顔を隠したがっているものとは思い違っていたけれど。

馬の下にあった顔は口の周りに無精ヒゲを生やした渋いダンディな男の人。三十後半から四十前半と言ったところかな。渋いイケメンだ。ワイルドな感じに僕は少し憧れる。

そのおじさんが馬を持ったまま悲しそうに言った。

「少年。何を隠そうこう見えてこの俺は住む家がないホームレスという奴なんだ」

「は、はあ」

「少年としては俺のような浮浪者に大切な秘密基地を使わせたくはないだろうが、なにぶん家が無いものでね。ここを追いつ出されたら干からびて死んじまう。何とかここを使わせてもらおうわけにはいかねえかな」

「え、えっと、その、そう言う理由があるのなら、仕方がないと思います」

「ああ、物わकारいのいい少年だ。助かる」

お面に手を突っ込みパカパカと馬の口を動かす男の人。

そうだ、お面を返してもらわなきゃ。楠さんのだもんね。

「あの、その、そのお面、僕の友達のなんです……。返していただくわけにはいかないでしょうか」

「そうだったんか。なら返す。ほら」

馬を放り投げ僕に渡してくれた。やっぱりいい人だ。

「ありがとうございます」

「なに、お礼を言われるようなことじゃない。しかし、なんで敬語なんだ？ 俺みたいな人間には敬意を払う必要はないだろ」

「え、で、でも、その、年上ですし……」

「年上？ 俺がいつ年上って言った？」

「え？ あの、見た目で……」

どこからどう見ても三十は越えている。老けているからとか、そういうのじゃなくて、オーラというか、なんというか……。でもおじさんは認めない。

「なんて失礼な。俺も君と同じ中学生かもしれないだろ」

「あの……僕は、高校生です……」

間違える方も失礼だよ……。

「……。俺も高校生かもしれないだろ」

間違えたのを無かったことにしたね。

「俺と少年が同級生の可能性はまだ否定できないだろ？ それどころか年下の可能性もある。敬語なんて使う必要ねえだろ」

でも、それを言うのなら年上の可能性もあるのでは……。話が長くなりそうなので言わないけれど。

「どうやらこの人は僕に敬語を使って欲しくないらしい。なら使わないで接しよう。」

「僕はわかりましたという意味を込めて一度うなずいた。おじさんも満足そうに歯を見せて笑顔を作った。」

「にしても少年。少年は高校生だというのにまだ秘密基地で遊んだりしているのか。今は夏休みだろ、もっと高校生夏の遊び方しよ
ぜ」

「あの、僕はここ好きですから」

「敬語止めようぜ」

「あ、はい、じゃなくて、うん」

「なんだか少しぎこちないね……。」

「年上の人、それも多分僕の二倍以上も生きている人相手に敬語を使わないなんて僕嫌だなあ。」

「ん？」

「男の人が突然短く声をだし空を見上げた。」

「あの、どうかしたんですか？　じゃなくて、どうかしたの……？」

「やっぱり嫌だなあ。でもいつか慣れるよね。」

「雨が降ってきたな」

「え？」

天を仰ぐ男の人を真似て僕も空を見上げる。
緑色の傘を抜けて僕の顔に何粒か当たる。

「少年。立ち話もなんだ。家の中に入ろうぜ」

そう言って、おじさんが秘密テントの中に戻って行った。

まるで自分の家のように言っているけれど、そこは僕たちの秘密基地なんだからね……。

狭いテントに僕とおじさんが肩を寄せ合って入っている。僕は体育座りをして、おじさんは寝ころがって。

狭いよ。

雨はまだ降っているかどうか分からない程度のもの。走って帰れば濡れないで済むかもしれないけれど、おじさんがテントに招いてくれたのでそれを無視するわけにはいかなかった。

「なかなか居心地の悪いテントだな」

なら出て行ってくれてもいいのだけれど……。

「俺ならソファを置くね」

「そんなスペース無いよ……」

僕は小柄だけどおじさんはそうでもないので、二人でテントの中はいっぱいだ。僕は入り口ギリギリにいたので、雨が本格的に降りだしたら多分濡れてしまうね、きっと。

見ず知らずのおじさんと秘密基地で過ごす時間。とても居心地が悪い。

いい人だとは思うけれど、まだ少しだけ怖い。この人のことは何も知らないのだから。

でもそれ以上に無言がづらい。お互いの事をまだ何も知らないので話すことが無い。気まずいよ。

「……雨の匂いにする」

だから、何となく感じたことをそのまま言葉にして発してみた。すると、おじさんがそれに反応してくれた。

「ああそうだな。何の匂いか知ってるか？」

「えっと、昔誰かに聞いた気がしま………する。確か、アスファルトの匂いだって」

「いや違うよ」

すぐに否定された。

「え？　なら、何の匂い？」

驚き聞いてみる。

「これはジオスミンの匂いさ。まあ、カビの匂い。雨の匂いでもアスファルトの匂いでもなくカビの匂い。そう考えたら臭くてたまんねえな」

か、カビ……。

「……僕、何気にショックを受けてるよ……。アスファルトの匂いて聞いたときもそれなりの衝撃を受けたけど、今はそれ以上の衝撃だよ……」

カビなんだ……。

「雨の匂いだと思っていた物がアスファルトの匂いだって教えられて、アスファルトの匂いだと思って感心していたら今度はカビの匂いだと真実を教えられて……。こうやって成長していくのかな……」

真実を知って成長していくんだね。

「まだいいじゃねえか。昔の人間は虹の匂いだって思ってたんだからな。虹の匂いだと思っていたのに実はカビだと知らされるよりはまだ少年はマシだっただろ」

「そうだね。昔の人は虹の匂いだと思っていたんだ……。でもそれが実はカビ……。色々と謎が解明されるのってすごいね」

「すごくなにかねえよ」

「え？」

「すごくないのかな。色々なものが解明されていくのは凄いことだと思ったのに。」

「さっき少年が成長していくのかなとか言ってたけど、『知ること』は本当に成長なのか？」

「えっと……？ その、よく分からない……かも……」

成長じゃないのかな。

「子供の時に感じ取れていた物が大人になったら見えなくなっちゃうってことさ。心の退化って言うてもいいんじゃないかねえのか？」

大人になったら見えなくなるものがあるんだ。それは一体なんだろうと、首をかしげている僕におじさんが教えてくれた。

「暑い夏が異常に楽しいこととか、夕立が無駄に楽しいこととか、大人になったら分からなくなるもんさ。暑いことはただ単に不快になるだけと知って、夕立は突然濡れてしまうだけの迷惑なものだと知る。どっちもうつとおしいものに変わっちゃまったよ。それを成長と言ってもいいのかどうか分かんねえけど、できることなら俺は子供のままでいたかったなあ」

……大人になったら、楽しみが減っていくんだ……。

今の僕はまだ暑い夏が楽しみだし、大雨も少しだけわくわくする。まだ大人になれないのだろう。僕もこの感覚をなくしたいとは思わない。でも大きくなるにつれてわからなくなっていくのかな。

「トンボを素手で捕まえられなくなったのがショックでかかったな。昔は結構簡単に素手で捕れてたはずなのに。体が大きくなっちゃまってトンボに警戒されるようになったのかあ？」

「と、トンボは、僕素手で捕まえたことないや。おじさん凄いなだね」

「誰がおじさんだ誰が。俺が高校生だという可能性はまだあるだろ

うが。おじさんいうな」

「え、で、でも、ならなんて呼んだら」

「名前で呼べばいいだろ。俺の名前は馬太郎。馬山馬太郎さ」

絶対に嘘だ。

でも、証拠もなく疑うのはダメだよ……。とりあえず、馬山さんという認識で行こう。

自己紹介をされたのだから、僕も自己紹介をしなくちゃね。

「あの、僕の名前は――」

自己紹介をしようとしたところを馬山さんに止められた。

「いやいや、こんな浮浪者に名乗ることは無いだろ。少年は少年でいいさ」

「で、でも……」

「良いのさ。別に仲良くなろうってんじゃないんだ。呼び方なんざどうでもいい」

そうだけど……。

でも、いいや。そう言うのなら言う通りにしよう。

「う、うん。なら、僕は少年で、馬山さんは馬山さん」

「そう言うこった。じゃあ少年、お互いの呼び方も決まったところで、空見てみろよ」

「え？」

空？

僕は顔を出して空を見上げてみた。

「あ、少し晴れてる」

「雨が降りだす前に帰んな。こんなところでおっさんと二人で雨宿りなんて青春ゲージがガンガン下がっていくぜ。……誰がおっさんだ誰が！」

「じ、自分で言ったんだよ?!」

「おっと、そうだったな。んじゃそう言うわけで、また降りだす前に帰っちまいな」

「うん」

僕は秘密テントを出た。

おじさんが後を追うように顔を出してくる。

「じゃあそう言うわけで、しばらくここ借りるから。追い出さないでくれよ」

「うん、分かった」

一応みんなにも説明しておかなくちゃね。ここにいるのは変質者じゃなくて馬山さんだって。

「じゃあ達者で」

「うん。さようなら」

僕は一礼してテントに背を向けた。けど、馬山さんがすぐに引き止めてきた。

「あー少年」

「？」

僕は振り返って顔だけ向ける。

馬山さんは苦笑いを浮かべていた。

「あんまり俺みたいな人間に心を許すなよ。損するぜ」

「え、でも馬山さんいい人だし……」

「演じているかもしれねえだろ。とにかく、疑うことを覚えた方が今後の人生役に立つぜ」

そう言って、テントの中に顔を引っ込めた。

「……？」

でも、いい人だね、馬山さん。

疑うなんて難しいよ。

……馬山馬太郎っていう名前は、本名ではないよねって疑っているけど……。

僕は一度首をかしげて、山を下りた。

僕が家についてからすぐに雨が降りだした。危機一髪だったね。

八月一日。

僕は馬山さんと知り合いになった。

まりもさんをお願い

八月一日、夜。

僕はスカイペをつけてまりもさんとチャットトーク。

ユウ..そう言うわけで、山にいたのは変質者なんかじゃなかったんだ。

まりも..それはよかったね。君の秘密基地が穢されませんんだ...のかな？

ユウ..あまりいい気分はしないけど、困っている人は追い出せないよね

まりも..優しいね君は。嫌なら嫌って言うてもいいと思うんだけどね

ユウ..嫌って言うほどでもないから、別にいいよ

まりも..君がいいのなら、いいと思うよ

僕の心配をしてくれているんだね。顔も知らないし本名も知らない相手を心配するなんてそうそうできる事じゃないよ。すごいよね、まりもさんは。

あ、そうだ。

ユウ..まりもさん、せっかくの夏休みだから、この機会に会ってみ

ませんか？

なんだか恥ずかしくて敬語を使ってしまった。不自然だよね……。

まりも…それはいい考えだね！ ……と言いたところだけど

あれ。

まりも…それは難しいかな。君にショックを与えたくないからね。顔は合わせないに越したことはないさ

ユウ…ショックなんて受けないよ。僕はショックを受けないけど、まりもさんは僕の姿を見てショックを受けるかも……

まりも…それこそありえないよ

ユウ…そう言うことだよ。僕もまりもさんと同じことを思っているから絶対にショックを受けないよ

まりも…なるほどw そう言われてみれば納得してしまうね。でもどうしたんだい急に。今まで会いたいだなんて言わなかったのに、突然だね

ユウ…うん。僕、まりもさんをみんなに紹介したいんだ。まりもさんみたいにすごくいい人のことをみんな知らないなんてかわいそうだからね

まりも…なんだ。君が会いたいわけじゃあないのかい。残念だよ

ユウ…もちろん僕もまりもさんに会いたいよ。みんなで仲良くできたら最高だなんて思って

まりも…みんな仲がいいことは幸せだろうけどね。でもそううまく行かないのが人生さ

ユウ…僕の友達もみんないい人だからすぐに仲良くなれるよ！

まりも…君の友達だからね。みんないい人だとは思うよ。問題は私にあるのさ

ユウ…まりもさんをとってもいい人だから問題なんてなさそうだけど……

まりも…残念ながら私は君の友達にあまり興味が無いのさ。私は君だけがればいいからね

う……。なんだか恥ずかしいことを言われたよ。……でも嬉しいな。頭がふわふわするくらい嬉しいよ。

ぼ、僕も、返さなきゃだね……。でも、なんて返せばいいのかな……。……。

ユウ…僕も

うわああああ。恥ずかしくてこれだけしかうてなかったよ！ 言葉にしている訳じゃないのに、恥ずかしいよ！

まりも…そっか。それは嬉しいね。なら、会うのは無しで

え、あ。……まあ、仕方がないよね。無理やりはよくないもん。会いたくないって言っているのなら合わない方がいいよ。今のこの関係を壊したくないもんね。

……でも、僕が会いたいから、僕だけがまりもさんと会いたいからって言っていたら会ってくれたのかな……。

……分からないね。

来訪者はDS

八月の二日目。

夏休みは残すところあと三十日だ。七月のことを僕はロスタイムと呼んでいたけれど、よく考えたら七月の夏休みは十日くらいあるから、夏休み全体の四分の一は七月にあるんだね。そんなロスタイム無いよね。

そんなわけで休みの残り四分の三に入っている。あと十日で折り返しだ。とても早く感じる。宿題もまだ終わっていないし、話し合うことが無いと言っても一応文化祭の会議もあるみたいだ。小嶋君も僕の家にあるアニメを見尽くすと言っているし色々忙しそうだし、そうとなれば早く起きなくては時間がもったいない。

僕はこれからのことを考えて少しドキドキする胸を押さえて一階へ下りた。

居間では両親と弟がテレビに目を向けていた。「おはよう」と声をかけるとみんなが返してきてくれた。素敵な朝だ。

両親は今日も仕事なので僕より早く起きている。弟は小学生なので誰よりも早く起きてラジオ体操に出かけている。それから帰ってきてずっと起きているので僕より先に居間にいるのだ。

僕がご飯を食べているうちに両親が仕事へ出た。忙しそうだ。ただ休んでいるだけの僕が情けなく申し訳ない。何かできる事があればいいのだけれど。

パンを喰えながら両親の出た行った扉を見つめっていると、弟がテレビを指さし話しかけてきた。

「また隣町がニュースになってる」

え、またなの？

僕は弟の指さす先を見てみた。

『――男数名が、深夜一人で歩いていた男性に暴行を加えおよそ五万円の入った財布を奪う――』

酷いことするなあ。早く犯人捕まればいいのに。

……それにしても、隣町がニュースになる率が高すぎるよ……。

朝ご飯を食べ終え、弟と一緒にテレビを見る。ニュースは相変わらず物騒な世の中を映し出しているけれど家の中は至って平和だ。無言が耐えられる関係というのはとても素晴らしいものだよね。これからどんどん、家族以外でそう言う関係になれる人を作っていきたいな。

ここでお姉ちゃんが起きてきた。少し遅い起床だけど、今年受験生だから夜遅くまで勉強しているのかな。えらいね、お姉ちゃん。寝ぼけているのか、ソファに座る僕の膝の上に座ってきたので違うよと言って隣に座らせてあげた。寝ぼけると僕が椅子に見えちゃうんだね。

兄弟三人並んでテレビを見る。右隣に座るお姉ちゃんが、眠いか僕の肩にもたれかかってきた。少し暑いよ。左隣に座る弟はテールの上に置いてあった新聞を持ち上げてテレビ欄にとらめっこを始めた。

そんな感じで、まったりとした時間が進んでいく。

幸せだな。

弟がチャンネルを変えて番組が変わる。

まったりした時間だなあ。

……トイレに行こうかな。

僕にもたれかかっていたお姉ちゃんを起こして、僕は立ち上がる。そこで、タイミングよくインターホンが鳴った。立ち上がっている僕がそのままドアホンへ向かいモニターを覗いてみた。

あれ？ モニターには誰も映ってないよ？

悪戯かな?と思ったけれど一応声をかけてみた。

「はい?」

『あ、その声は佐藤君、って、当然か。佐藤君の家なんだから佐藤姓以外の人は出てこないか』

「え?」

この声はとても聞き覚えがある。しかし機械越しなのでパツと思いつかない。

「あ、あの、どちらさまですか?」

『とりあえず玄関の鍵を開けてよ』

怒られた。

「あ、はい」

僕はモニターを消して玄関へ向かった。そして鍵を開け、扉を開いて来訪者を迎える。

開けた瞬間立ちくらみに似た衝撃を受ける。吹っ飛びかけた意識を慌てて掴んでその場にとどめる。来訪者は、僕の意識を吹き飛ばしそうになるほど強烈な美人オーラを持っている人だった。

「や。おはよう」

「くくく楠さん?! どうしたの?!」

楠若菜さんでした。

肩の部分が開いたチュニツクにキュロットスカート。真っ白で長で長い脚が眩しい。

「どうしたのって、友達が来ることがそんなに不思議？」

僕の反応が気に入らないようで、開かれた玄関の前で目を細め僕を睨み付けている。

「え、いや、不思議ではないけど……」

「とりあえず家の中に入れてよ」

「あ、うん」

僕は後ろ歩きで家に上がる。楠さんが玄関に入ってきて扉を閉めた。

「そ、その、今日は、どういったご用件で……」

「用件がなくちゃ来ちゃいけないっていうの？」

「え、いや、そんなことは、無いけど……。でも、僕の家なんか、わざわざ楠さんが足を運んでくれるなんて、その、何と言うか、すごいというか、珍しいというか……」

「来るのは初めてじゃないでしょ」

「そ、そうだけど、前は、二階からだっし……。こう、堂々と来てくれるとは、思ってたかったし、突然だったから、その、びっく

りして」

「なに？ 来てほしくなかったって言うの？」

「そ、そんなことは絶対にないよ！」

「ふーん。期待してたんだ。友達になったからいつか来てくれるって期待してたんだ」

「そ、その、そう言う気持ちも、あったのは否定できない事実です……」

なんで僕はこんなに追い詰められている気分なのだろうか。どうやら玄関で騒ぎすぎたらしい。居間から誰かがやってきた。

「お兄ちゃん？ どうしたの？ 困ってるの？」

その人は、元気よく居間からやってきたけれど、玄関に立つ楠さんを見て驚愕に目を見開いてた。

「……。……！ だ、だれ？！ その美人さんは誰？！ お兄ちゃんの知り合い？！」

「あ、うん、その、僕の、友達」

「友達？！ あのお兄ちゃんに友達？！」

それは僕に失礼だよ！

そんな僕らを見て、楠さんがにっこりと笑って自己紹介をしたくれた。

「初めまして、楠若菜です。佐藤君と仲良くさせてもらってます」
にっこり。

とても素晴らしい笑顔だった。

でも、それが気に入らないという人がここにいる。

「な、な、な……！　なんて完璧な笑顔……！　……ちょっと、お兄ちゃん！　お兄ちゃんには私がいるのにどうして女の子なんかを連れ込もうとしているの！」

「え、そ、その」

「お兄ちゃんを一番好きなのはこの私なんだからね！　それは分かってくれているでしょ?!」

「あ、あの……」

「もー……！　お兄ちゃんなんかもう知らない！　でもお兄ちゃん私の物だから！　渡さないから！」

と、楠さんに指を突きつけたあと、どんどん足音を立てながら階段を上って行った。

慌てて楠さんを見る。こんな失礼な態度を取られて怒らないわけがないよ！

「……あ、あの、ごめんね、楠さん。その、怒りっぽくて……」

失礼なことを言われた楠さんだけでも、顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「ううん。全然気にしてないよ。佐藤君、懐かれてるね」

「う、うん。仲は、いいと思う」

いつも一緒に遊んでいたからね。仲はとってもいいよ。

「ふふ……。可愛い妹さんだね」

楽しそうに笑う楠さん。でも。

「あの、あれは、お姉ちゃん……」

楠さんの穏やかな笑みが凍った。

「……佐藤君、知ってる？ あとから生まれた女の子は、妹っていうの。お姉ちゃんは、自分より先に生まれている女の子のことを言うの。佐藤君間違えてない？」

「し、知ってるよ？」

「そう。それは素晴らしい。で、今の子は？ 姉？ 妹？」

「お、お姉ちゃん……」

「………………。あ、なるほど」

合点がいったようだ。

「もしかして、双子とか？ 双子で、姉とか弟とか区別をつけたく

ないご両親が『お兄ちゃん』と『お姉ちゃん』って呼ぶようにしていたんだね。その名残でお互いそういう呼び方をしているんでしょ？
納得」

「えっと、その、お姉ちゃんは、僕の二つ上……」

楠さんの顔から笑顔が消えた。消え去った。

「……なんでお兄ちゃんって呼ばれてるの？　なんでお兄ちゃんって呼ばせているの？」

「よ、呼ばせてないよ！　その、これには、浅い理由があって……」

「浅いんだ」

「深くは、ないよ……」

「……詳しく聞こうか。場合によっては君との縁を切るから」

「そ、そんな……」

友達を失いたくないよ。

なんと説明していいものか、焦りながら考える。良い言い方が思いつかない……。

と悩んでいたところ。

「兄ちゃん？　どうしたの？　姉ちゃんまたおこったの？」

今度は弟が居間から顔を覗かせてきた。

「お客さん？」

楠さんを見て僕を見る。

「うん……。僕の、友達」

「へえ」

少し驚いた顔をして、居間から出てきた。そして僕の隣に並び楠さんに頭を下げた。

「初めまして。佐藤祈です」

佐藤祈。いのり僕の弟だ。

祈君を見てにっこり笑う楠さん。

「初めまして、楠若菜です。お兄さんにはいつもお世話になっています」

「あ、はい。兄をよろしくお願いします」

祈君がもう一度頭を下げて居間に戻っていった。

「ふふ」

楠さんの顔に笑顔が戻ってきた。

「今度の子は、妹だね。可愛い妹だねって言ってもいいよね」

「え、あ、弟」

楠さんの笑顔が再び凍りついた。

「……佐藤『いのり』って言ってたけど、女の子じゃないの？」

「その、女の子みたいな名前だけど、男の子だよ」

「……」

楠さんの顔から笑顔が再び消え去った。

「……君の兄弟はおかしい……」

そう、かな？

「……とにかく、上がっていい？」

「え、あ、うん」

そう言うわけで、楠さんが僕の家に来てきた。

僕を追い抜かして真っ直ぐに僕の部屋へ向かう楠さん。僕の家なのに……。扉を開けて僕の部屋に入り、すぐに扉を閉める楠さん。僕がついてきているのに……。僕は扉を開けて楠さんの後に続いた。

「佐藤君。これなに」

僕が部屋に入るなり楠さんが僕に問いかける。

僕の部屋に置いてあった馬のお面を手にとって驚いた顔を見せている楠さん。そう言えば、馬山さんから返してもらっていたんだ。ちようどよかった。

「昨日話した、秘密基地にいる人から返してもらったんだ。普通に返してくれたよ」

「有野さんのお兄さんと一緒に？」

「……その、それが、一人で行くことになって……」

「……ふーん。そうなんだ。じゃあ、これ、私の為にわざわざ取り返しに行ってくれたんだね」

「え、あ、そういうわけじゃないけど……」

「私の為にわざわざ取り返しに行ってくれたんだね」

「え？ いや、その」

「私の為にわざわざ取り返しに行ってくれたんだね」

「は、はい」

「ありがとう」

無理やり言わされた感が否めないけれど、楠さんは同じ言葉を繰り返していただけだし今のは僕が勝手に言ったことになるよね……。なんだか、嘘をついているみたいでいやだな。

困惑している僕に楠さんが馬のお面を渡してきた。

「え？」

「ちょっと持ってた」

僕に馬のお面を持たせて楠さんが数歩下がる。そして携帯のカメラを構えて僕と馬を撮った。よく分からないけど、何かの記念かな。

「よし。じゃあその馬君にあげる」

「え？ 返してほしかったんじゃないの？」

「よく考えたらどこの誰かも知らないおじさんがかぶったお面なんかもう被りたくないよ。だからもうそれいらない。君にあげるよ」

「あ、ありがとう」

僕もいらないよ……。部屋にこんなものがあつたら怖いよ……。真っ白い馬を眺めてみる。妙にリアルだ。見えないところにしまおう。

「でもその変質者はどこでそれを手に入れたのかな」

楠さんが僕の机から椅子を引いて座った。

僕は馬を持ったまま立っている。

「どこで手に入れたのかは聞いてなかった。でも、多分山に落ちていたんじゃないかな」

「多分そうだよな。あーあ。あのとき取りに戻ればよかった……」

あの時。

ストレス発散を僕に見られた日。その日にかぶっていた馬を落とした楠さん。そこから僕と楠さんの関係が始まった。

あれからもう一月以上も経っている。あつという間だった気がする。色々あったね。思い返してみればいいことだらけだ。

一月前、あの時足跡を追って森の奥深くへ進んでよかった。人生を変える出来事も、秘密基地を守りたいという『勇気』だったのだから、やっぱり勇気は人生においてとても大切な物なんだね。

「で、その変質者は追っ払ったの？」

回想している暇はなかったね。今は楠さんが部屋に来てくれているのだから。

「ううん。あの人は変質者なんかじゃないよ」

「馬被って外に出る時点で変質者だから」

……それは、自分の事を貶しているのかな……。

「……なに？」

考える僕を楠さんが半眼で睨む。

「いえ、なんでも……」

「……まあいいや。君がその人を変質者ではないと判断した理由は？ 顔？ 体つき？ ガチムチだったの？」

「体つきで人を判断したことなんて僕ないよ?! ガチムチ好きでもないし!」

「なら何。叫んでないで早く教えてよ」

叫びたくもなるよ。

「その、家が無いんだって。だからあそこにいるんだって」

「……で?」

「え?」

以上で僕の説明は終わりましたけど……。

「えっと、家が無くて、あそこにいるんだって……」

「それさっきも聞いた。続きは?」

「そ、その、以上です……」

「はあ?」

怒ったような顔の楠さん。笑顔の方が似合うよと思ったけれど言わない。

「住む場所が無くて、あそこで雨風を凌いでいるのだから、仕方がないかって……。理由があるから、変質者じゃない、よね?」

「君はアホだ」

「あ、はい……」

「家が無いだけで十分不審でしょう。何歳くらいの人？」

「えっと、四十前後……だと思う」

自称は高校生だけど。

「四十歳で山暮らしは厳しいものを感じるね。可愛いそ」

椅子を回して僕に背を向ける。そしてごく自然な動作でパソコンの電源をつけた。

「で、君は同情してそこに住まうことを許したというわけなんだ」

ディスプレイを眺めたまま僕に問いかけてくる。

「うん……」

「私の許可を取らずに」

「う、うん」

確かに、僕だけの秘密基地ではないのだから僕の独断で許したのはまずかったかもしれない。今さらだけど、楠さんにも許可をもらおう。

「あの、ダメかな」

「駄目だね」

バツサリ切り捨てられた。

「私はどこでストレス発散すればいいの。新しいところを見つけろって言うの?」

「えっと……。その、馬山さんになら見られてもいいと思うよ」

「馬山? 馬を被って山にいたから馬山? ネーミングセンス無いね」

「僕が付けた名前じゃないよ。馬山さんが自分で言っていたんだ」

「そう。どうでもいい。で、その馬山さんに見られてもいいという理由を是非お聞かせ願いたいね」

「うん。馬山さんいい人だから」

完全には振り向かず、横目で僕を見る楠さん。

「変質者を見ていい人と言える君が羨ましいよ」

う。これは嫌味だね……。何となく分かるよ。
楠さんが再びディスプレイを向いた。

「まあその変質者は追々追いつくとして、君にはそれ以外に説明しなければならぬことがあるよね」

「え？ 僕何かしたっけ？」

「『お兄ちゃん』」

う。

「弟である佐藤君はなんでお兄ちゃんと呼ばせているのかな。説明してよね、お兄ちゃん？」

「僕が呼ばせているんじゃないってば……」

これじゃあ僕が変な人みたいだよ。

「姉に自分のことをお兄ちゃんと呼ばせている強者は君くらいなものだよ。正直引く」

「ち、違うんだよ！？ 僕が望んでそうになっているんじゃないんだよ?!」

「良いから説明しなさい。浅い理由があるって言ってたでしょう」

「はい……」

この説明を失敗したら僕は友達を失うね……。

「これには、弟の祈君が関係してくるんだ」

「ほう」

「実は、僕の弟の祈君とお姉ちゃんはとっても仲が悪くて、いつも

いがみ合っているんだ」

「へえ」

「基本的にお姉ちゃんが祈君に突っかかっていくんだけど、なんでもかっというとお姉ちゃんは弟をライバル視しているみたいで、することなすことなんでも勝ちたいみたいなんだ」

「ふーん」

「それで、祈君が僕のことを兄ちゃんって呼ぶから、祈君だけずるいということで、お姉ちゃんも僕のことをお兄ちゃんと呼ぶようになったというわけです」

「変なの」

「……僕もそう思います」

「でも佐藤君自身も嫌がってないんでしょう？ 満更でもないんですよ？ お姉さん君より小さくて懐いているから、妹みたいで可愛いつて思ってるんでしょう？」

「い、嫌に決まってるよ……。でもなおしてくれないから……」

「あ、そうなんだ。ごめんね、勘違いしてた。勘違いして今全力で妹系のエロ画像をダウンロードしまくってたよ」

「え？！ 何してるの？！」

慌てて楠さんに駆け寄る。う……。ディスプレイに恥ずかしい絵

がでかでかと映し出されているよ……。女の子と部屋で二人こんなものを見ているなんて異常だよ！

「そ、その、とりあえずブラウザを閉じてもらっていいですか」

マウスを操作したいけれど楠さんが握っていて閉じられない。これを機にキーボードでブラウザを閉じる方法を調べておう。確かAltとF4だった気がするけれど、怖くて押せない。間違えたら変なことになってしまいそうなもの。

「なに？ 迷惑だっていうの？ 人が親切でエロ画像をダウンロードしてあげていたのに」

「有難迷惑です……」

楠さんが唇を尖らせながらブラウザを閉じた。しかしいつのまにか壁紙が裸の女の子のえっちな画像に変えられていたので状況は変わらず。

「なな何してるの？！ やめてもらっていいですかね？！」

懇願する僕を楠さんが怒る。

「ちょっと！ 佐藤君！ 何このデスクトップ！ 私が来るのは分かっていたんだからこんな恥ずかしいデスクトップ変えておいてよ！」

まるで僕が選んだ壁紙みたいに怒られた！
そもそも楠さん突然来たんだよね？！ 何の準備もしていないよ！

「僕こんな壁紙にしてなかったよ?! 綺麗な青空だったはずだよ?!」

「まったく……。煩惱の塊だね君は。私を部屋に連れ込んで何をする気なの?」

やらやれといった感じで再びブラウザを開いていた。ブラウザによって隠れるデスクトップを見て一安心。

「とりあえずお茶」

「え?」

おちゃ?

「とりあえずお茶が飲みたい」

「あ、はい」

えっちな壁紙の件何も解決していないけれど、確かにお客さんに何も出さないのはいけないよね。僕は慌てて一階へ下りた。

僕が一階へ下りると弟の祈君が靴を履いてどこかへ出かけるところだった。つま先を地面でトントンしている祈君に声をかけてみた。

「どこかへ行くの?」

「え、いや、俺は家にいない方がいいのかなと思って」

「え? どうして?」

お客さんがいるから？　そんなの気にしないのに。

「どうしても。頑張ってね兄ちゃん」

最後にかっこいい笑みを見せて家を出て行った。何をがんばればいいんだろう？

まあいいや。とにかく早くお茶を持っていかなければ怒られる。

……あと、正直楠さんを部屋で一人にするのが怖い……。申し訳ないけれど、何をされるのか分からないよ……。……もうえっちな画像収集はやってないよね……？

お茶とお茶請けを持って二階へ戻る。僕の部屋に行く途中、僕の隣に位置するお姉ちゃんの部屋からお姉ちゃんが半分顔をだし物凄い形相で僕を睨み付けていた。怖いから後で謝っておこう。今はとにかく楠さんだ。

一応ノックをしてから入る。

部屋に入ると楠さんはパソコンの前には座っておらず、部屋の真ん中にあるテーブルのそばで、クッションをおしりに敷いて座っていた。真っ白な太ももが目飛び込んだのであわてて目をそらす。そのついでにちらりとディスプレイを見てみるとブラウザが開かれたままでえっちな画像は表示されていない。ふうと一息つく。

「お待たせ」

僕はお盆をテーブルの上に置いてお茶を楠さんのそばに置いた。

「ありがとう」

にこりと笑いお茶を受け取る。棒の部屋に来てからずっと無表情だったけどやっと笑顔を見せくれた……。なんだかほっとする。

「有野さんの家ってここから近いんでしょ？」

「うん。あ、呼ぶ？」

「いい」

即答だった。仲良くしてほしいのだけれども……。

「昨日ね」

楠さんが頼杖をついて話し始める。なにごとかな？

「昨日の夕方ころ、先生から電話があってね。なんでも生徒会長が委員長に話があるから夏休みの間に生徒会室に來いってさ」

「そうなんだ。僕も行くの？」

「当たり前でしょ。君は副委員長でしょ」

「そうだよ。雛ちゃんには伝えた？」

「伝えてないけど、伝えなくてもいいかなって。私と君二人で行けばいいんじゃない？ 有野さんだって面倒くさがるでしょ」

「そうかな？ 雛ちゃんなら面倒くさがらないと思うけど。一応、伝えてみるね」

「……はいはい」

何故か呆れたような顔で僕から視線を外した。僕おかしな事した

かな。

「えっと、日にちはいつになるのかな」

「明日暇なら明日にでも行こうか」

つまらなそうに本棚を眺めている楠さん。

「有野さんの都合がつけばね」

そう言って僕をジト目で見てきた。なんでそんな目で見るのだろうか。

「今から聞いてみるね」

「あーいやいや」

携帯を取り出した僕を慌てたように楠さんが止める。

「今はいいから。多分あとで来るから、その時にでも確認すればいいよ。今確認して、ここに来られたら困る」

「こ、困るの？」

「困る。ストレスたまるもん。会わないならそれに越したことは無いよ」

「そ、そう……」

何とかして二人の中をよくすることはできないかな……。……。あ

まり仲が良くないのは僕のせいなのだけど。

「でも、後から来るってどういうこと？」

楠さんが気になることを言っていたので聞いてみた。しかし、

「ところで」

僕の質問を華麗にスルーする楠さん。

「今隣町が熱いの知ってる？」

「熱いって？」

「ニュースで取り上げられる回数が異様に多いよね。ニュースは見てる？」

「うん。少しは。でも本当に隣町は物騒だよね。気をつけなくちゃ」

「そうだね。昨日は殺人事件のニュースがあったし、今日は路上強盗のニュース。本当に危ないよ」

「え？　昨日見たニュースは、殺人事件じゃなかったけど……」

「結局意識が戻らなかったみたい」

「……そうなんだ……」

とても悲しい。

「それ以前にも交通事故とか、なんだか爆発とかあったみたいだけど隣町は一体どうなっているの？ そんなに無法地帯なの？」

「ごくまれに行くことがあるけど、それほど危ないっていうイメージは無いよ。……僕が鈍いだけで周りには危険がいっぱいあったのかもしれないけど……。でも、なんでその話をするの？ 何かあったの？」

「特に何も無いけどさ、私の兄が少し前まで隣町に住んでいたから。今は私と一緒に暮らしているから安心だけだね。ただちょっと気になったっていうだけ」

「へえ、そうだったんだ。お兄さんとは別々に住んでたんだね」

「兄はこのあたりの大学に通っているからね。今年で三年生。その兄がニュース見ながら何度も襲われたことがあるって言ってたからさ、そんなに危ないところなのかなと思って気になって。隣町だからいつこっちにまで危険が及ぶか分からないし」

「お、お兄さん、襲われたんだ……」

危ないよ。

「まあ生きてるから問題ないでしょ」

軽いよ、軽すぎるよ楠さん。驚きの軽さだよ。

「君はひ弱だから気を付けるんだよ」

「うん。心配してくれてありがとう。楠さんも気を付けてね」

「そうだね。特に金髪の女の子には気をつけなきゃね。いつ襲われるか」

「雛ちゃんのことだよね……。雛ちゃんはそんなことしないよ」

「はいはい仲良し仲良しごちそうさま」

心底つまらなそうに両手を上げた。

「そう言えば」

手をおろして楠さんがお茶の入ったコップを持った。

「チョコを持ってきたからあげるね」

「え、ありがとう」

「そこに置いておいたから」

と言って僕のベッドの上を指さした。

ちょうど日の当たるところに、ビニール袋が置いてあった。袋の底から茶色が透けて見えている。

「どんなところにおいてるの?! だろどろに溶けちゃうよ?! っというか溶けてるよ?!」

慌てて袋を持ち上げる僕。う、持ち上げた感触が固体のそれじゃないよ。自由自在に変形しているよ……。恐ろしいけれどかすかな希望を持って袋の中を覗いてみる。どろどろのチョコが何の包装も

されていない状態で袋の底にたまっていた。どうしようこれ……。一旦固めた方がいいよね……。

困惑する僕とは対照的にのんきな様子で話し出す楠さん。

「私思っただけど、バレンタインが企業の戦略だのなんなのって言う人いるよね」

「う、うん……」

話す前に僕これを冷蔵庫に入れてきたいよ。

「まあそれはいいよ。私もそう思うから」

「え、そうなんだ」

女の子はみんな喜んでいるものと思っていたけれど。もらえない男の人だけが企業の戦略だって言うよね。当然、僕ももらえないけど、僕は言わないよ。なんだかあの時期は暖かい空気がして楽しいからね。

「そうなんだよ。ひがみはしないけど。それでさ、企業の戦略だと思っうのなら、あえて別の日に開催すればいいんじゃないかなーっと思っうんだよね」

「別の日？」

「そう。バレンタインは二月でしょ？　だから、あえて半年離れた八月に渡すとか」

「その結果がこれ?!　その、もらえてうれしいけど、やっぱり固

形の方がおいしいと思うんだ!」

「私ね、好きな子には意地悪したくなるの」

……。

「……え?! 今僕嬉しいこと言われた?!」

気のせいではなければ今僕好きって言われなかった?!

「嫌いな子には陰湿なことしたくなるけど」

これは陰湿な部類に入るね。つまりそういうことだ。

「とりあえず、僕これを冷蔵庫に入れてくるね……」

僕がビニール袋を持って部屋の扉へ向かったところ楠さんが怒ったような声で僕に言ってきた。

「なに? その場で食べてくれないの? 言いふらしてやる。私が君に渡した少し早目のバレンタインチョコを食べずに捨てたって言いふらしてやる」

「少し早いどころじゃないし、僕捨ててないよ……」

「チョコを包んでいた銀紙をはがすとき私がどれだけ苦労したと思ってるの? 私がどんな気持ちでそのチョコレートビニール袋に放り込んだと思ってるの? その時の私の苦労をそんなに軽く見ないで! 私の二分を返して!」

僕謝らないよ。

「とりあえず、冷蔵庫に入れてくるね……」

普通の形でほしかったな……。

「じゃあね佐藤君。突然押しかけてきてごめんね」

玄関で僕と向かい合う楠さん。

家でお昼ご飯が待っているというので十二時過ぎに僕の部屋を出た。僕の部屋で過ごした時間は大体三時間ほど。とっても楽しい三時間だったよ。

「いつでも大歓迎だよ」

「そっか」

そう言って笑う楠さんは、容姿端麗とか、長身瘦躯とか、明眸皓齒とか、眉目秀麗とか、いくら漢字を並べても足りないほどの美しさで、薄暗い玄関に立っている姿を写真に収めただけで一枚の国宝になってしまうのではないかと思わせてしまうほどだった。

このような方とお友達になれるなんてすごいや。

「じゃあ、有野さんによろしく」

「え、あ、そうだった。楠さん、この後雛ちゃんが来るって言うだけど、どうして？」

「私が今からメールするから。そうしたら来るから」

カバンから携帯を取り出しポチポチといじる楠さん。

「僕の家に来てほしいって呼ぶの？ それなら僕が雛ちゃんの家に行くよ？」

「来るとか行くとかそういったメールをするわけじゃないの。別にただちよつと自慢するだけ」

「自慢？」

「自慢。別に私にとってはそうでもないんだけど、知らされた有野さんは自慢されたように捉えるだろうね」

「？」

何を知らせるんだろう。

「これで良しと」

もう送ってしまったようで、携帯を閉じてカバンにしまった。

「じゃあ、私は一刻も早く去るよ」

シュビつと手を挙げて扉をあける楠さん。

「うん。またね」

「ばいばい。さっきからずっと私を睨み付けているお姉さんと中性的な弟さんによってよく言っておいてね」

「え、お姉ちゃんが?!」

驚き振り向いてみるとお姉ちゃんが階段の脇で、今にも噛みつきそうな顔で僕らを睨み付けていた。慌てて楠さんに視線を戻して謝る。

「ご、ごめんね! あとで、お姉ちゃんには言っておくから!」

「別に気にしてないよ。じゃあね」

「あ」

なんだか僕の気持ちがすっきりしないままだったけれど、笑顔で手を振りながら去って行ったので怒ってはいなかったのだろう。よかった、嫌な感情を持って帰らなくて。

まったく! お姉ちゃんは!

振り返り僕は怒鳴る。

「お、お姉ちゃん。なんで楠さんをそんな目で見るの……っ」

怒る僕を見てお姉ちゃんがキレた。

「浮気者!」

浮気者って……。

「僕と楠さんはそういう関係じゃないし、そもそも僕とお姉ちゃん

もそういう関係じゃないし……」

「なっ……！ あれだけお姉ちゃん大好きって言ってたくせに、嘘だったの?!」

「そ、それは、お姉ちゃんとして好きだっていう意味で、別に、それ以上の意味は……。それに、いったい何年前の話をしてるの……？」

幼いころの話だよ。

「なにそれー！ 私の事愛してるんじゃないの!?!」

「家族としては、もちろん好きだけど……」

「家族って……、そんなこと言っても私たちは本当の姉と弟じゃないでしょ!?!」

「……お姉ちゃん」

本当の家族じゃない……か。

そう、僕たちは――

「……普通に血繋がってるけど……」

普通の姉弟です。

連れ子でもないし、養子でもないし、腹違いでもないし、居候でもないし、親戚の子を預かっている訳でもないし……。

僕らは完全に姉弟です。

姉の妄想だよ。

「前世では違ったし！」

「そんなこと知らないよ……。今関係ないし……」

「前世の前世では揚げパンだったし！」

「どういうこと?! 生き物じゃないの?!」

「まったく! お兄ちゃんは私に愛されているという自覚がないんだから!」

「そんな自覚いらないよ……」

「いらない?! ……あーあ……。今お兄ちゃんは私を怒らせちゃったよ。とうとうやってしまったね……。しーらない。どうなっても知らないから!」

最後に怒鳴って二階へ。

「また怒らせちゃった……」

よく怒られる。早く謝らないといけないけど、多分今は取りつく島が無いからね……。少しでも時間をおこう。

いつものことだと思っていた――

花言葉

お姉ちゃんが二階へ上がったあと、僕はお昼ご飯を食べようとキッチンへ向かった。

祈君はまだ帰っていない。お姉ちゃんは怒っている。お昼ご飯は何人分作ればいいのかと冷蔵庫を開けしゃがみ込んで悩んでいると、玄関が開く音が聞こえてきた。祈君が帰ってきたみたいだ。そう思い顔を上げて弟を迎える。けれど弟は急いだようにどたどたと足音を立て階段を駆け上って行き居間には入ってこなかった。ただいまって言わなきゃいけないのに。仕方がないので再び冷蔵庫の中身とにらめっこを開始する。夏休みのお昼と言えばそうめんだよね。もしくは冷やし中華。でも毎日麺類だと飽きるから今日は違うものを作ろうかな。野菜室からニンジンとネギを取り出し、体を起こす。そこで二階から降りてくる足音が。居間に来るのかな？ と思ひ扉の方を見ていると扉が勢いよく開いた。やっとお帰りが言えるね。

「おかえり」

僕の声聞き弟が入ってくる。が、弟ではなかった。

「優大！ てめえ！」

上下薄いスウェットを着たりラックス状態の雛ちゃんだった。

「あ、いらっしやい」

おかえりじゃないね。しかし雛ちゃんとしてはそんなことどうでもいいみたいで怒った顔をして僕に近づいてきた。

「ななななに?!」

ネギとニンジンを前に突き出す僕。

「何だこの野郎!　それで私と闘おうってのか?!」

「た、闘わないよ!」

慌てて野菜たちを置いた。

「ど、どうしたの雛ちゃん?　なんでそんなに怒ってるの?」

「なにとぼけてやがる!　お前、若菜の馬を取り返す為に单身山に乗り込んだらしいじゃねえか!」

僕を近くで睨み付けバンとテーブルをたたく。

「え?　どうして知ってるの?」

「メールが来たんだよこの野郎!」

僕に携帯を突きつけてくる雛ちゃん。近すぎて見えなかったので少し上体をそらして距離とってディスプレイに映し出されたものを見してみる。僕が白馬の首を持っている画像と、『佐藤君が私の為に馬を取り返してくれました(笑)』という文字が映っていた。

「あ、さっきの写真だ」

僕の部屋で馬を持つ僕の写真。楠さんはこの為に写真を撮ってい

たんだね。

「なんでお前は若菜なんかの為に馬を取り返しに行っただよ！」

「べ、別に、僕は楠さんの為に馬を取り返しに行ったわけじゃなくて、たまたま取り返せたっていうか」

「嘘つけ！　こんなものも一緒に送られてきたんだよ！」

携帯をいじる雛ちゃん。そして聞こえてきたものは。

『私の為にわざわざ取り返しに行ってくれたんだね』『は、はい』『ありがとう』

録音されていたみたいだ。気付かなかった。それにしても楠さん録音うますぎる。

「あんな奴の為に危険を冒すなんて馬鹿げてるぞ！　お前はあいつの外見に騙されてるんだよ！」

「そ、そんなことは、ないよ。それに、無事だったから、なにも問題ないよね」

「問題大ありだ！」

雛ちゃんが僕の胸ぐらをつかみグイッと顔を近づけてきた。

間近に迫る雛ちゃんの綺麗な顔。

顔が近くて恥ずかしいとか、そう言うことを感じられないほど、その眼は真剣だった。

「お前、私に嘘つきやがったな？」

「うそ……？」

「昨日メールで聞いたじゃねえか。秘密基地に行っていないよなって。お前行ってないって答えたよな。何で嘘ついたんだよ」

「そ、その、あの時はまだ行ってなかったから、嘘では……」

「ふざけんなよ。私が何て言いたいか分かってただろ？ 一人で行ってないかどうか心配だったからメールしたって分かってただろ？」

「……………うん……………」

「なのにお前は一人で行ったんだな」

「……………ごめん……………」

「ゆるさねえ」

「……」

「なんで嘘ついて一人で行ったんだよ。なんで私を頼らねえんだよ」

「……………危ないと、思ったから……」

「一人で行くことは危なくねえのかよ」

「……………危ないけど、僕だけ危ない目に遭うのなら、別にいいから……」

「それを良しとするのはお前だけなんだよ！ 私の感情は無視か！ 優大が危ない目に遭って私がどう思おうがどうでもいいのか!？」

「それは、その……………人に心配かけるのは、よくない、です…………」

「今後はこんなことするなよ。次はもう本当に許さねえからな。同じようなことがあったらお前を監禁するからそのつもりでいろよ」

「…………うん」

「……」

雛ちゃんが僕から手を離してくれた。

「怒鳴って悪かったな」

「そんな。僕の為を思って怒ってくれたんだから、悪くないよ」

「優大の為か……。多分、自分の為なんだろうけどな」

「…………？ どういうこと…………？」

「なんでもないよ」

そう言って笑い、手の甲で僕の頬を撫でてくれる。なんだかむず痒い。

「それで、取り返したってことは変態野郎を追っ払ったってことだよな」

「あ、その、そのことなんだけど、あの人は不審者じゃないんだ」

「不審者じゃないって、山に出没する馬人間なんて不審者異常だろ。ホラーレベルだぜ」

「その、でもね？ あの人は、家が無くて困っているみたいなんだ。だから、雨風を凌ぐために、秘密基地を貸してくれってお願いされたの。そう言う事情があるから、別にいいよね？」

「駄目だ」

え。そんな。

「そいつが安全とはまだ決まったわけじゃねえ。優大秘密基地によくちよく行っただろ？ だったら、少しでも危なそうなものは取っ払わなくちゃいけねえよな」

「馬山さんは、いい人だよ」

「馬山？ そいつの名前か？ 偽名じゃねえか。本名名乗れねえ奴を信用するなよ。何がいい奴だ。本名すら知らねえのにそいつの本質なんて分かるわけねえだろ」

「そ、それは、そうかもだけど……」

「もう分かった。私が追っ払う」

「え？！ 危ないよ！ 喧嘩にでもなったら大変だよ！」

「大丈夫だ。浮浪者になんか負けるか。私に任せておけ」

「ま、任せっぱなしはダメだよ」

「良いから優大はネギでもきざんでろ。その間に追っ払ってくるから」

「雛ちゃんが行くなら僕も行くよ!」

「あぶねえだろ、いいよ来なくて」

「雛ちゃんが僕を心配してくれているみたいに僕も雛ちゃんが心配なんだよ?!」

「抱きしめてもいい?」

「え?! 困るけど!」

どうしたの急に?!

雛ちゃんが嬉しそうにポンポンと僕の肩をたたく。

「優大が私のことを大切に思ってくれているのは分かった。よし、一緒にいこう」

僕の心配が伝わってくれたみたいだ。機嫌もよくなってくれたし一安心。

「行くぞ!」

やる気満々で居間を出て行った。その、乱暴なことはいらないでね?

雛ちゃんと一緒に燦々と照りつける日差しの下秘密基地へ向かう。
今はお昼。アスファルトの上に逃げ水が広がっている。

「あっちー……。あちーよー」

スウェットの首元をパタパタと動かしている。

「なんで私はこんなもん着てるんだよ……」

自分の服を見てげんなりする雛ちゃん。確かに暑そうだ。

「引き返そうか。それがいいよね、うん、引き返そう」

「何言ってるんだ。どうせこれから動き回るんだからどうでもいい服で丁度いいだろ」

動き回るって、馬山さんと闘うつもりなのかな……。

「てゆーか、なんで若菜が優大の部屋にいたんだよ……」

強い日差しのせいか、ほにゃんとした目を細めて僕を見る雛ちゃん。ジト目というわけではないよね。

「あ、そうだそうだ。なにかね、生徒会長が話があるから、明日生徒会室に行かなきゃけないっていうのを知らせに来てくれたんだ。雛ちゃんは明日時間ある？」

「優大が行くなら私が行かないでどうする。用事があるうがなからうが行くよ。つーか、そんなことなら別にわざわざ優大の部屋に行かなくてよくね？ メールか電話で済ませればいいじゃねえか」

「あ、それもそうだね」

言われなければ気づかなかった。

「……別に気にならねえのか……」

「え？ その、丁寧だなあって思うよ」

「……そうだな」

暑いせいなのかふうと息を吐いて道の先に目をやる雛ちゃん。蜷気楼でも見えているのか、鮮やかなピンク色の口元に幸せそうな笑顔が浮かんでいた。いや、これこそ僕が見ている蜷気楼なのかもしれない。喉が妙に乾くし頭もくらくらする、きつと熱で僕の頭がやられているんだ。だから雛ちゃんの姿が眩しく見えるんだ。でも、こんな温かい気持ちになれる蜷気楼ならずっと見ていたい。脳みそが沸騰してもいいからこの映像をまぶたの裏に焼き付けておきたい。

「暑いな」

蜷気楼の笑顔のまま雛ちゃんがこちらを向いた。

「暑いね」

やっぱり、夏は素敵だ。

さて、山を登って数分。もうすぐ秘密基地だ。

セミの声に顔をしかめる雛ちゃんとそれを見て驚く僕。セミの声嫌いなんだ。よかった、絶唱だねとか言わないで。

「浮浪者が近くにいるんだよな」

辺りに気を払いながら進んでいく雛ちゃん。多分もう少し近づけば馬山さんがどこにいるか分かるはず。

やはりその通りで秘密基地と同時に馬山さんの姿も見えてきた。その姿を見て顔つきが変わった雛ちゃん。

「あのぼさばさのおっさんか。私に任せろ」

「その、馬山さんと喧嘩しないでね？」

「県かなんてしねえよ。追い出すだけだ」

それが喧嘩だよ……。

雛ちゃんは一切ひるむことなくずんずんと馬山さんに近づいていく。僕はあたふたとその後を追った。

馬山さんは昼食中らしく、地べたに胡坐をかいとお弁当を食べていた。昨日と同じ格好だ。

「なんだおい。家が無い割には普通にコンビニ弁当喰ってんじゃねえか」

雛ちゃんの声に驚いた様子もなく顔を上げる馬山さん。

「ん？」

そう言えばそうだ。もっと安いもの食べれば節約になるのに。

馬山さんはお弁当の唐揚げをつまんだまま雛ちゃんの後ろに立つ僕を覗き込んできた。

「ああ、また来たのか少年。暇だなお前も。んで、こっちのえらく好戦的な目をした金髪少女はどちらさん？ 姉ちゃんか何か？」

「お姉ちゃんじゃなくて、僕の友達」

「おいおい。友達つれて訪問するような観光名所じゃねえぜここは。こんな可愛い友達がいるのならもっと楽しいところに行けよ」

「今日はおめえに用事があつてきたんだよおっさん」

「おいおいおい。おっさんじゃねえよ。少年に聞いてねえのか？ 俺は高校生だぞ」

「どう見ても小汚いおっさんじゃねえか」

「失礼な。その少年だって高校生には見えねえだろ。同じさ」

「優大と一緒にすんじゃねえよ浮浪者！ おめえは老けて見えるんじゃないくて老けてるんだよ！」

「老けてねえよ！ 俺だって昔は幼く見られてたんだぞ！」

「やっぱりお前おっさんじゃねえか！」

「しまった。誘導尋問とはやるな金髪」

「してねえよ！」

仲良しかな？

「なあ、少年。優大って呼ばれてたっけ？ まあいいや、少年。この金髪ヤンキーに俺のことを説明してくれよ。このままじゃあまた住居探しの旅に出なけりゃならん。頼むよ少年」

「う、うん。その、雛ちゃん。馬山さんは、いい人だよ？」

「お前さっきからそればっかだな。いい人だとしても変質者だろ。追っ払うには十分すぎる理由だ」

「そうかも、しれないけど、その、かわいそうだよね？」

「全然」

即答だ。馬山さんも驚いたらしく雛ちゃんに声をかける。

「酷いな雛ちゃん」

「私の名前呼ぶじゃねえよ気持ちわりいな！ おっさんは黙ってる！」

「ヤンキーこわっ」

馬山さんが泣きそうな顔をしてお弁当を食べ始めた。全然怖がついていないよね。

「なあ優大。こんなきたねえおっさんに秘密基地使わせて気分悪い
だろ？ 追い出せるのなら追い出したいだろ？」

「その、秘密基地使われるのはあまり嬉しくないけど、追い出すのは可哀そうだよ」

「こんなおっさんにまで情を移す必要ねえって。追い出すぞ？ い
いよな？」

「でも、追い出しても、こっさりここを使われるんじゃないかな？」

「だったらここがトラウマになるくらい痛めつける」

「暴力は危ないよ」

「暴力じゃねえ。正義の拳だ。正義の拳で追い出すんだよ」

ぐっとこぶしを突き出す雛ちゃん

「正義ってのは結果だぜ」

突然、馬山さんが唐揚げ弁当を食べながら呟いた。

「あ？ なんて？」

「正義ってのは過程の事じゃなくて結果のことだぞ」

「何言ってんだおっさん」

「正しい行いだとしても、結果が正義だとは限らねえってこと。逆に間違った行いでも結果が悪だとは限らねえの。正義が悪かは自分で決めることじゃなくて、結果を見た周りの人間が決めるんだよ。正義の拳で追い出すなんて方法はない」

「訳わかんねえこと言うなよおっさん。浮浪者を追い出すことは正義だろ」

「正しい行いかもしれねえけど正義とは言い難いな。その『正義の拳』とやらで俺が大けがを負ってみろ？ 非難されるのは金髪だろ。金髪の言う『正義の拳』の結果が悪だ。正義の拳が聞いてあきれる」

「このおっさん何言ってんだ？」

馬山さんを指さし困ったように僕を見る雛ちゃん。

「その、殴るのはよくないって言ってるんじゃないかな？」

「要約したらそんな感じさ」

唐揚げ弁当を食べ終わったらしく、後ろに置いてあったビニール袋にゴミを詰め込みお茶を飲む馬山さん。

「殴らないでくれよ、痛いから」

「ならとつと失せろよ」

「失せるのは別にかまわねえけど、こっそり戻ってくるぜ」

「そのたびに追いつく」

「二十四時間体制で監視するのか？ そんなことするくらいならばイトでもしろよ。せつかくの夏休みをおっさん観察で潰すんじゃないかねえよもったいねえな」

「ならこっから失せて戻ってくんないよ」

「ここ誰も来なくていい場所なんだよ。なんとかここにいさせてくれないかね」

馬山さんが懇願する。懇願に対して雛ちゃんは、

「断る！」

バツサリと切り捨てる。

「……少年は快く許可してくれたのに」

「優大は優しいから嫌でも嫌って言えねえんだよ。優大だっておっさんみたいなやつがここに居ることは嫌に決まってるだろ」

「なあ金髪よ。お前はなんで俺をそんなに目の敵にすんのよ」

「お前みたいな怪しい奴優大に悪影響しか与えねえだろ。だからだよ」

「ふーん……。まあ、そうかもしれねえけど……」

馬山さんが何か考えている。出て行くつもりなのかな……。ちよつとかわいそうだよ。

「少年」

何か思いついた様子で僕を見る馬山さん。

「なに？」

「少年は優しい人間と優しくない人間どっちが好き？」

「え？ それはもちろん、優しい人が……」

「なら、みんなに優しい人と、自分にだけ優しい人はどっち？」

「みんなに優しい人の方が、いいと思う、けど……」

「怖い人と怖くない人は？」

「もちろん、怖くない人」

「優しい人間と、優しくない人間、どっちが嫌い？」

「嫌い？ それは、優しくない人のほう」

「怖い人と、怖くない人、どっちが嫌い？」

「怖い人……」

「暴力をふるう人間と優しい人間どっちが好き？」

「え、優しい、人」

「優しい人がなに？　好き嫌い？」

「えっと、優しい人が好き」

「ほお。ところで金髪ヤンキー、俺家が無くて困っているんだ……。ここを使わせてもらえれば大変うれしいんだけど、どうだろうか」

「勝手に使えよバーカ！　死ね！」

何故か怒っている雛ちゃん。どうしたんだろう。

「ありがとうがとう。いやあ、少年。金髪ヤンキーは優しいな」

「うん。雛ちゃんはとっても優しいんだよ」

「そうかそうか。ん？　つまり？」

「え？　つまり？」

「つまりどういうことだ金髪ヤンキー。少年に優しいって言われているぞ」

「うるせーばーか！」

機嫌は一向になおっていない。けれどどこか嬉しそうだ。

「じゃあ、少年少女よ。用事も済んだことだしさっさと山を下りて

みたらどうだ」

「言われなくても帰るわ。こんな所一秒たりとも居たくねえよ」

「えっ、そうなの雛ちゃん。秘密基地好きじゃないの？」

「へ？ いや、別に秘密基地は好きだけど、そのおっさんが邪魔くさいってだけで」

「なら、もうちょっとここにいてもいいかな。ちよつと休憩もしたいし」

僕の意見に呆れたように笑う雛ちゃん。

「……はあ。しょうがねえな……」

よかった。

「少年に弱い金髪ヤンキーよ」

「うるせえ」

せっかくの夏休み。少しだけでいいから雛ちゃんと秘密基地で過ごしたかったんだ。

秘密基地から少し離れた木陰に馬山さんが座り、僕らは秘密基地のそばの木陰に座る。

「セミの声ってこんなうるさかったっけか……」

やはりセミの声があまり好きではないようだ。昨日馬山さんが言っていた大人になるというのはこういうことなのだろう。雛ちゃんはどうどん大人になっているんだ。僕はまだ子供のまま。昔を大切に持ちすぎているのかな。

少しだけ鬱な僕に、雛ちゃんが言ってくれる。

「でも優大と一緒に聞くと昔の夏を思い出すな。不思議だぜ」

爽やかに笑う雛ちゃん。

大人になっていくというけれど、その笑顔は昔からずっと変わっていない素敵な物だった。

「ずっと、こうやっていたいね」

昔に帰ることはできないから、ひたすら二人で思い出していたい。

「ず、ずっと、二人でこうやっていたいって、それ、お前……」

「二人でとは言ってねえよ」

「おっさんは黙ってろよ!」

雛ちゃんが馬山さんを怒鳴り、馬山さんが肩をすくめた。

「でも、ずっとこうやっているのは無理だよね。暗くなったらセミは鳴かないもんね」

「そりゃ、そうだけど……」

雛ちゃんがなんだかがっかりしていた。暗くなってもセミの声を聞いていたいということかな。

「ヤンキーの 望む相愛 蜃気楼」

「うるせえよ浮浪者！」

また怒鳴なられて肩をすくめる馬山さん。国語は苦手だから今詠んだ俳句の意味は分からなかったけど、きっと今の状況を表した詩だよ。すごいや。

「と、言っても蜃気楼は夏の季語じゃねえんだけどな。今詠むにはふさわしくねえのかも」

「え？ そうなの？」

「そうなの。実は春の季語ってんだから訳わかんねえよ」

「へえ……。物知りだね。あ、もしかしてそう言う知識があるってことは馬山さんは国語の教師とか？」

「全然違う。俺は今も昔もホームレス」

「だろうな。産まれた時からホームレスな顔してるわ」

「さいですか」

大人の余裕なのか噛みつく雛ちゃんを鮮やかに受け流していた。

「なあ優大。あいつ殴っていいか？」

「だ、ダメだよ。喧嘩になったりしたら怪我しちゃうよ」

「……ふん」

面白くなさそうに木に頭を持たれかけた。

「そうふてくされるなよ金髪娘。少年、尻に敷いてるクローバーの中から四つ葉を探して渡してあげろよ。金髪の機嫌が治るぞ」

「んなもん嬉しくねえよ……」

馬山さんに言われるまでシロツメグサの上に座っていると気付かなかった。多分、見つからないだろうけど探してみよう。

「探さなくていいっての。別にもらったところでどうしようもねえし」

「でも、せっかくだから」

目で探せる範囲は見渡してみよう。

「見つからないね」

「簡単に見つかるかよ」

「そうだよね」

「ありゃー。残念だな金髪」

「ふん。別にいらねえよ」

「いらないの？ 四つ葉の花言葉知らねえんだ」

「ああ？ なんか四つの葉にそれぞれ意味があるってやつだろ。覚えてねえよ」

「それじゃなくて、違う意味があるんだけど」

「んなもん興味ねえよ」

「四つ葉の花言葉は『私の物になってください』ってんだ」

「よし優大。探せ。探して私にくれ」

「え、う、うん」

突然やる気になった雛ちゃん。そんなに四つ葉が欲しいんだね。四つん這いのようになり四つ葉を探す。でも見つからない。

「見つからないね」

全部三つ葉だ。

「なんてこった。現実是非情だなヤンキーよ」

「含みのある言い方すんじゃないねえよ！」

馬山さんを見て怒る雛ちゃん。なぜみつからない事でそこまで怒

るのが分からない。

そんなに四つ葉のクローバーが欲しいのかな……。だったら、いつか探して渡してあげよう。

「……三つ葉か」

馬山さんが自分の座っている場所を撫でている。

「少年。三つ葉の花言葉は知ってるか？」

「え？ 知らないけど……」

「そうか。それならそれは、知らないままの方がいいぜ。いい事なんかないやしねえよ」

また、何か含みのある言い方だった。

でも、僕にはわからない。花言葉なんて一つも知らないのだから。

秘密基地で一時間。

雛ちゃんが馬山さんと喧嘩したり馬山さんがいろいろと教えてくれたり、何かと騒がしかったので一時間なんてあっという間よりもあったという間だった。

「もー我慢ならねえ！ 優大帰るぞ！」

馬山さんに怒った雛ちゃんが立ち上がる。怒った原因はやっぱり僕には分からないことだった。

「うん」

一時間もここにいてくれたから僕はもう満足だ。

「気分わりいぜ……！」

そう呟き何の未練も感じさせずの山を下りて行く雛ちゃん。

「さようなら、馬山さん」

僕は馬山さんに頭を下げる。

「おう。じゃあな少年。金髪ヤンキーと仲良くな」

「うん」

やっぱり、いい人だね？

「優大！ 早く来い！」

「う、うん！ じゃあ、馬山さん。また」

「また、ねえ……」

何か気になるようにつぶやいていたけれど、雛ちゃんに怒られるのは嫌なので僕は秘密基地を後にした。

僕の部屋で

八月二日夜。

お姉ちゃんと祈君と僕の三人で晩御飯を食べる。

お昼のことをお姉ちゃんに謝ってみたけれど、お姉ちゃんは怒るばかりで僕を許してはくれなかった。

「まったく！ お兄ちゃんはまったく！ 私は誰よりもお兄ちゃんという時間が長いんだよ？！ 祈君よりもね！」

祈君に飛び火してしまった。

「それなのにまったく！ なーにぱっと出の新キャラに鞍替えしちゃうって！」

「し、新キャラって、僕の友達をそんなふうに扱わないでよ」

「お兄ちゃんに友達はいらないの！ お姉ちゃんだけでいいでしょ！」

「そんなの、寂しいよ」

「今までずっとそうだったじゃない！ さみしー人生を歩んでいたのに！ 急に！ あんなかわいい子を連れ込んで！ 落ちろ！ 泥沼に落ちろ！」

「ひ、酷いよ、お姉ちゃん」

「ふーん！ ご馳走様！ 今日もおいしかった！」

自分の使った食器を流しに置いて、床が抜けるのではないかというほど足を鳴らしながら自分の部屋へ行った。

「姉ちゃん今回はかなり怒ってるね。何したの兄ちゃん」

「多分、僕が、お姉ちゃんに酷いことを言ったからだと……」

「酷いことって言っても、兄ちゃんのことだからそう大したことじゃないでしょ。また姉ちゃんがおおげさにとらえたんだろうね。まあ明日になればケロッとしてるでしょ」

「うん……」

そうだといいいのだけれど……。

少し落ち込む僕を祈君が励ましてくれて少し吹き返す僕。食器を洗いすぐに自分の部屋へ。

目的はまりもさんだ。まりもさんと話して元気を取り戻そう。とりあえず真っ先にデスクトップの背景を変えてから、スカイペにログイン。

よかった。まりもさんはすでにログインしていた。

ユウ…こんばんは

まりも…やあ。遅いじゃないか

遅いかな？　そうでもない気がするけれどまあいいや。
とにかく、楽しい会話をかわそう。

まりも…今日は一日、何か楽しいことはあったかい？

ユウ…それが、僕お姉ちゃんを怒らせちゃって

まりも…またかいw 君たちはよく喧嘩をしているね。でもすぐに仲直りしたんだろう？ もはや日常じゃないかw

ユウ…それが、まだ怒らせているみたいなんだ

まりも…そうなのかい？ 謝ればいいじゃないか

ユウ…謝ったよ。でも僕の謝り方が足りなかったみたいで……

まりも…まあたまにはそういうこともあるんだろうね。まあそれは今はいいいよ。私は君自身の話を聞きたいよ

ユウ…僕自身の話？

と言っても、僕は楽しい人間じゃないからね……。それにまりもさんには僕の情けない容姿や情けない性格のことは粗方話してしまっているからもう話すことは無いよ。

あ、そうだ。そう言えばまりもさんは僕に友達ができたことを喜んでくれていたんだ。その報告をしよう。

ユウ…今日は友達と思い出の場所で遊んだんだ。とっても楽しかったよ

まりも…それはよかったね

ユウ…うん。人生がどんどん変わって行っているようで嬉しいよ！

まりも…そうかい

ユウ…新しい友達も僕の家に来てくれたし、今日は最高の一日だったよ！

まりも…それはよかったね。ところで、ちょっといいかな

ユウ…どうしたの？

まりも…申し訳ないのだけれど、私は君の友達の話なんかどうでもいいんだ

え？

まりも…知らない人の話を聞いて楽しいと思うかい？ 楽しいのは話している君だけさ

ユウ…そうだね、ごめんなさい。今度から気を付ける

まりも…友達の事なんかより、君自身のことを教えてくれないかな。私は君のことがもっと知りたいんだ。もっと仲良くなりたいんだ

ユウ…僕とまりもさんは充分仲がいいと思うけれど……

まりも…それだけじゃあ足りないのさ。連絡手段が無くなっても君のことを想っていたんだ。そのためにはもっと君のことを知る必要がある。

ユウ…なるほど

まりも…君もそう思うだろう？

ユウ…うん

まりも…ああ、よかった。君もそう思ってくれていて嬉しいよ。じゃあ、もっと君のことを教えてくれないかな。今日はどこに行っと思ったとか、明日は何をして何を感じたいとか

ユウ…明日は学校へ行ってくるよ。委員長の仕事で集まらなきゃいけないみたいなんだ

まりも…そうかい。頼られているようで何よりだね。

ユウ…頼られているというか、僕以外に暇な人がいないからだけどもまりも…そう卑下する必要もないだろう。本当の事なんだから胸を張っていいよ

ユウ…うん。ありがとうまりもさん

まりも…おっと、ごめんね。もう時間だ。私はもう出るよ

ユウ…うん。さようなら

まりも…じゃあまた。お休み――

――ユウタ君

「え……？」

……え？ え？ なんで？

「ちょ、ちょっと……待って……」

僕は慌ててメッセージを送ろうとしたけれど、まりもさんはすでにログアウトしていた。今送っても意味がない。

「な、なんで……？」

なんで僕の名前を知っているの？ 僕は教えていないはずだよ？ ネット上で本名を明かすことはとても怖いから僕は充分注意していたはずだよ？

ユウタ君？

どうして？

どうして？

どうして？

僕は、初めてまりもさんに対して恐怖を感じた。

いつ僕の名前を知ったの？ 僕のことをどこまで知っているの？

「……ううん。きっと、僕が、ぽろっと、教えちゃったんだよね……？！
そう、だよね……？ あ、ううん。もしかしたら、『ユウ』

っという名前を打とうとして、勢いでユウタって打ったとか、もしくは、ユウっという名前から、ユウタっという名前を連想したのかもしれないね……。き、きつと、そう、なんだと思う……」

そうだよ。可能性はいくらでもある。そうだよ。だから『優大』じゃなくて『ユウタ』なんだよ。きつと、打ち間違えか、想像で出した答えなんだよ。

まりもさんは、いい人だよ。

襲い掛かってくる恐怖を必死に追いだす。

まりもさんが誰かという恐怖ではない。

まりもさんを失ってしまいそうで恐ろしいんだ。

だって、

僕にとって、

まりもさんは――

「お邪魔するニャー！」

「うわぁ！」

僕が一人恐怖の妄想に囚われているところ、ノックも無しに誰かが入ってきた。

「だ、誰?!」

慌てて振り返る。そこに立っていたのはジャージ姿で首にタオルを巻いた國人君だった。

「ど、どうしてここに?!」

「何を言っているの。俺と優大タンの愛の巣じゃないかここは。さあ、早速ちゅっちゅしようか」

「どうして、ここにいるの……？」

「大事なことなので二回言ったの？　もう、可愛いなあ優大タンは！」

「そ、その、どうして、ここに……」

「おわう。三度も聞かれたら本当のことを話すしかない……。実は……」

先ほどの出来事が頭をよぎる。もしかして、まりもさんは……。

「実は、家を追い出されてん。一時間くらい経たなきゃお家に入れないのです。だから優大タンのところに遊びに来たのさ……。さあ、始めようか優大……。愛の営みを！」

「どうして追い出されちゃったの？」

「わお。俺の話がほとんどスルーされとるがな。そう言うところも可愛いけどっ！」

「どうして追い出されちゃったの？」

「……実は、家にいるときに俺の体の中で眠っていた――」

「どうして追い出されちゃったの？」

「NPC化してるっ」

僕は今それどころじゃないんだよ……。

僕がおふぎけに付き合わないと分かったら、どっこいしょと重たく座って、いや、重たく寝転がっちゃった。寝転がって話し出した。

「実はさあ、今日のお昼、家でゴロゴロしてたさあ、妙に不機嫌な雛ちゃんに殺されかけてねえ。どうしたのかって命乞いをしながら聞いてみたら『デブが目障りなんだよ！ デブだから昨日優大が落ち込んで帰ったんだよ！ いい加減痩せろ！』って言われちゃって。ランニングでもして来いって言われて、お昼に外に叩きだされそうになったんだけど、暑いからせめて夜にしてってお願いしさあ。そう言うわけで今はランニングの真っ最中」

「え、僕の部屋にいるよ？」

「ふひひひひ！ 俺がランニングなんて面倒くさい事するわけないじゃん！ 痩せたいときは自分から痩せるから！ 人の言いなりになんてなるもんですか！」

「えっと、でも、走ってないってばれたら雛ちゃん怒るんじゃないの？」

「走ったかどうかなんて雛タンにわかるわけないっしょ！」

「その、僕が知らせたら……」

「……。優大。俺達、幼馴染だろ……。頼む……」

寝転がったままだと誠意も何も感じないね。

「そう言うわけでしたらここにいさせてもらうよん。内緒にしておいてね？」

「う、うん……。怒った雛ちゃんは、見たくないし……」

「ねえ。雛タンは笑ってる方が可愛いよねえ。しばらく俺に笑顔を向けてくれないけど！ ひゃひゃひゃ！」

笑い事じゃないよ。

「それにしても、優大タンも結構オタクだねえ……。俺と大差ないじゃん」

「國人君の方が、圧倒的にすごいよ……」

「え？ マジで？ いやあ照れるにゃあ」

嬉しそうにお腹を掻いた。これは國人君これは國人君これは國人君。

「優大タンが漫画とかアニメとか好きで嬉しいよ。俺に言えば何でも貸してあげるからね！ いつでも俺の部屋においで！ 一人で！」

「うん。ありがとう」

あ、そうだ。

「その、僕のクラスメイトが、今とってもアニメにはまって、僕の部屋のアニメを見尽くしちゃいそうなんだ。もしよければ、僕の

持っているアニメを見終わったら、そのクラスメイトに貸してほしいんだ……。あ、ちゃんと返してくれるし、大切に扱ってくれるから盗まれるとか汚されるとかはないよ？」

「全然いいじゃん。優大タンの相談ならどんなことでも聞くってばさ。それに同士が増えることは喜ばしい事ですりますからな！ いつでも連れてきなさい優大軍曹！」

「ありがとう國人君」

「……その笑顔が見ただけで、俺はもう満足さ……。性的な意味で……」

「あはは……」

どう反応していいのか分からないよ……。

「ところで優大タン。優大タンは一体どの作品が好きなん？ 語らおうではないっか！」

「え？ えっと、僕は、アニメじゃないけど、みつばと！ が好きだよ」

主人公のみつばちゃんとその周りの人々を描いた日常の漫画だ。とても人気がある。有名なスポーツ選手も読んでいたということでも話題になっていた。

「なるほどなるほど。確かにあれは日常系の最高傑作ですな。実在の商品が出ているところがすごいよねー」

「うん」

「あとなんと言っても背景の書き込みね。背景だけを見ていて飽きない漫画っていうのはそうそうないって」

「うん」

「あまりにも写実過ぎて作画ミスとかがよく分かるよね」

「う、うん」

「ここにあった物が次のコマで無くなっているとか、足が二重になっているとか、本物により近い絵だから分かるんだよね」

「う、うん……」

「しかし、一体どういう事情があるんだろうねあの人々は……。設定を全く出さないのにあれだけ面白いのは、やっぱり究極の日常漫画だからだろうね。理想の家族だよなあ。俺も子供が生まれたらああやって育てたいね。多分多くの人間がそう思っているだろうけど！　しかしそのためにはお隣に美人三姉妹がいるところを探さなくちゃいけないんだよね……。アヤセさんどこかにいないかなー。あ、アヤセさんって言っても『ブスは死ね（笑）』のアヤセさんじゃないからね。って、分かってるか、はは。まあでもヤンデレも好きだからどっちのアヤセさんでも俺は――」

「ちょ、ちょっと、まって！」

「ん？　どうしたの？　語らいらいことがあるの？」

実は少し前から話について行けていないのです……。

「ちょっと、気になることがあるから、調べさせてね」

逃げるためではないけれど、僕は椅子を回して國人君に向けていた体をパソコンに向けた。本当に気になることがあるんだ。けっして、話から逃げるためではないよ？

「えーっと……」

僕はブラウザを開いて文字を入力する。

調べることは、今日のお昼に聞いたこと。

『三つ葉 花言葉』

漫画のタイトルで思い出したことだ。気になっていたんだ。本当に、國人君の話から逃げるためではないからね。

「うーん……と」

適当にサイトを開いてそれを調べる。

そして、それを知る。

「……」

四つ葉が幸せな花言葉だから、三つ葉も幸せなものだと思っていた。

「何調べてるのかにゃ？ エロ画像？」

僕のそばに寄ってきて、ディスプレイを覗き込む。

「花言葉？ 三つ葉？ へえ。みつばちゃんの花言葉ってこんななんだ。初めて知ったにゃ」

「……四つ葉とは、違うんだね……」

ネットが教えてくれるのは、あまり幸せではない言葉。
不幸の連鎖の言葉。

「……復讐……」

三つ葉の花言葉は『復讐』だった。

「これは調べない方が漫画を楽しめたね。あひゃひゃ」

「……うん」

何故かはわからないけれど、かなり大きな衝撃を受けていた。
もしかしたら、まりもさんの一件が尾を引いているだけかもしれないけれど、僕はこの事実を知るべきではなかったのだと、心が警鐘を鳴らしていた。早くブラウザを閉じろと。早く忘れろと。

「あ、ついでにキーボードでのブラウザの閉じ方を調べておこう」

まあ、どうせ特に意味のない心配なのだろうけれどね。
だって。

たかが花言葉だもん。

生徒会長

八月三日の朝。

昨日の夜、國人君は僕の部屋で一時間ちょっと過ごして帰って行った。帰る時に洗面所で顔と髪の毛をびしょびしょに濡らして汗を演出していたけれど、その、臭いではなかったかな……。汗の臭いがしないって、怪しまれなかったかな……。今日雛ちゃんに会うけれど、確認できないよね。確認したら僕の部屋に来たってばれちゃうから。雛ちゃんが怒っちゃうから。

いつか國人君に直接確認しよう。

制服に着替えた僕は、國人君のことを一旦忘れて一階へ下りる。僕以外の家族がみんな揃っていた。お姉ちゃんが起きていることが珍しい。

「おはよう」

みんなが返してくれる。……お姉ちゃん以外。

「お、お姉ちゃん。おはよう」

椅子に座ってテレビを見ていたお姉ちゃんに近寄って顔を覗き込んでみる。すぐに逸らされた。

「つーん。お兄ちゃんには挨拶しないもんね」

「そんな……。ごめんね、お姉ちゃん……」

こんなに怒るなんて、初めてかもしれない……。早く許してもらいたい……。

「ふん。プロポーズするまで許してあげない」

どうやら一生許されそうにありません。

「あーあ。お兄ちゃんのせいで爽やかな朝が台無しだよ。もう一回寝よ」

「うつ」

ものすごくショックだ……。本当に怒っているよ……。僕に一切の興味を持ってくれないよ。なんだか、不安になってしまう……。…。

「ちらり」

ちらりと効果音をつけてお姉ちゃんが僕を見た。許してくれるのかな?!

「ふーん」

目が合ったらまた顔をそらされた！ ショックだよ！

「寝よ。お休みお兄ちゃん」

「あ、お休み」

おはようは言ってくれないけれどお休みはお姉ちゃんの方からしてくれた。それだけで嬉しいよ。

お姉ちゃんが出て行く姿を眺める。そんな僕に祈君が声をかけて

くれる。

「今回は長引いてるね。そんなにひどいこと言ったの兄ちゃん」

「う、うん……多分……」

「何言ったの？」

「えっと、その、私に愛されている自覚を持てって言われて、そんなの持ちたくないって言ったら、怒った……」

「……どっちもどっち」

苦笑いを見せて先ほどまで見ていたテレビに視線を戻す祈君。

うう……。何かアドバイスくれると思ったのに……。でも、これは甘えだよね。自分の事なんだから自分で何とかしなきゃ。

支度を整え家を出る。

一昨日のように家の前で雛ちゃんが待ってくれていた。

「よう」

不機嫌そうではない。昨日の國人君の一件に気づいていたのなら、多分機嫌が悪くなっているはずだ。今そうではないということは、ばれていないみたいだね。よかった。

「何安堵の表情を見せてるんだ？」

「あ、別になんでもないよ。おはよう雛ちゃん」

朝の挨拶を交わし学校へ向かう。遠回りしたがる雛ちゃんを何とか説得していつもの通学路を歩く。
やはり楠さんが待っていてくれた。

「おはよう。佐藤君と金髪の人」

「おはよう」

「……」

先ほどまでは機嫌がよさそうだったのに、機嫌が悪くなってしまった雛ちゃん。

「おはようございます、雛ちゃん？」

「……名前で呼ぶんじゃないよ」

「おはよう、有野さん」

「あーはいはい。おはようおはよう」

雛ちゃんが返した挨拶を聞いて満足そうに歩き出す楠さん。

「なんで挨拶させたがるかね……」

納得がいかない表情で雛ちゃんがつぶやいていたけれど、挨拶を交わすことはいいことだね。きっと楠さんは仲良くしたいんだよ。

このままみんなが仲良くできる世界になっていけばいいね。
そんな感じで学校までの通学路を三人で歩いた。

「有野さーん！」

校門をくぐってしばらく歩いたところで、どこからか雛ちゃんを呼ぶ声が聞こえてきた。振り返り見てみると銀髪でメガネをかけた前橋さんがニコニコと笑みを浮かべこちらに、雛ちゃんに向かって走ってきていた。

「有野さん！ お待ちしてました！」

抱き付く勢いだったけれど、自重したらしく急ブレーキをかけ雛ちゃんの目の前で止まりギュッと雛ちゃんの手を握った。

「未穂。どうしてここにいるんだ？」

「それはもう有野さんの行くところならどこへでも来ますよ！ 有野さんいつ連絡しても忙しいと言っていましたから、きつと文化祭の準備が大変なのだろうなと思い手伝いに来た次第です！」

「ああ、そっか。ありがとう」

「そんな！ 私と有野さんの仲じゃないですか！」

駆け寄ってきたせいなのか、ハアハアと荒い息で雛ちゃんを見つめる前橋さん。その表情は恍惚としている。

「はあ、はあ、はあ……」

「大丈夫か未穂。すげえ息切れてるじゃねえか」

「大丈夫です！ この息切れは喜びの息切れです！」

「そんなもんがあるのか……」

雛ちゃんが若干引いているように見えるけれど気のせいだね。

二人は仲良しだもん。

「有野さん！ 今日こそは私、二人きりで有野さんと過ごしたいです！」

「あー？ あーはいはい」

仲良しだね。

「おはよう前橋さん」

楠さんがにこやかにあいさつをする。

「……ふん。おはようございますっ」

それに対して前橋さんは不機嫌そうに返した。この二人は、あまり仲が良くないんだよね……。雛ちゃんは山での楠さんの秘密を誰にも漏らさないと約束してくれたので、前橋さんにストレス解消の件がばれているということは無いと思うけれど、とにかく仲は良くない。なんでだろうね。

そんなことより、僕もあいさつしなくては。

「おはよ——」

「はふううふうふうふう……」

僕の挨拶に対して、前橋さんは口から紫色のもやもやを出して返してくれた。間違いなく僕の幻覚なのだけれど、これは挨拶を返してくれたのと同じ意味だよな！

「佐藤君は帰ってもいいですよ?! 有野さんのサポートは私に任せてください!」

「え、仕事を途中で投げ出すのはよくないよ」

「ですから引き継ぐと言っているのです! その細い体をばっきばきに折るイメージトレーニングをしますよ!?!」

「それは……どうぞ……」

イメージトレーニングなら、いくらでも……。

「くうう……佐藤優大……!」

クチパクで「うせろ」と言ってくる前橋さん。雛ちゃんの前だとあまり酷いことは言われない。きっと雛ちゃんに嫌われたくないからなんだね。

というわけで。

僕は前橋さんからとても嫌われている。いや、前橋さんからだけではない。クラス全体がこんな感じだ。僕は肩身の狭い思いをして

いる。雛ちゃんとか楠さんとかがいなければ僕は多分耐えられないと思う。それくらい厳しい視線をもらっている。僕が悪いのだけれども、もうちょっと、いない人間として扱ってくれても、いいと思うよ。夏休み明けには、何とかなってくれているよね。

前橋さんと合流した僕らは、一度職員室で担任の先生に顔をだして生徒会室に向かった。

いったい何事だろうか。

僕らのクラスだけ呼び出されたわけではないらしいけれど、なんだか怖いね。

楠さんが生徒会室の扉を叩く。

「失礼します」

綺麗な声が夏休みの静かな校舎に響く。それに小さく返ってくる生徒会長の声。

「じゃあ、入ろうか」

楠さんが僕らの方を見て笑顔を見せたあと生徒会室の扉を開けた。

生徒会室には生徒会長と副会長の二人がいた。

「夏休みにわざわざご苦労」

重々しく口を開く生徒会長。

メガネの下で光る切れ長の目。いかにも出来る男と言った風貌の生徒会長が部屋の一番奥にある長机の真ん中に座っている。重い表情の前で手を組むその姿は某新世紀のお父さんにそっくりだった。しかし隣に座る妙に落ち着いた雰囲気を持つポニーテールの副会長

は、会長の表情とは正反対のつまらなそうな顔をして携帯ゲーム機で遊んでいる。

「……」

僕は生徒会長の姿に圧倒された。一般人とはオーラが違う。全てを見透かされているようで居心地が悪い。僕らを睨み続ける生徒会長に恐ろしくなった僕はとっさに横に立っていた楠さんの顔に視線を逸らした。そこにいたのは驚くほど感情のこもっていない眼をしている楠さん。あ、あれ、圧倒されていない……。次に僕は雛ちゃんの顔を見た。雛ちゃんはイライラしたような顔で舌打ちを連発している。あれ……。圧倒、されていないね……。最後に前橋さんを見る。何故かはわからないが鼻を押さえて楠さんの横顔をじっと見ている。誰も、圧倒されていないなかった。

改めて生徒会長を見てみた。なんだか平気だった。しかし依然として重々しい口調は変わらない。

「君たちに来てもらったのは他でもない。四人には、極秘作戦に参加してもらいたいのだ」

「ご、極秘、作戦ですか……？」

恐ろしげな響きに僕は思わず聞き返していた。

「ああそうだ。……これは、わが校の未来がかかっている作戦だ。失敗は許されない……」

「そ、そんな……」

いきなり突きつけられた非現実的な役割に僕は怖気づく。

「ど、どうしよう……」

右を見る。無感情を通り越して憎しみが見え隠れしている楠さん。左を見る。イライラを通り越してなんだかちよつと怖い雛ちゃん。雛ちゃんの隣を見てみる。相変わらずの前橋さん。なんだか平気になった。

「希望か絶望か……。それを決めるのは、君たちだ」

会長の意味深な言葉に、楠さんが答えた。

「そんなことはどうでもいいのでさっさと用件を教えてくださいませんか？」

雛ちゃんも答えた。

「なんだてめえは?! 呼び出しておいてその態度はねえだろうが！」

前橋さん……はいいや。

生徒会長は二人の放つ不機嫌オーラに驚き一瞬重々しい表情から怯えた表情になったが、それも一瞬のことですぐに元の顔に戻した。

「……き、君たちは、その、なんだ。ねえ? 副会長?」

「さっさと本題に入って」

「はい」

助けを求めた副会長にまで裏切られる形になった。

「なんだよ、みんなノリが悪いな……」

雛ちゃんがとびかかりそうになったのを僕が慌てて止めた。生徒会長が雛ちゃんの行動を見てサツと顔を防御し、来ないと分かかって一度咳払いしたのちに体勢を整えた。そしてやっと本題らしき話題に入る。

「君たち一年生？ 四人いるけど、ひよっとしてみんな違うクラス
の委員長？」

メガネをポケットの中にしまいながら、先ほどとは違い妙にフランクな感じで話しかけてきた。

「いえ私たちは一年六組の委員長です」

楠さんが答えた。

「四人もいるの？ 多いっ。いや別にいいけど。しかし君えらく可愛いな。あ、もしかして有名な楠ちゃん？ あー納得。こりゃ話題にもなるわ。モテるでしょ？ いや、答えなくていい！ 愚問だったなこれは！ ふーん。君が委員長かちようどいいや。んで、他の三人は副委員長？ あれ、よく見たら金髪の子もめちゃうくちゃ可愛いじゃん。そんな怒った顔しないでよ。可愛い顔が台無しだぜ……。なんつつて。あれ？ なに？ 君、横の子と金色と銀色でコンビ組んでるの？ いやー、確かに自由な校風だけどさー、それやりすぎでしょ。別にいいけど。もしお笑いコンビを組んでるのならぜひ文化祭で披露してよ。君たちの為に時間とるからさ。って、怒るな怒るな！ 冗談じゃんか！ ……ふう……。んで、唯一の男の子の君。

君は苦勞してるみたいだな。楠さんのマネージャーに金さん銀さんのマネージャー。忙しいなおい。でも可愛い二人に挟まれて、役得だな！羨ましいぜ！でも君も女の子みたいな顔してるね。実は女？男装少女？自由な校風だけど、制服は普通に着ようよ。スカートの方がいいジャン。夏だし。夏関係ないけど。でもスカートの方が涼しいっしょ？なんなら今からスカート用意するけど着る？なんならブルマ用意するけー」

「いい加減にしろ」

ものすごい音を立てて生徒会長が椅子ごと床に転がった。何が起きたか見えなかったけれど、どうやら副会長が生徒会長を思いつき蹴り飛ばしたようだ。ちょっとだけ、お礼を言いたい気分。

「いてえよ副会長！何すんの！」

床に転がる会長が講義をする。それに対し副会長。

「本題」

と短く言う。ちなみに先ほどからずっとゲーム画面から目を離していない。表情も暇そうな顔のままだ。

「……ったく……」

立ち上がり椅子を元に戻して浅く腰掛ける。

「じゃー副会長が怖いから本題に入るか」

僕、今日初めて素の会長を見ることになったのだけど、集会であ

いさつをする姿からは考えられないくらい会長職につく人間らしくない。その、失礼かもしれないけれど、仕事はできなさそう……。

「実はさあ、文化祭で生徒会が主催する出し物が決まってさあ、それについて早めに準備をしたいと思っと思ってさあ」

さあ。

「文化祭の出し物つつたらミスコンとか、ミスターとか、ベストカップルとかそういったチャライものが多いじゃん？ でもさ、でもさ、それじゃありきたりでつまんねーじゃん！」

じゃん。

「そこで、生徒会の精鋭たちが考えたわけ。主に俺が。チャラくない出し物。来たねこれ、俺の時代。チャライコンテストなんて時代遅れだYO」

生徒会長。あなたには、何かに対してチャライと言う権利が、無いです。

まだ生徒会室に入って数分だけれど、ものすごく疲れた気がする。会長が偉そうにふんぞり返って自慢げな顔をして言った。

「俺が考えたイベント、聞きたいっしょ？」

「「早く言え」」

楠さんと雛ちゃんと副会長が見事にハモった。

「はい」

偉そうな態度を改めた会長。と言っても相変わらず椅子に浅く腰掛けていたので姿勢がいいとは言えないが。

そしてとうとうそれが聞ける時がやってきた。

「俺たちが開催しようとしてるのは『ベストブラザー・シスターコンテスト』。どうよ。斬新」

「……それはつまり、生徒の兄弟姉妹を対象にしたコンテストというわけですか？」

楠さんが少しだけ嫌そうな顔で聞いていた。

「そゆこと。君兄弟いる？」

楠さんが即答する。

「いません」

あれ？ 僕は疑問に思い聞いてみた。

「え？ お兄さんは？」

「いません！」

僕を睨み付けながらそう言って、思いっきり足を踏んづけてきた。

「い、い、いった……！」

うずくまる僕の上で楠さんと雛ちゃんの言い合いが始まった。

「てめえ！ 優大に何しやがった！」

「別に何も。サッカーの反則でシミュレーションって知ってる？
多分それ」

「ハンド以外知らねえよ！」

そこに混ざってくる前橋さん。

「そーです！ サッカーの反則はハンド以外なくすべきです！ 覚えきれません！」

「それ人としてどうなの」

「なっ！ いま有野さんを見下しましたね？！ 許しませんよ！
大体ですね楠さん、私は以前から言おうと思っていたのですけどね、
有野さんに対してだけかなり態度が悪いですよ！ もっと敬うべき
です！」

「敬うって、尊敬するっていう意味だよ。有野さんを敬うって、使
い方間違ってるでしょ。有野さん、尊敬できるところないから」

「んなー？！ こここの人は一体何を言っているのですか！？ あ、
あ、有野さん！ 気にしないでください！」

「そんなことより優大に何しやがった！ 謝れ！」

「優大優大うるさいね。それ誰？」

「優大は優大に決まってるだろうが！ 優大以外に誰がいる！」

「ちょっと、一回の発言で優大って三回使わないでもらえる？ ルール違反だし気分が悪くなる。おえ」

「んな？！ て、てめえ……！」

雰囲気の不穏すぎるよ！

「お、落ち着いて二人とも！ いや、三人とも！」

頭上に立ちこめる重苦しい空気を散らすように勢いよく立ち上がって壁となる僕。足はまだ痛いけれどそれどころじゃない。このままでは全面戦争に突入しかねないよ！

「心配してくれてありがとう雛ちゃん！ 僕何もされてないよ？！ ただちょっと靴ひもがほどけたから結んでいただけなんだ！」

「お前今上履きじゃねえか。ひもねえよ」

「え、あ、その、……心の、靴ひも……」

「何を言っているんですか佐藤君。そんな詩的な表現で有野さんの気を引こうとしたってそうはいきませんよ？ その前にそれ寒いです。ダサいです」

「う……」

確かに、心の靴ひもなんて意味が分からない……。

「まあそう言うわけで、佐藤君は心の靴ひも（笑）を結んでいただけなので有野さんが怒る意味が分からない」

「優大痛がつてたじゃねえか。お前が何かしたんだろう。ってゆーか、足踏んだんだろ」

「酷い言いがかり。佐藤君、私君に何かした？」

「し、してません」

「だよね。有野さん、私を怒るの止めてくれる？」

「若菜……。お前、また優大を脅し——」

「わー！ わー！ わー！」

それは内緒だよ雛ちゃん！

「とにかくー！ 兄弟を探しているんですよ！ 会長！」

話を戻せばこの争いはうやむやになるはずだ。僕は強引に軌道修正をした。

「え？ あ、まあ、そうだけど。君らの話し合いは終わったのか？」

「はい終わりました！ それで、僕らが呼ばれた理由はなんですかね？！」

「んー、クラスメイトの達の中から兄弟を差し出してくれる人を探してもらおうと思って。そんなことより、君ら話し合いの続きはい

いのか？」

「ええ話し合いはもう終わりです！ 兄弟がコンテストに参加してくれそうなクラスメイトを探せばいいんですねっ」

「そうそう。できれば何か特徴のある兄弟がいいんだけど、ところで君らの話し合いは――」

「もう本当に穿り返さないでもらっていいですか！ お願いします」

もう喧嘩は見たくないよ！ なんて蒸し返そうとするのこの会長？！

「なんだか結論出ないまま喧嘩が終わったから気になって」

「……空気読んで……」

呆れたような顔でゲームをする副会長がつぶやいた。ありがとうございますと心の中で言っておきますね。それにしても、この騒動の中ゲームを続けるなんてすごいなあ。

「まあいいや。んで、結局楠ちゃんには兄弟いんの？ できる事なら話題の人間から兄弟出してもらいたいんだけどさ。どうなの楠ちゃんの横に立ってる男の子」

「え？ その……」

何故僕に聞いたのだろう？ よく分からないや。でも聞かれたから答えないとね。

答える前に一度楠さんの顔を見る。もう足を踏まれたくないもん。楠さんはにっこりとほほ笑んでいてくれた。この微笑は、言ってもいいってことだね。僕は生徒会長に教えてあげた。

「お兄さんがいます」

「ちょっと！」

楠さんが僕の太ももに膝をぶつけてきた。

「い、いたあ！？ な、なんで？！」

痛む太ももをさする僕を楠さんが怒った顔で睨み付けていた。

「言わないでって言ったでしょ！」

「え？！」

言うなよ？分かってるよな？の笑顔だったんだ。ゴメン……。間違えた……。間

「おい若菜！ 今のは見たぞ！ 優大にモモカツ入れただろ！」

楠さんを指さし非難する雛ちゃん。

「？ モモカツ？」

雛ちゃんの言葉に首をかしげる楠さん。本当に何かわかっていない様子だ。

「とぼけるな！ 今膝蹴りしてたじゃねえか！」

「ああ、これのこと」

と言ってまた僕の太ももに膝を入れてきた。痛い。

「再現すんなよ！ 可愛いそうだろう！」

僕の腕をつかみ楠さんと僕との距離をあげようとする雛ちゃん。

「あ、ごめんごめん。確認作業が必要だと思ったから。だって、モモカツなんて初めて聞いたから」

「はあ？ それはモモカツだろう！」

「え？ どれのこと？ ちょっと佐藤君にやってみせて」

「だから、これのことだよ……ってやらねえよ！」

び、びっくりした。両足が使用不可能になるかと思った。

「私の学校ではモモカンって男子が言っていたからモモカンかと思ってた」

「いや、モモカツだろ、なあ、優大？」

「うん。僕らの学校ではモモカツだったね」

「未穂もそうだよな？」

突然振られた前橋さんが、何故か慌てたように言う。

「え?! あ! ハイそうです! モモカツ?でした! モモチなんて聞いたこともありません! モモチではなくモモカツ?でした!」

どうやら、

「……未穂の学校はモモチって呼ばれてたのか……」

モモカツではなかったらしいね。

「え。……あ、はい。そうです……」

何故かとても悲しそうな顔をして俯く前橋さん。場所によって呼び方は違うものなのだからそんなに落ち込まなくてもいいと思うけれど。それだけ雛ちゃんと一緒によかったということだね。

「なんだ。みんなバラバラだな」

「そうだね。おもしろいね」

色々な場所の色々な呼び方を聞くの、僕は好きだ。

「なんならもう一回やろうか?」

「え?! 遠慮させてもらいますけど?!」

楠さんの提案を僕は拒否させてもらった。

「残念」

にっこりと笑いながら言う楠さん。悪戯っぽい笑みも輝いているね。

「残念じゃねえよ。謝れよ」

雛ちゃんが僕の為に言ってくれる。楠さんはそれに素直に従っていた。

「ごめんね佐藤君。痛かった？ 撫でてあげるね」

「えっ」

そんなのなんだか恥ずかしいよ！

「卑猥な事すんじゃないよ！ もう許すから優大に触るな！」

楠さんが僕の足に向けて伸ばしていた手を払う雛ちゃん。

「別に有野さんに許しをもらってもね」

「え、も、もちろん、僕は気にしてないよ」

「そ。ありがとう」

そう言って、綺麗に笑ってくれた。足の痛みなんてもうどうでもなくなった。

「ねえねえ、君たち」

あ、しまった。また生徒会長のことを放っておいてこちらで盛り上がってしまった。怒られてしまう！　と思ったけれど。

「俺の学校ではフトモモクラッシュって呼ばれてたんだけど聞いたことない？」

話に入りたかったようだ。でも、もうその話はいいのでは……。僕ら四人が、なんと云えばいいものか悩んでいると、

「それはない」

と副会長が言った。

「なんだよ。ならお前の学校ではなんて呼ばれてたんだよ」

少し怒ったように言う会長。しかし副会長は動じない。

「黙って。そんなことよりさっさと本題。兄弟について」

「あ、そうだった」

副会長は会長をコントロールする役目を担っているんだね。

「楠ちゃんは兄貴がいるんだ。じゃあちよつと、兄ちゃんを説得してくれよ」

「いえ、私の愚兄などコンテストに出場できる身分ではありません。説得する必要はありません」

「楠ちゃんがかわいいってだけで充分話題になるからいいよ。んじや、説得よろしく」

「ですから、私は――」

「残りの君たちは？ 特に金髪の君は？」

楠さんが何かを言おうとしたけれどそれを無視する形で、ターゲットを雛ちゃんに変えた。

「私？ 兄弟なんていねえよ」

「あれ？」

國人君がいるのに、と思ったけれど、そう言えば雛ちゃんは國人君のことを周りの人々に知られたくないと思っているのだったね。言わない方が雛ちゃんの為になるよね。

「なんだマネージャー君、あれって言ったな。金髪の子にも兄弟はいるの？」

「え、そ、その」

いないと言い切れない僕の罪悪感。小心者すぎるよ僕。どうしよう……。

困っているところ、僕の悩みを楠さんが解消してくれた。

「いますよ。有野さんにもお兄さんいるみたいですよ。確か名前は國人」

「な!？」

雛ちゃんが驚き楠さんを見る。

「一昨日聞きました。兄がいると」

そう言えば、そういう話をしたね。

「て、てめえ……」

怒りだしそうな雛ちゃんをなだめる。

会長は二人に兄弟がいると聞いてご満悦だ。

「これで二人確保だな」

「ちょっと待て。誰も出場させるなんて言ってねえよ」

「そうです。私は兄なんかを学校に呼びたくないです」

二人が怒る。しょうがないね。

「うるせえな。もう決定」

「なんでお前が勝手に決めるんだよ。お前の兄貴じゃねえだろ」

「勝手に決めるなんて横暴ですよ。よくそれで生徒会長が務まりますね」

責め続ける二人。会長は困ったように眉根を寄せる。

「あーうつせー。副会長なんとかして」

突然の会長のふりに副会長が面倒くさそうに顔をしかめた。また会長を突き放すのかなと思ったけれど、嫌々ながらも手に持っていたゲーム機において、床に置かれたカバンの中から何かの資料を取り出し眺めはじめた。

「……一年六組が文化祭でする予定のお店は『女子高生が握るおはぎ喫茶』……。いかがわしい。これは再検討の必要があるかも」

再検討？　今は夏休み中だからそうになったら新学期まで何もできないよ。少し大変になっちゃいそう。

楠さんもそう思ったようで抗議の声を上げる。

「ちょっと待ってください。一度は通した企画なんですから今更そんなことを言われても遅いです。会議だって何度もしているんですから」

「でも、これは高校生としては不健全。再考の必要がある」

「突然すぎます。何故今さらなんですか」

ここで副会長が顔を上げ表情のない顔を楠さんに向けた。

「ただ脅しているだけ」

楠さんの眉がピクンとはねた。
再び資料を見る副会長。

「手作り、衛生面が気になる。他のクラスも飲食系が多いし、数を減らす必要があるかも。そもそも、この案はお金儲けが目的のような気がする。文化祭はそういう目的じゃない。でもなにより、『女子高生が握る』というのがかなり引かかる。喫茶店というより風俗に近い匂いがある」

「……私たちが兄を説得すればそのままでもいいんですか？ それおかしくないですか？」

「おかしくない。文化祭が盛り上がればそれでいい」

「なるほど。最低ですね。兄を呼びたくない私と有野さんは、兄が来ることで文化祭を楽しむことができますけど」

「全校生徒の事情はあなた方二人の事情に優先する。比べようもない」

「本当に最低ですね。分かりました説得します。出場するかどうかは保障できませんが」

にっこりと笑って承諾した楠さん。表面上はあまり怒っていないけど、多分心の中ではとても怒っている。

「努力に期待する。あなたは」

副会長は雛ちゃんに目を向けた。

「……ふん。ふざけんなよ」

「断る？」

首をかしげるその姿も、今見たら裏にある感情がよく見えて気分がよくない。

「誰が断るか。優大が提案した案を潰してたまるか。絶対に連れてきてやるよ」

「期待している」

「黙れ」

「黙る」

それだけ言って、資料を置いてゲームを始めた。なんだか、嫌だ。

「ご協力に感謝するぜ。うっへっへ」

とても悪そうな顔の生徒会長。悪役だよ……。

「銀色の子とマネージャー君は兄弟いるの？」

「私はいません」

「あ、僕はいます」

「んじゃー、ジャーマネ君も兄弟連れてきてよ。女の子たちが頑張るんだから君も頑張らなきゃなあ！」

「はい……」

祈君は大丈夫だと思うけど、姉ちゃんは怒っているから……。困ったな。つれてこられるかな。

生徒会室での一件は、とても不穏後味を残して終わった。

よく脅される日

あれからすぐに生徒会室を出て校外へ出る僕ら。

「なんなんだよあいつら！」

生徒会室からずっと雛ちゃんの機嫌が悪い。雛ちゃんだけじゃない。楠さんも前橋さんも機嫌がよくない。当然だ。無理やり嫌なことをさせられるのだから。

「ふざけやがって、むかつくな」

「そーですよね！ 有野さんを怒らせるなんてふざけているにもほどがあります！」

確かに無理やりはよくないと思うけど、文化祭の為だと考えると仕方がないかなと納得もできる。でもそれは僕がお姉ちゃんと弟のことが好きだから言えるわけで、お兄さんのことを世間に知られたくない楠さんと雛ちゃんにとっては到底納得できることではないのだろう。

「なんであんな恥ずかしい兄を世間の目にさらさなくちゃいけないの……」

楠さんのお兄さんは見たことがないが、きっと楠さんのように素晴らしい人に違いない。しかし楠さんはオタク趣味の兄のことを恥ずかしく思っているようでそれをばらしたくないようだ。雛ちゃんもそれとよく似た思いなのだろう。

「ストレスが溜まる……」

楠さんが少しだけ俯きおでこに手を当てふうと息を吐いた。そして思いついたように顔を上げて言う。

「そうだ。変質者を追い出しに行こう」

つまりあそこでストレス解消をしに行くということだ。

「でも、馬山さんはいい人だから、追い出さなくても……」

「いい人だろうがいい人じゃなろうが関係ない。追い出したいから追い出すの」

「え、えっと、でもね、雛ちゃんも、馬山さんがあそこにいること認めてくれたんだよ？」

「それはつまり追い出せなかったってことでしょ」

「ちげえよ。追い出さなかったんだ」

「そーですよ！ 有野さんに出来ないことが存在するとも思っているんですか？！ 楠さんは失礼です！」

何のことは分かっている前橋さんだけど、とりあえず雛ちゃんの味方になるみたいだ。

「私に任せて佐藤君。私なら追い出せるから」

「え、その、僕は別に……」

追い出さなくてもいいけれど……。

僕の気持ちを感じ取ってくれたのか、雛ちゃんと言う。

「待てよお前！ 優大は追い出したくないって言ってたから、私は追い出さなかったんだぞ！」

びしっと楠さんに指を突きつける雛ちゃん。その横で前橋さんが話に入れないようで悔しがっていた。

「本当は、追い出したいんだよねー？」

楠さんが首をかしげて僕に問う。

「えっと」

「よしわかった。任せて」

う。答えてないのに話が進んでいるよ。どんな方法で追い出そうとするんだろう……。馬山さん、大丈夫かな……。

「あ、あの、あそこに行くのなら、僕も行くよ」

「へえ。心配してくれるんだ。ありがとう」

「ま、まあ……」

どちらかと言えば……馬山さんの方の心配だけど……。

「あんなところに二人だけで向かわせるなんて襲われちゃうじゃね

えか！」

雛ちゃんも僕らのことを心配してくれる。でも、大丈夫だよ。

「馬山さんは僕らを襲わないよ？　雛ちゃんも昨日見たでしょ？」

「あのおっさんのことじゃねえよ！　道中若菜がお前を襲うだろ！」

「襲わないから……」

「……襲われればいいんです……」

小声で前橋さんが言っていたけれど僕以外聞こえていなかったようだ。

「誰も佐藤君のことなんて襲いません」

「うるせえ痴女っ！　優大が行くなら私も行くからな！」

雛ちゃんの発言に前橋さんが大きな声を上げる。

「え？！　そんな！　有野さん今日は私と二人きりで過ごしてくれると約束してくれたじゃないですか！」

「そんなのしたっけ。覚えてねえ」

多分、あさ学校についた時にそれらしいことを言われていたよ。

「駄目ですよ有野さん！　今日は私の日ですから私のこと以外考えないでください！」

「なんで私の予定を人に決められなきゃならねえんだよ」

「約束したからです！ もうっ、ダメですからね！」

そう言って雛ちゃんの腕をがっしりとつかみ来た道を引き返し始めた前橋さん。

「有野さんのお家に連れて行ってくれるものだと思っていたのがどうやら違ったようですね！」

「何しやがる！」

「私の家に行きましょう！ 今日は私と過ごしてもらおうんです！」

「放せ！ 優大が襲われちまう！」

「大丈夫です！ ……襲われようがどうでもいいです……」

またぼりつつぶやいたが雛ちゃんには聞こえていないみたいだ。ずるずると引きずられる雛ちゃんに僕は声をかけた。

「僕は大丈夫だよー。何も心配することは無いよー」

「大丈夫なもんか！ 頼む放してくれー！」

「はあはあ……今日は、有野さんと一緒に……はあはあ」

「僕は大丈夫だからねー？」

「大丈夫じゃねえよ！ 放せつての！」

終始抵抗していたけれど、結局前橋さんに連行されてしまった雛ちゃん。僕の心配をするのなんかより友達と遊んだ方が楽しいからこれでよかったんだと思う。

「じゃあ行こうか佐藤君」

どこかいい表情の楠さんが山へ向かって歩き出す。

「あ、うん」

昨日と同様に友達と秘密基地へ向かう僕。なんだか楽しいね。

制服のまま山を登り秘密基地にたどり着いた。

夏の日差しの下、馬山さんは暇そうにぼうつと空を眺めていた。

「こんにちは変質者さん」

何のためらいもなく馬山さんのそばにより挨拶をする楠さん。変質者という認識を持っている男の人に怯えずに近づけるその勇氣は凄いと思うけど危険を伴う気がする。本当の変質者だったら大変なことになってしまうよ。

馬山さんは一度楠さんを見て、昨日と同じように楠さんの後ろに立つ僕の姿を覗き込んできた。

「なんだ少年。またまた来たのか。しかも連れてくる少女を変えて

再来するとは。少年は結構遊び人なんだな」

「ち、違うよ」

「違うのか。昨日連れてきたヤンキーも可愛かったけど今回のねーちゃんもまた可愛いな。可愛いっつか、美人か」

「セクハラですか？」

さっそく強い言葉を使うね楠さん。仲良くする気ゼロだよ。

「どこがだよ。褒めただけじゃねえか」

「変質者に褒められたところで不快感しか得られません。不快に思うということはセクハラと言っても過言ではないはずです」

「過言だろ。で、今日は一体どういったご用件で？」

「ここから出て行ってもらっていいですかね」

バシツとストレートに言いますね。かっこいいです。

「なんだよ。その話は昨日終わっただろ少年」

「それは私とは関係ありませんから。佐藤君がここにいてもいいと許可しても私は許可しません」

「えー。そこを何とかしてもらえませんかね。俺家が無くて困ってるんだよね。ここを追い出されたら住所不定無職にもどっちます」

「大丈夫です。ここにいたところで住所不定無職は変わらないので。さあっと失せてください」

「笑いながらきついこと言うな……。少年。少年は、優しい人が好きなんだよなあ？」

「え、うん」

昨日も聞かれたよ。何の確認だろうか。

「きつい人と、きつくない人はどっちが好き？」

「きつくない人……」

「きつい人ときつくない人どっちが嫌い？」

「それは、もちろん、きつい人の方が、好きじゃないけど……」

「優しい人が好きで、きつい人が嫌い」と

「う、うん」

「なるほどなあ。それで、美人のねーちゃん。俺、ここに追い出されたら困るんだけど」

「知らない。出て行ってください」

「きついな。少年に嫌われてもいいのか」

「佐藤君はもう私の性格が最悪だと知っていますから。この程度で

印象が変わるとは思えません」

「……はあん。なるほどなあ……。困ったなあ。少年。何とかしてくれねえか」

そうだね。ここは、僕が説得する場面だよね。馬山さんは今大変な状態なんだから助け合わなくちゃ。

「う、うん。その、ね、楠さん。人が困っていたら、助けてあげなくちゃ、いけないと思うんだ」

「なら今私が困っているから助けてよ」

う。

「で、でもね、あの、馬山さんは、家が無いから、その、今の楠さんよりも困ってると思うんだ」

「なに？ 君は見ず知らずの困っている不審者は助けて困っている友達は助けないっていうの？ 私達ってその程度の関係だったんだ。ショック」

「え、いやその、もちろん、楠さんは大切な友達だけど……」

「すごく困っている変質者を助けるか、すごくじゃないけど困っている大切な友人を助けるか。どっちを選ぶの？」

「そ、その……」

そう言われると、困る……。

「駄目だ少年。このねーちゃんは俺たちの手に負えない。ここは少し強硬手段に出るしかねえ」

「きよ、強硬手段?! 暴力はダメだよ!」

慌てて楠さんの前に出て馬山さんに向けて両手を突き出す僕。

「んなことしねえよ。犯罪じゃねーか」

「あ、そ、それなら、よかった……。なら、強硬手段って、何をするの?」

「その辺の道端で倒れて保護されたところでそのねーちゃんの名前を連呼するとか」

「やめてくださいよ。迷惑かけないで」

「まあそういうこった。迷惑をかけられたくなくちゃここにいさせてくんねえかな」

ものすごく強硬手段だね。迷惑にもほどがあるよ。

「脅すっていうんですか?」

「脅すつつたって、なあ。そんな大げさなことじゃねえし、俺をここにいさせてくれりゃあ全部丸く収まるだろ」

「……脅すなんて卑劣な行為、私は最低だと思います」

「え?!」

楠さん、僕を脅していた気がするけど……。

「何佐藤君。何か言いたいことでもあるの?」

「え?! いや! その……あ、生徒会長も脅してたし、流行ってるのかなーって……」

「……もう本当にね……。ありえない。今日はありえない日。ちょっともう私限界に近いから行ってくる。ついてこないでよ」

楠さんの中で馬山さんとの話は終わったのか、僕と馬山さんを残し森の奥へ進んでいく。すぐに姿が見えなくなり、残った僕らの間にセミの声が響いていた。

「少年。あのねーちゃんはどこへ行こうっていうんだ。奥に何かあるのか」

「何もないけど、えっと、日課……? みたいなものをしに……」

「ああ、日課があるのか。それで、不審者の俺を追い出そうとしていたわけか。悪い事しちゃったな。出て行くつもりはねえけど。あとあのねーちゃんに謝っておくか」

「それがいいかも」

少しだけ沈黙が流れる。馬山さんはぼうつと空を眺めて、僕はただ突っ立っている。あ、そうだ。暇なら四つ葉のクローバーを探してみよう。雛ちゃん欲しがっていたし。

シロツメグサに近づき四つ葉を探す。
やっぱり見つからないね。

「あ、そう言えば、馬山さん」

「なんだ少年」

「僕、三つ葉の花言葉調べてきたよ」

「調べるなって言ったのに。残念だったろ」

「うん。もっと幸せなものだと思ってた」

「やっぱり知らねえほうがいいってことあるんだよな」

「それは、大人になるということ？ 大人にならない方がいいって言う意味？」

この前聞いた。馬山さんが言うには、成長するというのは心の退化だと。知ることを成長というのであれば、子供のままでいたかったと。そんな感じのことを言っていた。

「まあな。何も知らない方が幸せな場合が多いんじゃないかな。無知な子供時代の方が楽しいもんな」

「でも、色々知っていれば、その分世界が広がるんじゃないかな」

「広がるかもなあ。でも子供の世界だって無限だろ」

「そう、なのかな……」

「広い世界を知らなけりゃ、狭い世界の中で無限に生きて行けるのさ。何も知らない子供は自分で何でも生み出せるからな。それが幸せかどうかは分からねえけど、やっぱり俺は子供のままでいたかったぜ。社会が許してくれねえけど」

「その結果がこれだぜ」と言って、自嘲気味に笑った。

「馬山さんは色々知っているから、立派な大人だね」

「浮浪者を見て立派とか言うなよ。冗談にしてもきついぜ」

「本心だよ。馬山さんみたいなの、なんでも知っている大人になりたい」

「なんで俺が知識の貯蔵庫みたいな扱い受けているのか分かんねえな。それに、なんでも知っていてもそれを使えなけりゃあ意味がないんだぞ」

そう言って、日向から日陰へ移動した。暑くなったのだろう。

「知識とか情報ってのは……まあ、この場合は情報の方か。情報は強者の味方さ。俺みたいなのが持っていたところで使う場面が訪れることはねえの」

「使う場面が無いの？」

「無いさ。あるわけがない。浮浪者に何か聞きたいと思うか？ 思わねえだろ」

「……なら、自分から向かっていけばいいんじゃないかな」

「その足を持っているのは、また意味の違う別の強者なのさ」

「馬山さんは、強者じゃないの？」

「全然違う。強者は負け惜しみなんて言わねえの。勝つからな」

今言っていたのは、負け惜しみだったのだろうか。何に負けたのだろうか。

「えっと、なら、みんなで力を合わせれば、何とかなるんじゃないかな。きつとなんにでも勝てるよ」

「力を合わせたところで、弱者の味方は弱者だけなんだよなあ。どうしようもない循環にはまっちゃってる世界なんだよ」

そうなのかな……。何も知らない子供である僕は、何もわからない。

「その、弱者は、どうしても強者になれないの？ 馬山さんの言い方だと、どうあがいてもその関係が変わらないように聞こえたけど……」

「弱者は、最初から最後まで弱者なんだよな」

「でも、それじゃあ、今どん底にいる人は、諦めなくちゃいけないの？ 弱者だからって、夢見れないの？」

僕は今とても弱いところにいると思う。だとしたら、これから先

人生が変わっていくのかななんて、考えたらダメなのかな。

「弱者に見えて強者ってのはいるし、強者に見えて実は弱者だったってのもいる。だから、現状を見てそいつがどっちかを判断することとは出来ねえけど、少なくとも俺は完全に弱者だ。もう分かってる」

「で、でも、今の姿だけじゃあ何とも言えないって、今……」

「心の問題さ」

そう言って、お尻に敷かれたシロツメグサを撫でた。

「弱者が強者に勝とうと思ったら、方法は一つ」

その一つの方法を、僕は聞かなかった。

知らない方が幸せだって言ってたから。

馬山さんも言わなかった。

「なんだかうるせえな。巨大なセミでもいるのか？」

さっきからずっと鳴いていたけれど。馬山さんには聞こえなかったのかもしれない。この声をセミの声と認識せずに、ただの雑音としか認識できていなかったのかもしれない。セミの声がうるさいといった雛ちゃん以上に、馬山さんは大人なんだ。

「ところで少年。少年の本命はどっちなんだ？」

「え？ 本命って、何のこと？」

「決まってるじゃねえか。金髪か黒髪か。どっちなんだよ」

突然何を聞いてくるのかなこの人は！

「ほ、本命とか、僕らはただの友達だよっ」

「何言ってるの。あんなに可愛い二人と接して惚れねえわけがない。どっちなんだ、正直にこの浮浪者に教えてみな」

「ぼ、僕は……」

なんだか、目の前空間に選択肢が浮かんでいる気分だ。

楠さん

雛ちゃん

⇒ どちらでもない

こんな気分。とりあえずセーブをしておこう。

「えっと、二人とも、友達だけど……。あ、雛ちゃんは親友って言うってくれるから、雛ちゃん？ でも、今問われていることはそう言うことじゃないし……。楠さんとってもいい人だし、雛ちゃんもとってもいい人だし……。楠さんを見るとドキドキするけど、雛ちゃんを見てもドキドキするし……。どっちも同じくらい大切だし……」

「どっちが好きなんだよ」

「どっちかって聞かれたら、困る……。その、どっちも、好き……とか……。あ、で、でも、この好きっていうのは、友達としてっていう意味で……」

「優柔不断だな少年、情けねえぞ。それともなんだ。三人目の選択肢が必要か？」

「三人目？」

と言われて、僕は真っ先にまりもさんが頭に浮かんだ。

多分、まりもさんという選択肢があれば僕はそれを選ぶと思う。散々迷った挙句、顔も知らないまりもさんを選ぶと思う。でも……、昨日……。

「なんだ少年。表情が暗くなったぞ。三つ目の選択肢はいらないか」

「……いる、けど……」

少しだけ不安がある。

「へえ、いるならそいつのことが好きなんだな。そう言うことだろ」

「え？ あ！ そ、そそそんなことないですよ?!」

「贅沢な奴だな。可愛い二人を振ってもう一人のところへ行くなんて」

「ふ、振るとか、そんなの、僕してないよ！ そ、それに、その人のこと、好きか、どうか、分からないし……、みんな、同じくらい好きだし……」

「ふーん。そうか」

ニヤニヤする馬山さん。なんだか、嫌な気分だよ。

「はっきりしとけよ少年。思わせぶりな態度で過ごしていると、いつか後ろから刺されるぜ」

「だれもそんなひどい事、しないよ!」

「信じてるねえ。刺されたことねえんだな……」

「え?! 馬山さん刺されたの?!」

痴情のもつれで刺されちゃったの?!

「まあ、一度お店でさされたこともあるけどな。しかし基本男はさす方さ。色んな意味で」

え? どういうこと?

よく分からない……。

……?

「……? ……。………はっ!」

気づいてしまった!

「な、な、な何を、いい言ってるの?!」

馬山さん、なんだか恥ずかしいこと言ってるよね?! って、さされたことあるの!? きよ、興味なんて、ナイヨ!

「そ、そのっ、えっと……」

別に詳しく聞きたいとか、そう言うの、一切ないから！

「下世話な話はもうやめるか」

「え？」

馬山さんが森の奥に視線をやった。そちらを見てみると、楠さんが帰ってくるところだった。馬山さんの話が聞けなくて残念だななんて思っていないからね。

「おかえり楠さん」

「……ただいま」

何故か冷たい目で見られている。

「ど、どうかしたの？」

「別に？ あーあ。ちょっと疲れたから休憩していこうか」

ふうと溜息のように息をついて僕の隣に座ってくれた。ちょっと、緊張しちゃうよ。

「少年。黒髪のねーちゃんに四つ葉でもプレゼントしたらどうだ」

「え？ あ、うん」

「いないから」

楠さんがそう言って、また僕を冷たい目で見てきた。なんで……？

「木の陰に 鳴かず佇む 黒い蟬」

「うるさい」

僕の頭が悪いからか、馬山さんが詠んだ俳句の意味は全く分からなかった。

「黒髪のねーちゃんは四つ葉の花言葉知ってんだな」

「知ってますけど。常識じゃないですか」

「常識ねえ。少年は知らなかったみたいだけど」

「佐藤君は仕方ないです。常識ないので」

そ、そうだったんだ……。

「愚か者だね君は。愚者と呼ぶにふさわしいよ」

「ご、ごめんなさい」

なんだか、酷い言われようだよ……。

「でもタロットでいうと正位置かな」

「いえ逆位置です」

「ん？ あはは、そうか。なら力の逆位置の方がいいんじゃないの」

「そうですね」

よく分からない言葉が二人の間で交わされたけれど、僕は今貶されたの？ 褒められたの？

やっぱり知識って大切。

何か気になったのか、楠さんが大きな目を細めて馬山さんを見る。

「馬山さんでしたっけ？ 馬山さんは何故ホームレスに？」

「別に。なりたいたらなっただけ。つかさ、敬語止めようぜ。少年はフランクに話しかけてくれてんだ。見習ってフランクに接してくれよ」

やっぱり敬語を嫌がる馬山さん。楠さんはどうするのか？

「あなたとの間には壁を作っておきたいので」

馬山さんの要望は一切聞かないらしい。すごいや。

「あはは。正直なねーちゃんだな。まあ、そりゃそうか、俺ホームレスだし。敬意を表してるわけじゃねえなら、別にいいか」

敬意を表されたくないんだ。だから敬語が嫌なんだね。どうしてかな？

「馬山さんはなんで敬語を嫌がるの？」

「対等に話したいじゃん。上下関係とか、俺嫌いなんだよね」

「へえ……」

対等に話したい。なんだか、上司とか先生になって欲しいな。

「で、ホームレスになった理由は？」

「まだその話すんのかよ。言っただろ、なりたいたらなったんだって」

「つい最近の話ですかそれ」

楠さんの指摘に馬山さんが驚いたような顔を見せた。

「なんでそう思う？」

「服や靴が綺麗だからです」

確かに、馬山さんのかっこうは普通の大人の人の格好だ。目に見えて汚れてはいない。

「ああ、なるほど。次来る時まで汚しておくから気にしないでくれ」

「そう言う問題じゃないでしょう」

「そう言う問題じゃねえか。ま、別にいいじゃん。理由なんて。よくある話さ」

馬山さんが立ち上がった。

「逃げるんですか？」

「逃げねえよ。腹が減ったんだ。もうお昼だろ」

僕は携帯電話を取り出して時間を確認した。十二時少し前。確かに
お昼と言えはお昼だ。

「少年たちもう帰った方がいいんじゃないか。お家でおいしいご飯が待ってるだろ」

「あ！ そうだ！ 僕ご飯作らなきゃ！」

昨日は誰もお昼いらないみたいだったからよかったけれど、今日は祈君もお姉ちゃんもお昼いるだろうから作らなきゃ怒られてしまう！

「少年が給仕当番か。忙しいな」

「そんなことも無いよ」

楠さんと一緒に立ち上がる。

「じゃあ馬山さん。また」

頭を下げる僕と動かない楠さん。

「はいはいまたな。んじゃ、俺はここを使い続けるということ、今日のお話はおしまい」

苦笑いを見せて、秘密テントの中を漁り始めた馬山さん。

「……なんだか、いろいろと不満が残るけど……」

口をとがらせていた楠さんだったが、馬山さんに話す気がないのだとわかると素直に山を下りてくれた。僕もそれについて山を下りた。

サトウユウタ

夜。

晩御飯お姉ちゃんと祈君の三人で晩御飯を食べる。

お昼はみんな別々だった。

祈君は友達と遊びに出かけていて、お姉ちゃんは僕の作ったチャーハンを部屋に持って行って食べていた。正直、かなりつらかった。でも晩御飯は一緒に食べてくれるみたいだ。

「ごめんねお姉ちゃん」

ご飯を食べながら何度も謝る。

「……ふん」

ずっと怒ってるよ……。

「お姉ちゃん、どうしたら許してくれるの？」

「プロポーズしてくれたらって言ったじゃん！」

「無理だよ……」

「じゃあダメ！」

「その、他の方法はないかな……」

「じゃあもうあの子家に連れてこないで！ そうしたら許さないことも無い」

「そんな。友達を呼んじゃあいけないなんて……」

「いいでしょ今まで誰も呼んでなかったんだから」

「その、だからこそ呼びたいんだけど……」

「何ー?! 許されたくないっていうの?!」

「もちろん許してほしいけど……」

呼んじゃダメっていうのは納得できないよ。

「友達と呼んだらダメっていうけど、小嶋君は呼んでもいいの?」

「小嶋君っていうのは男の子でしょ。別にいいよ。まだお兄ちゃん
懐いてないし」

そ、そうかな……。

「雛ちゃんはいいの?」

夏休みになってから何度か来ているけれど。

「雛ちゃんってあれでしょ? 金髪のヤンキーの子でしょ? 別
いよ」

「あ、いいんだね」

「いいよ。ヤンキーならお兄ちゃん怖がって懐かないだろうし。私

は嫌いだけど来たければ来てもいい」

ヤンキーじゃないし、僕雛ちゃんのこと好きだけどな。でも言わないでおこう。これ以上機嫌悪くなられても困るし……。それにしても、お姉ちゃん雛ちゃんのこと嫌いなんだ……。

「でもあの黒髪のかわいい子は清純で性格よさそうでお兄ちゃんが懐きそうだからダメ！」

褒めているのかな？

呼ぶなって言われたけど、そんなの嫌だよ。

「……僕は、呼ぶよ……」

「じゃあ許さない」

うう……。

困ったなあ……。

「姉ちゃん、兄ちゃんが困ってるじゃん。兄ちゃんのこと好きって言うならわがまま言って迷惑かけるのやめた方がいいんじゃない」

困っていると祈君が助けてくれた。

「祈君はうーるーさーいー。関係ないでしょ」

「関係無いけど兄ちゃんが困ってるし」

「私が一番のお姉ちゃんなんだから言うこと聞きなさい！」

「精神年齢は一番子供じゃん」

「うーるーさーいー！ 何さみんなして私をいじめて！ もういいよ！ ご馳走様おいしかった！」

しっかりと全部を食べきっているから僕は嬉しいよ。

食器を片づけ、お風呂へ向かうお姉ちゃん。ご飯食べてすぐお風呂はよくないって聞くけど、まあいっか。

「兄ちゃん。今回の姉ちゃん異常だよ」

さすがに祈君も不思議に思うようだ。

「う、うん……。早く許してほしいよ……」

「どうしたんだろう。いつもは謝ればすぐに許してくれるのに。今回は何が違うんだろう」

「いつもと違うところ……。うーん、楠さんかな……」

「楠さんって、あの長い髪の綺麗な人？」

「うん……。楠さんが綺麗だから怒ってるのかな……」

「……そうかも」

でも綺麗だったらなんで怒るんだろう……。やっぱりよく分からないや。

祈君との話し合いで何の解決策も出ないまま、僕は二階の自室へさがった。文化祭のコンテストのことも切りだせなかったし、困ったなあ。

……でも、とりあえず……。

今はそのことは忘れよう。同じくらい気になる問題を僕は抱えているから。

当然まりもさんのことだ。

昨晚の一件をまりもさんに確かめる為に、僕はスカイペにログインをして待っていた。

まりもさんはまだ来ていない。

今日はこないのかな……。

僕は宿題をして待つことにした。

そう言えば、僕一学期の期末テスト散々だったんだ……。勉強もしなくちゃまずいよ。

ちなみに。

楠さんは一位。前橋さんが二位。男子のリーダー沼田君が三位。雛ちゃんは四位。僕は百五十位。二百人中。もう一つついでに言えばアニメにはまっている小嶋君は最下位だったと教えてくれた。なにやら得意げに。

頭の良い人が羨ましい……。

と、その時。

ポンと、メッセージが届いた音がパソコンから聞こえてきた。

勉強を一時中断してパソコンの前に座る。

メッセージの主はもちろんまりもさん。

まりも…やあ

ユウ..こんばんは

まりも..調子はどうだい？

ユウ..あまりよくないよ

まりも..よくないのかい？　もしかしてお姉さんとの喧嘩が継続中
なのかいw　早く仲直りしなよw

ユウ..それもだけど、それだけじゃないんだ

まりも..？　何かあったのかい？

ユウ..昨日のログを見てほしいんだ

まりも..うん？　どうしたんだい？

あ、気づいてないのかな？　やっぱりわざとじゃないのかな。そ
れなら、よかった....。

ユウ..僕の勘違いだったみたいだね。昨日まりもさんがいなくなる
直前に僕のことを『ユウタ』って呼んだから驚いて

まりも..え、そうだったっけ？

ユウ..うんw

まりも..もしかして君の本名がユウタなのかい？　だとしたら偶然

だよ W

ユウ..すごいね！

まりも..ああ、すごいことだよこれは。偶然ってあるんだねユウタくん

ユウ..ユウタってやめてよ W

まりも..やっぱり嫌かい。ならなんと呼ぼうか

ユウ..ユウでいいよ

まりも..本当にそれでいいのかい？ ユウ君か、ユウタ君か

まりも..それとも

まりも..サトウ君がいいのかな？

「.....なんで.....！」

小嶋君と遊ぼう

「おい、佐藤！」

「え？」

茶髪で長い前髪をヘアピンでとめている男の人、僕の部屋に遊びに来た小嶋君が僕を揺さぶる。

「今の見たか？！」

僕の部屋のテレビに流れているアニメを指さし、小嶋君が興奮気味に僕を揺さぶっている。

「神作画！ 神作画！」

「う、うん」

僕にはよく分からないよ。

「ぬるぬる動きすぎだろこれ！ 実写か！」

「実写ではないけど……」

「わかつとるわ！」

そうだ。朝早く小嶋君がうちに来て一緒にアニメを見ていたんだ。今は八月四日昼。アニメを見ているうちに僕は昨日の晩のことについて考え込んでしまったんだ……。

昨晚の出来事、まりもさんとの一件は解決するどころか悪化してしまった。

サトウ君と呼ばれてすぐにまりもさんがログアウトしてしまったので、一体何故僕の名前を知っているのかは聞けなかった。

「ルイスちゃんサイコー！」

僕の思考を散らす小嶋君の声。

小嶋君。

期末テストの前まではアニメや漫画なんて大嫌いなスポーツ少年だった。でも、僕が面白いアニメを勧めたりなんかしたから……。

「可愛すぎるっ……。誰か、俺を召喚してくれ……。！」

もう駄目だ……。

「何故俺は二次元に生まれてこなかったんだ……。畜生……。ちくしよおお！」

「小嶋くん……」

なんだか小嶋君の悩みに比べたら僕の悩みは小さい気がしてきた。僕の悩みは解決できるけど小嶋君のは解決できないからね。

「なあ、佐藤。どうすれば二次元に行けると思う？」

「えっと……」

過去に楠さんが僕に言ったことがある。プレス機に挟まればいいと。でもそんなこと言えないよ。

「無理かな……」

「なんて残酷なことを言うんだお前は！」

えっ、これ残酷なんだ。

「ああ……可愛すぎて生きるのがつらい……」

重症だよ……。

「あ、終わっちまった……」

「うん」

「面白かったー……。じゃあ次は何を見せてくれるんだ？！」

子供のようなキラキラした瞳で僕を見つめる小嶋君。

とても純粋な目だ。この汚れきった世界とは別の次元で生きているからこそできる

「えっと……、これは、見たよね……。これも見たか……。えーつと……」

あ、もうないのかな。

「ごめんね、僕の部屋にあるのはもう全部見尽くしちゃったみたいだよ」

「……………は？」

目を大きく開きわなわなと口が震えている。

「なん……だと……」

どうやらアニメだけでなくネットの方にも手を出しているみたいだね。

「見尽くしたって……。俺は残りの夏休みをどうやって過ごせばいいんだよ！」

「勉強とか……」

テストの結果が悪かったって言ってたじゃない。

「勉強とか、将来の役に立たねえだろ。そんなことよりアニメでも見て心を浄化したほうがいいだろ」

「そうだね」

そうだねって言っちゃった。話し合わせちゃった。

「なあ、マジな話俺はどうすればいいんだ？ どうすれば二次元の世界に触れることができるんだ？」

「漫画とかはダメなの？」

「漫画はしゃべらねえじゃねえか！俺は会話がしたいんだよ！」

アニメも会話はできないよ！

「ゲームは？」

「ゲーム？ ゲームねえ……」

あまりお気に召さないようだね。

「やっぱりアニメが見てえなあ。あ、なに？ レンタルしろって？
んなことしちまったら破産すんだろうが！」

何も言っていないよ。でも、確かに今の調子だと破産しちゃうね……。

「大丈夫だよ。僕とある人に話をつけているから」

「とある人？ 誰だ？」

「雛ちゃんのお兄さんなんだけどね」

「有野の兄貴い？ 有野の兄貴がどう関係してくるんだよ」

「うん。実はね、雛ちゃんのお兄さん——」

とここで思い出す。雛ちゃんはお兄さんのことは出来るだけ秘密にしておきたいと言っていたっけ……。

「——その、ちょっと、待ってね」

「ちょっと待って？ まあ、いいけど」

僕の言葉を聞きアニメの二周目を見始めた小嶋君。
僕は慌てて雛ちゃんに電話をかけた。

「……あ、もしもし」

『なんだなんだ！ 優大から電話掛けてくるの珍しいな！』

とっても機嫌がいいね。これなら國人君のこと許可してくれるかもしれない。

「あのね、実はお願いがあるんだ」

『何でも言えよっ。私と優大の仲じゃねえか！』

「ありがとう。実はね、小嶋君を國人君に会わせたいんだ」

『今すぐ行くから待ってろ』

「え」

電話が切れた。あれ？ どういうことだろう？ 直接話そうって
いうことなのかな。あ……、もしかしたら僕怒られるのかもしれない。
こういう状況に陥ってしまった僕は怒られても仕方がないけ
れど……。

「電話終わったのか」

画面から目を離さずに小嶋君が聞いてくる。

「う、うん。あの、雛ちゃんがここに来るって」

「はあ?!　なんで有野がここに来るんだよ!　来るな来るな!」

「多分、もう向かってると思う」

「なんだよ!　あいつが来たら落ち着いてアニメが見れねえじゃねえか!」

「でも一回見たから大丈夫だよな」

「セリフ覚えるまで見たとは言えねえだろ!」

それは無理だよ!　その分の記憶力勉強に使おうよ!

「有野は追い返せ!」

とっても嫌いっているね……。仲良くすればいいのに……。

「え、そ、それは……」

無理だよ……。

「優大あ!」

バンとドアが勢いよく開き雛ちゃんが飛び込んできた。本当にすぐ来たね。

「あ、いらっしゃー!」

「てめえ小嶋この野郎!　優大に何しやがった!」

入ってくるなり僕なんかにもくれず小嶋君の胸ぐらをつかんだ雛ちゃん。

「な、何もしてねえよ！」

「嘘つけこの野郎てめえ！ 何もしてなかったら優大が助けなんか呼ぶかよ！」

「俺が聞く限り佐藤助けてなんて言っていなかったぞ？」

「言っていないよ！」

「小嶋っていう単語が出ただけでそれはヘルプの合図だろうが！」

「とんでもねえ飛躍した考えだな！？」

「優大……大丈夫か……？」

突き飛ばすようにして小嶋君の胸ぐらを放して、僕の体のあちこちをポンポンと触ってきた。

「僕は何もされてないから大丈夫だよ」

「んなバカな話があるか」

えっ。信じてくれない。

「優大が助け以外で私に電話掛けてくるわけねえ」

「お前それ自分で言って悲しくねえのか」

小嶋君がツツコんでいた。僕は助けを求める以外でも雛ちゃんに電話掛けるよ。

「ヘルプじゃなきゃ一体なんだ？」

僕から離れて不思議そうに僕らを交互に見る雛ちゃん。

「えっと、國人君に小嶋君を会わせたいんだ」

「ああ、そういやそんなこと言ってたっけ。でもなんであいつにこいつを会せるんだよ」

「國人君のコレクションを貸してもらおうと思って……」

「ああ、そうゆうことか。別に私に許可取らなくてもいいのに」

「あ、ごめんね。この前國人君のことはみんなに知られたくないって言ってたから一応確認取った方がいいと思って」

「……優大は本当に優しいな……」

「え、そんなことないよ」

「そんなことある。なんか悪いな気を遣わせて。でももういいんだ。どうせ文化祭に来るんだし」

「え？ 文化祭に来るんだ」

「ああ。例の生徒会のコンテストにな」

「あ、そっか」

僕もお姉ちゃんを説得しなきゃ。その前に許してもらわなくちゃ……。

僕らの話に興味がないのか入れないから暇だったのか、小嶋君はまたテレビに集中していた。

「ああ……ルイスちゃん萌えー……」

また呟いていた……。

その呟きに雛ちゃんが反応する。

「なんだ？ 陸上選手が可愛いってのか？ お前気持ち悪いな」

「誰がスプリンターに萌えるんだよ！」

「お前カールルイスって言ってただろ」

「いたなあそんな奴も！ ちげえよ！ ルイスちゃんだ！」

「ああ、アメフトの……」

「ちげえよ！ ボルチモアのラインバッカーなんて誰も知らねえよ！ 俺は屈強な男たちを愛でるような妙な性癖を持ってねえ！」

「うるせえな」

スプリンターもラインバッカーも、どちらも僕にはよく分からない

かった。多分スポーツ選手だと思う。

一瞬静かになった僕の部屋にアニメの声が響く。

『べ、別にあんたの為にやってあげたんじゃないんだからねっ!』

ツンデレだね。

「……優大も、こう言うのが好きなのか？」

「え？」

アニメのことかな？

「うん。好きだよ」

「……そっか」

何故か困ったような顔をしてテレビ画面を見つめていた。何かあったのかな……。

「んじゃ行くか」

「え？ どこへ？」

「どこへって、兄貴のところに行くんだろ」

困った顔を吹き飛ばし爽やかな笑顔で僕に笑いかけてくれた。そうだった。僕は國人君に会いに行くんだった。

國人君は小嶋君を受け入れてくれるかな。大丈夫だね。

……國人君、パソコンのこと詳しくそうだから、まりもさんに僕の

名前がばれてしまったことについても聞いてみよう……。何か分かるかもしれない。

さっそく雛ちゃんの家に来てきた僕ら。

真っ直ぐに國人君の部屋に向かう。

その途中、階段を上がりながら雛ちゃんが笑いながら僕に笑いかけてくれた。

「優大は別に用事ねえよな。兄貴の部屋に行かないで私の部屋来るか？」

「え？」

小嶋君を初めて会う人と二人きりにするのは少し酷な気がするよ。

「んなのダメに決まってるだろう！ 何言ってるんだ有野！」

やっぱり一人になるのが嫌なのか必死に止めようとする小嶋君。

「うん。僕も一緒に國人君のところに行くよ。僕も聞きたいことがあるし」

「……そうかよ」

笑顔を収め國人君の部屋へと歩き出す。

僕らは國人君の部屋の前にたどり着いた。

「兄貴ー」

ノックも何もしなしに扉をあける雛ちゃん。大丈夫なのかな？
大丈夫ではなかった。

國人君は、その、……。

中略

「全く、恥かいたじゃないか雛タン！」

パソコンの前に座る、ちゃんとズボンをはいている國人君。

「恥かいたのはこっちだよくそデブ！ 死ね、死ね、死ね！」

「い、痛いから、痛いからもっとお願いします雛タン！」

兄妹仲良くじゃれ合っているけれど、先ほどの事件は僕の心に大きな傷を刻み付けてしまった。いや、僕は何も見なかった。なんにも見ていなかった。

「汚いものを見せてゴメンな優大……」

「汚いものなんて失礼だZO☆」

「次ふざけたこと言ったら殺す」

「……」

本気が目だった。

「僕は何も見えてないよ。だから安心して」

記憶からも消去しなきゃ。

「さすが優大タン。気が遣えるいい子だねぶひひ」

ぶひひ……。

「それで、俺の部屋を興味津々な様子で物色しているそのドキュンは誰？」

「あ、この人は小嶋君。この前話したアニメにはまっているクラスメイトだよ。アニメを貸してくれるって國人君言ってたから連れてきたんだ」

「ああああ。そう言えばそんなことも言ってた気がするニャー。君君！勝手に触るなよ！」

「分かってるって！」

嬉しそうに小嶋君が僕らの元に戻ってきた。とてもわくわくしている。

「な、なあ」

小嶋君が僕の腕をつついて急かす。

「う、うん。その、國人君、早速、何か貸してくれないかな……？」

「……いいんだけど、それはいいんだけど、その前に！」

と、國人君が喜ぶ小嶋君を止める。

何事かとみんなが國人君を見る。

「貸すのはいいけど、その前にお前の情熱を聞きたい！」

「じよ、情熱？」

小嶋君が、訳が分からないといった顔で首をかしげた。

「情熱だ！　どれほどアニメを愛しているか俺に示してみろ！」

「そんなこと言われても……、俺あんまり見てねえし……」

「そんなものなのか！　嫁はおらんのか！」

「俺は助手が好きだ！」

「いくらでも貸そう！」

早っ！

「さあ、どれでも好きなものを持って行け」

椅子から立ち上がり両手を広げ小嶋君に選ばせる。

「ありがとう有野の兄貴！」

小嶋君が再び部屋を漁りだした。

この隙にまりもさんのことについてお知恵を拝借しよう。ちよんちよんと、腕を組んで小嶋君を見守っている國人君の肩を叩く。

「あの、國人君。その、相談があるんだけど」

「なんだい優大タン。優大タンもアニメについて語りたいのかい？」

「あ、その、それじゃあないんだけど……」

「なら話すことは無い！ 今は新たなる同士の誕生に喜ぶ場面だ……面倒くさいことは話さない！」

「えっ、あ、ごめん」

怒られちゃった……。

「おいデブ！ 優大を泣かせるな！」

庇ってくれる雛ちゃん。だけど、

「な、泣いてないよ？」

泣いてないよ？

「優大タン……。今は空気読もうよ」

「そ、そうだね……」

僕、空気読めないから……。

「デブ！ おいデブ！ 殺すぞ！」

「何と言われようとも今俺は楽しい話以外しない！」

「て、てめえ……！」

わなわなとふるえる雛ちゃん。僕は慌てて止める。

「い、いいんだよ、雛ちゃん。僕の話はしょうも無いから……」

「優大……。私が代わりに聞いてやるよ。一体何の話だ？」

背を向ける國人君の後ろで、雛ちゃんが僕の肩を優しくつかんでくれる。

「私にできる事は何でもするからな？」

「ありがとう……。でも、パソコンのことなんだ……」

「……そっか……。なら、ちょっと力づくで兄貴を……」

「あ、いいんだよ？ 本当に、どうでもいいことだから」

「そ、そっか……？」

雛ちゃんが悲しそうに握りしめていた拳を解いた。

……また違う機会に聞いてみよう……。

図書館は涼しいところ

新たなる同士の誕生による興奮が冷めやらないまま、小嶋君は一刻も早く帰って借りたものを見たいようで僕を連れて有野家を出た。國人君も今日はそういう気分ではないようだし、用事が無いのに長居するのは迷惑だもんね。

そういうわけで僕は一人悶々としたものを心に抱えながら、風の死んだ蒸し暑い道路を歩いていった。

暑い……。なんだかいつもより暑い気がする……。悩みを抱えていることが関係しているのかな……。

何となく家に帰る気にならない僕は溽暑の中、涼を求めて市立図書館へと向かう。

暑いよ……。

やっとのことでたどり着いた図書館。自動ドアが開き心地の良い人工の涼風が僕を包み込んだ。とっても涼しいね。

図書館に来たけれど勉強道具も持ってきていないし読みたい本も無いので汗が引くまで適当にぶらぶらと館内を徘徊する。つまみ出されないよね？

歩き回るのは迷惑かと思ひ直し適当に本を抜き取って読むことにした。

……。

難しくってよく分からないよ。

十ページほど読んで本を閉じた。

頭の悪い人間は図書館に来てはダメだね……。

「佐藤君……？」

僕の名前が呼ばれたのかな？ 佐藤はありきたりな名前だから僕じゃないかもしれない。でもとりあえず声の方を見て確認すること

に。確認するだけなら迷惑をかけないからね。

「佐藤君、偶然だね……」

僕が呼ばれたのだった。

僕の後ろに立っていたのは真っ白いワンピースを着た黒髪でボブカットがよく似合う女の子。とってもおしとやかで物静かなクラスメイトの三田さんだ。

少し前まではよく話していたけれど、僕が楠さんの秘密を見てしまった六月あたりから話しかけられることが無くなってしまった。友達と思っていたけれど、そう思っていたのは僕だけだったのかな……。

「久しぶりだね……」

「うん」

久しぶり。

夏休みだからしばらく会っていないことに対することか、会話を交わすことがしばらくぶりだということか。

「佐藤君は、勉強？」

「あ、ううん。僕は涼みに来たただだよ。三田さんは勉強をしに来てたんだね」

三田さんは筆箱と夏休みの課題を持っている。僕も勉強道具を持って来ればよかった。

「外は暑いからね……」

「うん。とっても蒸し暑いよ」

「……」

「……」

図書館だから、静かにしなくては。

こう言ったら三田さんに失礼かもしれないけれど、三田さんは僕に似ていると思う。もちろん友達の数も三田さんの方が多いいけれど、何と言えぱいいものか悩むけれど、本当に申し訳ないと言えなけれど、ポジシヨンの僕らは似ていると思うんだ。こんな失礼なこと三田さんには言えないよね。

その三田さんがゆっくりと僕の隣の席を指さした。

「……隣、いい？」

「え？ あ、うん。もちろんだよ」

断る理由がないからね。

かすかに笑みを浮かべ三田さんが僕の隣に座った。……この広い机に隣り合って座るのってなんだか緊張しちゃうよ。

「佐藤君は、宿題終わった……？」

「全然終わってないよ。きっと夏休みの終わりに慌ててやることになると思うよ。僕頭悪いから。三田さんはもう終わりそう？」

「私は……まだまだ……」

きっとそんなことは無いよ。だって三田さん、頭いいもん。

三田さんがノートと問題集を机の上に広げた。ちらりと解いてある問題を見てみると、やはり僕より断然先の問題をやっていた。

「佐藤君」

「え？」

もしかして、ノートを眺めていることが気に障ったのかも！
「答え見ないでよ！」って怒られてしまうのかも！

そんなことは無かった。

「夏休みの間、これまで、誰がクラスメイトに会った……？」

「うん。さっきまで小嶋君と雛ちゃんと会ってたよ」

「……そう、なんだ……」

「それがどうかしたの？」

「……ううん」

三田さんがほんの少しだけ悲しそうな顔をして問題集に取り掛かり始めた。なんだか、よく分からない罪悪感が僕を襲うよ。ここは、何とか機嫌を取らなくちゃ。

「あ、えっと、三田さんは？ 誰か友達と遊んだ？」

「……私は、ずっと一人でいたから……」

僕のバカ。

「私、友達いないから……」

「そんな。三田さんいつもたくさんの人に囲まれているよね？
みんな友達でしょ？」

「……あの人たちは、私のことを友達とは思ってないから……」

今度はとっても悲しそうな顔を作った。

宝石のように綺麗な瞳が悲しげな光を放つ。僕がじっと見ていることに気づいたのか陶器のように白い肌に少しだけ赤みが差した。あれ、なんだか僕ヘンタイみたい……。

「私、友達いないから……」

同じ言葉を繰り返した三田さん。

やっぱり僕は友達と思われてないのかな……。

……。

ううん。

やっぱり、勇気を出して僕から行かなくちゃ。

「あの、その、三田さんと僕は、友達、だよね……？」

勇気を出して友達になろうって言いたかったのに情けない聞き方になってしまった……。

違うって言われたらどうしよう……。悲しくてここから逃げ出してしまうそうだ。

三田さんは驚いた顔をして僕の方に顔を向けた。

「……私、友達でいいの……?」

「う、うん。もちろんだよ。というか、お願いします……って言い
たかったんだけど……」

僕の言葉を聞いて、楠さんにも雛ちゃんにも勝る笑顔を僕に向け
てくれた。うう……。ドキドキするよ……。

「ありがとう」

お礼を言われた。

「ど、どうしてお礼を言うの?」

「嬉しいからだよ……」

頬の赤い素敵な笑顔を僕から反らす三田さん。なんだか僕も恥ず
かしい。

反らしたまま僕に聞いてくる。

「……友達なら、一緒に遊んでもいいかな……」

「うん。一緒に遊ぼう」

「……うん……」

とっても嬉しそうだ。自分のしたいようにやったのに、相手の人
も喜んでくれるなんて、やっぱり勇気を出すことはいいことだね。
ポケットから携帯を取り出しおずおずと僕に差し出してくる三田
さん。

「……佐藤君の、携帯のアドレスとか、聞いていい？」

「あ、うん」

僕も慌てて携帯を出して赤外線送受信。

なんだか最近アドレス帳に登録する機会が多くなっている気がする。とってもいいことだね！

「……佐藤君の、アドレス……」

赤外線で送られた僕のアドレスを眺めて三田さんがつぶやいていた。

アドレスの交換を終えただけなのにとてつもない充実感が僕の心を満たしていた。三田さんも同じようなことを感じているようで課題には一切触れなくなっていた。もしかして僕が邪魔なだけかもしれないけれど……。

「さ、とう、くん……」

ギュッと携帯を握りしめちらりちらりと僕を見てくる三田さん。どうしたのだろう。どこか行けって言われるのかな……。

「メール、するからね……」

「あ、うん。僕いつでも暇だからどんな時間でも大丈夫だよ」

「うん」

携帯を眺め、嬉しそうに笑った。アドレスが増えることがそんな

にうれしいんだね。僕もよく分かるよ。僕も数えるほどしか登録されていらないから、増える度にニヤニヤしてしまうもの。

三田さんが携帯を握りしめたまま僕に顔を向ける。

「そ、それで、あの、今度――」

どこか緊張した面持ちで何かを伝えようとしたとき、

「あれ、佐藤君……と三田さん？」

綺麗な声が静かな図書館に響いた。その声に三田さんがびくつとなり、慌てたように課題の方へ顔を向けた。僕は確認するまでも無い声の主を確認した。そこには綺麗な姿勢と綺麗な笑顔で僕らの方を見ている楠さん。

「楠さん。こんにちは」

「こんにちは佐藤君。三田さんもこんにちは」

「こんにちは……」

顔の半分だけ楠さんに向けて挨拶をする三田さん。そうだよな。突然こんなところで楠さんのような人物に会えるなんて緊張しちゃうよね。

「偶然だね二人とも。勉強？」

楠さんが近づいてくる。

「三田さんは勉強をしにきたみたい。僕は涼みに来ただけなんだ」

「勉強かあ。すごいなあ」

Sっ気たっぷりのいつもの態度とは違い今はとても優しい雰囲気だ。僕や雛ちゃん以外のクラスメイトにはこの優しい雰囲気で接している。

山での一件の真相を知らない人は、楠さんに対して完璧美人という認識を持っているので、楠さんはその期待に応えるように接しているみたいだ。

あの一件は僕が悪で楠さんは被害者。そんな図式がみんなに浸透しているから楠さんは今まで通り過ごしているというわけ。

当然三田さんに対してもあの完璧で美人で非の打ちどころがない楠さんとして接している。

「二人はいつからここにいるの？」

「僕はついさっき来たばかりだよ。三田さんは？」

「……私も、さっき来たばかり、です」

「へえそうなんだ。偶然だね」

「うん。楠さんはここに何をしに来たの？」

「何をしに来たのって、なんだか気に障る言い方だね。私が来ちゃいけないの？」

「え、そう言うつもりではなくてですね。何をなさるのかなあと思っ
て……」

「本を読みに来た意外に目的があるのかな」

全てを知っている僕に対してはどこであろうとSっ気満載だよ。
喜んでいいところだね、多分。

「そ、その、僕みたいに涼みに来たとか、三田さんみたいに勉強しに来たとか……」

「図書館は落ち着いているし勉強するにはふさわしいかもしれないけどさ、クーラーで涼みたいのなら自分の家でいいんじゃない？ なに？ 君の家はエアコン無いの？」

「あ、ある、けど……。その、何となく家に帰りたくなくて……」

「あらあら。これがいわゆる夏特有の自分探しの旅ですか。すごいや佐藤君」

「そういうつもりはないけど……」

でも、旅とかしてみたいな。せっかくの長期休暇だし、普段出来ない事をやりたくなるのは当然だよな。

と、こんなどうでもいいことを考えていると、三田さんが急いだように机の上に広げられた勉強道具を片付けて立ち上がった。

「その、私はこれで……」

「え、あ、うん。ばいばい」

「うん」

「もう課題やらないの？」と楠さんが問いかける。

「あ、はい……」

申し訳なさそうに頷く三田さん。

「そっか。もうちょっと話したかったんだけど残念だね」

綺麗に笑う楠さんと恥ずかしそうに俯く三田さん。

「……その、失礼します……」

楠さんに軽く頭を下げて逃げるように僕らの前から姿を消した。

「……急いでいたのかな？」

「そんなわけないでしょ」

先ほどまで三田さんが座っていた席に楠さんが座った。

「私のことが嫌いなんですよ」

楠さんが面白くなさそうに頬杖をついた。

「私が来た瞬間勉強道具片付けだしたじゃん。すっごくあからさま」

「そ、そんなことは無いんじゃないかな？ その、楠さんすごいから、緊張しちゃったんだよ」

「そう。ならいいんだけどね。でも、まさか佐藤君と三田さんが逢瀬を楽しんでいるとはね。意外だったよ」

「逢瀬って、本当に偶然会っただけだよ？」

「と、みんなには言っておこうね三田さん。そうだね佐藤君」

信じてくれないよ……。

「楠さんはよく図書館に来るの？」

「話をそらそうとしているところがより怪しさを醸し出しているよ」

「そ、そう言うつもりじゃないよ」

「どうか。まあいいや。私はよく来るよ。それほど遠くないしね」

楠さんの家がどこにあるのかは分からないけれど、朝僕らを待ってくれているところはこの図書館にほど近い。多分そのあたりに家があるのだろう。

「それで、家に帰りたくないって言ってたけど何かあったの？」

頬杖をついた状態で僕の方を見てくれる楠さん。

「う、うん……」

それほど大それたことではないけれど……。

「なに？ 言いたくないの？」

「え、そんなことは無いよ！　ただしもうもない事だから……」

「ならそのしょうもない事を言いなさい」

「は、はい」

伝えるようなことでもないことを楠さんに伝える。

それは当然まりもさんのことだ。

スカイペの相手に僕の名前が特定されたい。少し怖くて部屋に帰る気にならなかったというだけ。

と、伝えた結果。

「ダサ」

と二文字で返してくれた。とっても理解しやすいね。

「インターネットの向こうの相手でしょ？　そんなの気にしなければ勝ちじゃん」

「そ、そうなんだけど……」

まりもさんは、僕にとってそんなに簡単に無視できるような相手ではないんだ。

「あ、そう言えば、楠さんパソコン触るんだよね……？」

「まあ、君ほどではないけれど」

「あの、なら、知恵をお貸しただくわけには……いかなかな？」

「別にいいけど役には立たないよ」

「ううん。そんなことないよ。どういう状況か見てくれるだけで僕は救われた気持ちになるよ」

「そう。なら、頑張って見ようかな」

そう言って綺麗な笑顔を見せてくれた。

お姉ちゃんと楠さん

図書館から僕の家を場所を移したのだけれど、玄関に入るなりお姉ちゃんに通せんぼされてしまった。

「お、お姉ちゃん」

玄関でにらみ合う僕らとお姉ちゃん。睨んでくるのはお姉ちゃんだけだけ。

「連れて来たらダメって言ったのに！ 言ったのに！」

「分かったって、言っていないよ……」

「分かりたなくても分からなくちゃダメなの！ そうしないと、ダメなの！」

「そんな」

少しだけ酷く思う。そんなの自分勝手だよ。お姉ちゃんを怒らせた僕が悪いのかもしれないけれど、楠さんは関係ないよ。僕の友達に迷惑をかけるのはやめてほしい。

「おね——」

僕が文句の一つでも言おうと思った直後楠さんが僕の肩に手を置きそれを制止する。

そして楠さんがお姉ちゃんに問う。

「佐藤君のお姉さん、なんで私は来たらダメなんですか？」

少しだけムツとしたような声だった。やっぱり、納得できないよね……。

それに対してお姉ちゃんはとても怒った声で答えた。

「可愛いから！ 性格よさそうだから！」

「……褒めているんですか？ ありがとうございます」

……よく分からないけど、お姉ちゃんが褒めて楠さんが喜んで一件落着なのかな？

そんなわけが無かった。

「だから来ちゃダメええええれろれろ」

舌をぺろぺろしながらお姉ちゃんが言う。

「……イラ……」

今楠さんがイラっとしたよ。

「何を言っているんですか？ 意味が分からないんですけど」

「何を言っているのか分からないんですか？ 意味教える気ないんですけど」

楠さんの怒りメーターが結構な勢いで溜まっていった。

「……佐藤君、君のお姉さんは私にケンカを売っているのかな？」

ケンカなんか見たくないよ！

「ごごめんなさい！ お姉ちゃんにはあとで言うておくから！
そ、その、気にせずに上がって！」

サツと上がってササッとスリッパを出して楠さんの前に置く。

「お兄ちゃん？！ 私は許さないから！」

しゃがみ込んで背を向けている僕の頭をバシバシと叩いてくる。
僕はそれを必死にガードしながら言う。

「お、お姉ちゃん！ お願いだからわがまま言わないでよ！ ぼ、
僕友達無くしちゃうよ……！」

「その方がいいよ！」

お姉ちゃんが今言った言葉はとても嫌だ。不快だ。

「お姉ちゃん……！ お姉ちゃんおかしいよ！ 僕が友達作ったら
ダメなの！？」

玄関に響き渡る僕の声。

少しだけ大きな声を出してしまった。でも、それも仕方ないよね。
これに関しては、お姉ちゃんが悪いもん。

怒る僕に、お姉ちゃんは、少しだけ態度を変えた。

「駄目だよ」

先ほどの騒がしく怒っている雰囲気をしまい、静かに怒っている雰囲気を出してきた。

「もう、お兄ちゃんは他人を信じない方がいいんだよ。誰かを信じて裏切られて悲しくなるなら、最初から信じない方がいいんだよ。だからね、お兄ちゃんが誰かを信じそうになったら、私がその邪魔をする。お兄ちゃんは大切な弟だから、私が守らなきゃいけないんだよ。私が守って見せる、悲しませない」

恐る恐る振り返ってみて、お姉ちゃんを見上げてみる。

お姉ちゃんは今まで見たことのない顔で楠さんを睨み付けていた。楠さんは困惑した顔でそれを見つめ返していた。

しばらくその状態が続いた後、お姉ちゃんが無言で居間に入って行った。

数秒か、もしくは数分か、僕らは閉じられた居間のドアを色々な感情を持って眺めていた。

「で、さっきのお姉さんは何？」

僕の部屋で椅子に座っている楠さんがイライラした様子で僕に問う。

「その、僕にも何が何だか……」

意味が分からない。謝ろうにも、僕らが悪いとは思えない。

「私どうすればいいの？ 怒っていいの？」

「お、怒らない方が、僕としては助かるけど……」

「しょうがない。君に免じて許してあげよう」

「あ、ありがとう」

許してくれたね。よかった。

「でも君はそれでいいの？　怒っていたみたいだったけど」

「うん……。僕はあとで一言いうつもりだよ」

「そっか。ならいいや。それじゃあ君のお悩み相談でも始めようか」

「うん、ありがとう」

優しいなあ楠さんは。

「とはいっても何もできないと思うけどね」

楠さんがスカイペのアイコンをクリックして起動する。

そして無言でログを確認していき一言。

「つまらない話ばかりしてるね」

「う、うん。でもそれが僕らにとっては楽しいんだ」

「あっそう。で、なんだか時々私の話題が出ているようだけどどんな悪口を言っているのかな」

「い、言っていないよ。ご覧のとおり」

くるくるとスクロールさせながらログをざっと眺めて行く。

「まあ、そっか。君は、そうだよ。で、ここか……」

戻していたログを最新のところまで戻す。

サトウユウタ。

ただの自分の名前なのに。

気持ちが悪い。

「ふーん……。サトウくんねえ……」

楠さんが横に立つ僕を見上げてくる。

「最初は名前を当てられたんでしょ？ このユウっていうのから優大ってばれたんでしょ？」

「う、うん。多分」

「なら偶然じゃない？」

「偶然？」

偶然でフルネームを当てられちゃうの？

「たとえば、山田君の名前は何？」

「え？ そ、それは……分からないけど……」

「ありきたりなものでいいから」

「や、山田、太郎？」

「そう。なら、イチロウと来たら名字は？」

「鈴木さん？」

「そう正解。君すごいよ。氏名当てクイズの世界チャンピオンになれるよ」

「……う、ん」

喜んでいいものかどうか悩んだ結果、喜ばないことにした。

「そう言うことじゃない？」

「そう言うこと？」

「そ。この、まりもさんにとって、ユウタに合う名字はサトウだったんだよ。サトウもユウタも、山田太郎なみにありきたりな名前だしね。偶然だよ」

「そう……なのかな……」

「そうだよ。それ以外に考えられないよ。佐藤優大なんていっぱいいるでしょ」

「う、うん」

そうなのかな……。

……そうだよね。

そうに決まってるよ。

だからまりもさんは『サトウユウタ』ってカタカナで打ったんだよね。漢字が分からなかったっていうことなんだよ、うん。きっと、そうだよね。

「これで解決だね。あーよかったよかった」

とてもどうでもよさそうに言ってスカイペを切った。

「これで、少しは悩みが散った？」

ブラウザを立ち上げて何のためらいもなく僕のお気に入りを見つめる楠さん。

「うん。楠さんのおかげでなんだかすっきりしたよ。ありがとう」

僕のお礼に何も答えない。どうしたのかな？

「……なにこれ」

楠さんがお気に入りを見つめてジト目で僕を見つめる。

「え？ どれ？」

そんなに文句を言われるようなお気に入りはないけれど……。

「これ」

これと言ってマウスカーソルで示すそれは、

「あ、怖い話？」

怪談を集めたサイトだった。

「君、こんなの見るんだ」

ジト目というか、少し引いた目。

「うん。僕怖い話が好きなんだ。楠さんは？」

「そんなことより私ずっと気になってることがあるんだけどさ」

立ち上がり軽く僕の肩に手を置いてパソコンの前から離れる。

「ATMってあるでしょ？」

「うん」

楠さんが床に落ちていたクッションを蹴り飛ばして壁際に持つていきそれに座った。

「ATMでお金を下ろす時、手数料ってかかるでしょ？ あれおかしくない？」

「えっと、うん？ おかしいの、かな？」

なんでだろう。

「手数料って、誰に払ってるの？ 誰にも迷惑かけていないのだから別に手数料払わなくてもいいでしょ？ 手数料って何？ 手間をかけさせたことにより発生する金銭じゃないの？」

「う、うん」

「だったら。ATMを使ってお金を下ろす時手間をかけているのは私なのだから私に手数料払ってよ」

「そう、だね？」

「そうかな？」

「そうでしょ。なんでぬくもりのない機械に手数料を払わなければならないの」

「たしかに、そう言われれば、なんだか納得できないものを感じるような気がする。」

「だからちよつとATM壊して中身もってきて」

「犯罪だよそれ……」

「何言ってるの。手数料を返してもらっただけだよ」

「物凄い利子がついてるね」

「それくらいいいでしょ」

「うん。それで、楠さんは怖い話好きなの？」

「……………」

こ、怖い。

「空気読もうよ。どう見ても私話逸らしたよね。どう聞いても怖い話嫌いだよね」

「え、あ、ゴメン……」

わざとだったんだ。

「まあ、私に苦手な物なんてないけどね」

「え？ 得意なの」

「得意なんて言ってない。普通」

「普通ってことは、聞いても平気なんだよね」

「平気なんて言ってない。普通」

「ふ、普通っていうのは、普通に怖いっていうこと？」

「怖いなんて言ってない。普通」

「う、うん」

普通って、どんな感じなのだろう……。

「意外だったよ」

楠さんが壁にもたれかかったまま足を組み直す。

「佐藤君がそんな気味の悪い趣味を持っていたなんてね」

「気味の悪い趣味、かな。普通だと思うよ」

「普通じゃない。私が普通なんだから君は普通じゃない」

「そ、そう、かな？」

「佐藤君怖いよ。この部屋大丈夫？　なんだか悪いものが集まってきたるんじゃない？」

「集まってきてないよ。何もおかしい現象起きてないからね」

「……君は鈍いから……」

「え、何かおかしいことが起きているのかな。もしかして何か感じる？」

「感じてたらここにはいない。すぐに家をおたきあげしているよ」

「それはやめていただいてもいいですか！？」

全てを失っちゃうよ！

「全く。ここに来てからいいことないよ。お姉さんに罵られるわ怖

い部屋に監禁されるわ。ちょっとATM壊してきてよ」

「頑なに壊させようとするね。僕壊さないよ」

「サイテー。事件を解決してあげた私に対して何のお礼も無いなんて」

「あ、そうだった。楠さんには悩みを解決してもらったんだった。ごめんね、僕何でもするよ」

「あ、今言ったね？　ならATM――」

「は壊さないよ」

「……生意気にも反抗するようになってきたね」

「と、当然だよ……」

犯罪なんて絶対にしちゃいけないことだよ。

「なら選んで。パソコンと一緒に風呂に入るか、パソコンと一緒にATMを壊しに行くか」

「ば、パソコンと一緒にATMは壊しに行けないよ……」

そもそも意味が分からないよ。

「その、お礼は、どうすればいいかな……」

「いないよ」

楠さんが立ち上がり歩き出す。

「いないよ。何もしてないし」

そう言いながら扉に手をかけた。

「あ、もう帰るの？」

「帰るよ。ここは空気が悪いや。悪いものが漂っているよ」

「ご、ごめんね。お姉ちゃんと、怖い話でなんだか不快な思いをさせてしまった」

「別にいいよ。気にしてない。でも、お姉さんと仲良くすることは一生ないだろうけどね」

「う、うん……。しょうがないよ……」

僕にも、理解できないから。
多分、僕も一生涯理解できない。

いつか馬山さんが旅立つ日

僕は家に帰るといふ楠さんについてアスファルトの上を歩く。秘密基地へ行くためだ。やっぱり僕は部屋にいたくないみたい。

「まさか君、私の家突き止める為に秘密基地へ行くだなんて言いだしたんじゃないでしょうね」

「ううん。違うよ。本当に秘密基地に行こうと思ってるんだ」

「そう。ならいいんだけど」

汗なんて掻いていない楠さん。驚くほど清々しい姿だ。なんだか羨ましい。暑さなんて感じないのかな。

「暑いね」

暑いみたいだ。

「暑くて暑くて死にそうだよ。夏は嫌いだな」

「え、そうかな。夏はとっても楽しいよ」

「それは君の意見でしょう。君の意見を押し付けてこないでよ。私は嫌いな。暑いし、蝉はうるさいし、夕立は煩わしいし、佐藤君はなよなよしてるし」

「え、ごめんね」

最後のは夏と関係ない気もするけれど……。

「いいよ。許してあげる」

許してもらえた。よかった。

それにしても、夏のことが嫌いだというなんて。楠さんはきっと大人なのだろう。

僕はそれを羨ましがっているのか、可哀想だと思っているのか。僕の事なのによく分からないや。

「さっきの件なんだけど」

楠さんが話しかけてきてくれたので僕は妙な考えを放棄する。

「さっきの件って言ったら、お姉ちゃんのこと？」

「それはもういい。パーソナルコンピュータについてのこと」

「あ、うん」

何故略さなかったの？

「その件の相談は有野さんにはしなかったの？」

「うん」

「なんで？」

「雛ちゃんパソコンしないみたいだから」

「ふーん。そうなんだ」

「うん。僕の悩みを聞いてくれたのは楠さんが一番だよ」

「そっか。それはなんだか優越感を感じるね」

楠さんが笑った。にやりと。

……最初に相談しようとした相手は雛ちゃんのお兄さんだったとは言わないでおう。

「あのまりもっていう人はいつからの付き合いなの？ 結構親しげだったけど」

「えーっと、中学校一年生の時だから、三年前からかな」

「へえ、結構付き合い長いね。っていうか君、中学生の時からパソコンもってたんだ。贅沢」

「うちは、中学生になったらパソコンを買ってもらえるんだ。これからはパソコンを使えなくちゃいけない時代だからって」

「贅沢。私は兄からパソコンを奪ってやっと手に入れたのに」

「奪うのは、よくない気がするけど……」

「兄の物は私の物。私の物は私の物。佐藤君の物は私の物」

「僕の物は盗らないで！」

「まあ、そんなことより」

「そんなことよらないで！」

何もあげないよ！

「さっきの話なんだけど」

「さっきの話と言ったら、パソコンのこと？」

「それはもういい。海へ行けば楽しいんじゃないかっていう話」

「あ、うん。……………え？！　いつそんな話したっけ！」

「そんな話はしていないけど、君の心を読んでみただけ」

「そんなこと思ってないけど、でも海へ行けたら楽しいね！　夏休みだし！」

「そうだね。なら一人で行ってくればいいよ」

「え？！　あ、うん！」

一人で行かねばならないんだ。楽しいのかな。

「なに？　君もしかして私と行けるかともか思っていたの？　おやおや。これは自意識過剰ですね」

「う……………ごめんなさい……………」

確かに、一度も一緒に行こうだなんて言われていなかった。勝手

に変なこと想像しちゃった……。

「まあ、君が行きたいというのであれば行ってあげないことも無いけれど。ただそうなたら例の金髪の、えっと、雛ちゃんだっけ？
彼女も来るんでしょ？」

なんで知らない体で話すのだろう。

「うん。みんなと一緒に行きたいよね」

「そうだね」

なんだか少しあきれたような顔だけど……。一緒に行きたくない
のかな。仲良くすればいいのに……。

うーん、みんなで行きたいな。海。

夏の秘密基地にたどり着く。一番いい風景。

「なんだよー少年。また来たのかよ」

馬山さんが暇そうに日陰に寝転がっていた。

「少年さあ、マジでこういうところへ来ない方がいいって。時間の
無駄にもほどがあるぜ」

「そんなことないよ。馬山さんと一緒に過ごしたら知識がどんどん
増えていくからね。とっても楽しいよ」

「それは今じゃなくてもできるだろう。青春時代だぜー。もったいねえよー」

「でも、夏休みにしか時間取れないし……」

「それは他のことについても同様だろうよ。夏休みじゃなけりやあできないことは他にもあるだろう？」

「そうだけど……」

でも……。

「おいおい。そんな悲しい顔しねえでくれよ。俺は少年の為に言うてんだぜ」

「う、うん……」

「青春時代ってのはな、大きすぎるんだ。大きすぎるからその場に立ってる本人には何のことだか分かんねえ。少し離れてみれば分かるんだ、そのアホみたいな大切さに。気付いてからじゃあ遅いんだぜ」

「そ、そうなの、かな……」

「そうなんだよねえ。こんなおっさんとじゃあ青春出来ないだろ」

「大人の人と触れ合うのも青春だよ」

「おいおい。俺は高校生だぜ」

まだ言っている。僕は騙されないよ。

「ああ、そうだ少年。そんなことより」

馬山さんが体を起こした。

「ちょっと携帯を貸してくれないか？」

「え？　携帯？　誰かに電話をするの？」

「こんな浮浪者に電話をかけるような相手がいるわけないだろう。ただちよつとニュースを見ようと思ってな」

「え、何か気になるニュースでもあるの？」

「そう言うものはないけれど、俺くらいになると時勢を知っておかなくちゃ恥ずかしい思いをするんだよ」

「そうなんだ」

「そうなんだよ」

やっぱり大人の世界は大変だね。っていうか、今自分で自分のことをおっさんって言っただね。

でもそんなことは言わずに僕は携帯電話を差し出した。

「なんだ少年。スマートフォンじゃねえんだな。最近の若者はみんなスマホを持っているもんだと思ってたんだけどちげえんだな」

「うん。僕は多分使いこなせないし」

「あんなもん簡単だろ」

「え？ 馬山さんはスマートフォン持ってるの？」

「何を言っているんだ少年。持っていれば少年から携帯電話を借りようだなんて思わないだろうよ」

「あ、そっか」

そうだよね。

「おいおい、なんだこりゃ。隣町で事件が起こっているのか」

携帯のディスプレイを見てとても驚いた顔をしている馬山さん。

「殺人事件なんてのが起きてるのか。これ犯人捕まったのか？」

「たしか、まだ。怪しい人は目撃されているみたいなんだけどね」

「はあ……。つたく、クソみたいな世の中だな。神様は何をしているんだか」

「そうだね。馬山さん神様信じてるの？」

「いや別に信じてはいねえけど。今のはどうしようもない世の中に対してどうしようもない解決策を言うことによる、現代社会に対しての、えー、アンチテーゼ？だ」

アンチテーゼの意味は知らないけど、絶対に違うよね。適当に言った感がぷんぷんしているよ。

「神様っているのかな？」

何となく気になって聞いてみた。

「自分が信じていればいるんだろうよ」

カチカチと携帯をいじりながら馬山さんが答えてくれた。

「主観的な物なの？」

「そうなんじゃねーの？ ああ、いやまあ少年にとっては例外的にそうでもないか」

「え？ どういうこと？」

「まあ、少年は騙されやすいってことさ」

「う、うん。確かに僕は、騙されやすいかも」

「だろうな。人がよさそうだもんよ。俺の言葉に含蓄があると勘違いしている少年に、俺が『神様はいる』なんてことを言ったら少年は信じるだろ？ まあ、つまりそう言うことさ。ああ、だったら俺が神様みたいなもんになるのか。少年の世界に影響を与えて作り替えちまうんだから神様と言っても過言ではねえな。よし、俺を崇めろ」

「う、うん。その、崇めるよ」

「崇めちゃうんだな。崇めるなよ。まあ、つまりあれだ。神様なんかを信じる事より友達を信じてことだ。神様を信じだところで何もしちゃくれねえんだから」

「でも、馬山さんが神様だったら僕は信じちゃうよ」

僕の言葉に馬山さんが苦笑いを見せた。

「俺は新興宗教の教祖かよ」

馬山さんなら、いい教祖になれそうな気がする。褒めているのかなこれは？

馬山さんが思いついたように顔を上げ僕に聞いてきた。

「そう言えば、少年。天国や地獄を信じるか？ まあ、死後の世界だ」

「死後の世界？僕は怪談とか好きだから、幽霊を信じているよ。だから死後の世界ってあると思う」

見たことは無いけれど、存在してくれればいいなって思う。

「そうか。まあさ、例えばだけど、それはどこにあると思う？」

「どこ？天国と地獄なら、空と地面の下かな？」

「ふーん。まあそう思うよな」

「馬山さんはそうは思わないの？」

「ああ。もしあるのだとすればの話だからな。俺を変な目で見るなよ」

「うん」

「返事が良すぎて心配だぜ。まあとにかく。もし死後の世界があるのだとすれば、俺はそこは宇宙なんだと思うな」

「宇宙？」

「宇宙だ。だって、大勢の死者を迎えるスペースこの世界にそこしか存在しねえもん」

「あ、そうだね」

「だろ？　どんどん増える幽霊を全て包み込める空間、そこが宇宙なのさ。そこは生きている人間が踏み込むべきでない場所。だから宇宙は人が生きられる環境じゃねえんだよ。死者の空間だからな。ダークマターってあるだろ？　暗黒物質。それは多分、人であったもののなんだよ。いや、人以外の生き物もだ。犬、猫、蟻、蟬。もつと言えば植物もかもな。そういうものがそこにあるんだよ」

「へえ……。なるほど」

確かにそう言われれば、そんな気がしてきた。とても納得ができるね。

「よし、これで新しい宗教を作って騙そう」

「僕騙されていたの?!」

感心していたのに!

「だから信じるなって。時間の無駄だぜ。その分友達を信じる友達を。友達は神様なんかより少年を助けてくれるんだから」

「う、うん。……その、それなら僕、やっぱり馬山さんも信じるよ」

「なんでそうなるんだよ」

「えっと、年下の僕がこういうのは失礼かもしれないけれど、その、僕、馬山さんのこと、友達だと思ってるから」

「……」

ポカンと僕を見る馬山さん。

「おいおい。俺はそんなに信頼されるようなことした覚えはねえぜ。何を言っているんだ少年」

「でも、いい人だし……」

「……むう……。こいつは困ったな」

とても渋い表情。

「え、やっぱり、迷惑？」

「結構な。少年。最初に言っておくが、俺はもうすぐここからいな

くなるぜ。俺にも事情があつてね。だから信じるだけ無駄だろ？」

「もうすぐ、どこかへ行くの……？」

「ああそうだ。放浪の旅って奴さ。次の場所へ移るんだ」

「……その、ずっとここにいても、いいけど……」

「事情があるんだって。ここは結構居心地がいいけどよ、ずっとここに
いるわけにはいかねえの」

「ど、どうして？」

「言えねえよ。言えるわけがねえ。悲しむなよ少年。少年の為なんだ」

そう言って僕の携帯を投げて返してきた。運動神経の鈍い僕はあ
わあわとなりながら必死にキャッチした。

「ありがとよ。さあ、もう帰んな」

馬山さんが立ち上がった。

「えっと、その……」

「何も言うことは無いさ。何も言わないで帰んな。あともうここには
来ない方がいいぜ。俺を信じることもやめた方がいい。俺がここ
からいなくなったときショックを受けるぜ」

「……でも……」

「いいから帰んな。俺は浮浪者だ。何も気を遣うことは無い。信じられる要素も持っていない。だからもう来るなよ」

そう言い残して、馬山さんがテントに入って行った。

僕は少しだけ悲しい余韻を残して山を下りた。

馬山さん、いなくなっちゃうんだ……。

虚像

今までにないほど静かな晩の食卓にかなり落ち込んだ僕。お姉ちゃんはいいただきますとご馳走様以外一言も話さなかった。これほどまでに怒っているお姉ちゃんは初めてだった。お姉ちゃんかどうかを疑ったほどだ。

だけど落ち込んではいられない。もちろん落ち込んではいいるのだけれど動かないわけにはいかない。

僕はまりもさんに話を聞かねばならないのだ。

部屋に行きパソコンをつける。

すぐにスカイペをつけてまりもさんに話しかけた。

ユウ..こんばんは

まりも..やあ。暑い日々が続くね

ユウ..うん

ユウ..ちよっと聞いてもいい？

まりも..何でも聞いていいよ

ユウ..ありがとう。昨日の話なんだけどね

ユウ..昨日、最後に言った『サトウユウタ』って、どういうこと？

まりも..どういうこと？ どういうこととはどういうことだい？

ユウ…何故僕の本名を知っているの？

まりも…ああw　そういうことかいw　偶然だよ偶然w w

ユウ…ほんとう？

まりも…本当だとも。いつ私が君の本名を知れるんだい。そんな機会ないだろう？

ユウ…うん。そうだけど。信じていいの？

まりも…それは私に聞くことじゃないだろうw　君自身が決めることだ

ユウ…なら信じる。僕はまりもさんが好きだからまりもさんを信じる

まりも…ありがとう。君はやさしいね

ユウ…そんなことないよ。だって少し怖かったんだもん。どこかでまりもさんに見られているんじゃないかって思っちゃったもん

まりも…まあ仕方がないよ。顔も知らない相手から名前を呼ばれたら誰だって怖いさ

ユウ…ごめんねまりもさん

まりも…謝るのはこっちさ。君の名前を当ててしまって申し訳なかったね

ユウ…ううん。偶然だからしょうがないよ

まりも..ありがとう。サトウユウタくん

ユウ..ごめんなさいまりもさん、本名で呼ぶのやめてほしいな……

まりも..ごめんごめんW でも別にいいじゃないかW ユウタくんW

ユウ..やめてってば

まりも..本当に怒ってるね。ごめんね

ユウ..怒ってはないけど、なんだか少し怖くて……

まりも..そうかい。なら仕方がないね

「ふう……」

僕は溜息をついた。安堵の溜息だ。

やっぱりまりもさんは、偶然僕の名前を当ててしまったんだ。安心だ。

この安心は恐怖から解放された安心ではない。まりもさんを失わないで済むという安心だ。

「よかった……」

本当に少しだけ泣きたくなった。多分ちょっと目がうるんでいると思う。

うるんだ目でディスプレイを見つめる。

まりも..そう言えば、君にはお姉さんと弟さんがいるんだよね？

ユウ..うん

まりも..妹なんかはいないのかい？

ユウ..妹はいないよ？

まりも..そうなんだ。でも、君のことをお兄ちゃんと呼んでいる女の子がいなかったかい？

涙が引っ込んだ。

ユウ..呼ばれたことない

まりも..嘘だね

ユウ..そんな人僕の周りにはいない

まりも..嘘だね

ユウ..なんで嘘だって思うの？

まりも..ははははは

ユウ..お兄ちゃんなんて呼ばれたことない。妹なんていない

まりも…妹じゃないのならお兄ちゃんなんて呼ばせるのはどうなのかな？

ユウ…誰もお兄ちゃんなんて呼んでこない。妹なんていないもん

まりも…ああ、そうだったね。君はお姉ちゃんと呼んでいたね

ユウ…あなたは誰ですか？

まりも…お姉ちゃんお兄ちゃんはおかしいね。名前で呼び合えばいいじゃないか

ユウ…あなたは誰ですか

まりも…正直、お兄ちゃんと呼ぶせるは少し気持ち悪いよ優大君

ユウ…お願いします。誰だか教えてください

まりも…じゃあ私はそろそろスカイペをログアウトしようかな。こう見えて忙しくてね

ユウ…誰ですか

まりも…じゃあ

まりもさんがログアウトした。僕の質問に答えることなくログアウトした。

「な、なんで……」

この人は誰？ だれだれ？

「い、嫌だ……」

怖い。怖いよ。

「ど、どうして、どうして？」

何も言葉が出てこない。意味のない言葉ばかりが出てくる。

どうやら、僕はまりもさんを失ってしまうようだ。とても悲しいけれど、今はそれ以上に怖かった。

僕はずっと見られていたみたいだ。

いつから？ 出会った時から？ ずっと見られていたの……？

怖い。怖い。こわ——

ぶうううう！ ぶうううう！

「うわぁ！」

僕がパソコンのディスプレイの前でがたがた震えているところ、携帯もぶるぶる震えはじめた。

メールだ。

「び、びっくり、した……」

僕の携帯は滅多に鳴らないのでたまになると驚いてしまう。しかもこのタイミングだったので死ぬかと思った。

でも少しほっとする。誰かと連絡を取り合えば少し落ち着くはずだ。そう思って僕は携帯電話を手に取りメールの差出人を見た。

「？」

見たことも無いアドレスだ。誰かがアドレスを変えたのかなと思
いながら、僕はメールを開いた。

『おやすみ いつも見ているよ まりも』

僕は携帯を放り投げて家を飛び出していた。

家を飛び出した僕は何となくコンビニを目指して走っていた。そ
こに行こうと思った理由は分からないけれど、家にはいたくないし
暗いところも怖いので明るいところに行きたかったのだろう。虫み
たいだ。

「はぁ……はぁ……」

暑い。汗が目に入って息が切れる。でも足は止めたくない。追
つかれそうで怖かった。

走っているのか歩いているのか分からないスピードでコンビニを
目指す僕。

その僕先に大きな体の人の後ろ姿が見えてきた。

あれは、國人君だ。

「く、國人君……！」

僕は自分でも驚くほど元気の戻った足を全力で動かして國人君の
前に回り込んだ。

「んんー？ おお、優大タン。どうしたのハアハアして。も、もしかして、俺で……」

「ち、ちが……」

息が切れて全然話せない。

「まあ、まあ。ゆっくり歩きながら話そう」

そう言って止めてくれた足を動かし始めた。

「ま、まって！」

僕は手を掴んで引き止めた。

「どうしたの優大タン。話は歩きながらでもできるっしょ」

「そ、その……、あの、ぼ、僕の部屋に来てほしいんだけど……！」

とにかく今の状況を誰かに見てもらいたい。神様が導いてくれたのか、最初に相談しようと思った國人君に出会えたんだ。是非國人君に見てもらいたい。

「少し、その、厄介なことになって……」

きっと國人君なら何とかしてくれるはずだ。國人君は凄いんだから。

「お、お願い！ ついてきて！」

でも。

「えー。厄介なことには関わりたくないニャー」

「え、え？ その、でも」

「それに今はダイエットで運動中なんだよねえ。厄介な事かダイエットかと聞かれたら迷わずダイエットでしょう」

「で、でも……」

「俺結構焦ってるんだよねえ。時間がないんだよねえ」

「その、でも、この前は、ダイエットさばりに僕の部屋に来てたよね……？」

「うん。あの時はダイエットする理由が無かったから。でも今は理由があるのだよ君」

「理由？」

「そうそう。いやあ、この前雛タンからさあ『学校の文化祭に来てお兄ちゃん』って頼まれちゃってさあ。公式に女子高生と触れ合える機会をもらったんだから少しでもカッコいい姿で行かなきゃね。雛タンも『ダイエットしてお兄ちゃんって』お願いしてきたし。あー楽しみにゃ。早く女子高生と触れ合いたいなあ……うふふ……」

「そ、そうなんだ」

そう言えば、コンテストに出てくれるって雛ちゃんが言ってたね。

面倒くさがらなかったのはこういう理由だったんだね……。

「じゃあ、そう言うわけで、厄介ごとには首を突っ込まないから」

「あ、うん。ごめんね……」

「優大タンじゃなかったら怒っちゃうけど、優大タンだから許すんだからね。今度からは気を付けてよね」

そう言ってウォーキングを再開した國人君。僕を振り返ることはもうしない。

「……帰ろう……」

僕は来た道を引き返した。あわてて出てきたけどどう考えても家の方が安全だよね……。

休日自主的に行く学校は苦じゃない

八月五日。

昨日の夜。僕は部屋に入って一番に携帯電話を開いてみた。大量にメールが来ていたら恐ろしいなあと思っていたけれどそんなことは全くなく、昨日のお昼にアドレスを交換した三田さんからのメールだけが入っていた。とてもほっとしたし、とても嬉しかった。しかし……。

何故まりもさんは僕のアドレスを知っているのだろうか……。どうやって調べたのか全く分からない。携帯電話のアドレスを何かの登録に使った覚えもないし、怪しいサイトに入った覚えもない。それなのにまりもさんは知っている。

一体、何故だろう。

昨日は怖くてあまり眠れなかった……。

でももう朝だ。起きて朝ご飯を食べなくちゃ……。

今日は昨日メールで約束した三田さんと学校の図書室で勉強だ。

こんなに早く一緒に遊べる機会が来るなんてとっても嬉しいね。

なのでまだまだ覚醒したとは言えない目をこすり一階へ向かう。

眠いなんて言ってられない。

居間ではみんなが勢揃い。おはようと言うとお姉ちゃん以外がおはようと言ってくれた。

やっぱりお姉ちゃんは怒ったままだ。

……僕が悪いのかな……。

いつもは僕が悪いと思うけれど、今回はよく分からないよ。友達を作ったらダメだって、そんなの納得できないよ。

……。

でも、こんな状態は嫌だから、謝ろう。

誰が悪いとかじゃないよね。仲直りがしたいなら謝らなくちゃ。

「お姉ちゃん」

ソファに座ってテレビを見ているお姉ちゃんに声をかけた。

「ふーん」

お姉ちゃんが不機嫌そうに返事をした。これを返事と言ってもいいのかわからないけれど。

「その、ごめんね」

「許しませーん」

よかった、昨晚よりは多少機嫌がマシになっている。昨日は本当に無言で怖かったもん……。

「あの……」

「話しませーん」

「う……」

機嫌が戻ってきているとはいえ僕のことを許す気はさらさらないらしい。

……ごめんね……。

お姉ちゃんに許されないまま僕は学校へ向かった。

なんだか色々悶々とする。まりもさんの正体は分からないしお姉ちゃんも許してくれないし馬山さんは近いうちにあそこを離れるらしいし……。

少しだけ、人生がよくない方向に進んでいる気がする……。怖いこととか悲しいことが起きすぎだよ……。

そんなことを考えながら、何となく周りを確認する。

……誰もいない、よね。

でも、もしかしたらまりもさんはどこかで見ているのかもしれない……。暑い……。

暑い夏なのに、背中に妙な寒気を覚えて僕は小走りで学校へ向かった。

学校にたどり着いた僕は上履きに履き替え真っ直ぐに図書室へ向かう。

たどり着いた、クーラーの効いた図書室には結構な数の人がいた。恐らく今年受験がある三年生の先輩たちだろう。こんなに朝早くから勉強するなんてすごいや。……お姉ちゃんも今三年生だけど、ちゃんと勉強しているのかな……。

そう言えば言っていなかったけれど、僕とお姉ちゃんは高校が違う。僕は近くの高校で、お姉ちゃんはちょっと距離のある高校。僕の学校はきわめて普通の学校。お姉ちゃんの学校は進学校。お姉ちゃんも僕と違って頭がいいんだよ。出来の悪い弟としては出来のいい姉と比べられたりするので少し肩身が狭い……。さらに弟も出来がいいのでもっと肩身が狭い……。頑張らなくちゃ。

よし……。さっそく今日から頑張ろう。勉強しに図書室に来たんだからね。

僕はあたりを見渡す。

よく見ると図書室の端っこで三田さんが小さく手を挙げてくれた。

僕は静かに走ってそこへ向かう。

「おはよう三田さん」

「おはよう佐藤君……。その、ごめんね……。勉強につき合わせちゃって……」

「そんなことないよ。僕、最近課題ができていなかったからありがたいなって思ってたんだ」

「それなら……。よかった……」

嬉しそうに笑ってくれた。僕も嬉して恥ずかしいよ。

「あ、ここに、座ってもいい？」

僕は三田さんの正面の席を指す。

「うん……」

にっこりと笑って座る許可をくれた。僕はそこに座って早速課題を取り出す。

う……。なんだか改めてみたら全然進んでないよ……。少しペー
スが遅い気がする。今日はたくさん進めよう。ここには変な誘惑が
無いから勉強に集中できるよね。

ただまりもさんのことが気になる……。一応辺りを確認してみる。
怪しい人はおらずみんな黙々と勉強していた。何処にいてもこれか
らは逃げる事ができない気がするよ……。

でも、いるわけないんだ。

絶対に、いない。

僕は大きく息を吐いて課題と向き合う。今は、課題に集中しよう。

ひたすら無言で課題をすること一時間。とっくの昔に集中力は切れてしまっている。情けない……。こんなだから僕は頭が悪いんだよ……。まったく……。

顔を上げて三田さんを見てみた。すごく集中してさらさらと問題を解いている。やっぱり頭の良い人は違うなあ……。などと眺めていると、三田さんも顔を上げて僕を見た。僕と視線があい頬を赤くしてサッと視線を落とす三田さん。し、しまった！　じろじろと観察していると勘違いされてしまったよ！

違うんだよ三田さん？！　僕も今偶然見ていただけなんだよ？！　と声に出してしまつては周りの三年生に迷惑がかかるので何も言えない……。

うう……変質者だと思われるよね……。
がっくりと肩を落とし僕は課題に向かった。はあ。

それから更に一時間。あと一時間もすれば十二時、お昼。三田さんはずっと集中している様子。しかしシャーペンの滑るスピードはかなり落ちていた。ちらりちらりと僕の様子をうかがっているようで、どうやら先ほどじろじろと観察されていたことを気にしているみたいだ。違うのに……。

申し訳ない気持ちと居心地の悪さを感じ僕は立ち上がって本棚へ向かった。特に読みたい本は無いけれど、気分転換に何かを読むのもいいかもしれない。

本棚の間を縫うように歩く。

図書室の端に来てても気になる物は特に見つからなかった。

「佐藤君……」

「?!」

気配のない背後から声がかけられた！ 飛び上がるほど驚いたけれど叫んだりなんかしたらみんなから怒られてしまうので必死になって叫び声を飲み込んだ。慌てて振り返る。

つい先ほどまで勉強していた顔の赤い三田さんが後ろに立っていた。

ま、まさか、先ほどのことをとがめに来たのでは……。ごめんなさい。

「ごめんね……。驚かせて……」

図書室の端っこ。誰から見えないところ。ここなら小声で話しても迷惑がかからないと思う。

「う、ううん。僕こそ、驚いてごめんね……」

「私が後ろから声をかけちゃったから……」

「ち、違うよ。僕が情けないからだよ……?」

「私の存在感が無いから……」

「その、僕の気配を感じる力が弱いから……」

「私が誘ったりなんかしたから……」

「い、いや、僕がさっきじろじろと三田さんを見てたから、だよね……?」

「そんなことはないよ……？ やっぱり、私が――」

終わりが見えないね。

三田さんと二人の時にはよく起こる罪の被り合い。僕が悪いのに三田さん優しいから自分が悪いということにしてくれようとする。こうなってしまったら終わりが見えない。話をそらさなければ謝り合いで一日が終わっちゃうよ。

だから僕は話を変えることにする。

「課題は、もう終わりそう？」

「……まだ、もうちょっと……かな？」

「すごいね。僕はまだまだだよ」

「あ、私もそんなに進んでいる訳じゃあないから……」

「でも、三田さんがやっているところ見たけど僕なんかよりずっと進んでいたよ」

「それは……飛ばし飛ばしやっているから……」

そんなことは無いよね。

これも三田さんと二人きりの時に起きる現象だ。謙遜大会。三田さん、謙虚だからすごく謙遜するんだ。こんな時も話を変えるのがベターだよ。

「図書室には、よく来るの？」

「ううん……。今日が初めて。いつもは図書館だけど……。あの、人が来るから……」

ここにも人がいるよ？　この人たちとは別なのかな？

「佐藤君は図書館がよかった……？」

「え？　あ、僕は、どこでもよかったよ。暇だから」

「……うん」

とてもかわいい笑顔を見せてくれた。うう……。ドキドキしちゃうよ。

「あの」

「はい?!」

しまった。ドキドキして思わず大声で返事をしてしまった……。迷惑だよね、ごめんなさい先輩方。

三田さんの顔が、先ほどの笑顔から壊れてしまいそうな弱弱いものになっていた。

「佐藤君……。楠さんの事………」

「う、うん」

「……。好きなの？」

「……。え？　え？」

そ、それは、もちろん……。

「そ、そ、その、友達だから、もちろん、好き……だよ？」

「そうじゃなくて」

儂げな表情とは正反対の力強い声だった。何と言うか、決意がこもっているというか……。

えっと……そうじゃないということは……。

そ、そう言う意味、だよ。

「その、僕なんかが、楠さんに恋愛感情を抱くなんて、恐れ多いにもほどがあると、思います」

好きかどうかは別として。

「……………だったら、有野さん……は……？」

「雛ちゃんにだって、同じだと、思います。恐れ多いです」

滅相もございません。はい。

でも、結局は好きかどうかは別として……。僕、とっても情けないね。

それでも、三田さんは僕の答えに満足したようだ。

「そ、そっか……………そう、なんだ……………。……………それなら……………」

突然三田さんが俯きがちにキュッと僕の手を握ってきた。

「え?! どどどどうしたの!？」

三田さんの柔らかい手の感触が僕の脳髓を破壊する。この表現が大げさでない位僕の緊張はピークに達っしてしまった。

「なananんっ、そのっ、なにごと?!」

慌てふためる僕に三田さんが頬を赤くして言う。

「あの……、悩み事とかがあったら、私が聞くからね……。佐藤君、なんだか色々大変そうだから……。相談相手がいないのなら、私が聞くから……」

……。

なるほど。夏休み前の一件、僕がみんなに迫害され始めたことを気にしてくれているんだね。それなのに僕は変なことを考えて変に妄想したりなんかして……。人の厚意をそんなやましいことに直結させる僕の頭はやっぱポンコツだ。

そう言う理由ならば変に緊張してしまうのは間違いだ。失礼すぎるよ。

「うん。ありがとう。でも、僕は大丈夫だよ」

「……そうなんだ」

三田さんが赤い顔を上げる。僕も恥ずかしいけれど目をそらすのは失礼だよね。

「……なら、いいんだ……」

ずっと、気のせいかな、心なし、自意識過剰かもしれないけれど、三田さんが名残惜しそうに手を離れた。多分、僕の勘違い。

「……佐藤君、なんだか、雰囲気が変わったね……」

「え、そ、そう、かな？」

勇気を出したことによって何かが変わったのかな？ そうだとしたら、嬉しいな。

「うん。……かっこいいと、思う……」

といった瞬間三田さんが耳まで赤くしてあわあわと辺りを見回しだした。

「その、私、もう、お昼ご飯の時間だから、帰るね……！」

「あっ」

ものすごいスピードで僕の前から消えて、ものすごいスピードで図書館から出て行った。

なんだか僕、今驚きの体験をしたような気がするよ。

でも僕の心配をしてくれるなんて、三田さんは優しいなあ。

僕は幸せな気持ちで図書室を出ることができた。

が、しかし。

「な、な、なにこれ……」

図書館を出た後僕は真っ直ぐに下駄箱へ向かったのだけれども、そこで妙なものを見つけてしまった。

「な……なに、これ……」

同じ言葉を繰り返す。

驚き半分、喜び半分。

「ま、ま、まさか！」

下駄箱の中、僕の靴の上に、一通の手紙が置いてあった。

僕なんかがラブレターを貰うなんて！ これは天変地異の前触れじゃないかな？！ なんてことを思いながらゆっくりと取り出してみる。

ドキドキしながら、あて名を確認してみた。

そして封筒の裏に書かれた宛名を見て僕の『驚き半分喜び半分』は、『戦慄全部』に変わってしまった。

（まりもより）

変な汗がにじみ出る中、僕は手紙を握りしめたまま大慌てで学校を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8722x/>

キョーハク少女

2011年12月29日01時55分発行